松山市文化財調査報告書190

宮前川流域の遺跡Ⅲ

辻遺跡５次調査
辻町遺跡３次調査
朝美辻遺跡１次調査
朝美辻遺跡２次調査

２０１７

松山市教育委員会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

宮前川流域の遺跡Ⅲ

辻遺跡５次調査
辻町遺跡３次調査
朝美辻遺跡１次調査
朝美辻遺跡２次調査

２０１７

松山市教育委員会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

序　　言

本書は、平成15年度から24年度までに実施した、4件の発掘調査の報告書です。

今回の調査地は松山平野西部にある大峰ケ台丘陵の東斜面、宮前川の両岸に位置しています。周辺では弥生時代中期の高地性集落や古墳群が分布する大峰ケ台遺跡群、古墳時代の堰遺構で著名な古照遺跡の調査が実施されています。このほか中近世に位置づけられる遺構も新たに発掘されており、各時代を通して遺跡の豊富な地域です。

今回報告します4遺跡でも、弥生時代から近世に至る遺構・遺物が確認されました。朝美辻遺跡1次調査では、自然流路から6世紀前半の土器と共に、建築部材の「蹴放(けはな)し」が良好な状態で出土し、周辺で確認されている掘立柱建物の構造を知る貴重な資料となりました。また、辻遺跡5次調査で出土した棟端飾瓦は、江戸時代後期に建立された山内神社に関連するものと考えられます。

このような成果を得られましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力の賜物と厚くお礼申し上げます。本書が学術研究の一助となり、さらには文化財保護及び生涯学習に資するものとなりますことを切に願います。

平成29年3月

松山市教育委員会教育長
藤田　仁

例　　言

1　本書は、財団法人松山市生涯学習振興財団（平成22年度に財団法人松山市文化・スポーツ振興財団に名称変更し、平成24年度には現在の公益財団法人松山市文化･スポーツ振興財団となる。）が平成15年度から24年度までの間に、松山市南江戸五丁目、辻町、朝美一丁目において民間の開発に伴い実施した4件の発掘調査成果をまとめた調査報告書である。

2　本書では、遺構名を略号化して掲載している。
竪穴建物：ＳＢ、掘立柱建物：掘立、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柱穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸ

3　本書で使用した標高数値は海抜標高を示し、方位は国土座標（世界測地系:平面直角座標第Ⅳ系）を基準とした真北である。

4　基本土層や遺構埋土の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1998)に準拠した。

5　遺構・遺物の実測、製図は各担当者の指示のもと、池内芳美、木下奈緒美、木西嘉子、篠原綾、末光美恵、丹生谷道代、平岡直美、本多智絵、山下満佐子が行った。

6　屋外調査における写真撮影は調査担当者と大西朋子が行い、図版作成は小笠原が行った。

7　挿図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。遺物の実測図は原則として、弥生土器は1/4、土師器、須恵器、瓦、陶磁器、石器、金属器は1/3を基本とした。

8　本書の執筆は、第1･5･6章を小笠原善治、第2･3章を河野史知、第4章を宮内慎一が担当した。編集は小笠原が担当した。

9　本書にかかわる遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターにて保管・収蔵している。

10　報告書抄録は、巻末に掲載している。

目　　次

第１章　はじめに……〔小笠原〕…… **1**
第１節　調査の経緯……1
第２節　調査・整理刊行組織……1
第３節　立地と歴史的環境……3

第２章　辻遺跡５次調査……〔河　野〕…… **7**
第１節　調査の経緯……7
第２節　層　位……8
第３節　遺構と遺物……11
第４節　小　結……19

第３章　辻町遺跡３次調査……〔河　野〕…… **23**
第１節　調査の経緯……23
第２節　層　位……24
第３節　遺構と遺物……31
第４節　小　結……55

第４章　朝美辻遺跡１次調査……〔宮　内〕…… **63**
第１節　調査の経緯……63
第２節　層　位……65
第３節　遺構と遺物……68
第４節　小　結……81

第５章　朝美辻遺跡２次調査……〔小笠原〕…… **87**
第１節　調査の経緯……87
第２節　層　位……88
第３節　遺構と遺物……93
第４節　小　結……103

第６章　調査の成果と課題……〔小笠原〕…… **111**

挿　図　目　次

第１章　はじめに

第 1 図　松山平野の地形概要図（縮尺 1：250,000）・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第 2 図　宮前川流域の主要遺跡分布図（縮尺 1：7,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第２章　辻遺跡５次調査

第 3 図　調査地位置図（縮尺 1：800）・・・・・・ 8
第 4 図　土層図（縮尺 1：60）・・・・・・・・・・・・・ 9
第 5 図　遺構配置図（縮尺 1：80）・・・・・・・・・・10
第 6 図　掘立 1 測量図（縮尺 1：60）・・・・・・・11
第 7 図　掘立 1 出土遺物実測図（縮尺 1：3）12
第 8 図　掘立 2 測量図（縮尺 1：60）・・・・・・・12
第 9 図　掘立 2 出土遺物実測図（縮尺 1：3）・12
第 10 図　掘立 3 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：60、1：3）・・・・・・・・・・・・・・13
第 11 図　SA1 測量図（縮尺 1：50）・・・・・・・・・・13
第 12 図　SK2 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：3）・・・・・・・・・・・・・・14
第 13 図　SK3 測量図（縮尺 1：40）・・・・・・・・・・14
第 14 図　SK3 出土遺物実測図（縮尺 1：3）・・15
第 15 図　SK4 測量図（縮尺 1：40）・・・・・・・・・・15
第 16 図　SD1 測量図（縮尺 1：40）・・・・・・・・・・15
第 17 図　SD1 出土遺物実測図（縮尺 1：3）・・16
第 18 図　SD2 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：1）・・・・・・・・・・・・・・16
第 19 図　SD3 測量図（縮尺 1：40）・・・・・・・・・・16
第 20 図　SX1 測量図（縮尺 1：80）・・・・・・・・・・17
第 21 図　SX1 出土遺物実測図（縮尺 1：3）・・・18
第 22 図　SK1 測量図（縮尺 1：20）・・・・・・・・・18
第 23 図　包含層出土遺物実測図（縮尺 1：3）・18

第３章　辻町遺跡３次調査

第 24 図　調査地位置図・区割図（縮尺 1：800）・25
第 25 図　1 区・2 区南壁土層図（縮尺 1：50）・26
第 26 図　3 区・4 区・T9 南壁土層図（縮尺 1：50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第 27 図　1 区遺構配置図（縮尺 1：100）・・・・・28
第 28 図　2 区遺構配置図（縮尺 1：100）・・・・・28
第 29 図　3 区遺構配置図（縮尺 1：100）・・・・・29
第 30 図　4 区遺構配置図（縮尺 1：100）・・・・・30
第 31 図　トレンチ遺構平面図（縮尺 1：100）・30
第 32 図　SD9 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：4）・・・・・・・・・・・・・・31
第 33 図　1 区第Ⅶ層上面の遺構配置・炭化物堆積図（縮尺 1：100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第 34 図　SD11 測量図（縮尺 1：60）・・・・・・・・33
第 35 図　SD11 出土遺物実測図（縮尺 1：3）・34
第 36 図　SK4 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・34
第 37 図　SX4 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：3）・・・・・・・・・・・・・・35
第 38 図　水田面測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：50、1：6）・・・・・・・・・・・・・・36
第 39 図　水田面出土遺物実測図（縮尺 1：3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第 40 図　木杭 1 測量図（縮尺 1：20）・・・・・・・37
第 41 図　木杭 2 測量図（縮尺 1：20）・・・・・・・37
第 42 図　掘立 1 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：3）・・・・・・・・・・・・・・38
第 43 図　SE1 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・39
第 44 図　SE1 出土遺物実測図（縮尺 1：3）・・39
第 45 図　SD1 測量図（縮尺 1：40）・・・・・・・・・40
第 46 図　SD2 測量図（縮尺 1：40）・・・・・・・・・40
第 47 図　SD3 測量図（縮尺 1：40）・・・・・・・・・41
第 48 図　SD4 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：3）・・・・・・・・・・・・・・41

第 49 図　SD5 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：3）・・・・・・・・・・・・・・42
第 50 図　SD6 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：3）・・・・・・・・・・・・・・42
第 51 図　SD7 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：60、1：3）・・・・・・・・・・・・・・43
第 52 図　SD8 測量図（縮尺 1：40）・・・・・・・・・43
第 53 図　SD8 出土遺物実測図（縮尺 1：3）・・44
第 54 図　SD10 測量図（縮尺 1：40）・・・・・・・・44
第 55 図　SK1 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・44
第 56 図　SK2 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・45
第 57 図　SK3 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・45
第 58 図　SK5 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・45
第 59 図　SK6 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・46
第 60 図　SK7 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・46
第 61 図　SK8 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・47
第 62 図　SK9 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・47
第 63 図　SK10 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・47
第 64 図　SK11 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・48
第 65 図　SK12 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・48
第 66 図　SX1 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：3）・・・・・・・・・・・・・・49
第 67 図　SX2 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：3）・・・・・・・・・・・・・・50
第 68 図　SX3 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：40、1：3）・・・・・・・・・・・・・・51
第 69 図　第Ⅵ層出土遺物実測図（縮尺 1：3）・・51
第 70 図　第Ⅴ層出土遺物実測図 (1)（縮尺 1：3）・52
第 71 図　第Ⅴ層出土遺物実測図 (2)（縮尺 1：3）・53
第 72 図　第Ⅴ層出土遺物実測図 (3)（縮尺 1：3）・54

第 4 章　朝美辻遺跡 1 次調査

第 73 図　調査地測量図（縮尺 1：1,000）・・・・・64
第 74 図　南壁土層図（縮尺 1：80）・・・・・・・・・66
第 75 図　遺構配置図（縮尺 1：200）・・・・・・・・67
第 76 図　SR1 出土遺物実測図（1）（縮尺 1：3、1：4）・・・・・・・・・・・・・・・69
第 77 図　SR1 出土遺物実測図（2）（縮尺 1：4、1：6、1：8）・・・・・・・・・70
第 78 図　SD1 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・72
第 79 図　SD1 出土遺物実測図（縮尺 1：3、1：4）・・・・・・・・・・・・・・・73
第 80 図　SD2 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・74
第 81 図　SD3 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・74
第 82 図　SK1 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3、1：4）・・・・・・・・75
第 83 図　SK2 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・76
第 84 図　SK3 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・76
第 85 図　SK4 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・77
第 86 図　SK5 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・77
第 87 図　SK6 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・77
第 88 図　SK7 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・78
第 89 図　SK8 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：4）・・・・・・・・・・・・・・79
第 90 図　SK9 測量図（縮尺 1：30）・・・・・・・・・79
第 91 図　SK10 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1：30、1：3）・・・・・・・・・・・・・・80
第 92 図　包含層出土遺物実測図（縮尺 1：3、1：4）・・・・・・・・・・・・・・・81

第５章　朝美辻遺跡２次調査

第 93 図　周辺遺跡位置図（縮尺 1：500）‥‥89
第 94 図　調査地座標一覧および対象範囲図（縮尺 1：200）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥90
第 95 図　調査区東壁・北壁土層図（縮尺 1：50）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥91
第 96 図　調査区遺構配置図（縮尺 1：100）‥92
第 97 図　掘立 1 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥94
第 98 図　SD1 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥‥‥95
第 99 図　SD2 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥‥‥96
第100図　SD3・4・5 測量図（縮尺 1：40）‥‥96
第101図　SD6 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥‥‥97
第102図　SD7・8・10 測量図（縮尺 1：40）‥97
第103図　SD9 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥‥‥98
第104図　SD11 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥‥‥99
第105図　SD12 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥‥‥99
第106図　SD13・14 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥100
第107図　SD15 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥‥‥101
第108図　SD16 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥‥‥101
第109図　SK1 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥‥‥102
第110図　SK2 測量図（縮尺 1：40）‥‥‥‥‥102
第111図　出土遺物実測図（縮尺 1：3、2：3）‥‥104

第６章　調査の成果と課題

第 112 図　朝美･辻町周辺の遺跡分布図（縮尺 1：7,000）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥112

表　目　次

第１章　はじめに

表 1　調査地一覧‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 1

第２章　辻遺跡５次調査

表 2　掘立柱建物一覧‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥20
表 3　溝一覧
表 4　土坑一覧
表 5　性格不明遺構一覧‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥21
表 6　掘立 1 出土遺物観察表（土製品）
表 7　掘立 2 出土遺物観察表（土製品）
表 8　掘立 3 出土遺物観察表（土製品）
表 9　SK2 出土遺物観察表（土製品）‥‥‥‥21
表 10　SK3 出土遺物観察表（土製品）
表 11　SD1 出土遺物観察表（土製品）‥‥‥‥22
表 12　SD2 出土遺物観察表（石製品）
表 13　SX1 出土遺物観察表（土製品）
表 14　包含層出土遺物観察表（土製品）

第３章　辻町遺跡３次調査

表 15　掘立柱建物一覧‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥56
表 16　溝一覧
表 17　土坑一覧‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥57
表 18　性格不明遺構一覧
表 19　SD9 出土遺物観察表（土製品）‥‥‥‥57
表 20　SD11 出土遺物観察表（土製品）‥‥‥58
表 21　SK13 出土遺物観察表（土製品）
表 22　SX4 出土遺物観察表（土製品）
表 23　水田面出土遺物観察表（石製品）
表 24　掘立 1 出土遺物観察表（土製品）

表 25　SE1 出土遺物観察表（土製品）・・・・・・・59
表 26　SD4 出土遺物観察表（土製品）
表 27　SD5 出土遺物観察表（土製品）
表 28　SD6 出土遺物観察表（土製品）
表 29　SD7 出土遺物観察表（土製品）
表 30　SD8 出土遺物観察表（土製品）
表 31　SK5 出土遺物観察表（土製品）
表 32　SK7 出土遺物観察表（土製品）・・・・・・・60
表 33　SK9 出土遺物観察表（土製品）
表 34　SK10 出土遺物観察表（土製品）・・・・・・60
表 35　SK11 出土遺物観察表（土製品）
表 36　SK12 出土遺物観察表（土製品）
表 37　SX1 出土遺物観察表（土製品）
表 38　SX2 出土遺物観察表（土製品）
表 39　SX3 出土遺物観察表（土製品）
表 40　第Ⅵ層出土遺物観察表（土製品）・・・・・61
表 41　第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）
表 42　第Ⅴ層出土遺物観察表（石製品）・・・・・62

第 4 章　朝美辻遺跡 1 次調査

表 43　自然流路一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
表 44　溝一覧
表 45　土坑一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
表 46　柱穴一覧
表 47　SR1 出土遺物観察表（土製品）・・・・・・・84
表 48　SR1 出土遺物観察表（木製品）
表 49　SD1 出土遺物観察表（土製品）
表 50　SD2 出土遺物観察表（土製品）・・・・・・・85
表 51　SK1 出土遺物観察表（土製品）・・・・・・・85
表 52　SK2 出土遺物観察表（土製品）
表 53　SK3 出土遺物観察表（土製品）
表 54　SK7 出土遺物観察表（石製品）
表 55　SK8 出土遺物観察表（土製品）
表 56　SK10 出土遺物観察表（土製品）・・・・・・86
表 57　包含層出土遺物観察表（土製品）
表 58　包含層出土遺物観察表（石製品）

第 5 章　朝美辻遺跡 2 次調査

表 59　掘立柱建物址一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・105
表 60　溝一覧
表 61　土坑一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
表 62　柱穴一覧(1) ～(4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
表 63　出土遺物観察表（土製品）・・・・・・・・・・・110
表 64　出土遺物観察表（石製品）

写真図版目次

第 2 章　辻遺跡 5 次調査

図版 1　1. 調査前（北西より）
　　2. 遺構検出状況（西より）
　　3. 南壁土層（北東より）
図版 2　1. SX1 遺物出土状況（西より）
　　2. 掘立 1・P1 半掘状況（西より）
　　3. 掘立 2・P1 半掘状況（西より）
図版 3　1. SX1 ベルト土層（南より）
　　2. 遺構完掘状況（南より）
　　3. 掘立 3 完掘状況（北より）
図版 4　1. 出土遺物
　　(SK3：11、SD2：16、包含層：24・25)

第 3 章　辻町遺跡 3 次調査

図版 5　1. 調査地全景（南西より）
図版 5　2. 1 区堆積土層（北より）
　　3. 1 区遺構検出状況（南より）

図版 6　1. 1区第Ⅵ層上面遺構検出状況（北より）
2. 1区第Ⅵ層上面遺構完掘状況（北より）
3. 1区 SD11 完掘状況（南東より）
図版 7　1. 2区第Ⅵ層上面遺構検出状況（西より）
2. 2区第Ⅵ層上面遺構完掘状況（西より）
3. 2区 SE1 井戸枠検出状況（西より）
図版 8　1. 2区 SE1 半截状況（北東より）
2. 2区掘立1完掘状況（北より）
3. 2区第Ⅶ層足跡完掘状況（北より）
図版 9　1. 2区第Ⅵ層上面木杭半截状況（西より）
2. 3区遺構検出状況（南より）
3. 3区遺構完掘状況（西より）
図版 10　1. 3区南側遺構完掘状況（北東より）
2. 4区遺構検出状況（東より）
3. T9 遺構検出状況（西より）
図版 11　1. 出土遺物
（SD11：3、水田面：15、SE1：18）
図版 12　1. 出土遺物（SE1：19、Ⅴ層：66）

第4章　朝美辻遺跡1次調査

図版 13　1. 調査前全景（南東より）
2. 遺構検出状況①（西より）
3. 遺構検出状況②（北東より）
図版 14　1. 西半部完掘状況（南東より）
2. 東半部完掘状況（東より）
3. SR1 検出状況（北西より）
図版 15　1. SR1 土層（北より）
2. SR1 蹴放し出土状況（北西より）
3. 作業風景（北東より）
図版 16　1. SD1 完掘状況（北西より）
2. SD2 完掘状況（南より）
3. SD3 完掘状況（北東より）
図版 17　1. SK1 検出状況（南より）
2. SK2・3 検出状況（北西より）
3. SK4 半截状況（東より）
図版 18　1. SR1 出土遺物①
図版 19　1. SR1 出土遺物②
2. 出土遺物
（SD1:13、SD2:18、SK1:19、
SK3:23、SK10:29）
図版 20　1. 包含層出土遺物

第5章　朝美辻遺跡2次調査

図版 21　1. 調査前風景（南より）
2. 重機による掘削状況（北東より）
図版 22　1. 遺構検出状況1（北より）
2. 遺構検出状況2（西より）
図版 23　1. 掘立1布堀り断面状況（東より）
2. SD1 北部検出状況（西より）
3. SD1 北部断面状況（西より）
図版 24　1. SD3・4・5 検出状況（北より）
2. SD3・4・5 断面状況（西より）
3. SD7・8・9 検出状況（東より）
図版 25　1. SD7 遺物出土状況（北より）
2. SD7 東部断面状況（西より）
3. SD11 検出状況（西より）
図版 26　1. SD11 遺物出土状況（西より）
2. SD13 遺物出土状況（西より）
3. SD16 遺物出土状況（南より）
図版 27　1. SP26 根石出土状況（東より）
2. SP86（掘立1）半截状況（南より）
3. 調査風景（南西より）
図版 28　1. 出土遺物
（SD1:3・10、SD3:9、SD7:1・12・13、
SD12:5・6、SD13:2・7、SD14:8、
SD16:11、SP82:4）

第１章　はじめに

第１節　調査の経緯

本書は、松山市朝美地区および辻地区において民間の開発行為に伴い実施した４件の埋蔵文化財調査報告書である。本書の刊行組織である公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団は、平成24年度に公益財団となったが、平成22年度以前は財団法人松山市生涯学習振興財団として発掘調査及び報告書作成を行っている。平成15年度には辻遺跡５次調査を行い、平成20年度には朝美辻遺跡１次調査、平成22年度には辻町遺跡３次調査、平成24年度は朝美辻遺跡２次調査を行った。各調査の場所や期間、調査面積等は表１に記す。

表１　調査地一覧

調　査　名	所　在　地	調査期間	調査面積(㎡)
辻遺跡５次調査	南江戸五丁目1529-1の一部、1529-2	H15.8.5～H15.8.29	245.35
辻町遺跡３次調査	辻町41番１、44番１の各一部	H22.10.1～H22.11.26	約450
朝美辻遺跡１次調査	朝美一丁目1259番５、1266番１、1267番１・７、1270番７の各一部	H20.5.1～H20.6.20	約235
朝美辻遺跡２次調査	朝美一丁目1395番１の一部	H24.8.1～H24.9.28	約190

第２節　調査･整理刊行組織

（１）調査組織

〔平成15年度〕

松山市教育委員会

教育長　中矢　陽三
事務局　局　長　武井　正浩
企画官　遠藤　宗敏
企画官　石丸　　修
文化財課　課　長　八木　方人
主　幹　家久　則雄
副主幹　田城　武志

財団法人 松山市生涯学習振興財団

理事長　中村　時広
事務局　局　長　三宅　泰生
事務局　次　長　菅　　嘉見
埋蔵文化財センター所長　杉田　久憲
次長兼調査係係長（兼務）西尾　幸則
管理係　係　長　岸本　照修
（調査担当）調査員 河野　史知
（写真担当）調査員 大西　朋子

〔平成20年度〕

松山市教育委員会

教育長　土居　貴美
事務局　局　長　石丸　　修
企画官　仙波　和典
企画官　古鎌　　靖

財団法人 松山市生涯学習振興財団

理事長　中村　時広
事務局　局　長　吉岡　一雄
埋蔵文化財センター所長兼考古館館長　丹生谷博一
次　長　重松　佳久

	企画官　岸　紀明		調査担当リーダー　栗田　茂敏
文化財課	課　長　家久　則雄		（調査担当）調査員 河野　史知
	主　幹　森　正経		（写真担当）調査員 大西　朋子

〔平成 22 年度〕

松山市教育委員会		財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	
	教育長　山内　泰		理事長　一色　哲昭
事務局	局　長　嶋　啓吾		事務局　局　長　松澤　史夫
	企画官　渡部　満重		事務局　次　長　近藤　正
	企画官　青木　茂		施設利用推進部　部　長　中越　敏彰
文化財課	課　長　駒澤　正憲		埋蔵文化財センター所長兼考古館館長　田城　武志
	主　査　竹内　明男		調査担当リーダー　栗田　茂敏
			普及・啓発リーダー　梅木　謙一
			（調査担当）調査員　吉岡　和哉
			（写真担当）調査員　大西　朋子

〔平成 24 年度〕

松山市教育委員会		公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	
	教育長　山内　泰（前任、～ 10/1）		理事長　一色　哲昭
	教育長　山本　昭弘（10/2 ～）		事務局　局　長　松澤　史夫
事務局	局　長　嶋　啓吾		事務局　次　長　近藤　正
	企画官　渡部　満重		施設利用推進部　部　長　玉井　弘幸
	企画官　前田　昌一		埋蔵文化財センター所長兼考古館館長　田城　武志
文化財課	課　長　駒澤　正憲		調査担当リーダー　栗田　茂敏
	主　幹　篠原　昭二		普及・啓発リーダー　梅木　謙一
			（調査担当）調査員　小笠原善治
			（写真担当）調査員　大西　朋子

（2）整理・刊行組織

〔平成 27 年度出土物整理組織〕

松山市教育委員会		公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	
	教育長　山本　昭弘		理事長　中山紘治郎
事務局	局　長　前田　昌一		事務局　局　長　中西　真也
	次　長　隅田　完二		次長兼総務部長　紺田　正彦
	次　長　家串　正治		施設利用推進部　部　長　渡部　広明
文化財課	課　長　若江　俊二		埋蔵文化財センター所長兼考古館館長　田城　武志
	主　幹　篠原　昭二		（整理担当）主　任　小笠原善治
			（写真担当）調査員　大西　朋子

〔平成 28 年度報告書編集・刊行組織〕

【刊行組織】

松山市教育委員会

教育長　山本　昭弘（前任、～ 10/1）

教育長　藤田　　仁（10/2 ～）

事務局　局　長　前田　昌一

次　長　家串　正治

次　長　杉本　　威

文化財課　課　長　若江　俊二

主　幹　越智　茂樹

【編集組織】

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理事長　中山紘治郎

事務局　局　長　中西　真也

次長兼総務部長　橋　　昭司

文化振興部　部　長　梶原　信之

埋蔵文化財センター所長兼考古館館長　村上　卓也

主　査　梅木　謙一

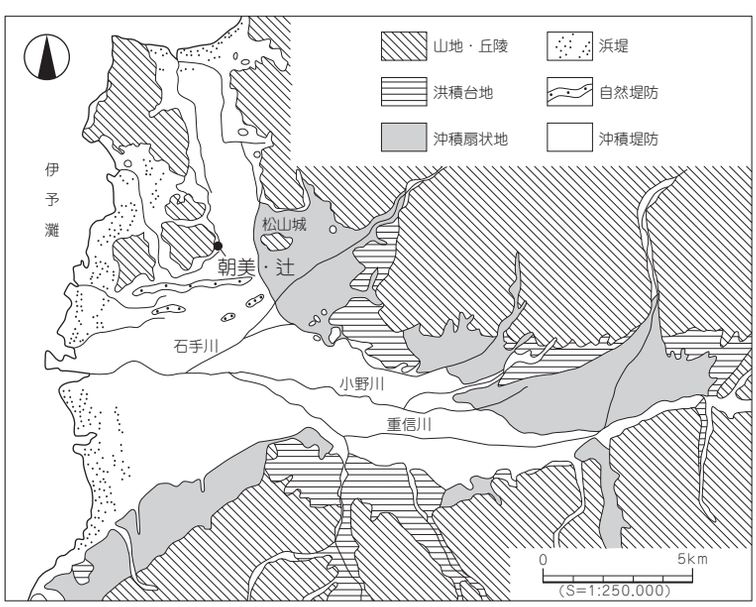
（編集担当）主　任　小笠原善治

第３節　立地と歴史的環境

（１）遺跡の立地

松山平野は四国山地北西部に位置し、石手川や重信川などの大小河川で形成された複合扇状地堆積物と沖積低地や浜提などで形成されている。このうち、石手川は高縄山地を水源とし、平野北東部を西進しながら、途中に重信川と合流する。石手川が形成した扇状地は、半径 4kmに及ぶ。石手川扇状地は、古期扇状地面と新期扇状地面、さらには洪積世の段丘化した低位段丘面とに区分される。

この松山平野の西部に所在する朝美地区および辻地区は、西方の伊予灘から 3.5kmに位置する独立



第１図　　松山平野の地形概要図

丘陵である大峰ケ台丘陵の東に位置する。周辺の河川には、この丘陵東と南麓に平野を貫流する２大河川の一つである石手川支流の宮前川が流れる。この２地区は大峰ケ台丘陵の東麓と低地からなる地域であり、南方には古墳時代の堰遺構で著名な古照遺跡など、各時代を通して遺跡が豊富な地域である。

（２） 歴史的環境

ここでは、遺跡の所在する大峰ケ台丘陵上、および周辺平野部の遺跡分布等を概観していく。以前より、大峰ヶ台丘陵上には弥生時代以降の各期の遺跡が存在することが知られているが、これを遡る時期の遺構・遺物の検出例はみられていない。

縄文時代

縄文時代の遺物は、同丘陵南麓直近にあって、古墳時代前期の井堰が出土し、断続的に 11 次までの調査が行われている古照遺跡の井堰を覆った洪水砂礫層中から、後期を中心として前期末～晩期の土器片の出土をみるが、遺物は石手川旧流路の氾濫に伴うものであって、該期の遺構に伴うものではない。また、同丘陵北東麓の朝美澤遺跡２次調査包含層中から少量の後期土器片が出土している。

弥生時代

大峰ケ台丘陵一帯や周辺部の微高地上で、弥生時代の遺構、遺物の出土が多くみられる。同丘陵上や裾部では中～後期のものを主体とし、前期の遺跡は周辺の微高地上に分布している。これら前期の遺跡の中でも、朝美澤遺跡２次調査地第３層出土の板付Ⅱａ式併行期の遺物群は、松山平野の弥生時代の遺物としては最古段階の遺物が出土した遺跡のひとつである。また、調査地の西南方、弁天山丘陵東麓に所在する斎院烏山遺跡では環濠と考えられる溝状遺構からは、前期末の一括遺物の出土をみている。

中期中葉では、大峰ケ台遺跡４次調査として実施された丘陵頂上部の調査において、大型の円形竪穴住居、方形竪穴住居、掘立柱建物、段状遺構などの高地性集落が知られる。また、丘陵東麓で行われた大峰ケ台遺跡６次調査や、さらに東方の朝美辻遺跡２次調査の西隣接した松山西部環状線に伴う大峰ケ台Ⅱ遺跡の調査で、包含層遺物としての中期中葉の遺物の出土がある。近年では大峰ケ台遺跡 12 次調査で溝から中期中葉の遺物が出土している。なお、現時点ではこれに続く中期後葉、凹線文期の遺跡はこの地域では確認されていない。

後期では遺跡数は増え、前述の６次調査では丘陵鞍部に投棄された状況で、器台を多く含む後期中葉の土器群が出土し、また朝美澤遺跡１次調査では３基の壺棺墓が検出されている。斎院烏山遺跡の南方１km の津田鳥越遺跡の１～３次調査では、土錘や石錘を多数伴った後期後半の火災住居の検出をはじめとして、多量の土器群が出土している。

古墳時代

調査地西方に所在する大峰ケ台をはじめとして、周辺の岩子山、弁天山等の丘陵上には古墳が多く分布している。大峰ケ台丘陵北西面には、当平野最古の前方後円墳朝日谷２号墳があり、主体部粘土床上から２面の舶載鏡、40 本を越える銅鏃・鉄鏃や鉄剣、ガラス玉等を出土している。また、西斜面で行われた同９次調査では、大池東古墳群として５世紀末～６世紀初頭の円墳群や、横穴式石室を主体部とする後期古墳群が調査されており、円墳群からは形象埴輪を含む埴輪類の出土がみられている。この丘陵には、そのほかにも横穴式石室を主体部に持つ後期古墳が多く分布しており、朝日谷１

1-A 朝美澤遺跡1次A区	❾ 伝旧松山藩陣屋跡(県)	⑱ 大峰ケ台遺跡4次	㉗ 大峰ケ台遺跡13次
1-B 朝美澤遺跡1次B区	❿ 大峰ケ台遺跡Ⅱ(県)	⑲ 大峰ケ台遺跡5次	㉘ 南江戸客谷遺跡
❷ 朝美澤遺跡2次	⓫ 辻遺跡3次(県)	⑳ 大峰ケ台遺跡6次	㉙ 南江戸鬮目遺跡1次
❸ 朝美辻遺跡3次	⓬ 辻遺跡4次(県)	㉑ 大峰ケ台遺跡7次	㉚ 新玉36号線南江戸鬮目遺跡
❹ 辻町遺跡1次	⓭ 南江戸桑田遺跡1次(県)	㉒ 大峰ケ台遺跡8次	㉛ 南江戸鬮目遺跡2次(県)
❺ 辻町遺跡2次	⓮ 南江戸桑田遺跡2次(県)	㉓ 大峰ケ台遺跡9次	㉜ 松環古照遺跡(県)
❻ 南江戸桑田遺跡	⓯ 大峰ケ台遺跡1次	㉔ 大峰ケ台遺跡10次	㉝ 古照遺跡
❼ 朝美澤廃寺遺跡(県)	⓰ 大峰ケ台遺跡2次	㉕ 大峰ケ台遺跡11次	
❽ 朝美澤遺跡(県)	⓱ 大峰ケ台遺跡3次	㉖ 大峰ケ台遺跡12次	図中の◎は本書掲載遺跡

※南江戸桑田遺跡は松山市による調査、南江戸桑田遺跡１・２次調査は愛媛県による調査。また南江戸鬮目遺跡１次調査西側で行われた調査は新玉 36 号線南江戸鬮目遺跡となる (2016.11)。朝美澤遺跡は愛媛県、同１・２次調査は松山市による調査。辻遺跡１・２次調査は松山市が行い、大峰ケ台遺跡６・８次調査と名称変更。同３・４次は愛媛県による調査。

第２図　宮前川流域の主要遺跡分布図

号墳や、大峰ケ台３次調査・同５次調査で確認された客谷古墳群といった６世紀後半～７世紀前半を主体とした円墳の調査が行われている。古墳以外には、南方に古照遺跡や松環古照遺跡、古照ゴウラ遺跡などがある。また、大峰ケ台丘陵東の低地、宮前川左岸にある辻町遺跡１・２次からは後期の祭祀関連遺構が出土、大峰ケ台遺跡８次調査（辻遺跡２次調査）、大峰ケ台遺跡Ⅱでは掘立柱建物跡が検出されている。

古　代

この地域では古代の遺構・遺物は、検出事例が少ない。（公財）愛媛県埋蔵文化財調査センターによって松山西部環状線建設にともなう調査では、1988 年度に実施された大峰ケ台丘陵北東麓部の朝美澤廃寺遺跡の調査によって平安時代の寺跡の一部が検出され、澤廃寺と命名された。そのほか、11 世紀後半の朝美澤遺跡１次・２次調査では７世紀～８世紀中頃の掘立柱建物３棟を検出している。南江戸客谷遺跡では９～10 世紀の集落関連遺構が検出されている。朝美澤遺跡２次調査では、10 世紀以降の掘立柱建物が検出されている。

中　世

中世以降になるとこの地域では、一気に遺跡の増加が見られる。前述の松山環状線に伴う大峰ケ台丘陵北東麓部から南東部の調査によって中世の水田址、集落・墓等が見つかり、また、南江戸鬮目遺跡１次調査、古照遺跡上層部において多量の土師器・瓦器・須恵器が出土しており、これらの遺物は松山平野の中世土器編年の基準資料となっている。そのほか地域では集落遺跡とともに大峰ケ台遺跡８次調査や辻町遺跡２次など中世墓の検出がなされており、集落内での墓域が中世から近世まで継続的に使用されている。

近　世

近世の遺構では、墓を主体に調査が行われている。調査地東南麓の南江戸桑田遺跡は、近世墓地で、11 基の桶棺墓、１基の箱棺墓や、その他土坑墓が検出された。また、丘陵西南部の北斎院地内遺跡でも 15・16 世紀の墓や掘立柱建物を中心とした遺構群が検出され、集落内での墓域、生活域といった集落変遷の一端が窺える資料として評価されている。

【参考文献】

梅木　謙一　2005　「南江戸桑田」「大峰ケ台６次 ·8 次」「北斎院」『宮前川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書　第 102 集

梅木　謙一　2006　「大峰ケ台遺跡３次調査」「南江戸客谷遺跡」『大峰ケ台遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書　第 110 集

栗田　茂敏　1995　『大峰ケ台遺跡 －第４次調査－』松山市文化財調査報告書 第 48 集

髙尾　和長　1998　『大峰ケ台遺跡Ⅱ －第９次調査－』松山市文化財調査報告書 第 62 集

栗田　茂敏　2007　『大峰ケ台遺跡 －第 10 次調査－』松山市文化財調査報告書 第 119 集

山之内志郎　2016　『衣山北組遺跡・谷町遺跡２次調査』松山市文化財調査報告書 第 183 集

相原浩二・河野史知　1995　『辻町遺跡 －２次調査地－』松山市文化財調査報告書 第 51 集

栗田正芳・小笠原善治・河野史知　1995　「第 10・11 次」『古照遺跡』松山市文化財調査報告書 第 47 集

梅木　謙一　1994　「北斎院地内」「斎院烏山」『斎院の遺跡』松山市文化財調査報告書　第 43 集

梅木　謙一・宮内慎一　1992　『朝美澤遺跡・辻町遺跡』松山市文化財調査報告書 第 29 集

第２章　辻遺跡５次調査

第１節　調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2001（平成13）年11月30日、渡部英夫氏より松山市南江戸５丁目1529番地における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。確認願が提出された申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『№33大峰ケ台弥生遺跡Ｂ・大峰ケ台古墳群Ｂ』内にあり、周辺地域では以前より調査が行われ、当地一帯は周知の遺跡として知られている。調査地は大峰ケ台丘陵の東麓に位置しており、北西約350mの同丘陵頂上部には弥生時代中期の高地性集落である大峰ケ台遺跡４次調査、北側約100mの辻遺跡からは弥生時代後期の土器群が検出されている。北東隣の辻遺跡２次調査からは古墳時代後期や中世の集落跡が検出され、東側の環状線の調査である南江戸桑田遺跡２次、辻遺跡３次・４次調査からは古墳時代から近世にかけての集落跡が検出されている。

これらのことから、文化財課では、確認願が申請された地点についての遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、平成13年12月13日に試掘調査を実施した。その結果、中世の集落関連遺構を検出し、土師器片が出土した。試掘調査の結果を受け、文化財課と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）と地権者の三者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発工事によって消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、中世における集落構造の解明を主目的として、文化財課の指導のもと、埋文センターが主体となり、2003（平成15）年８月５日より本格調査を開始した。

（２）調査の経緯

８月 ５ 日　重機により表土掘削を行う。
８月 ７ 日　重機による表土掘削、排土の移動を終了する。
８月11日　壁面・床面を精査し、遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘り下げ・測量を開始する。
８月18日　北壁を一部拡張する。
８月29日　遺構完掘写真撮影を行い、発掘器材を搬出し、屋外調査を終了する。

（３）調査組織

所 在 地 ：松山市南江戸５丁目1529－２、1529－１の一部
調査期間：2003（平成15）年８月５日（火）～同年８月29日（金）
調査面積：245.35㎡
契 約 者：渡部英夫、森川末弘
調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査担当：埋蔵文化財センター調査員　河野　史知

第２節　層　位（第４図）

本遺跡は、松山平野の西部の丘陵麓付近の斜面上にあり、標高約 26 ～ 27m に立地する。調査以前は畑地である。基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層旧耕作土、第Ⅲ層遺物包含層、第Ⅳ層地山土である。

第Ⅰ層　表土で明褐色土（7.5YR 5/6）が調査区全域に層厚 10 ～ 53cm の堆積を測る。

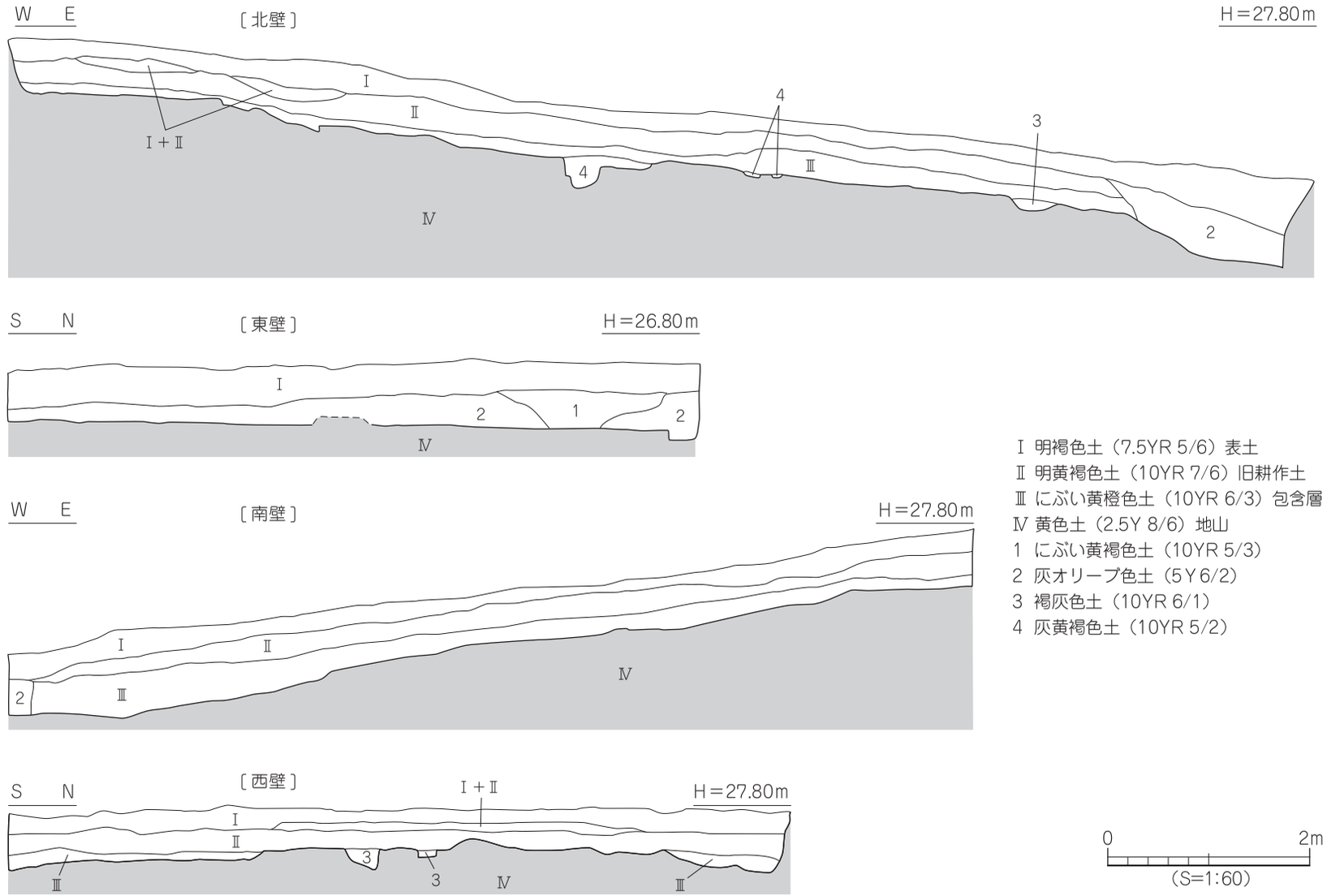
第Ⅱ層　旧耕作土で明黄褐色土（10YR 7/6）が調査区の東端を除く全域に層厚 10 ～ 26cm の堆積を測る。

第Ⅲ層　にぶい黄橙色土（10YR 6/3）が調査区の東端を除く全域に層厚 6 ～ 38cm の堆積を測り、土師器・須恵器片を包含する。

第Ⅳ層　地山で黄色土（2.5Y 8/6）が西から東へ緩やかに傾斜し、比高差 1.3 ｍを測る。最終の遺構検出面である。

調査にあたり、調査地内を４ｍ四方のグリットに分けた。グリットは北から南へＡ・Ｂ・Ｃ、東から西へ１・２・３・４のグリット名を付した。グリットは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。調査では、弥生土器・土師器・須恵器・石器（石鏃）など弥生時代から古墳時代の遺物が出土し、その出土量は収納用箱（深さ 22 ×幅 44 ×長さ 60cm）３箱分である。

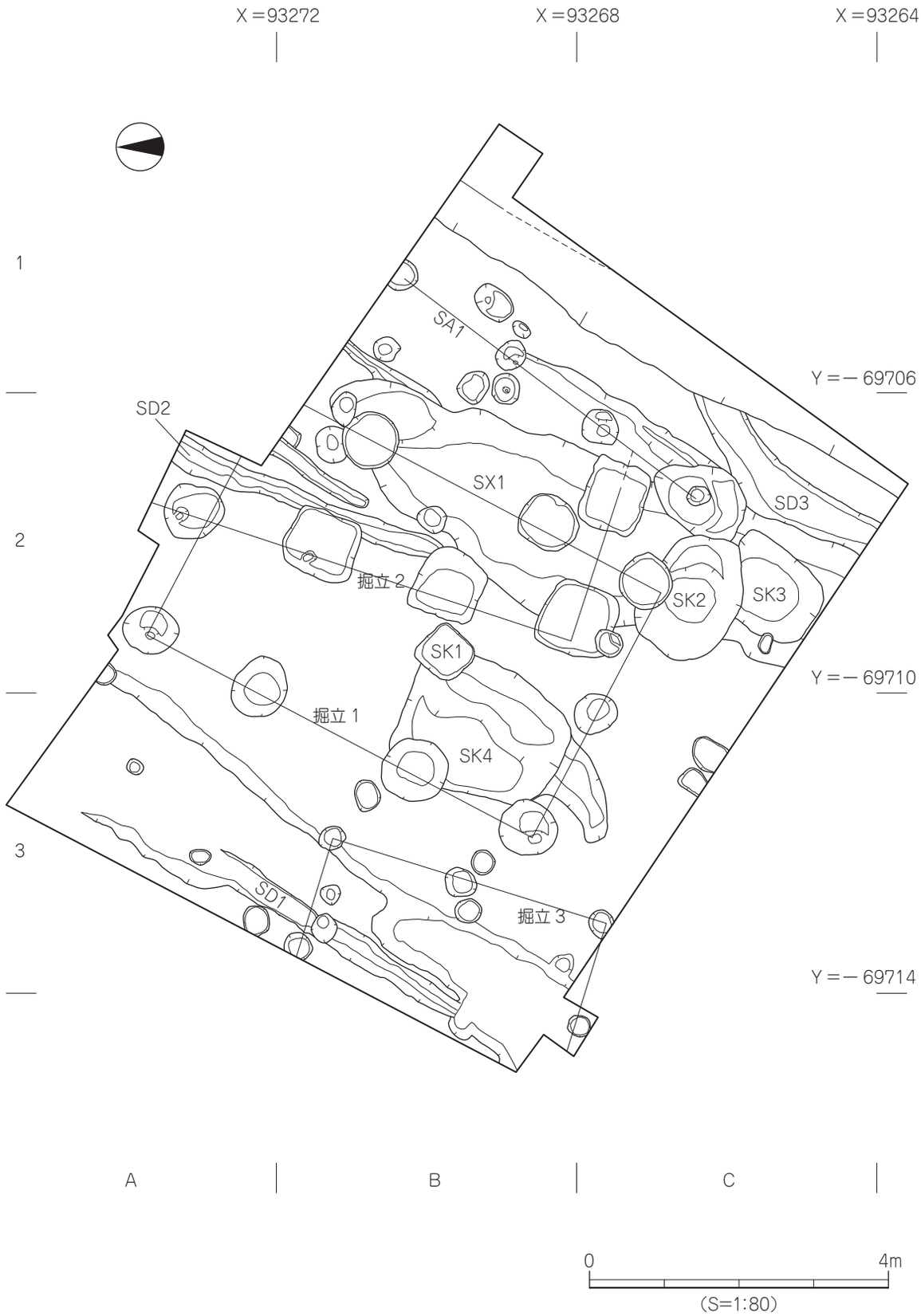
第３図　調査地位置図



Ⅰ 明褐色土（7.5YR 5/6）表土
Ⅱ 明黄褐色土（10YR 7/6）旧耕作土
Ⅲ にぶい黄橙色土（10YR 6/3）包含層
Ⅳ 黄色土（2.5Y 8/6）地山
1 にぶい黄褐色土（10YR 5/3）
2 灰オリーブ色土（5Y 6/2）
3 褐灰色土（10YR 6/1）
4 灰黄褐色土（10YR 5/2）

0　2m
（S=1:60）

第４図　土層図


X＝93272
X＝93268
X＝93264
1
2
3
Y＝－69706
Y＝－69710
Y＝－69714
SA1
SD2
SX1
SD3
掘立２
SK2
SK3
SK1
掘立１
SK4
SD1
掘立３
A
B
C
0
4m
(S=1:80)

第５図　遺構配置図

第３節　遺構と遺物

今回の調査では、主に古墳時代の遺構や遺物を検出した。遺構は、第Ⅳ層上面から掘立柱建物址３棟、柵列１条、土坑３基、溝３条、柱穴 21 基、性格不明遺構１基を検出した。遺物は、弥生土器･土師器･須恵器・石器が出土した。

（１）古墳時代

1）掘立柱建物址

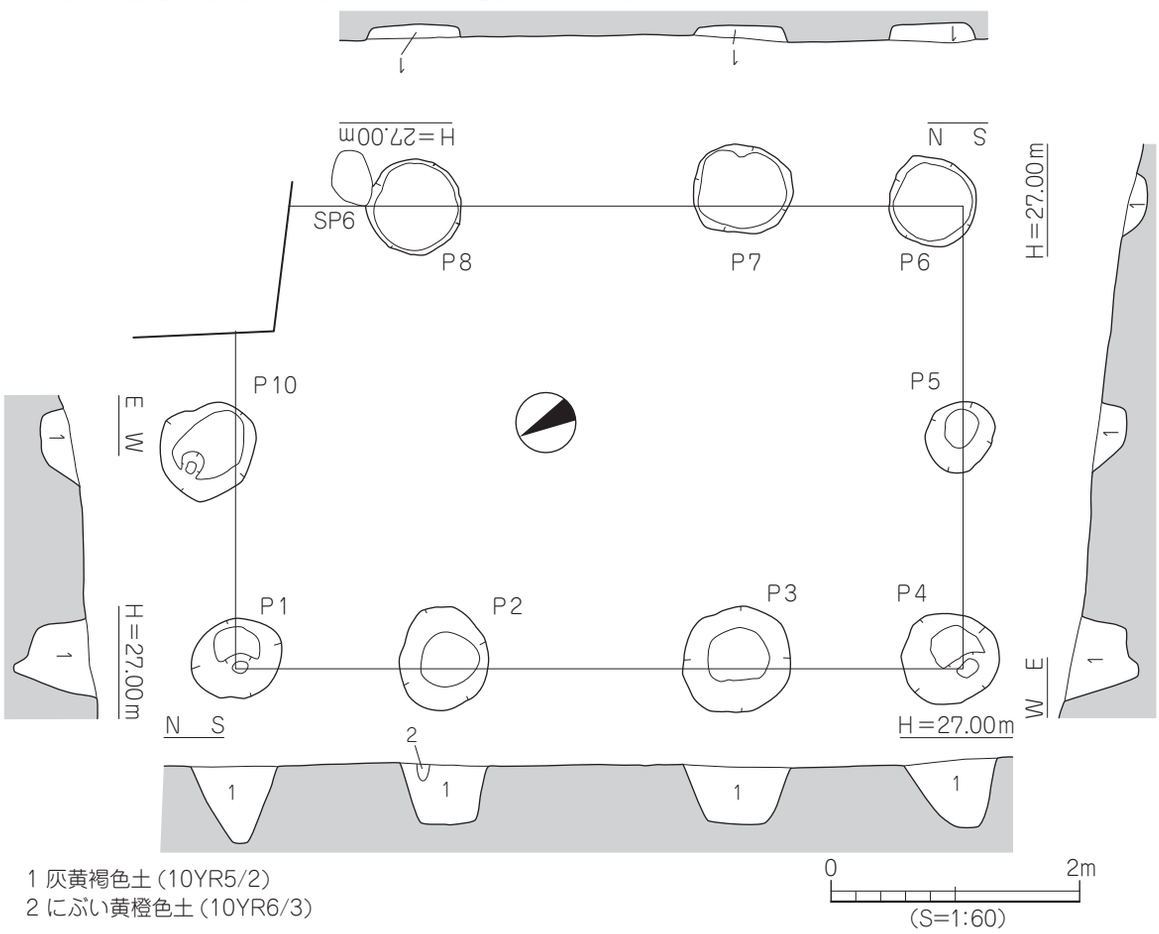
掘立１（第６図、図版２・3）

調査区中央部の A2 ～ C3 区に位置し、SK2・4、SX1 を切り、東北角は調査区外に延びる。３間×２間の南北棟で、主軸はN−28°−E を測る。規模は桁行5.84m、柱間1.65 ～ 2.64m、梁行3.66m、柱間1.83m、柱穴の平面形態は円形を呈し、直径 53 ～ 89cm、深さ６～ 55cm を測る。埋土は灰黄褐色土で、P4 と P10 の基底面からは直径約 22cm の柱痕を検出した。遺物は埋土中から土師器・須恵器片が少量出土した。

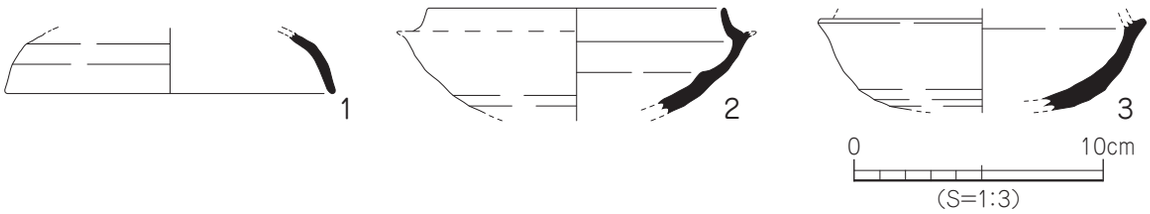
出土遺物（第７図）

１～３は須恵器である。１は坏蓋で天井部と口縁部の境に稜をもち、口縁端部は丸く納まる。2・3 は坏身で受部端がやや凹む。

時期：出土した須恵器の特徴から６世紀後半とする。



第６図　掘立１測量図



第７図　掘立１出土遺物実測図

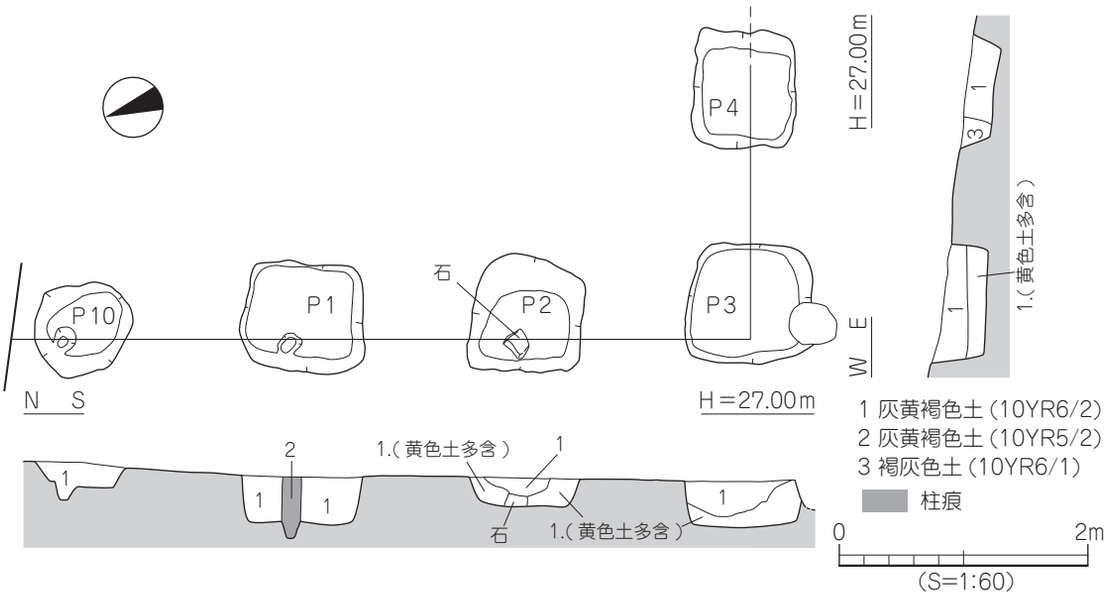
掘立２（第８図、図版２・３）

調査区東側の A2 ～ C2 区に位置し、SD2、SX1 を切り、北・東側は調査区外に延びる。3 間× 2 間以上で、主軸はＮ－19°－Ｅ を測る。規模は南北 5.5m 以上、柱間 1.80 ～ 1.99m、東西 2.16m、柱間 2.16m、柱穴の平面形態は方形～円形を呈し、直径 74 ～ 98cm、深さ 12 ～ 46cm を測る。埋土は灰黄褐色土で、P1 と P10 の柱穴からは直径 16cm の柱痕を検出した。遺物は埋土中より土師器・須恵器の小片が僅かに出土した。

出土遺物（第９図）

4 は須恵器の坏身である。上外方に延びる受部端は凹む。

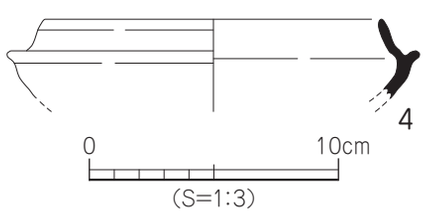
時期：出土した須恵器の特徴から 6 世紀後半とする。



第８図　掘立２測量図

掘立３（第 10 図、図版３）

調査区南西部の B3 ～ C3 区に位置し、西側は調査区外に延びる。2 間× 2 間以上で、主軸はＮ－18°－Ｅ を測る。規模は南北 3.82m、柱間 1.91m、東西 1.66m 以上、柱間 1.41 ～ 2.02m、柱穴は円形を呈し、直径 27 ～ 41cm、深さ 7 ～ 19cm を測る。埋土は褐灰色土である。遺物は埋土中から土師器・須恵器の小片が僅かに出土した。

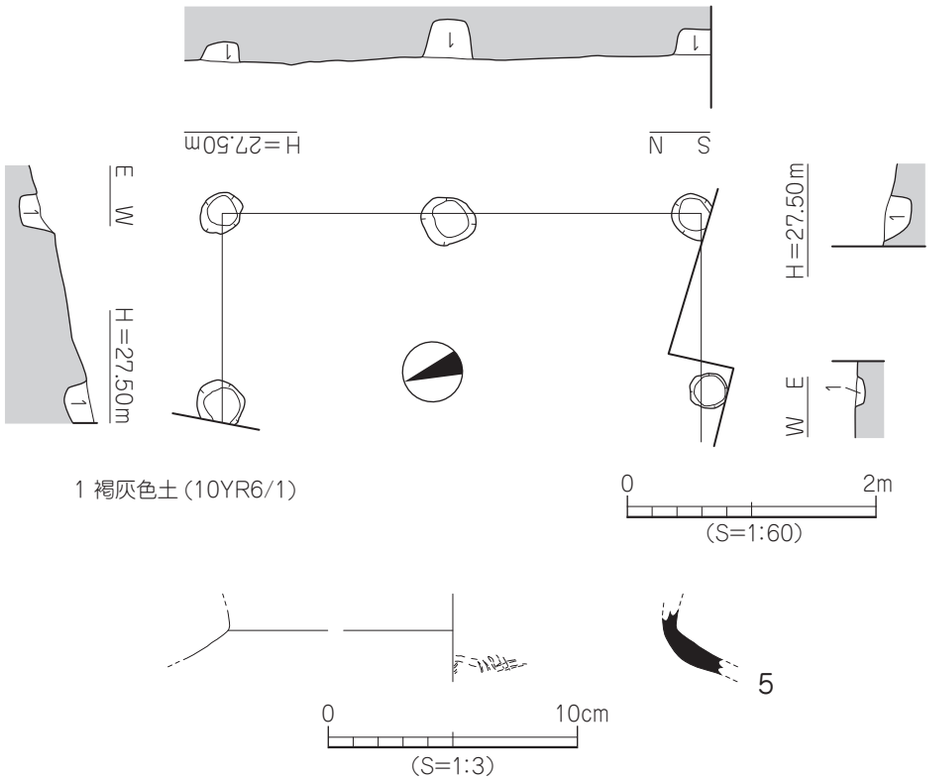


第９図　掘立２出土遺物実測図

出土遺物（第 10 図）

5 は須恵器の甕の頸部である。内外面に回転ナデ調整、内面は円弧叩き調整が施される。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、古墳時代としか判らない。



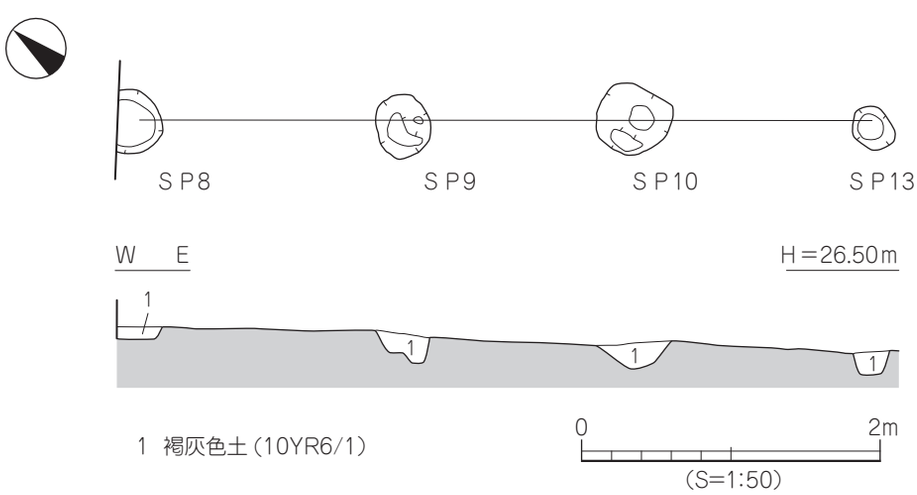
第 10 図　掘立 3 測量図・出土遺物実測図

2）柵列

SA1（第 11 図）

調査区東側の B1 ～ C2 区に位置する。南北方向に 3 間分が並んでおり、南北端は主軸は N-37°-E を測る。検出長は 5.16m、柱間 1.49 ～ 1.99m、柱穴は円形～楕円形を呈し、直径 26 ～ 49cm、深さ 7 ～ 19cm を測る。埋土は褐灰色土である。遺物は埋土中から土師器・須恵器の小片が僅かに出土した。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、古墳時代としか判らない。



第 11 図　SA1 測量図

3）土　坑

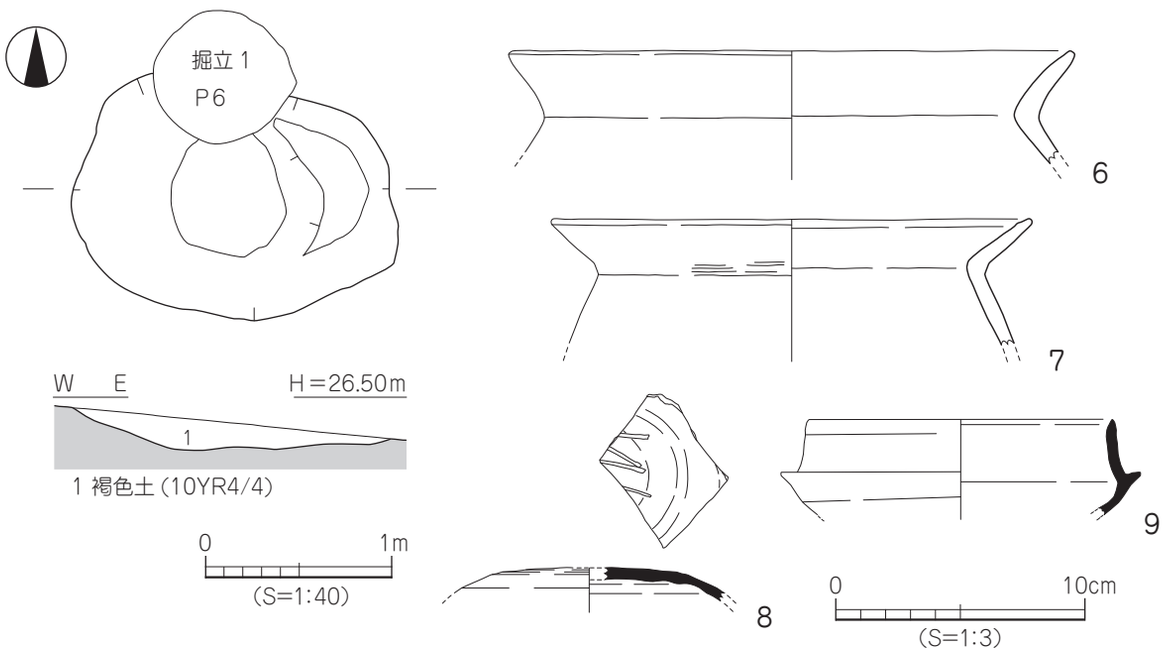
SK2（第 12 図）

調査区南東部の C2 区に位置し、SK3、掘立 1 に切られる。平面形態は楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸 1.7m、短軸 0.91m、深さ 32cm を測る。埋土は褐色土である。遺物は埋土中から土師器・須恵器片が出土した。

出土遺物（第 12 図）

6・7 は土師器の甕の口縁部である。「く」字状を呈した口縁部に端部は丸く納まる。8・9 は須恵器で、8 は坏蓋の天井部にヘラ記号がある。9 は坏身で、受部は凹み口縁部端に内傾する面をもつ。

時期：出土した須恵器の特徴から 5 世紀末とする。



第 12 図　SK2 測量図・出土遺物実測図

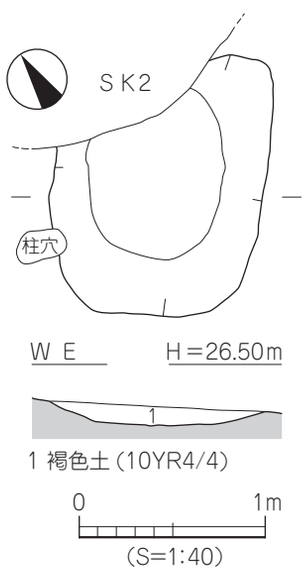
SK3（第 13 図）

調査区南西部の C2 区に位置し、SK2 を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸 1.2m、短軸 1.12m、深さ 10cm を測る。埋土は褐色土である。遺物は埋土中から土師器・須恵器片が出土した。

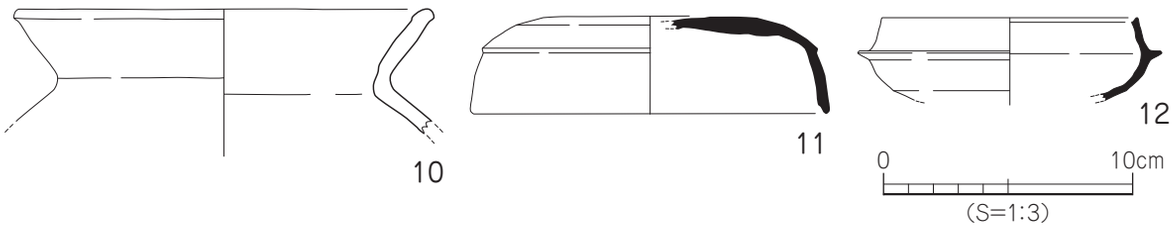
出土遺物（第 14 図、図版 4）

10 は土師器の甕である。口縁部は「く」字状を呈し、端部は丸く納まる。11・12 は須恵器であり、11 の坏蓋は扁平な天井部境に凹みをもち、口縁部に内傾する段をもつ。12 は坏身で、受部は水平に延び口縁端部に内傾する面をなす。

時期：出土した須恵器の特徴から 6 世紀初頭とする。



第 13 図　SK3 測量図

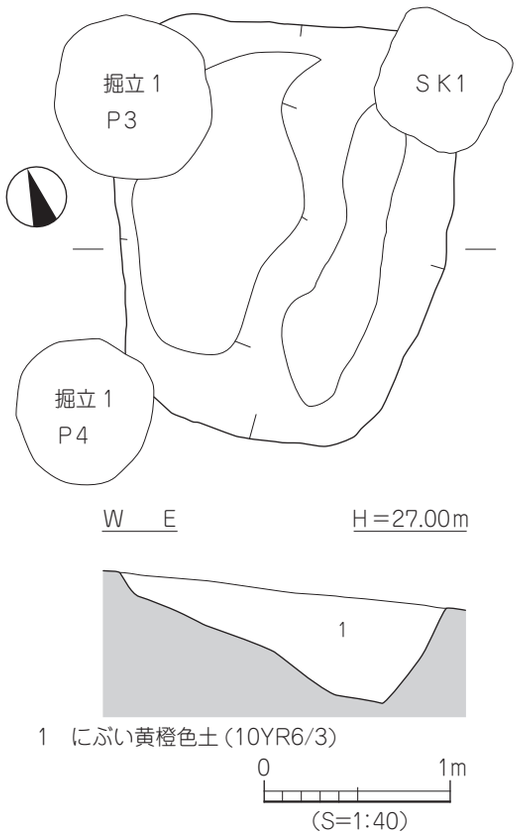


第 14 図　SK3 出土遺物実測図

SK4（第 15 図）

調査区中央部の B2 ～ B3 区に位置し、掘立 1、SK1 に切られる。平面形態は不整方形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 2.27m、短軸 1.79m、深さ 55cm を測る。埋土はにぶい黄橙色土である。遺物は埋土中から土師器・須恵器の小片が僅かに出土した。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、掘立 1 に切られることから、6 世紀後半以前としか判らない。



第 15 図　SK4 測量図

4）溝

SD1（第 16 図）

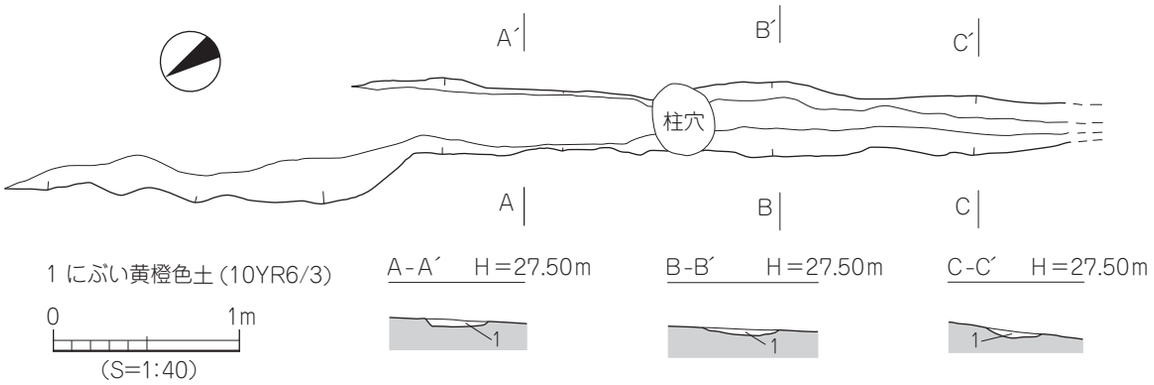
調査区の西端の A3 ～ B4 区に位置し、直線的に延び、断面形態は皿状を呈する。規模は検出長 5.56m、上場幅 26 ～ 40cm、深さ 2 ～ 10cm、南から北へ比高差 11cm を測る。埋土はにぶい黄橙色土である。遺物は埋土中から土師器・須恵器の小片が出土した。

出土遺物（第 17 図）

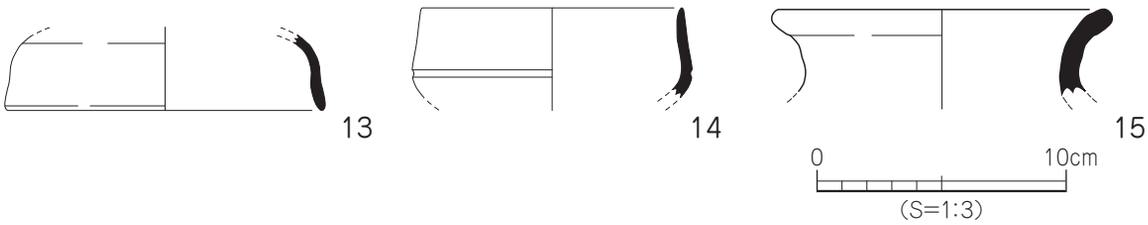
13 ～ 15 は須恵器である。13 は坏蓋で、口縁端部が丸く納まる。14 は椀で、胴部外面に沈線が 1 条巡る。15 は壺の口縁部で、外反する口縁端部は丸く納まる。

時期：出土した須恵器の特徴から、6 世紀後半とする。

SD2（第 18 図）



第 16 図　SD1 測量図



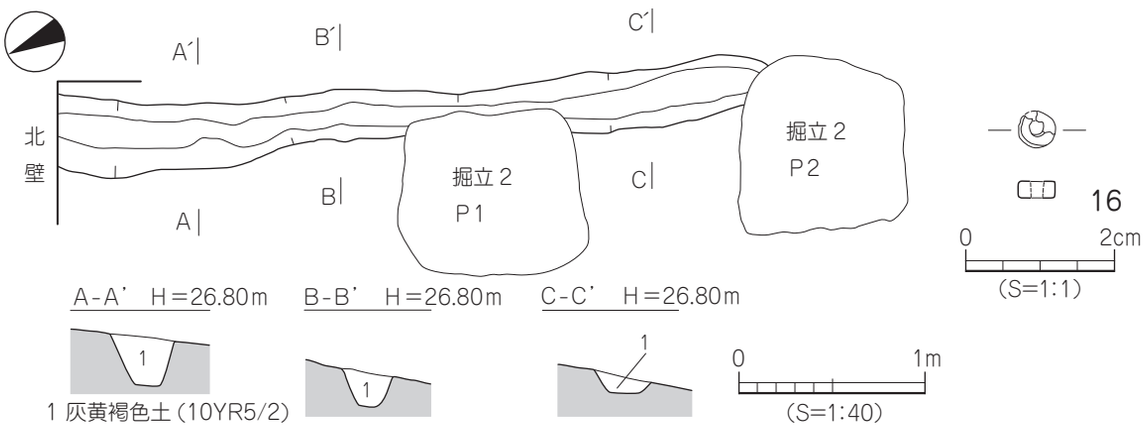
第 17 図　SD1 出土遺物実測図

調査区中央部北側の A2 ～ B2 区に位置し、掘立２に切られ、北端は調査区外に延び、断面形態は逆台形状を呈する。規模は検出長 3.8m、上場幅 25 ～ 42cm、深さ５～ 31cm、南から北へ比高差 9cm を測る。埋土は灰黄褐色土である。遺物は土師器･須恵器のは小片に混じり､臼玉が１点出土した。

出土遺物（第 18 図、図版 4）

16 は臼玉である。径 5mm、孔径 2mm、厚さ 2mm、重さ 0.066g を測る。滑石製。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、掘立２に切られることから６世紀後半以前としか判らない。

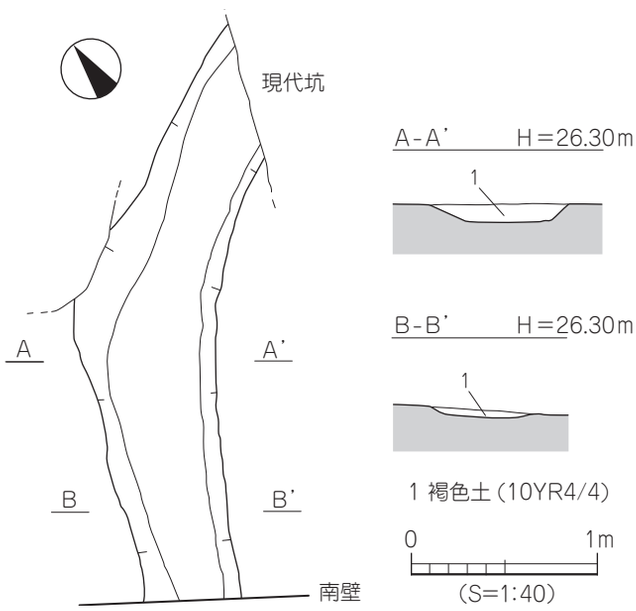


第 18 図　SD2 測量図・出土遺物実測図

SD3（第 19 図）

調査区南東部の C2 区に位置し、東端は現代坑に切られ､南端は調査区外に延びる。湾曲を呈しており、断面形態は皿状を呈する。規模は検出長 2.73m、上場幅 50 ～ 75cm、深さ１～ 12cm、比高差は殆どない。埋土は褐色土である。遺物は埋土中から土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土が SK2・3 に類似することから５世紀末～６世紀初頭とする。



第 19 図　SD3 測量図

5）柱　穴

調査区全域にて 21 基を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は直径 22 ～ 56cm、深さ 3.8 ～ 43cm を測る。埋土は灰黄褐色土～褐灰色土である。遺物は土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。

時期：出土遺物や、埋土などから古墳時代のものと考えられる。

6）性格不明遺構

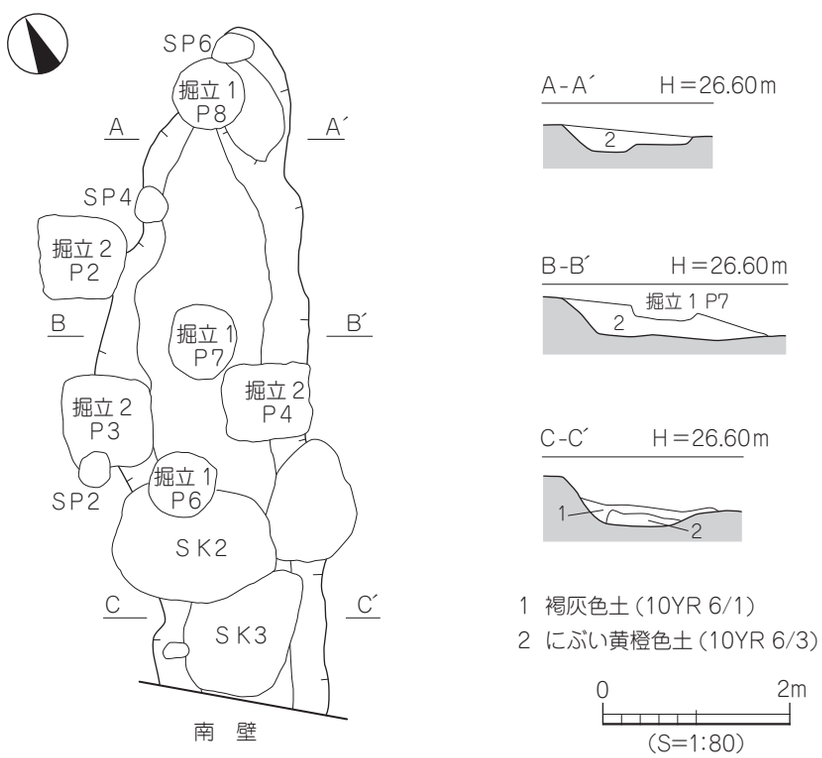
SX1（第 20 図、図版 2・3）

調査区東側の B2 ～ C2 区に位置し、掘立 1・2、SA1、SK2・3 を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面はほぼ水平な面をなす。底面付近にて焼成を受けた粘土塊や炭を検出した。規模は長軸 7.17m、短軸 2.12m、深さ 38.0cm を測る。埋土はにぶい黄橙色土である。遺物は埋土中から土師器・須恵器片が出土する。

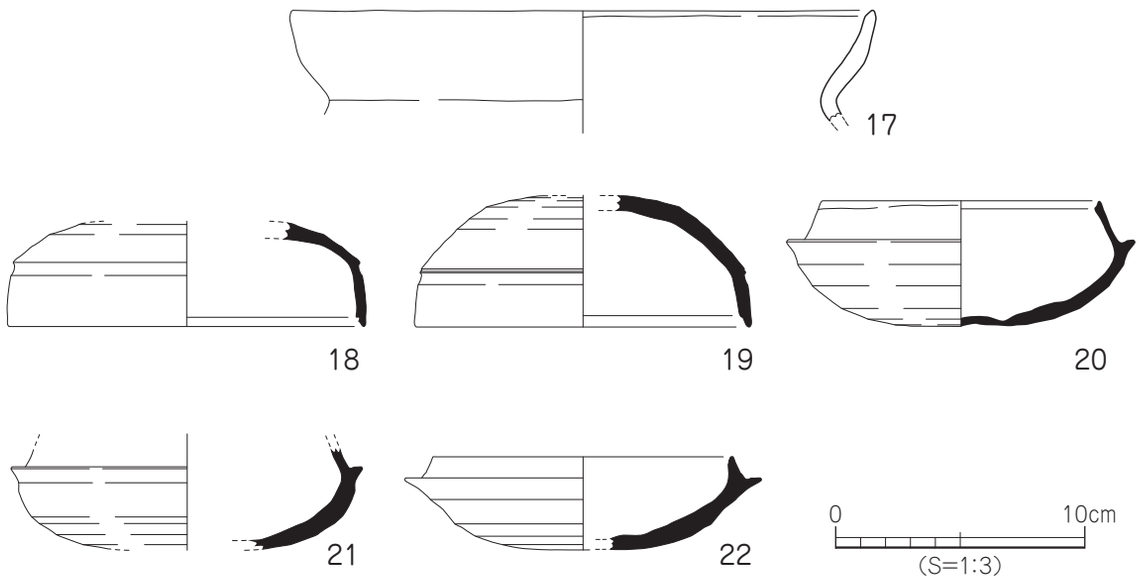
出土遺物（第 21 図）

17 は土師器の甕の口縁部で緩やかな屈曲をもつ。18 ～ 22 は須恵器である。18・19 は坏蓋で、18・19 ともに天井部境は凹み、口縁部端は内傾する段をなす。20 ～ 22 は坏身である。20 は、受部が凹み、口縁端部に内傾する段を有する。21 は受部端がやや凹み、22 は口縁部が上方に立ち上がる。

時期：出土した須恵器の特徴から、6 世紀後半とする。



第 20 図　SX1 測量図



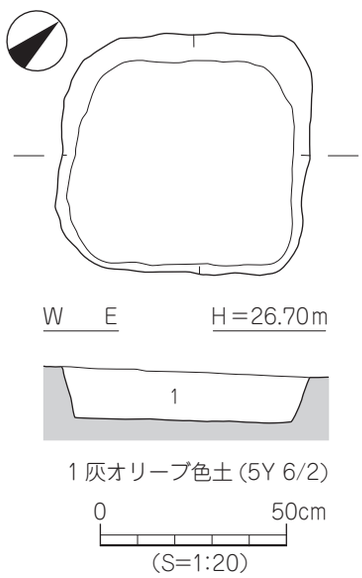
第 21 図　SX1 出土遺物実測図

（２）近世以降

SK1（第 22 図、図版 3）

調査区中央部の B2 区に位置し、SK4 を切る。平面形態は方形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸 0.68m、短軸 0.65m、深さ 13cm を測る。埋土は灰オリーブ色土である。遺物は基底面に棟端飾瓦の破片が５点が並んだ状態で出土した。

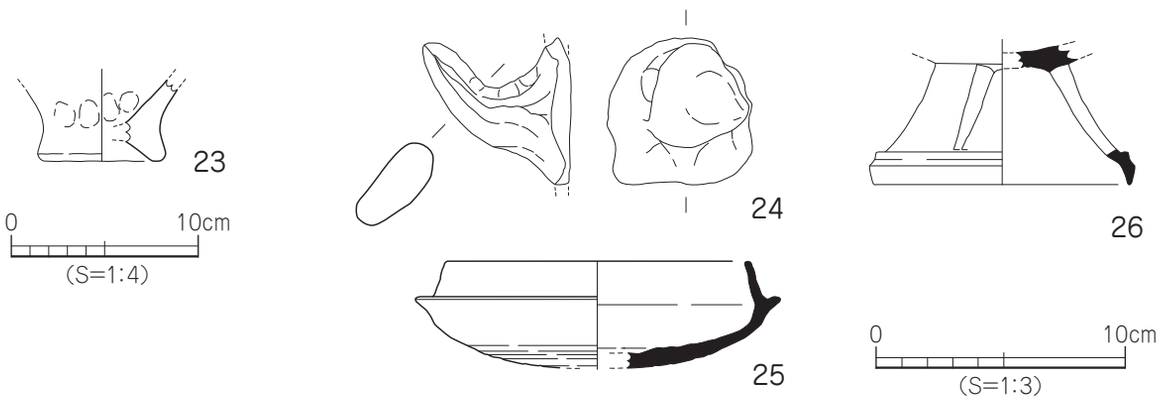
時期：出土遺物の特徴から近世以降としか判らない。



第 22 図　SK1 測量図

（３）第Ⅲ層出土遺物（第 23 図、図版 4）

23 は弥生土器の甕の底部であり、上げ底の底部付近に括れをもつ。24 は土師器の甑の把手であり、上外方に延びる。25・26 は須恵器である。25 は坏身で、受部端に凹みをもち口縁部は内傾する。26 は高坏の脚部で、３方向の透かしが施され、脚端部は直立気味である。



第 23 図　包含層出土遺物実測図

第４節　小　結

調査地は大峰ケ台丘陵東麓の緩斜面上に位置しており、西から東へ比高差 1.25m の傾斜を測る。第Ⅲ層の包含層は、調査区の地形が最も高い西壁中央部を除くほぼ全域において堆積しており、弥生土器・土師器・須恵器などを包含する弥生時代から古墳時代にかけての堆積層であることが確認できた。第Ⅳ層地山面は西端部分が比較的平坦な面をなしているが、中央部から東側にかけては緩斜面を呈する。

弥生時代の明確な遺構は検出されなかったが、第Ⅲ層や遺構内から中期から後期にかけての土器や石鏃などが出土していることから、大峰ケ台遺跡４次調査で検出した山頂付近の中期頃の竪穴建物群が調査地周辺にまで及んでいたことを示すものである。古墳時代では、掘立１の西側は東側に比べて深く掘られており、傾斜部に構築する時に掘立柱建物の基底面の比高差を無くした円形に掘られた柱穴で構成されていた。また、掘立２は掘立１に先行する時期の建物であり、柱穴の平面形態が方形でほぼ垂直に掘られた特徴をもち、東側の柱穴は第Ⅲ層を掘り込んで造られた可能性が高い。掘立３は掘立１・２に比べ規模の小さい掘立柱建物址で、小屋や倉庫などの建物址と考える。SA1 は４本の柱穴が南北方向に一直線状に並んでいるが、遺構の配置状況から調査区外の東側に展開する掘立柱建物址の可能性をもつ。SX1 は地形に沿う様に溝状に延びているが、基底面がほぼ平坦になっており、僅かではあるが基底面付近から焼成を受けた粘土塊や炭を検出していることから、工房跡などの可能性をもつ。近世以降では、SK1 の基底面から並んで出土した棟端飾瓦は、その出土状況から意図的に埋納されたものと考えられる。また、瓦自体が重厚で模様などが施されていることなどから、神社の屋根に葺かれたものと考えられ、同じ稜線上南約 60 mの地点には江戸時代後期に建立された山内神社があり、この神社と関連する遺構の可能性も考えられる。

今回の調査では、丘陵麓部に古墳時代後期の集落が確認出来た。なかでも北西約 30 mに位置し標高のやや低い辻遺跡２次調査の古墳時代後期の掘立柱建物２棟とは同じ時期の建物であり、丘陵麓部の緩傾斜面に広がる集落が存在していたことが確認できた。今後の調査において集落の範囲や構造を解明することが課題である。

〔参考文献〕

栗田茂敏1989「辻遺跡」『松山市埋蔵文化財年報Ⅱ』松山市教育委員会

重松佳久・丹下道一1989「南江戸桑田遺跡」『松山市埋蔵文化財年報Ⅱ』松山市教育委員会

栗田正芳1991「辻遺跡2次調査地」『松山市埋蔵文化財年報Ⅲ』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

岡田敏彦1994「辻遺跡3次調査地」「辻遺跡4次調査地」『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ大峰ケ台地区』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田茂敏1995『大峰ケ台遺跡第4次調査』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

ー凡例ー

１．本報告書では、検出した遺構を以下のように掲載している。
２．遺構の一覧表や遺物の観察表の凡例は、以下とした。

遺構一覧表・遺物観察表　　ー凡　例ー

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
（２）遺構一覧表
　規模欄　　（　）：現存検出長を示す。
（３）遺物観察表の各掲載について。
　法量欄　　（　）：推定復元値
　調整欄　　土製品の各部位名称を略記した。
　　例）㊐ →口縁部、㊐ →胴部、㊤ →天井部、㊡ →底部
　胎土欄　　胎土欄では混和材を略記した。
　　例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色土粒。
　　（　）の中の数値は混和材粒子の大きさを示す。
　　例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3mm 大の石英・長石を含む」である。
　焼成欄　　焼成欄の略号について 。◎→良好、○→良。

表２　掘立柱建物一覧

掘立	地区	規　模（間）	方　位	桁　行		梁　行		床面積（㎡）	時　期	備　考
				実長（m）	柱間寸法（m）	実長（m）	柱間寸法（m）			
1	A2 ～ C3	3 × 2	南北	5.84	1.65 ～ 2.64	3.66	1.83	21.37	6 世紀後半	SK2・4 を切り東北角は調査区外に延びる
2	A2 ～ C2	3 ×（2）	南北	（5.5）	1.80 ～ 1.99	2.16	2.16	（11.88）	6 世紀後半	SD2・SX1 を切り北・東側は調査区外に延びる
3	B3 ～ C3	2 ×（2）	南北	3.82	1.91	（1.66）	1.41 ～ 2.02	（6.34）	古墳時代	西側は調査区外に延びる

表３　溝一覧

溝（SD）	地区	断面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	A3 ～ B4	皿状	5.56 × 0.26 ～ 0.40 × 0.02 ～ 0.10	にぶい黄橙色土（10YR 6/3）	土師・須恵	6 世紀後半	
2	A2 ～ B2	逆台形状	3.80 × 0.25 ～ 0.42 × 0.05 ～ 0.31	灰黄褐色土（10YR 5/2）	土師・須恵 臼玉	6 世紀後半以前	掘立 2 に切られ北端は調査区外に延びる
3	C2	皿状	2.73 × 0.50 ～ 0.75 × 0.01 ～ 0.12	褐色土（10YR 4/4）	土師・須恵	5 世紀代	東端は現代溝に切られ南端は調査区外に延びる

表４　土坑一覧

土坑（SK）	地区	平面形	断面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B2	方形	皿状	0.68 ×0.65 × 0.13	灰オリーブ色土（5Y6/2）	棟端飾瓦	近世以降	SK4 を切る
2	C2	楕円形	レンズ状	1.70 ×0.91　× 0.32	褐色土（10YR4/4）	土師・須恵	5 世紀末	SK3、掘立 1 に切られる
3	C2	不整楕円形	レンズ状	1.20 ×1.12 × 0.10	褐色土（10YR4/4）	土師・須恵	6 世紀初頭	SK2 を切る
4	B2 ～ B3	不整方形	逆台形状	2.27 ×1.79 × 0.55	にぶい黄橙色土（10YR6/3）	土師・須恵	6 世紀後半以前	掘立 1、SK1 に切られる

表５　性格不明遺構一覧

性格不明遺構（SX）	地 区	平面形	断面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B2 ～ C2	不整楕円形	逆台形状	7.17 × 2.12 × 0.38	にぶい黄橙色土 （10YR 6/3）	土師・須恵	6 世紀後半	掘立 1・2、SA1、SK2・3 を切る

表６　掘立１出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
1	坏蓋	口径 残高	(13.0) 2.4	天井部と口縁部の境に稜をもつ。	㊦回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 長 (3) ◎		
2	坏身	口径 残高	(11.8) 4.2	受部端がやや凹む。	回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
3	坏身	残高	3.6	受部端がやや凹む。	回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		

表７　掘立２出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
4	坏身	口径 残高	(13.5) 3.1	受部端は凹む。	回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表８　掘立３出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
5	甕	残高	2.5	頸部が屈曲する。	ナデ	円弧叩き	暗灰色 灰色	密 ◎		

表９　SK2 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
6	甕	口径 残高	(22.4) 4.5	「く」字状の口縁部をもつ。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1 ～ 3) ○		
7	甕	口径 残高	(19.0) 5.0	「く」字状の口縁部をもつ。	マメツ	マメツ	黄橙色 褐灰色	石・長 (1 ～ 4) 赤 ◎		
8	坏蓋	残高	1.3	天井部にヘラ記号をもつ。	㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
9	坏身	口径 残高	(12.2) 3.8	口縁部端に内傾する面をもつ。	回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	密 長 (3) ◎		

表 10　SK3 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
10	甕	口径 残高	(16.4) 5.0	「く」字状の口縁部をもつ。	マメツ	マメツ	橙色　淡黄色 浅黄橙色	石・長 (1 ～ 3) 金 赤 ○		
11	坏蓋	口径 器高	(14.1) 3.9	天井部境に凹みをもつ。	㊦回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1 ～ 3) ○		4
12	坏身	口径 残高	(10.2) 3.3	口縁端部に内傾する面をもつ。	回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	自然釉	

表 11　SD1 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
13	坏蓋	口径 残高	(12.6) 3.0	口縁端部が丸く納まる。	㊦回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
14	椀	口径 残高	(10.4) 3.7	外面に沈線が１条巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
15	壺	口径 残高	(13.0) 3.4	口縁端部が丸く納まる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色　暗灰色 灰褐色　暗灰色	密 石・長 (2) ◎	自然釉	

表 12　SD2 出土遺物観察表　（石製品）

番号	器種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				径（cm）	孔径（cm）	厚み（cm）	重さ（g）		
16	臼玉	一部欠失	滑石	0.5	0.2	0.2	0.066		4

表 13　SX1 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
17	甕	口径 残高	(23.3) 4.4	口縁部が緩やかに屈曲する。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎		
18	坏蓋	口径 残高	(14.2) 4.1	天井部境は凹み、口縁端部に内傾する段をもつ。	㊦回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
19	坏蓋	口径 残高	(13.4) 5.2	天井部境は凹み、口縁端部に内傾する段をもつ。	㊦回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
20	坏身	口径 器高	(11.0) 5.0	受部は凹み、口縁端部に内傾する段をもつ。	㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
21	坏身	口径 器高	(12.0) 3.7	受部端がやや凹む。	回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	密 石･長(2～4) ◎		
22	坏身	残高	4.0	口縁部が上方に立ち上がる。	回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表 14　包含層出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
23	甕	底径 残高	(6.0) 4.3	上げ底の底部に括れをもつ。	ナデ（指頭痕）	ナデ（指頭痕）	灰褐色 橙色	石・長（1～3） ◎		
24	甑	残高	5.8	上外方に延びる把手。	ナデ	マメツ	浅黄橙色　橙色 浅黄橙色	石・長（1～2） 金 赤 ○		4
25	坏身	口径 残高	(12.1) 4.3	受部端が凹む。	回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白　オリーブ黒 灰白　オリーブ黒	石(1～2)長(5) ○	自然釉	4
26	高坏	底径 残高	(10.2) 5.5	3 方向の透かしをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長（1～3） ○		

第３章　辻町遺跡３次調査

第１節　調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2010（平成22）年８月３日、社会福祉法人　愛寿会　理事長　長戸金昭氏より松山市辻町41番１、44番１地内における老人福祉施設の建築に伴う埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。確認願の提出された申請地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地『№34　朝美町遺跡』内にある。

申請地が所在する松山平野西部は、古照遺跡をはじめ古照ゴウラ遺跡、朝美辻遺跡、辻町遺跡、大峰ケ台遺跡など縄文時代から近世にかけて、数多くの遺跡が平野部や丘陵部で発見されており、松山平野でも有数の遺跡地帯として古くから知られている（第２図）。

申請地は包蔵地内に所在することや周辺の遺跡の状況等から、申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、文化財課の指導のもと財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は辻町44番１を1999（平成11）年３月25日～26日、辻町41番１を2010（平成22)年１月20日に試掘調査を実施した。調査の結果、竪穴状遺構１基、溝１条、土坑１基、柱穴13基のほか、弥生時代から中世の遺物を検出した。この結果を受け、申請者と文化財課は協議を重ね、老人福祉施設の建築に伴い消滅する遺跡に対して、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は申請者と埋文センターが委託契約を結び、文化財課の協力のもと2010（平成22）年10月１日より開始した。愛媛県教育委員会の本格通知に基づき、調査実施範囲（調査区と呼称）を13ヶ所設定し、調査面積約450㎡のうち、調査区面積が２～15㎡の９ヶ所をT1～T9、調査区面積が45～200㎡の４ヶ所を１区～４区と呼称した。解体工事に支障のない場所から調査区を設定し、掘削土置き場の都合上、調査区を大きく２回に分けて調査した。以下、調査工程を略記する。

（２）調査の経緯

10月１日（金）発掘調査を開始する。重機によりT1を重機掘削し、２区の重機掘削を開始すると同時にT1と２区の壁面の精査を行う。10月４日（月）重機によりT3・T5の重機掘削を行う。２区の壁面の精査と中世の遺物包含層の掘り下げ、T3・T5の壁面と床面の精査を行う。10月５日（火）重機によりT2を重機掘削した後、３区の重機掘削を開始する。T1・T2の小溝、柱穴などの中世遺構を完掘し、測量後、排土置き場の確保のため埋め戻す。10月６日（水）重機による３区の重機掘削を終了し、壁面の測量や床面の精査を行い土坑、柱穴、鋤跡などの中世遺構を検出する。10月８日（金）重機により２区の掘削を終了し、T4・T7・T8の掘削を行う。T8は遺構が検出されなかったため測量後、重機により埋め戻す。10月13日（水）委託業者による基準点と水準点の設置を行う。10月14日（木）T4の中世の柱穴を完掘し、測量を行う。10月15日（金）３区遺構の掘り下げを開始する。10月25日（月）重機による３区の埋め戻し作業を開始する。10月26日（火）重機による３区の埋

め戻し作業を終了する。

10 月 27 日(水)重機により１区の表土掘削を開始すると同時に１区南壁を精査する。11 月１日(月)重機による１区の表土掘削を終了する。11 月２日（火）重機により４区・T6 の表土掘削を行う。T6 の測量･測量図の作成を行い、重機にて埋め戻す。11 月５日（金）１区の遺構の掘り下げを開始する。2区の井戸の北東側を半分裁ち割る。11月23日(火)申請者や周辺住民を対象とした遺跡見学会を行い、62 名が見学する。11 月 24 日（水）T9 を重機により掘削し、遺構検出後に遺構を完掘し同日埋め戻す。また､2 区から重機による埋め戻しを開始する。11 月 26 日（金）重機による埋め戻しが完了する。発掘用機材の搬出や発掘用具を撤収し、本日にて屋外調査を終了する。

（３）調査組織

所　在　地：松山市辻町 41 番１、44 番１の各一部
契 約 期 間：平成 22 年 10 月１日（金）～ 平成 22 年 11 月 26 日（金）
調 査 面 積：約 450㎡
契　約　者：社会福祉法人　愛寿会　　理事長　長戸　金昭
調 査 主 体：財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
調 査 担 当：埋蔵文化財センター調査員　河野　史知

第２節　層　位（第 25・26 図）

調査地は松山平野西部の扇状地上、標高約 15 mに立地する。調査地は、調査以前は既存建物があった。調査で検出した土層は、以下の 12 種類（Ⅰ～ XII 層：１～４区・Ｔ１～Ｔ９）である。なお、Ⅸ層～ XII 層は１区南西隅の深掘り部にて確認した土層である。

Ⅰ層－近現代の造成に伴う客土で、真砂土が層厚 22 ～ 90cmの堆積を測る。
Ⅱ層－農耕に伴う耕作土で、色調の違いから２層に分層される。調査地全域にみられる。
　Ⅱ①層：暗青灰色土（10BG 4/1）で、層厚３～ 34cmの堆積を測る。
　Ⅱ②層：Ⅱ①層に灰色（N 6/0）を強く帯び、層厚２～ 22cmの堆積を測る。
Ⅲ層－農耕に伴う床土で、明黄褐色粘質土（10YR 6/6）１・２区全域と３区西側にみられ、層厚１～ 10cmの堆積を測る。
Ⅳ層－明オリーブ灰色砂質土(2.5GY 7/1)が調査区全域に堆積し､色調の違いから２層に分層される。
　Ⅳ①層：明オリーブ灰色砂質土（2.5GY 7/1）で、層厚２～ 22cmの堆積を測る。
　Ⅳ②層：Ⅳ①層に灰色（2.5GY 8/1）を強く帯び、層厚１～ 18cmの堆積を測る。
Ⅴ層－砂質土層で色調・土質の違いにより、３層に分層される。３区北側を除く全域において堆積することを確認した。本層中からは、土師器・須恵器・陶磁器・瓦器などの中世頃の遺物が出土する。
　Ⅴ①層：黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）が１･２区全域と３区の南側に堆積することを確認し、層厚２～ 20cmの堆積を測る。
　Ⅴ②層：Ⅴ①層よりやや明るい黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）が１・２区全域と３区の南側に堆積

することを確認し、層厚４～17㎝の堆積を測る。

Ⅴ③層：Ⅴ①層より砂粒を多く含む砂質土層で、各区に部分的に堆積することを確認し、層厚２～22㎝の堆積を測る。

Ⅵ層－明緑灰色粘質土（5G 7/1）で、全域に堆積することを確認し、本層中からは遺物の出土はない。本層上面は、中世の遺構検出面である。

Ⅶ層－灰黄褐色粘質土（10YR 6/2）で、0.5～1㎝大の炭を僅かに含んでいる。土師器・須恵器片を僅かに出土する。本層上面は、古墳時代の遺構検出面である。

Ⅷ層－黒褐色シルト（10YR 3/2）が、T9 全域に堆積し、本層中から弥生土器が出土する。層厚 20～36cm の堆積を測る。

Ⅸ層－淡黄色シルト（5Y 8/3）が、T9 全域に堆積し、上面にて溝、柱穴など弥生時代の遺構を検出する。層厚 8cm 以上を測る。

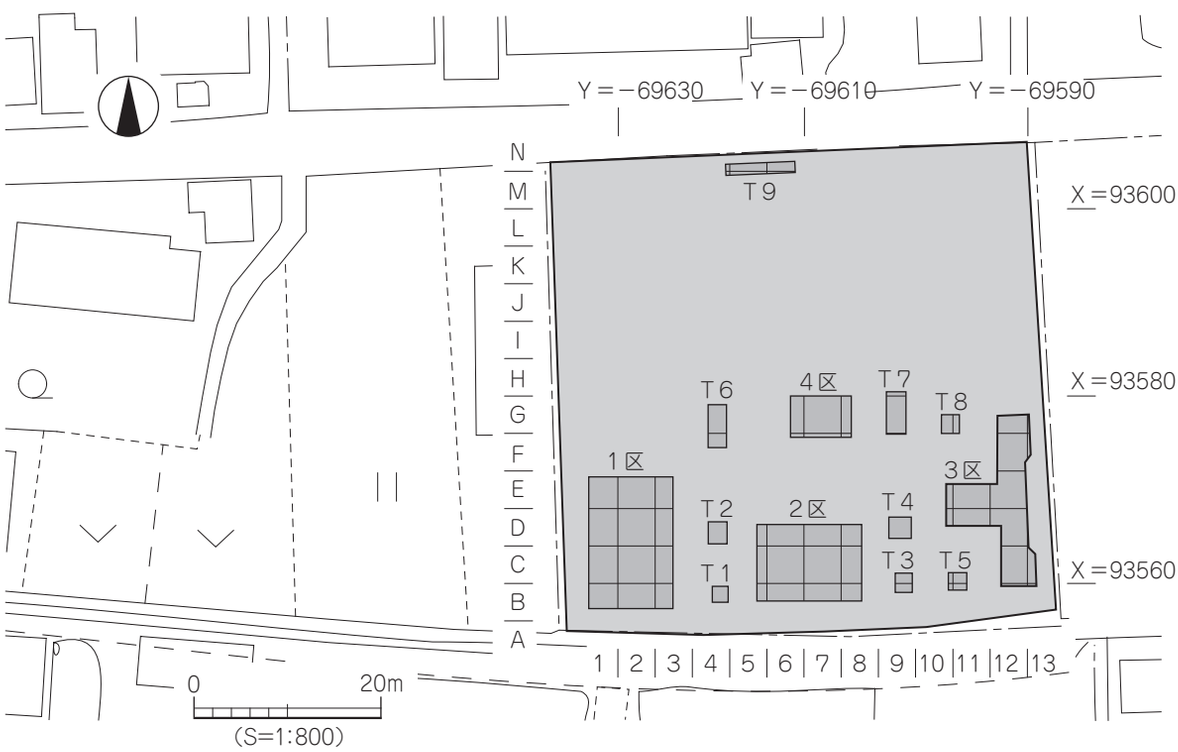
Ⅹ層－褐灰色シルト（10YR 6/1）で、トレンチ掘りにより１区全域に堆積することを確認する。

※以下の層は１区南西隅の深掘りにて確認する。

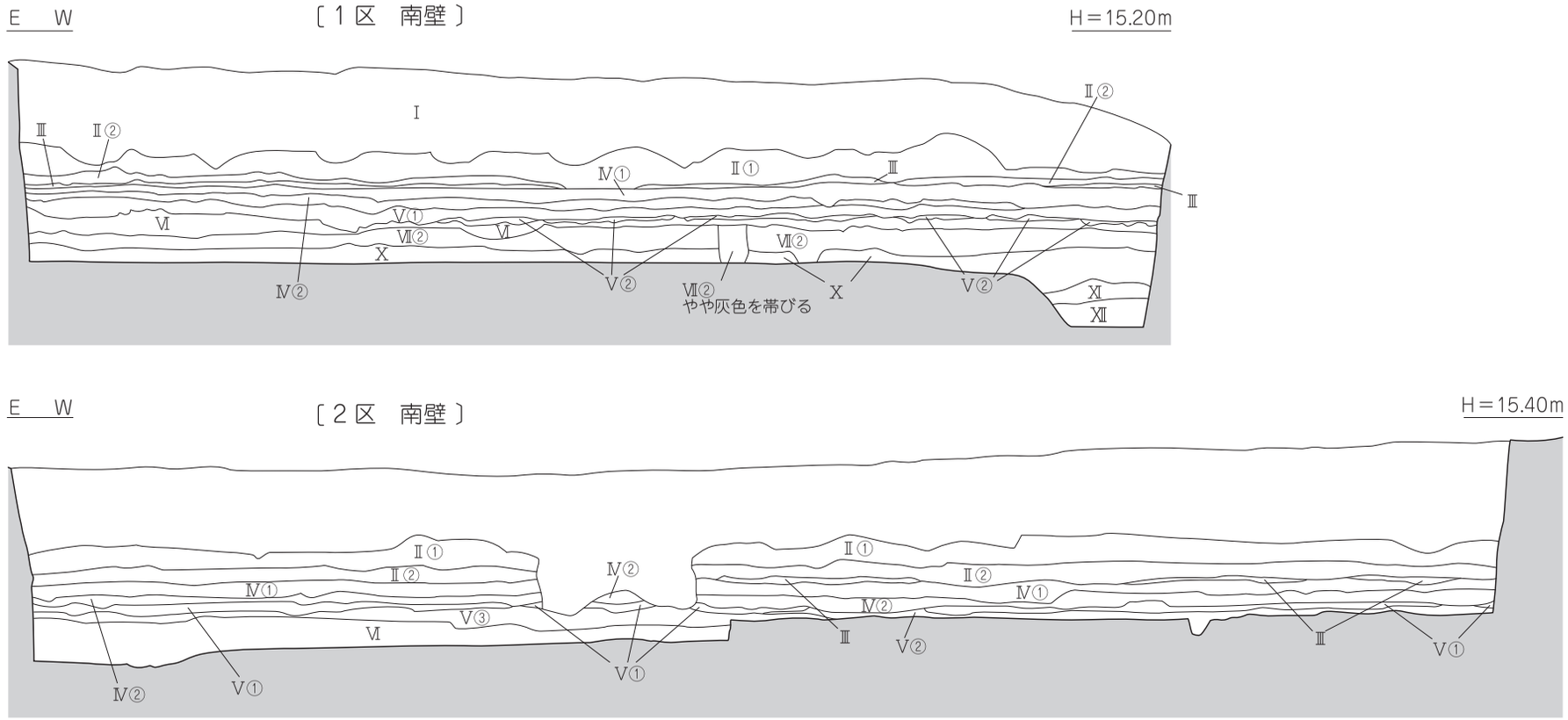
Ⅺ層－灰白色シルト（10YR 7/1）で、砂粒を多く含む。最大層厚 30㎝を測る。

Ⅻ層－緑灰色砂質土（5G 6/1）で、やや粘性をもつ。層厚 22cm 以上を測る。

調査にあたり、調査区内を４ｍ四方のグリットに分けた。設置した４級基準点のうち、調査区西南部の基準点〔X=93556.000、Y=-69634.000〕をもとに、南側から北側へ向けてＡ・Ｂ・Ｃ、西側から東側へ向けて1･2･3･4とし、A1・A2・・・・C4といったグリット名を付した。（第24図）なお、グリットは検出した遺構の位置表示や遺物の取り上げに利用した。



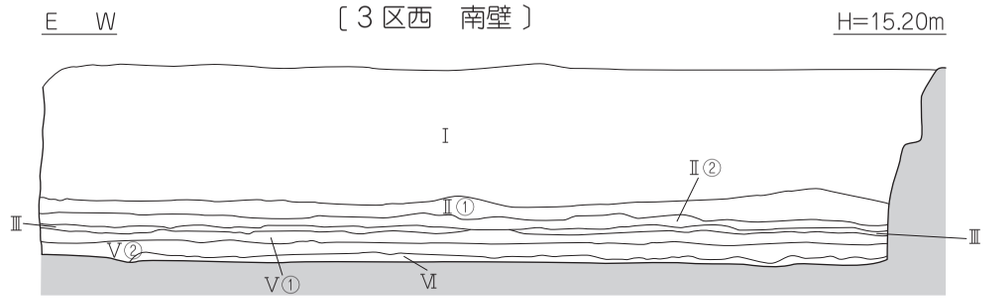
第24図　調査地位置図・区割図

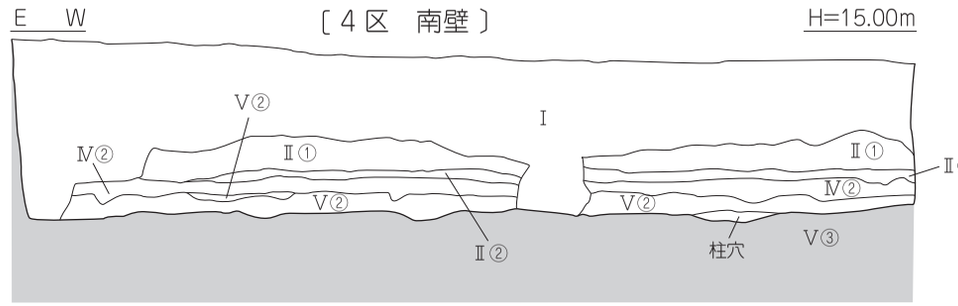


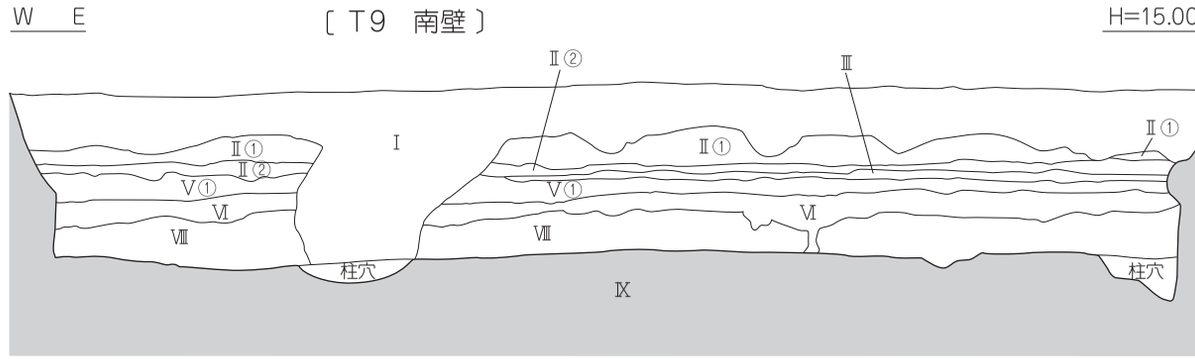
Ⅰ　造成土
Ⅱ① 暗青灰色土（10BG 4/1）
Ⅱ② Ⅱ①に灰色（N 6/0）を強く帯びる
Ⅲ　明黄褐色粘質土（10YR 6/6）
Ⅳ① 明オリーブ灰色砂質土（2.5GY 7/1）
Ⅳ② Ⅳ①に灰色（2.5GY 8/1）を強く帯びる
Ⅴ① 黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）
Ⅴ② Ⅳ①よりやや明るい黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）
Ⅴ③ Ⅳ①より砂粒を多く含む
Ⅵ　明緑灰色粘質土（5G 7/1）
Ⅶ　灰黄褐色粘質土（10YR 6/2）
Ⅷ　黒褐色シルト（10YR 3/2）
Ⅸ　淡黄色シルト（5Y 8/3）
Ⅹ　褐灰色シルト（10YR 6/1）
Ⅺ　灰白色シルト（10YR 7/1）
Ⅻ　緑灰色砂質土（5G 6/1）

0　1　2m
（S=1:50）

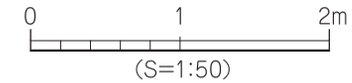
第25図　１区・２区南壁土層図



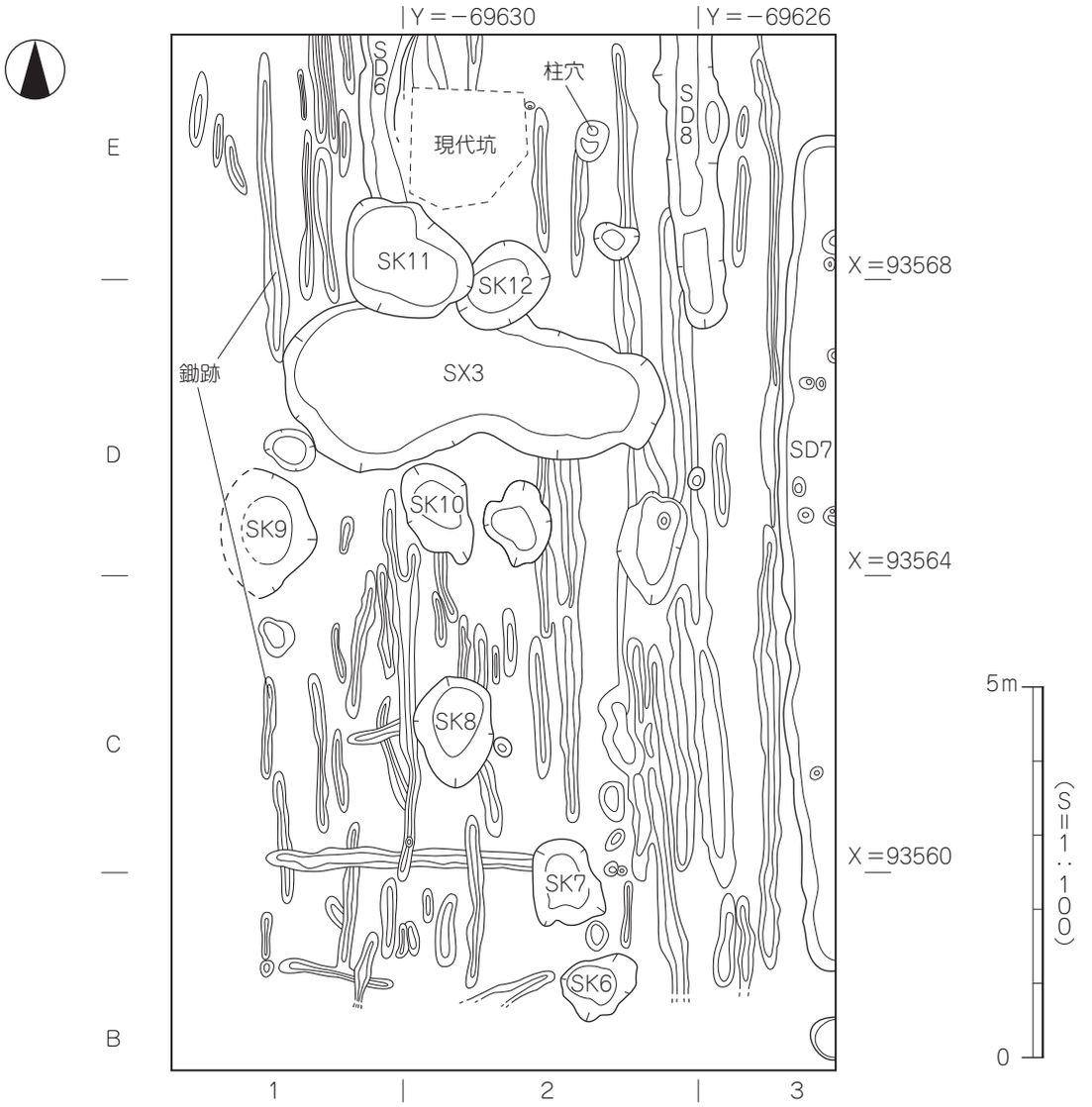




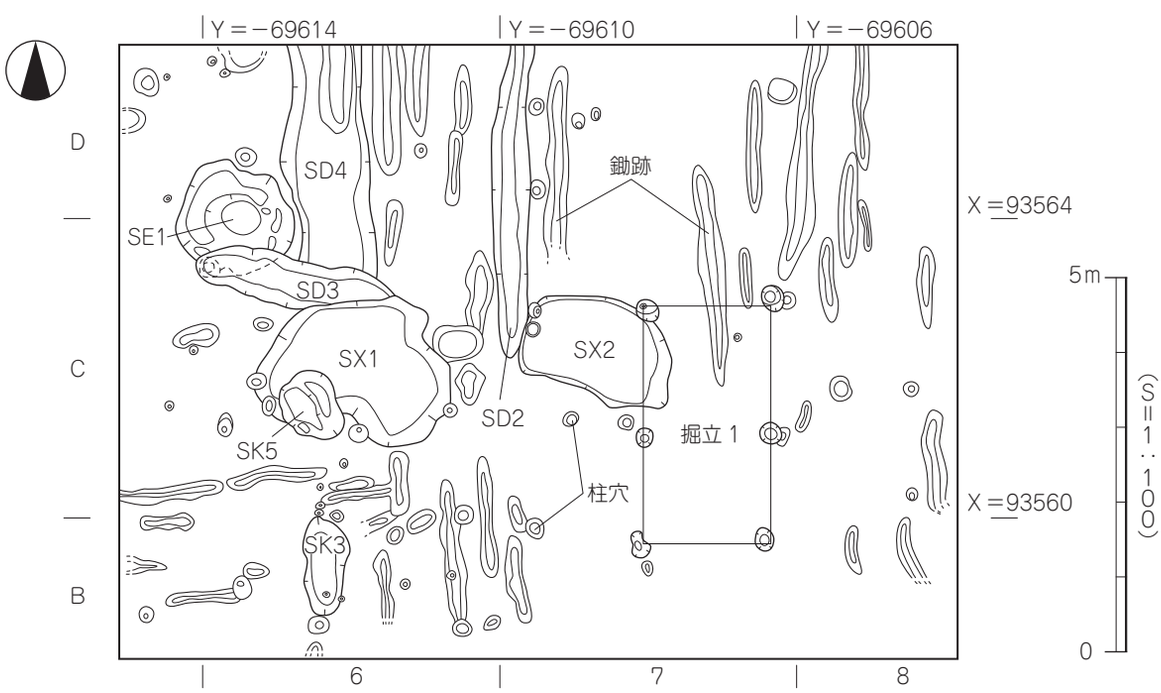
Ⅰ　造成土
Ⅱ① 暗青灰色土（10BG 4/1）
Ⅱ② Ⅱ①に灰色（N 6/0）を強く帯びる
Ⅲ　明黄褐色粘質土（10YR 6/6）
Ⅳ① 明オリーブ灰色砂質土（2.5GY 7/1）
Ⅳ② Ⅳ①に灰色（2.5GY 8/1）を強く帯びる
Ⅴ① 黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）
Ⅴ② Ⅳ①よりやや明るい黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）
Ⅴ③ Ⅳ①より砂粒を多く含む
Ⅵ　明緑灰色粘質土（5G 7/1）
Ⅶ　灰黄褐色粘質土（10YR 6/2）
Ⅷ　黒褐色シルト（10YR 3/2）
Ⅸ　淡黄色シルト（5Y 8/3）
Ⅹ　褐灰色シルト（10YR 6/1）
Ⅺ　灰白色シルト（10YR 7/1）
Ⅻ　緑灰色砂質土（5G 6/1）



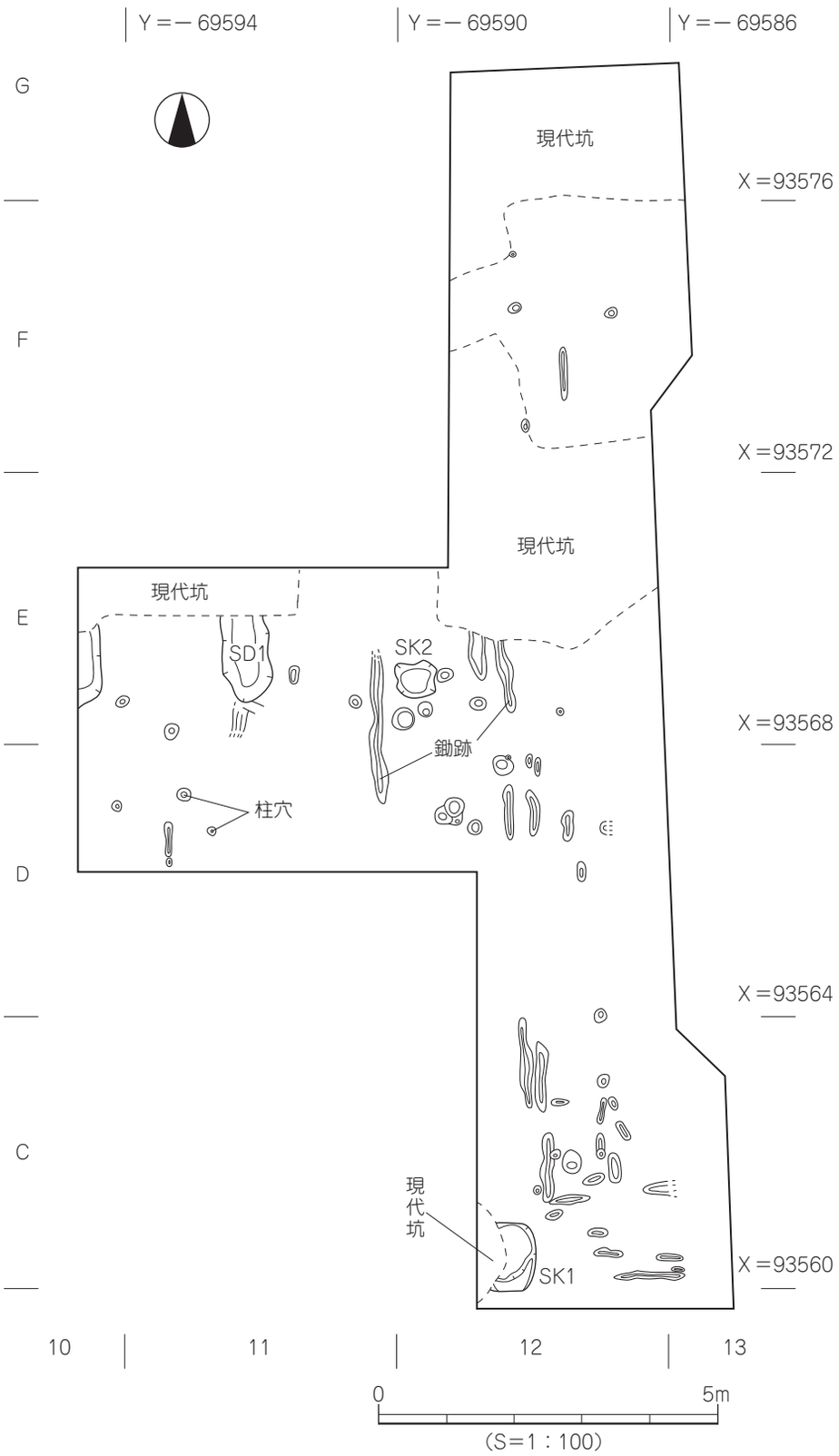
第 26 図　３区・４区・Ｔ９南壁土層図



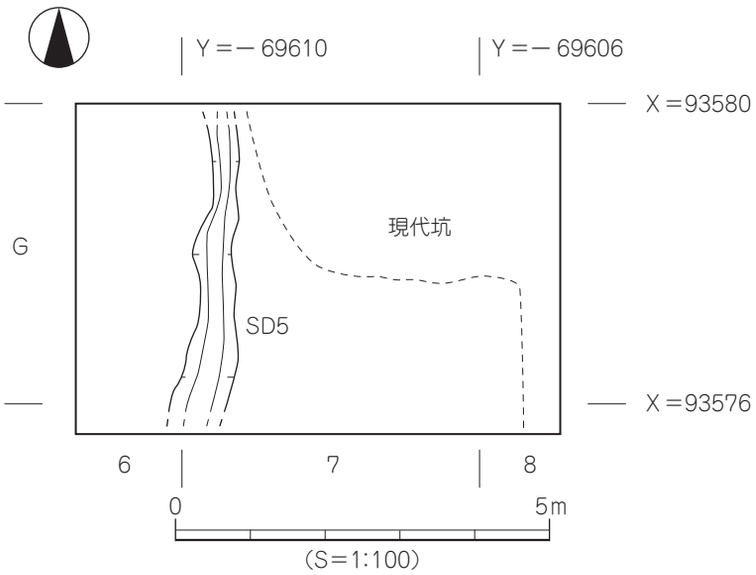
第 27 図　1 区遺構配置図



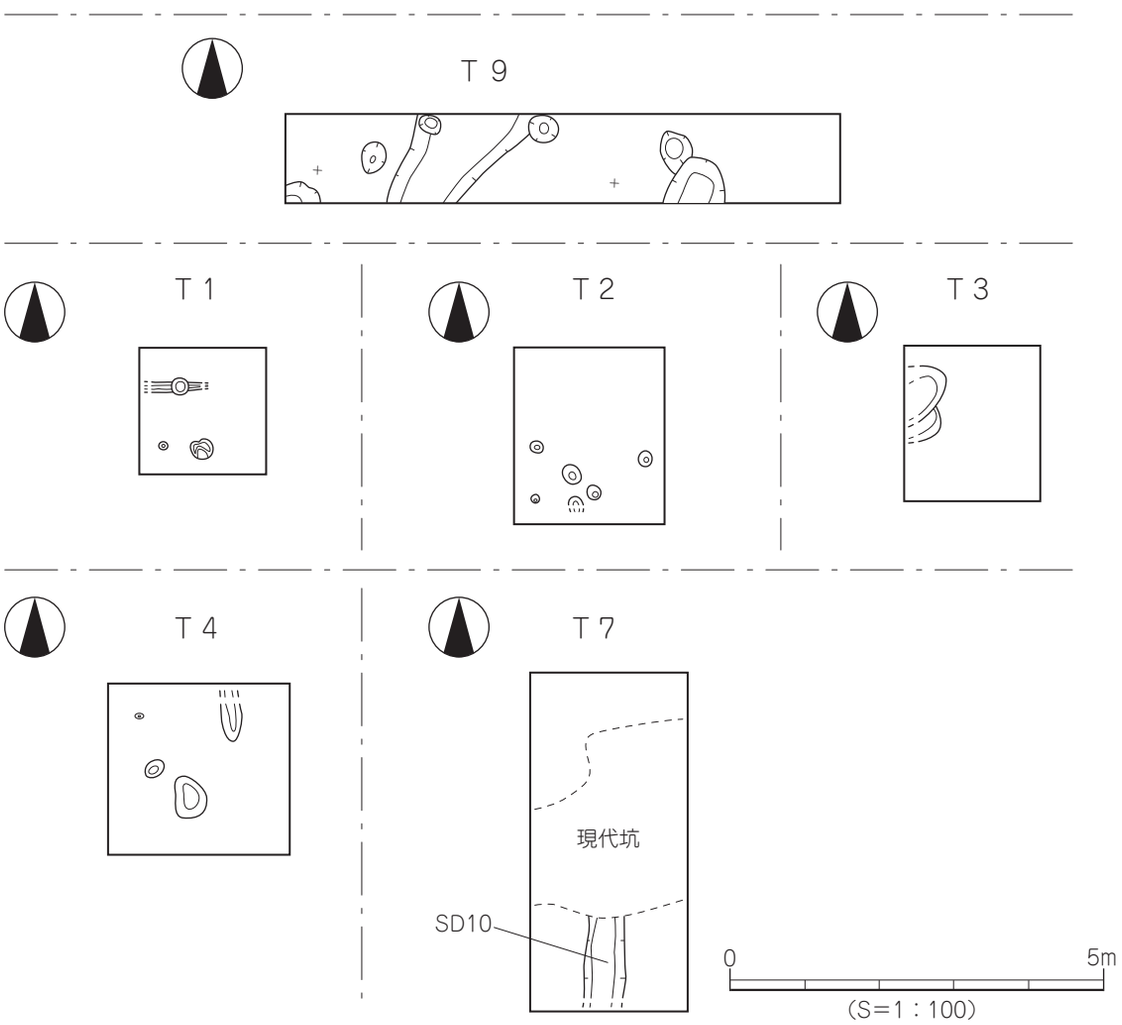
第 28 図　2 区遺構配置図



第 29 図　3 区遺構配置図



第 30 図　４区遺構配置図



第 31 図　トレンチ遺構平面図

第３節　遺構と遺物

調査では、掘立柱建物跡１棟、溝 11 条、土坑 12 基、井戸１基、柱穴 83 基、鋤跡 131 条、水田面１面、性格不明遺構４基など、弥生時代から鎌倉時代の遺構を検出した。弥生時代の遺構は第Ⅸ層上面、古墳時代の遺構は第Ⅶ層上面、中世の遺構は第Ⅵ層上面での検出である。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、渡来銭、鉄滓、木製品、種子が出土した。

（１）弥生時代

第Ⅸ層上面にて溝１条、柱穴６基を検出し、弥生土器の甕・壺の破片が遺構内から出土した。

１）溝

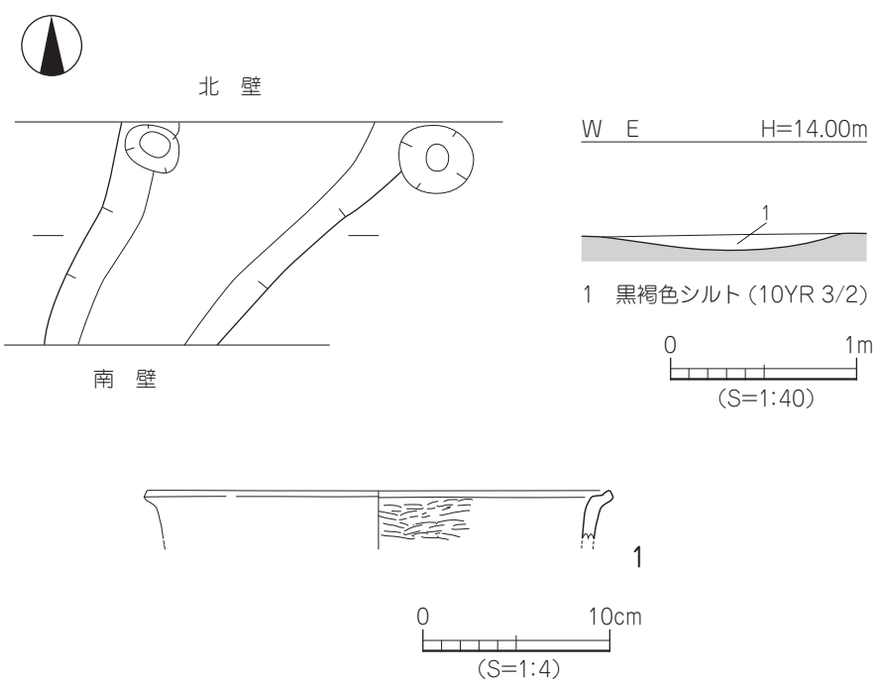
ＳＤ９（第 32 図）

T9 西側 M ～ N･5 区で検出した南北方向の溝で、溝北部は柱穴に切られ両端は調査区外に延びる。規模は検出長 1.4 m、上場幅 0.9 ～ 1.3 m、深さ 7㎝、比高差は殆どない。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒褐色シルトの単一層である。埋土上部から溝床にかけて弥生土器の甕・壺の小片が僅かに出土した。

出土遺物（第 32 図）

1 は口縁部は外上向に屈曲し、内面にヘラミガキ調整が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期と考えられる。



第 32 図　SD9 測量図・出土遺物実測図

２）柱　穴

T9から５基を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈し、断面形態はレンズ状～逆台形状を呈する。規模は28～50cm、深さ７～15cmを測る。埋土は第Ⅷ層の黒褐色土である。出土遺物は弥生土器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土がSD9と同一なことから弥生時代後期と考えられる。

（２）古墳時代

第Ⅶ層上面から溝１条、土坑１基、性格不明遺構１基、炭化物堆積面、水田面などを検出した。

１）炭化物堆積面（第33図）

１区の遺構検出面である第Ⅶ層上面からSD11基底面にかけて薄い炭化物の堆積を部分的に検出した。僅かに焼土も混入するが、炭化物の下からの焼け跡は未検出であった。炭化物は５ヶ所に散在しており、不整楕円形状を呈し、規模は0.7～4m大で、厚みは5mm程で均一に薄く堆積している。出土遺物はない。

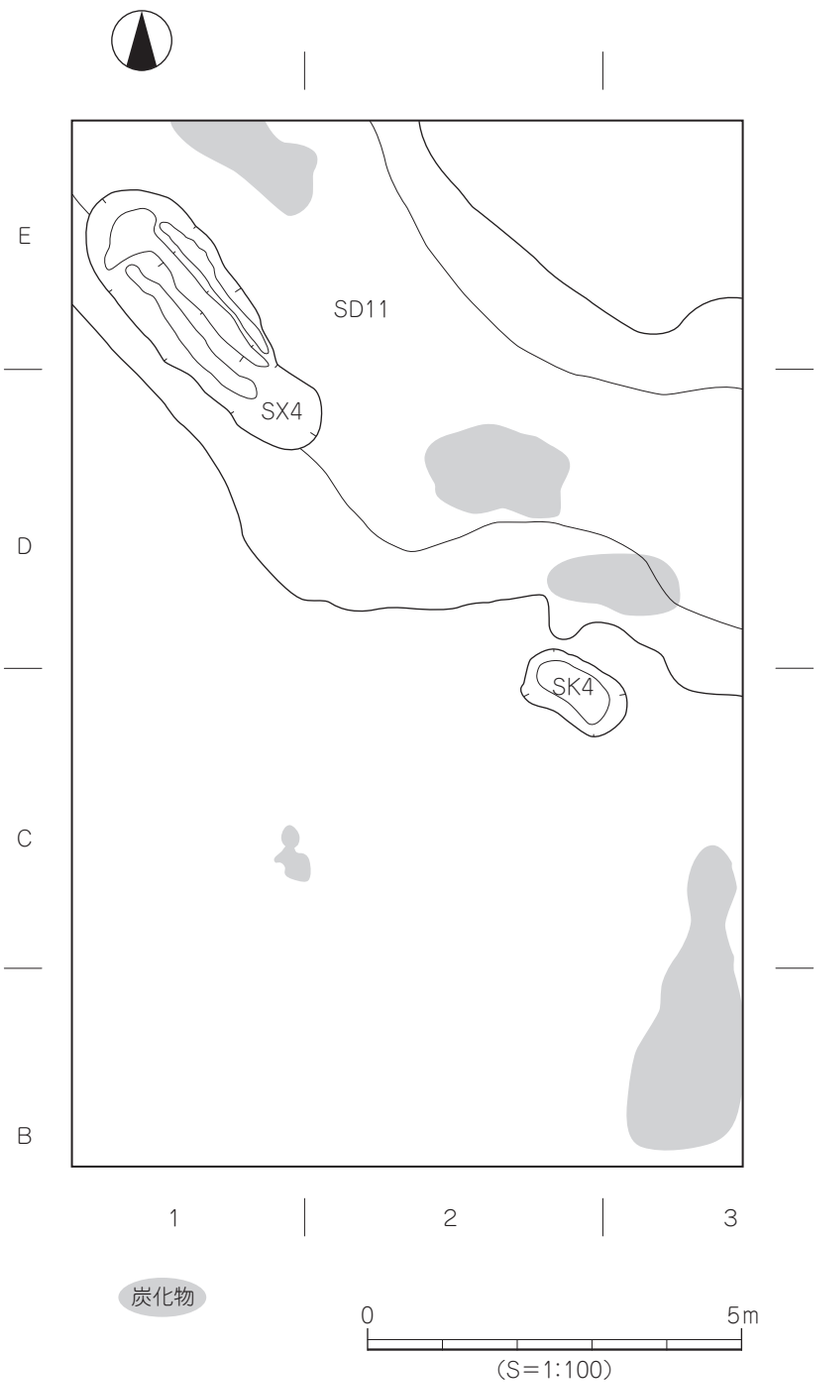
時期：出土遺物がなくSD11の基底面に及んでいることから、遺構の埋没する６世紀初頭以前と考えられる。

２）溝

１区において１条を検出した。

ＳＤ11（第34図、図版６）

１区北半分Ｃ～Ｅ･１～３区において南東方向から北西方向を指向し、両端は調査区外

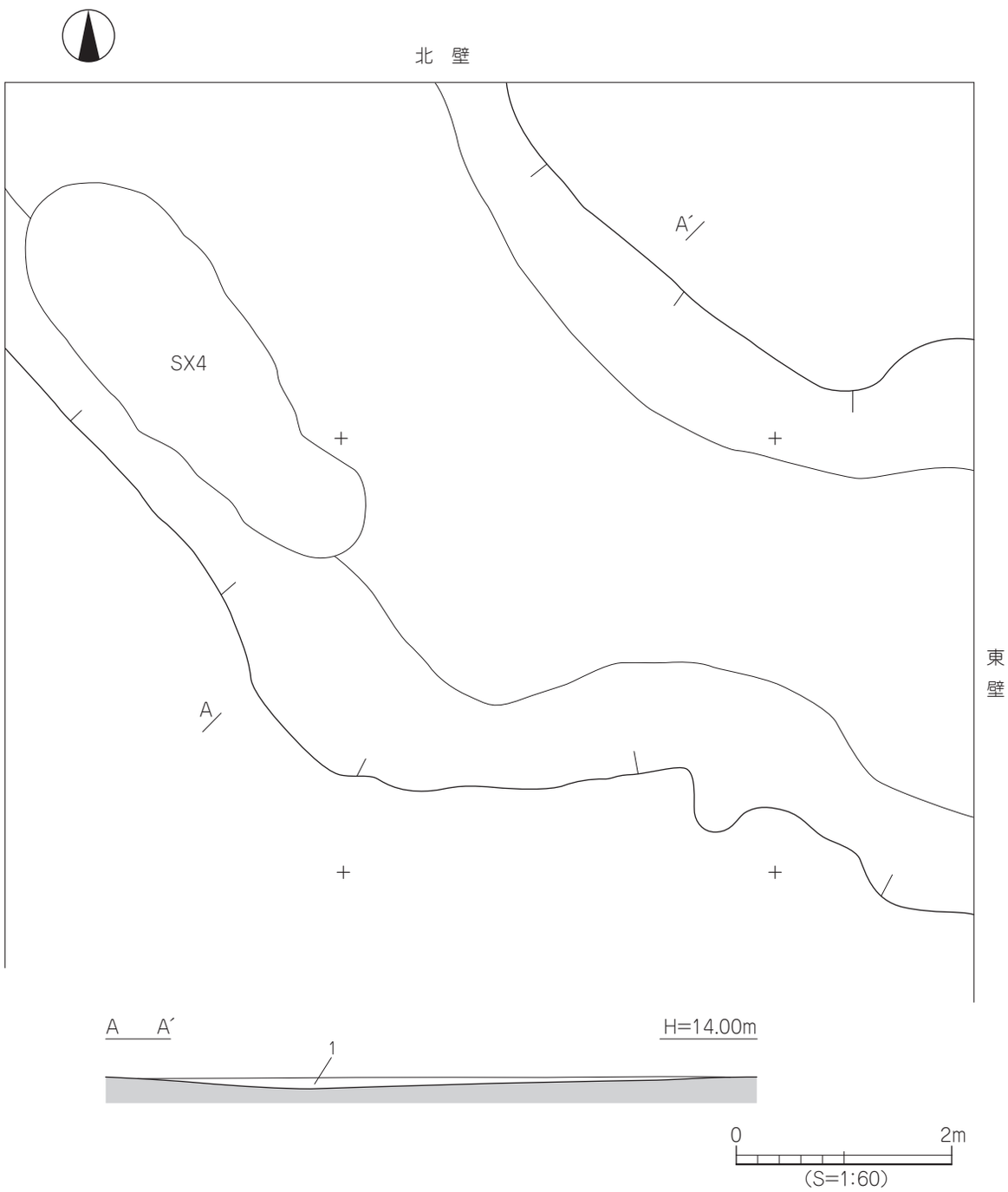


第33図　１区第Ⅶ層上面の遺構配置・炭化物堆積図

に延び、溝床からはSX4を検出した。断面形はレンズ状を呈し、規模は長さ11.5 m、上場幅3.75～5.54 m、深さ4～17㎝、南東から北西方向へ溝床は比高差13㎝を測る。埋土は灰黄褐色土の単一層で、溝床付近から土師器・須恵器の破片が出土した。

出土遺物（第35図、図版11）

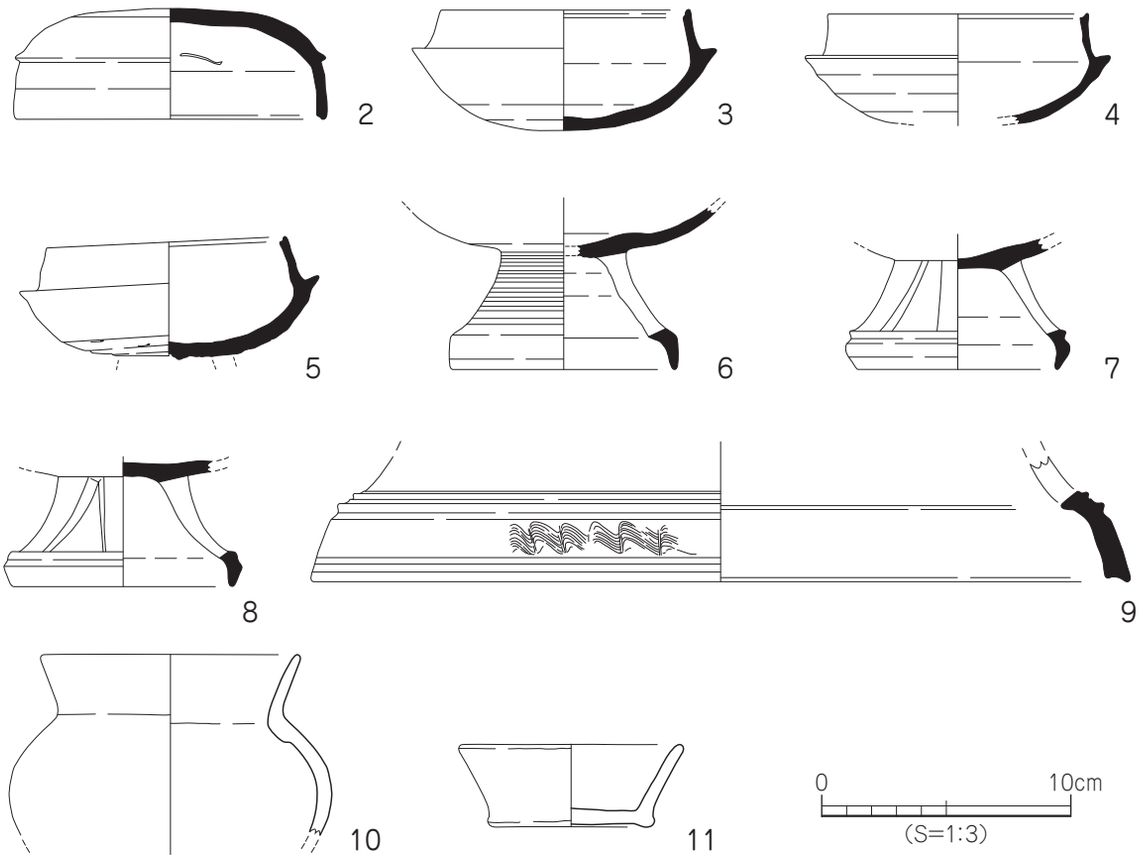
2～9は須恵器である。2は坏蓋で、天井部境に稜をもつ。3・4は坏身で口縁端部に内傾する段を有し、受部端は凹む。5～8は高坏で、5は口縁端部に内傾する段を有し、受部端は凹む。6は脚部にカキ目調整が施され、透かしをもち脚端部は下方に延びる。7・8は脚部に3方向の透かしをもち、



第34図　SD11測量図

脚端部は凹む。9 は器台の脚裾部で透かしをもち、7 条の波状文が施される。10・11 は土師器である。10 は壺で、球状の胴部に口縁部が外反する。11 は坏で平底の底部に外反する口縁部をもつ。

時期：出土した須恵器の特徴から、6 世紀初頭に廃棄・埋没したものと考えられる。



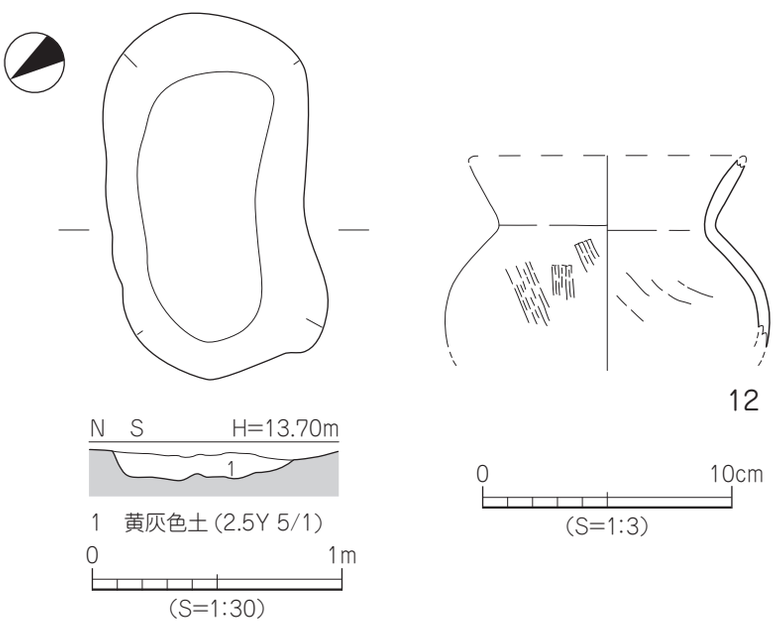
第 35 図　SD11 出土遺物実測図

3）土　坑

1 区において 1 基を検出した。

ＳＫ４（第 36 図）

1 区中央部東側Ｃ～Ｄ・2～3 区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸 1.43 m、短軸 0.78 m、深さ 10㎝を測る。埋土は淡黄色砂質土で、土師器・須恵器の小片が僅かに出土する。また壁体から基底面にかけて部分的に 1 ～ 3㎝大の炭化物が薄く覆っている。



第 36 図　SK4 測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第 36 図）

12 は土師器の壺で、球状の胴部に口縁部は外反する。内外面にはナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、6 世紀初頭に廃棄・埋没したものと考えられる。

4）性格不明遺構

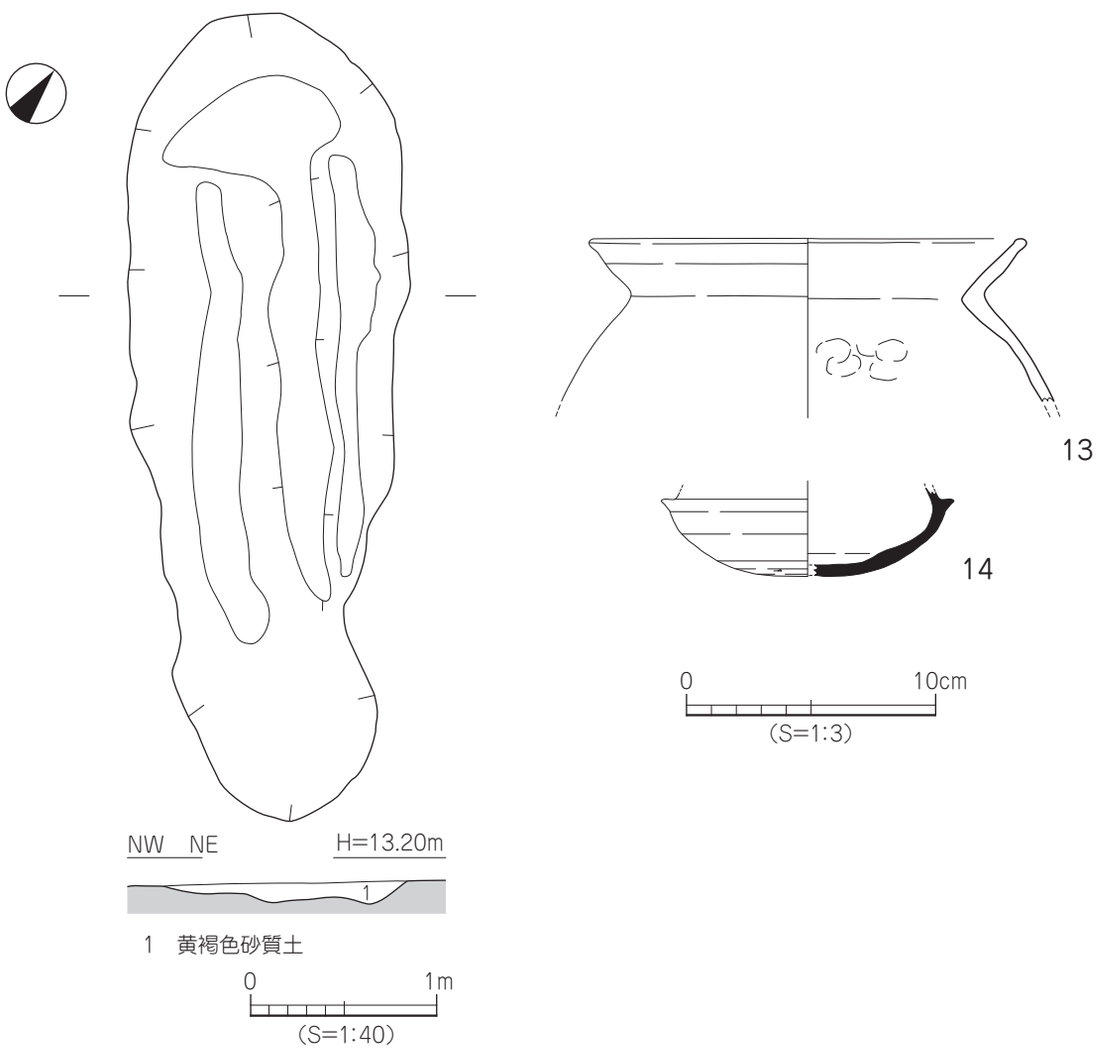
ＳＸ４（第 37 図）

１区北西部Ｄ～Ｅ･1 ～２区に位置し、SD11 の溝床から検出した。平面形態は長楕円形状で断面形状は皿状を呈する。規模は長軸 4.26 m、短軸 1.49 m、深さ 15㎝を測る。埋土は黄褐色砂質土に灰色の細砂が混じり、上位から基底面にかけ土師器・須恵器片が出土しており、基底面に長さ 0.87 m、幅 9㎝の板状の木片が出土した。

出土遺物（第 37 図）

13 は土師器の甕で「く」字状の口縁部外面には稜をもち、内外面にはナデ調整が施される。14 は須恵器の坏身で受部端は外方に延び､内面に回転ナデ調整､外面に回転ナデ･ヘラ削り調整が施される。

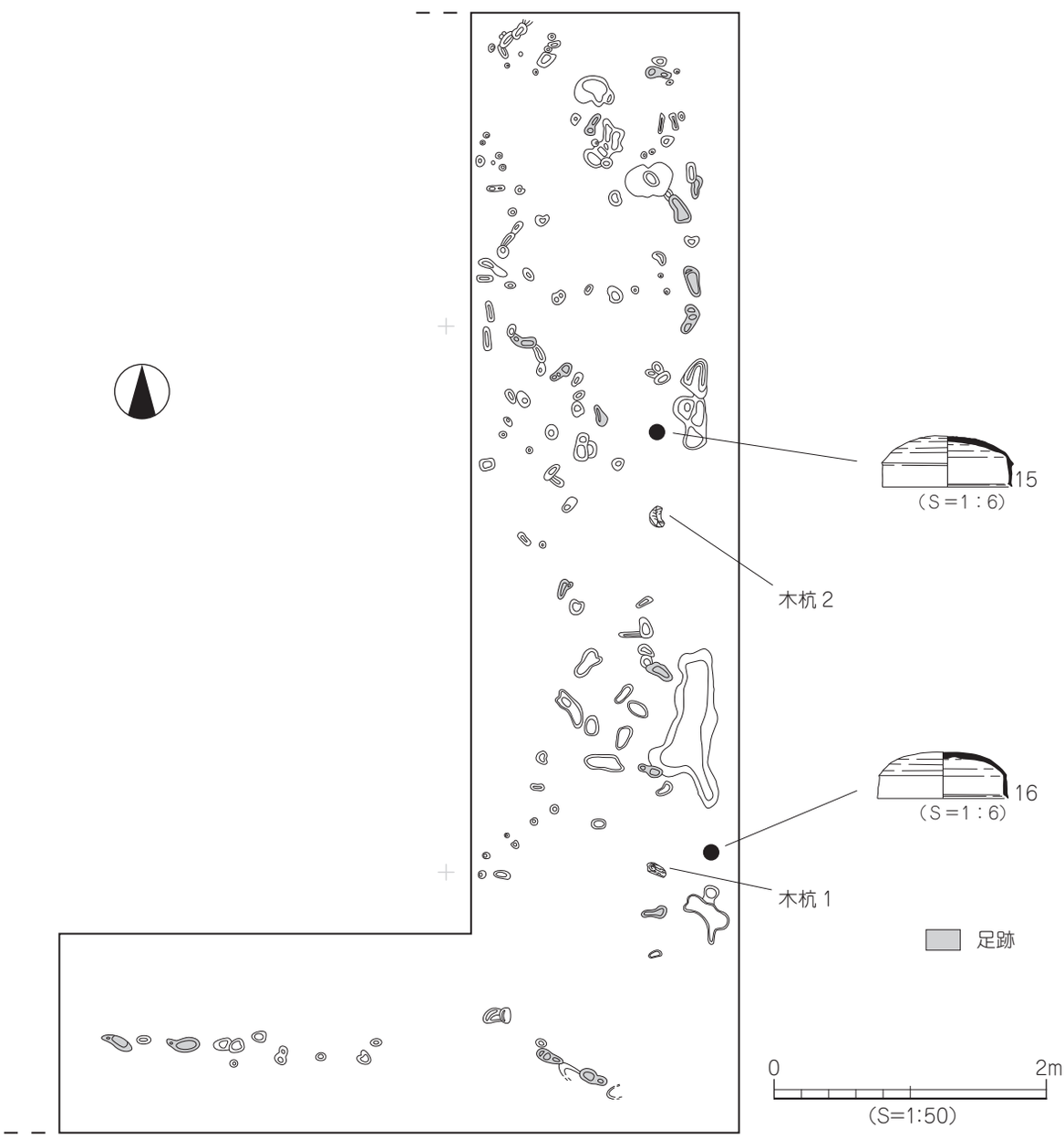
時期：出土した須恵器の特徴から、6 世紀初頭に廃棄・埋没したものと考えられる。



第 37 図　SX4 測量図・出土遺物実測図

５）水田状遺構（第 38 図）

２区の東壁と南壁トレンチにて淡黄色粘質土の上面から検出した。平面形態が楕円形から不整形のものに混じり僅かに人の足跡を検出した。不規則に歩いており、長さは 21 ～ 25㎝、最大幅９～ 12㎝、深さ３～ 10㎝を測り、埋土は上層を薄く覆っている灰白色砂層である。また、検出面からは、ほぼ完形の須恵器坏蓋２点が出土した。

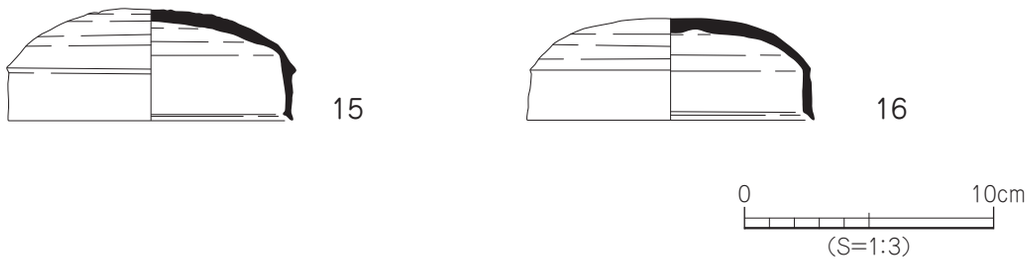


第 38 図　水田面測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第 39 図、図版 11）

15・16 は坏蓋である。天井部境に稜をもち、口縁端部に内傾する段をもつ。内面は回転ナデ調整、外面天井部はヘラ削り調整、口縁部は回転ナデ調整が施される。

時期：出土した須恵器の特徴から、6 世紀初頭の水田面と考えられる。



第 39 図　水田面出土遺物実測図

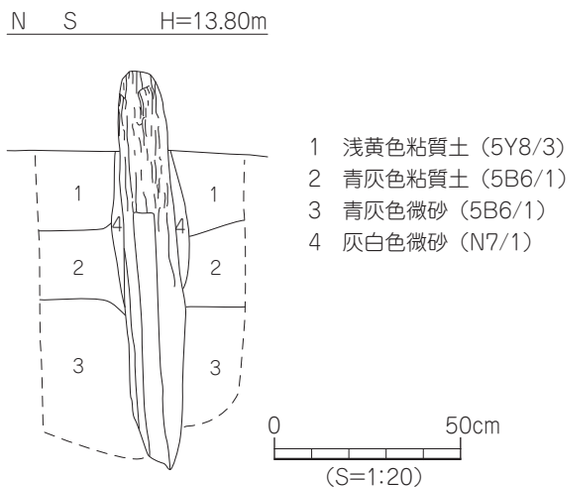
6）木　杭

2 区東端 C・8 区の第Ⅵ層上面にて南北方向に 2 本を検出した。

木杭 1（第 40 図、図版 9）

ほぼ垂直に打ち込まれた状態で掘り方はない。軸は先端がやや南を振り、その先端は尖り気味で面をもち、柱部の断面形状は多角形状を呈しており、建物の柱材を杭に転用したと考えられる。長さ 1.07 m、幅 16.5cmが残存する。

時期：木杭の加工された特徴が古墳時代の建築部材と同一な特徴をもつことから、古墳時代の可能性が高いと考えられる。

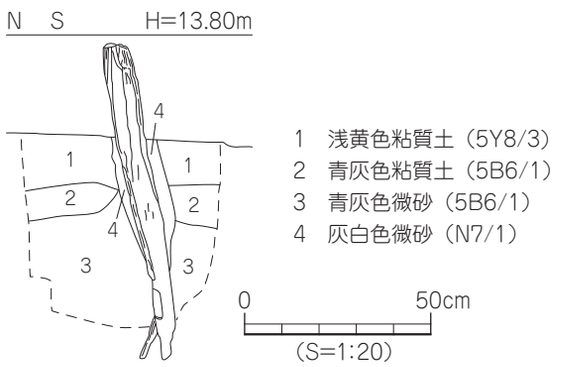


第 40 図　木杭 1 測量図

木杭 2（第 41 図）

木杭 1 の北 2.6 m地点から検出されている。木杭 1 同様ほぼ垂直に打ち込まれた状態で掘り方は見当たらなく、軸は先端がやや南を振る。加工面がなく荒割り材と考えられる。長さ 0.86 m、幅 8cmが残存する。

時期：木杭 1 との位置関係や検出層が同一なことから、古墳時代の可能性が高いと考えられる。



第 41 図　木杭 2 測量図

（3）中世

１～４区、T1 ～ 4･T7 の第Ⅵ層上面において掘立柱建物跡１棟、溝 10 条、土坑 11 基、井戸１基、柱穴 77 基、鋤跡 131 条、性格不明遺構３基を検出した。

１）掘立柱建物跡

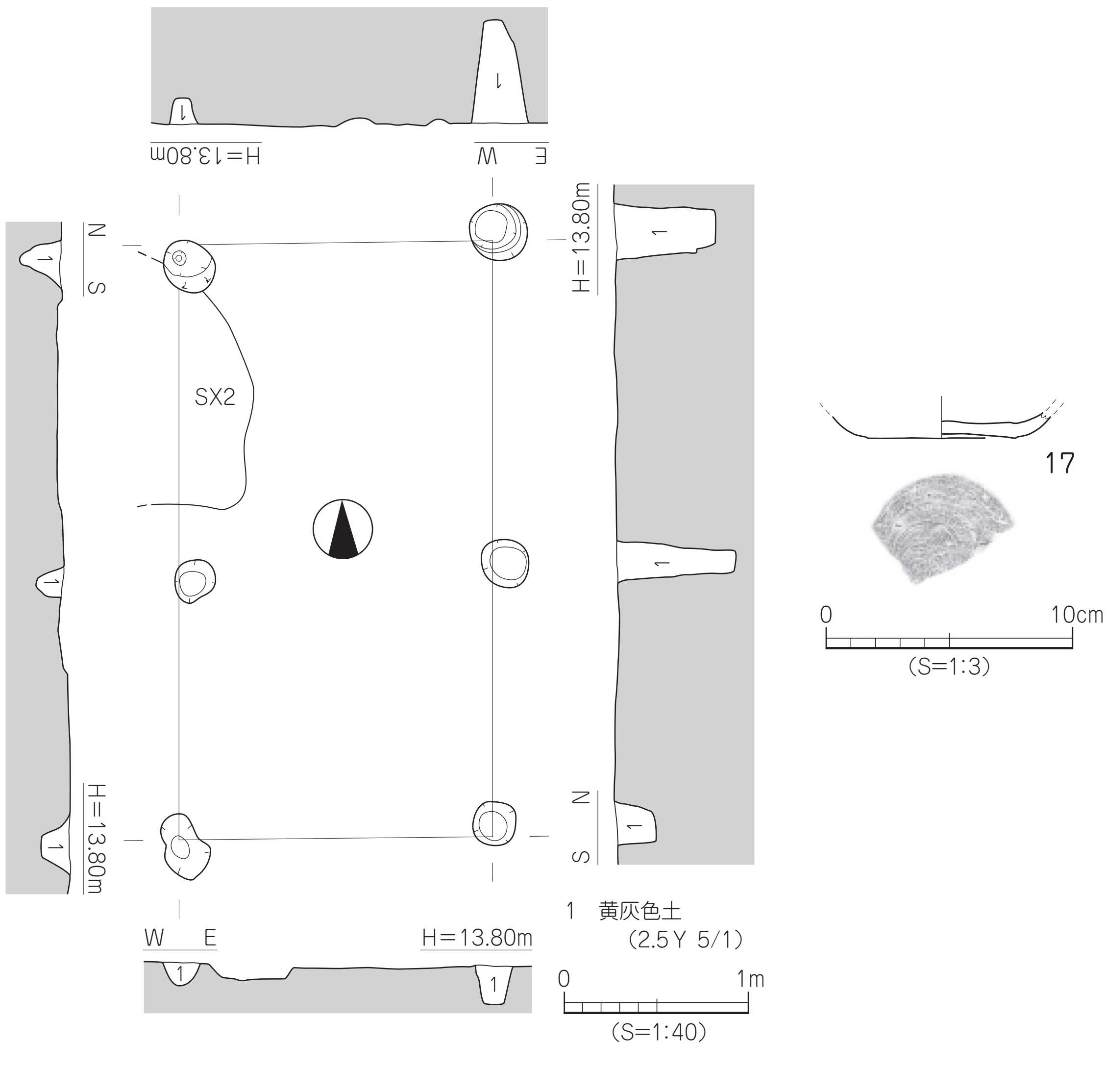
掘立１（第 42 図、図版 8）

２区東側Ｂ～Ｃ･7 区にて検出し、SX2 を切る。２間×１間の南北棟で、主軸はほぼ真北を指向する。柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は桁行 3.21 ｍの柱間 1.42 ～ 1.78 ｍ、梁行 1.69 ｍ、柱穴は 22 ～ 36㎝､深さ 12 ～ 64㎝を測る。埋土は黄灰色土で、 遺物は土師器･瓦器の小片が少量出土する。

出土遺物（第 42 図）

17 は土師器の坏である。底部には回転糸切り痕が残る。

時期：出土した土師器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。

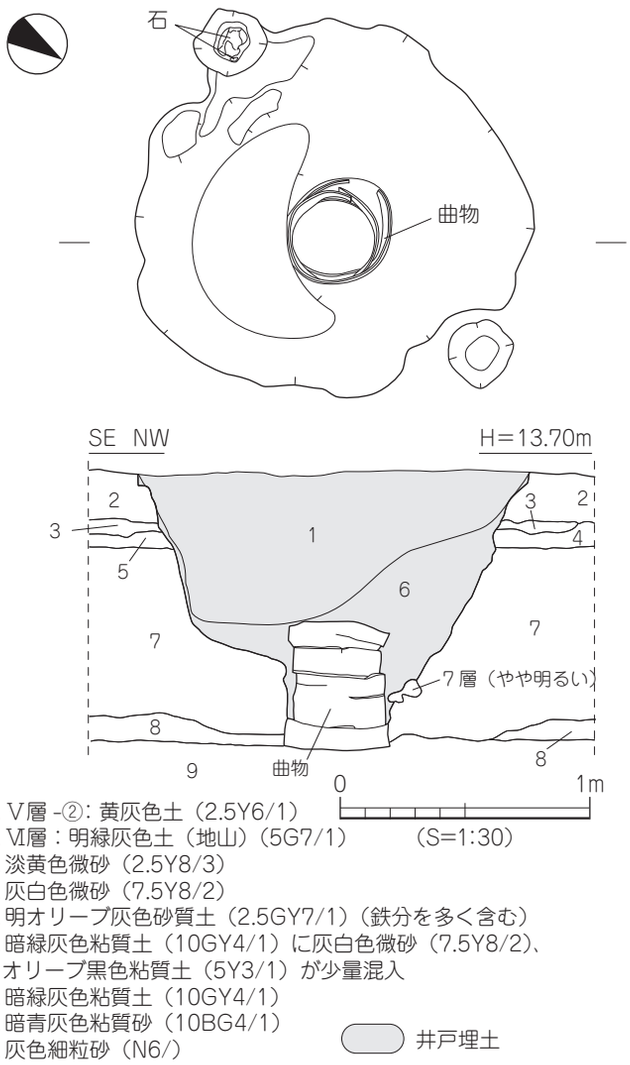


第 42 図　掘立１測量図・出土遺物実測図

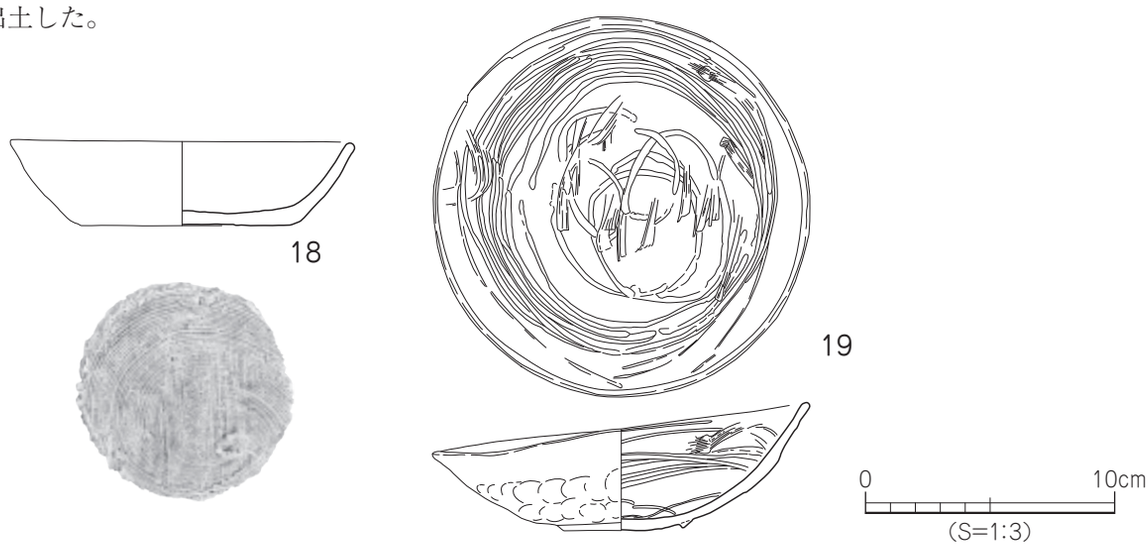
2）井戸

ＳＥ１（第43図、図版7・8）

2区西側C～D･5～6区にて検出し、SD3に切られる。平面形態は不整円形で断面形態は上部が逆台形状、下部が円筒状を呈する。上場の南北に楕円形状の柱穴が2基検出され、南側の1基の底面には人頭大のやや扁平な石が据えられており、この2基の柱穴は井戸に伴う施設と考えられる。埋土は上部が黄灰色土、下部が暗緑灰色粘質土で、上部の底面には厚み2～7cmの炭化層が堆積し、部分的に焼土も混入するが、下層に焼けが見られないことから別の場所で炭化したものと考えられる。下部の曲物は3段で構成されており、井戸底は細砂層まで達し湧水がある。曲物は遺存状態が良好で、側板の外側に帯板を巻いており、結合部や内面全体には木目に直交・斜交するケビキ加工等が観察できる状態である。また、中位から曲物を挟むように南北方向の2ヵ所に木杭が打ち込まれており、井戸の施設と考えられる。上部から種子が3点と裏込め土の中には完形の瓦器椀や木箸が置かれ、曲物の中からは木錘が2個体出土した。



第43図　SE1 測量図



第44図　SE1 出土遺物実測図

出土遺物（第 44 図、図版 11・12）

18 は土師器の坏で、平底の底部外面には回転糸切り後の板圧痕が残る。19 は瓦器椀で内湾する胴部内面にはミガキ調整が螺旋状に施され、底部には断面逆三角形状の貼付高台をもつ。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。

３）溝

ＳＤ１（第 45 図）

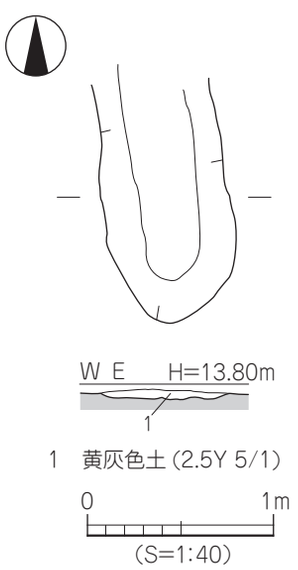
３区西側 E･11 区に位置し、北側は現代坑に切られる。主軸は南北方向を指向する。断面形状レンズ状を呈し、規模は長さ 1.41 m、上場幅 0.60 ～ 0.69 m、深さ２～ 5cmを測り、比高差は殆どない。埋土は黄灰色土の単一層である。遺物は埋土の上位から溝床にかけ土師器の小片が僅かに出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が SE1 と同一なことから 13 世紀代と考えられる。

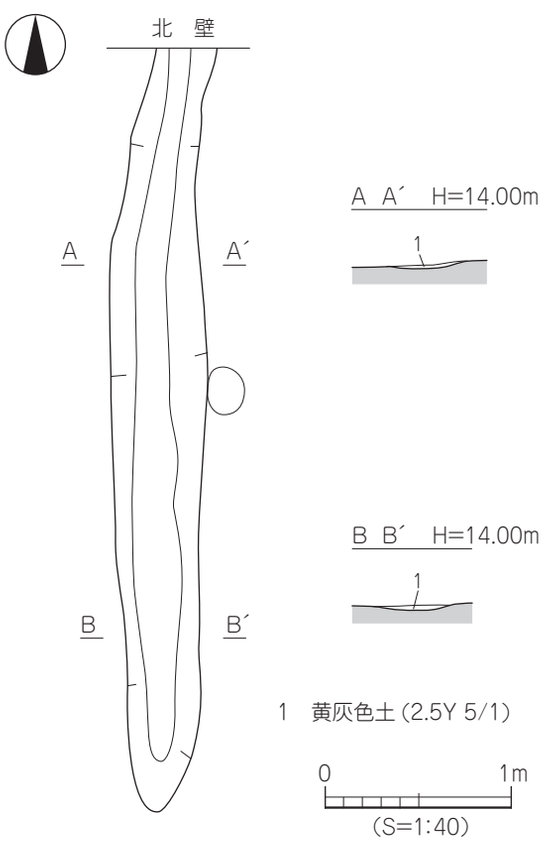
ＳＤ２（第 46 図）

２区中央部北側 C6 ～ D7 区に位置し、北側は調査区外に延びる。主軸は南北方向の座標軸を指向する。断面形状レンズ状を呈し、規模は長さ 4.08 m、上場幅 0.29 ～ 0.52 m、深さ１～ 5cmを測り、比高差は殆どない。埋土は黄灰色土の単一層である。遺物は土師器の小片が僅かに出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が SE1 と同一なことから 13 世紀代と考えられる。



第 45 図　SD1 測量図

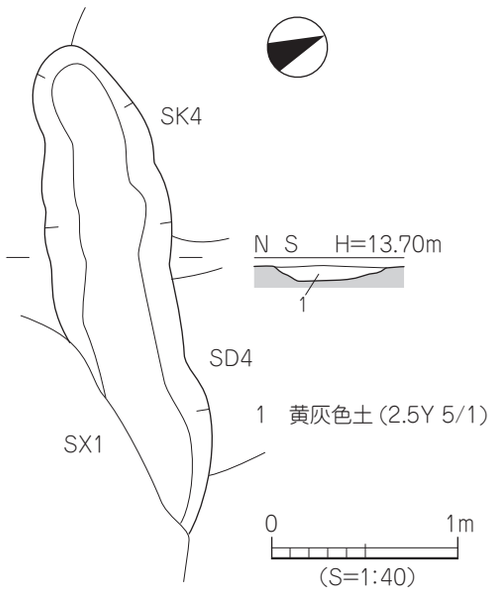


第 46 図　SD2 測量図

ＳＤ３（第 47 図）

2 区西側 C5 ～ 6 区に位置し、SX1 に切られ、SE1・SD4 を切る。主軸は東西方向を指向する。断面形状レンズ状を呈し、規模は長さ 2.68 m、上場幅 0.56 ～ 0.68 m、深さ 4 ～ 8㎝、を測り、比高差は殆どない。埋土は黄灰色土の単一層である。遺物は土師器・瓦器片が少量出土した。

時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が SE1 と同一なことから 13 世紀代と考えられる。



第 47 図　SD3 測量図

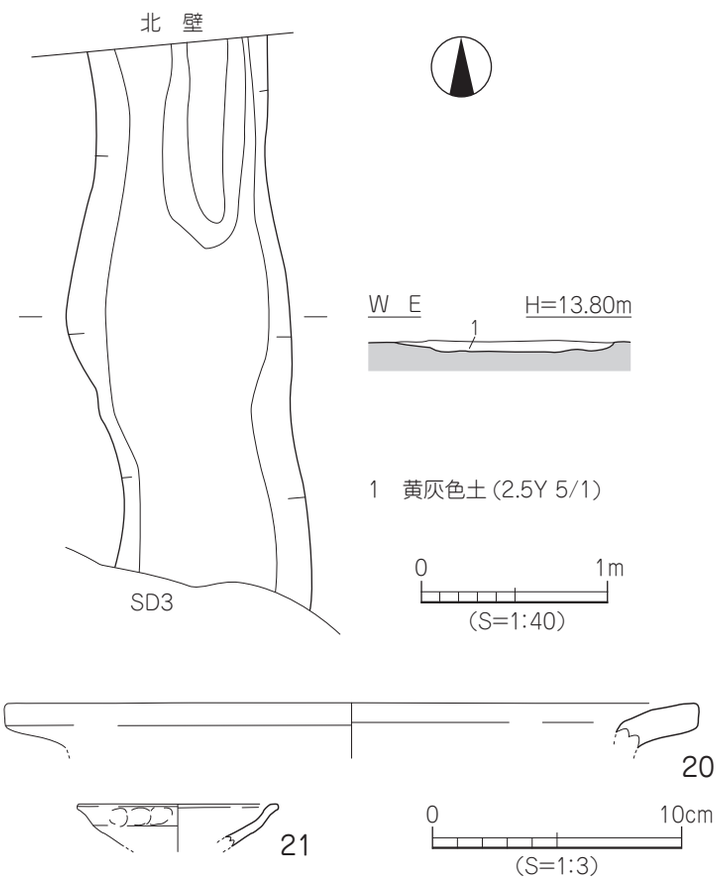
ＳＤ４（第 48 図）

2 区西北部 C6 ～ D6 区に位置し、南端は SD3 に切られ、北端は調査区外に延びる。主軸は南北方向を指向する。断面形状は皿状を呈し、規模は長さ 2.92 m、上場幅 0.88 ～ 1.18 m、深さ 2 ～ 7㎝を測り、比高差は殆どない。埋土は黄灰色土の単一層である。遺物は土師器・瓦器片が僅かに出土した。

出土遺物（第 48 図）

20 は土師器の鍋の口縁部で、外反する口縁部に端部は丸く納まる。ハケ目調整が施された口縁外面には煤けが残る。21 は瓦器皿の口縁部で、内湾する上胴部に口縁部は外反し、内外面に横ナデ調整が施される。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。



第 48 図　SD4 測量図・出土遺物実測図

ＳＤ５（第 49 図）

4 区西側 F6 ～ G7 区に位置し、南北端は調査区外に延びる。主軸は南北方向を緩やかに湾曲しながら指向する。断面形状はレンズ状を呈し、規模

は長さ 3.86 m、上場幅 0.28 ～ 0.71 m、深さ 2 ～ 5㎝を測り、比高差は北から南へ 4cm の比高差をもつ。埋土は黄灰色土の単一層である。遺物は土師器・瓦片が出土した。

出土遺物（第 49 図）

22 は土師器鍋の口縁部で、屈曲をもつ口縁内面はハケ目調整が施される。23 は土師器の皿で平底の底部に回転糸切り痕が残る。

時期：出土した土師器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。

ＳＤ６（第 50 図）

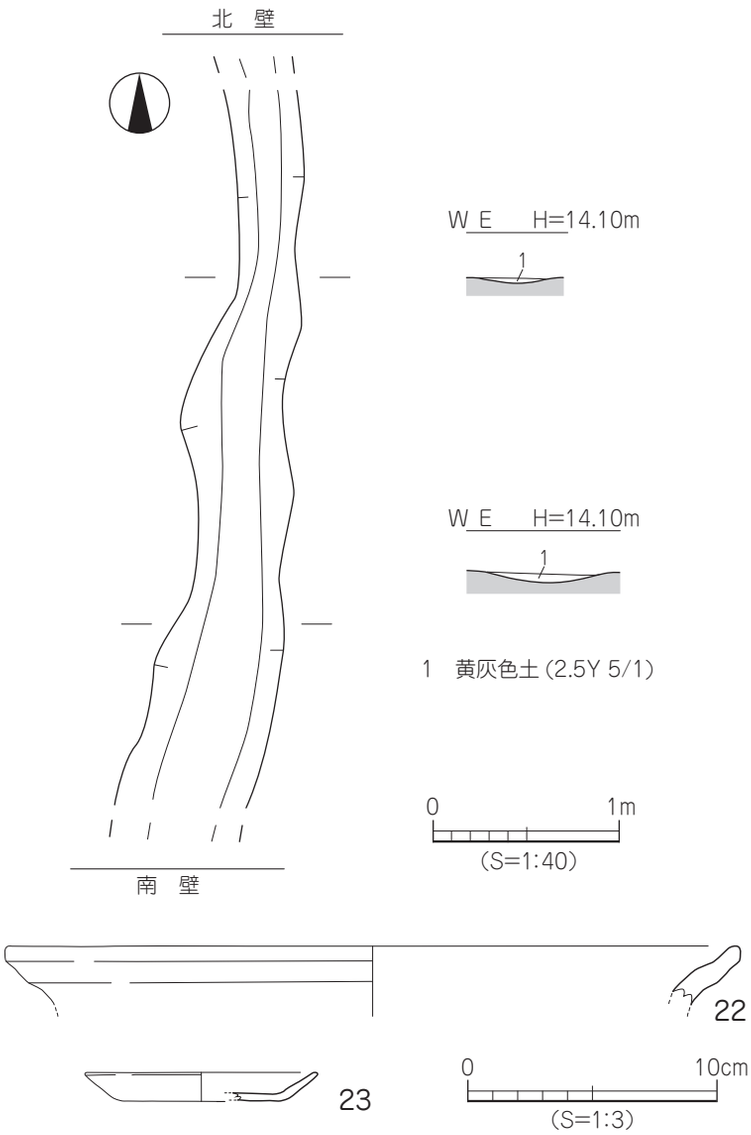
1 区北側 E1 ～ E2 区で南北方向に検出し、南端は SK11 に切られ、北端は調査区外に延びる。主軸は南北方向の座標北を指向しており、南端には中段をもつ。断面形状は逆台形状を呈し、規模は長さ 2.16 m、上場幅 0.48 ～ 0.60 m、深さ 5 ～ 8㎝を測り、比高差はない。埋土は黄灰色土である。

遺物は埋土上位から溝床にかけ土師器･瓦器の破片が少量出土する。

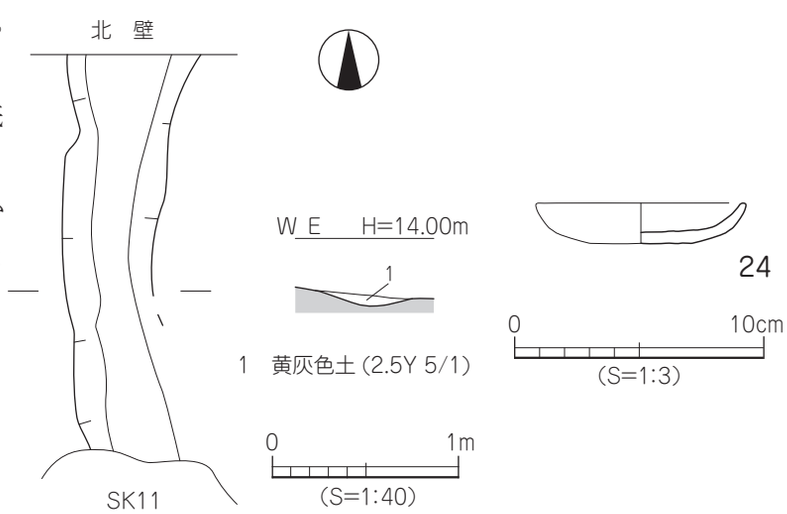
出土遺物（第 50 図）

24 は土師器の皿で、平底の底部より内湾して立ち上がる。

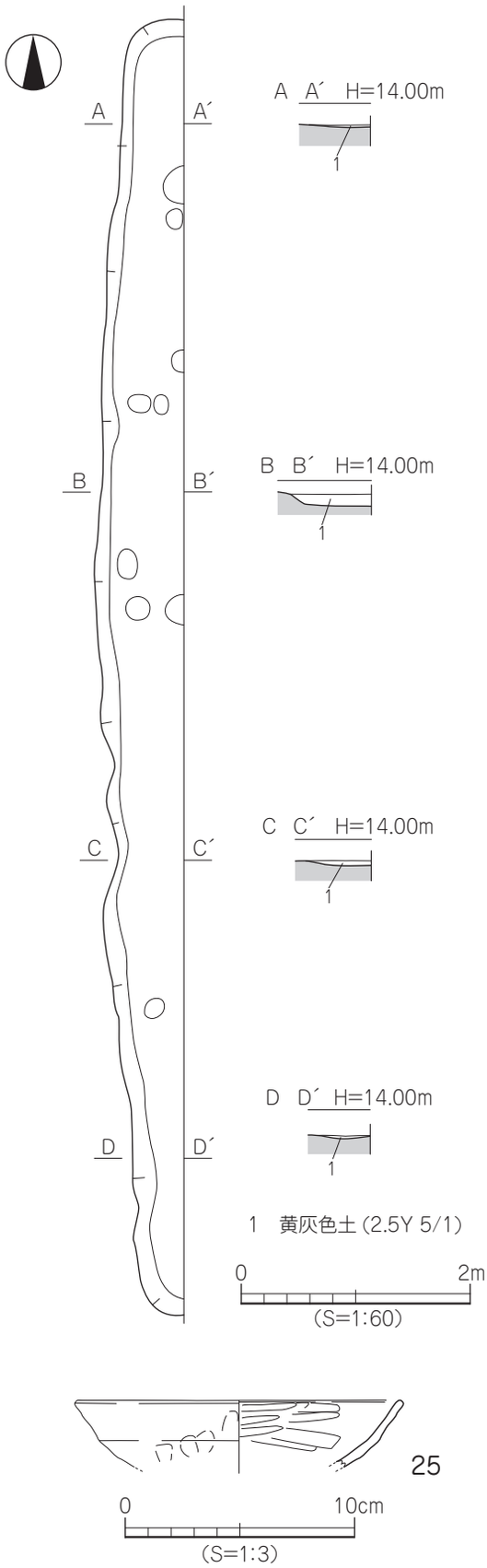
時期：出土した土師器の特徴から廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。



第 49 図　SD5 測量図・出土遺物実測図



第 50 図　SD6 測量図・出土遺物実測図



第 51 図　SD7 測量図・出土遺物実測図

ＳＤ７（第 51 図）

1 区東端 B3 ～ E3 区に位置し、東側は調査区外に延びる。南北方向を指向する鋤跡と平行な位置関係である。断面形状は皿状を呈し、規模は長さ 11.16 m、上場幅 0.64 m、深さ 2 ～ 11cmを測り、比高差は殆どない。埋土は黄灰色土で、遺物は埋土上位から溝床にかけ土師器・瓦器の破片が少量出土する。

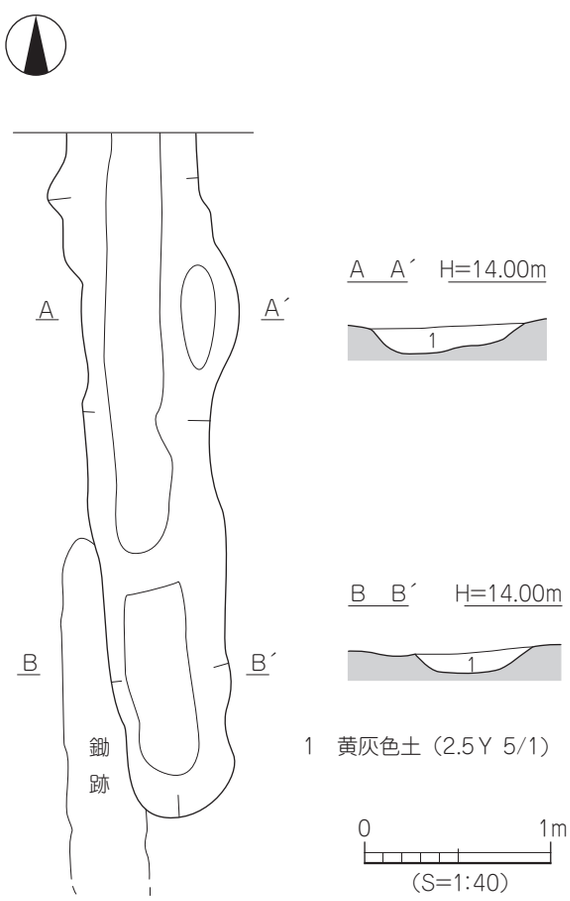
出土遺物（第 51 図）

25 は瓦器椀で、内湾する胴部の内外面には横ナデ調整が施され、外面には指頭痕が残る。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。

ＳＤ８（第 52 図）

1 区東北部 D2 ～ E3 区に位置し、鋤跡を切り、北端は調査区外に延びる。南北方向を指向する鋤



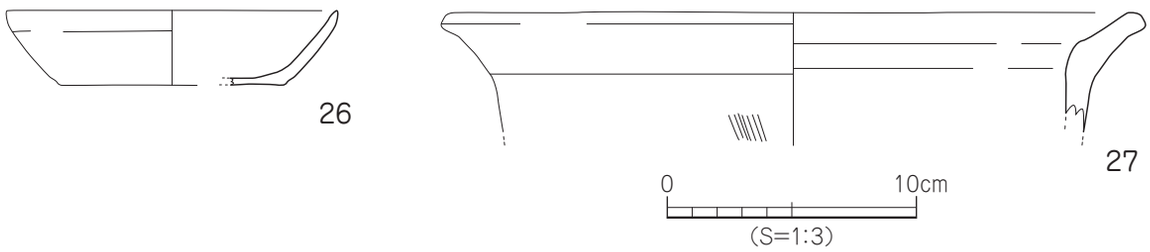
第 52 図　SD8 測量図

跡と平行な位置関係である。断面形状は逆台形状を呈し、南端には中段をもつ。規模は長さ 3.76 m、上場幅 0.55 ～ 0.82 m、深さ 9 ～ 16㎝を測り、比高差は殆どない。埋土は黄灰色土で、遺物は埋土上位から溝床にかけ土師器・須恵器・磁器の破片が比較的多く出土する。

出土遺物（第 53 図）

26 は土師器坏で、平底の底部には回転糸切り痕残る。27 は土師器鍋で、「く」字状の口縁部内外面には横ナデ調整、上胴部にはハケ目調整が施される。

時期：出土した土師器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。

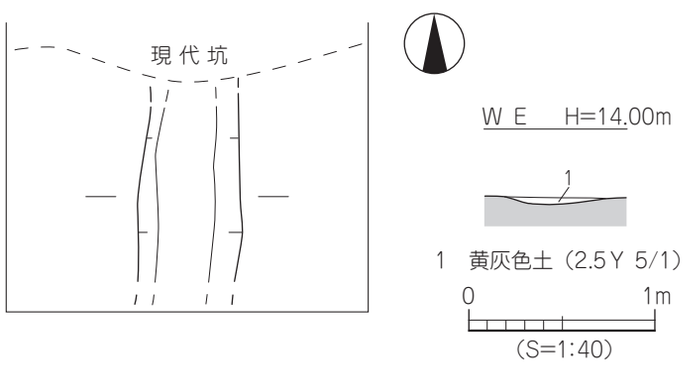


第 53 図　SD8 出土遺物実測図

ＳＤ10（第 54 図）

T7 南部 G9 区に位置し、北端は現代坑に切られ、南端は調査区外に延びる。南北方向を指向する。断面形状はレンズ状を呈し、規模は長さ 1.02 m、上場幅 0.43 ～ 0.53 m、深さ 2 ～ 4㎝を測り、比高差は殆どない。埋土は黄灰色土で、出土遺物はない。

時期:時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が SE1 と同一なことから 13 世紀代と考えられる。



第 54 図　SD10 測量図

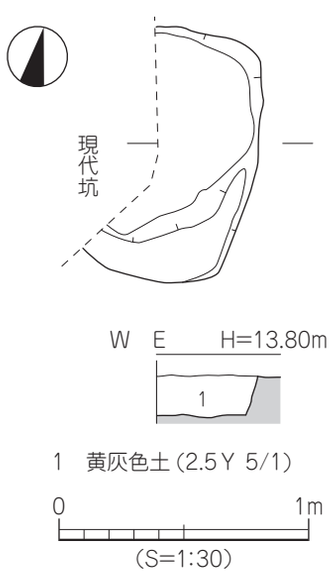
4）土　坑

1 ～ 3 区において 11 基を検出した。

ＳＫ１（第 55 図）

3 区南端 B12 ～ C12 区に位置し、西側は現代坑に切られる。残存状況から平面形態は不整長方形を呈するものと考えられ、断面形態は逆台形状を呈する。規模は南北 1.03 m、東西 0.4 m以上、深さ 17㎝を測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器・須恵器・瓦器の小片が僅かに出土した。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。

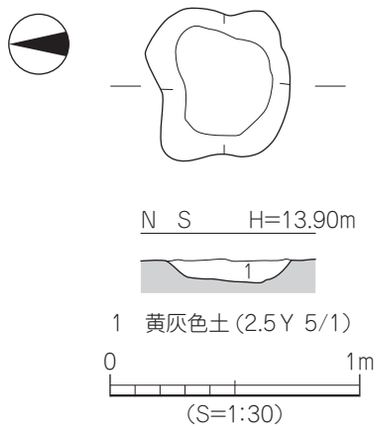


第 55 図　SK1 測量図

ＳＫ２（第 56 図）

3 区中央部 E11 ～ E12 区に位置する。平面形態は不整円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸 0.61 m、短軸 0.52 m、深さ 9㎝を測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器・瓦器の小片が僅かに出土した。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。

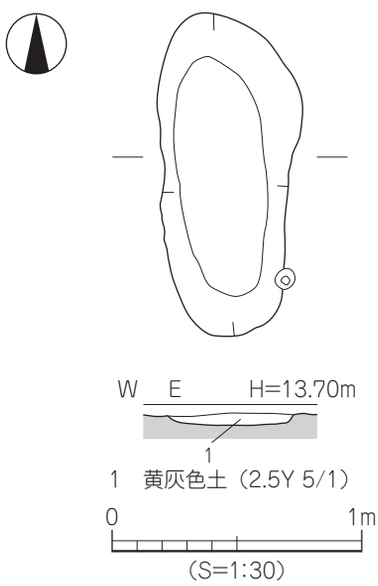


第 56 図　SK2 測量図

ＳＫ３（第 57 図）

2 区西南部 B6 ～ C6 区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 1.3 m、短軸 0.52 m、深さ 5㎝を測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器の小片が僅かに出土した。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。



第 57 図　SK3 測量図

ＳＫ５（第 58 図）

2 区西側 C6 区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 0.97 m、短軸 0.77 m、深さ 24 ㎝を測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器の坏・皿、瓦器の椀の破片が約 20 個体分出土した。

出土遺物（第 57 図）

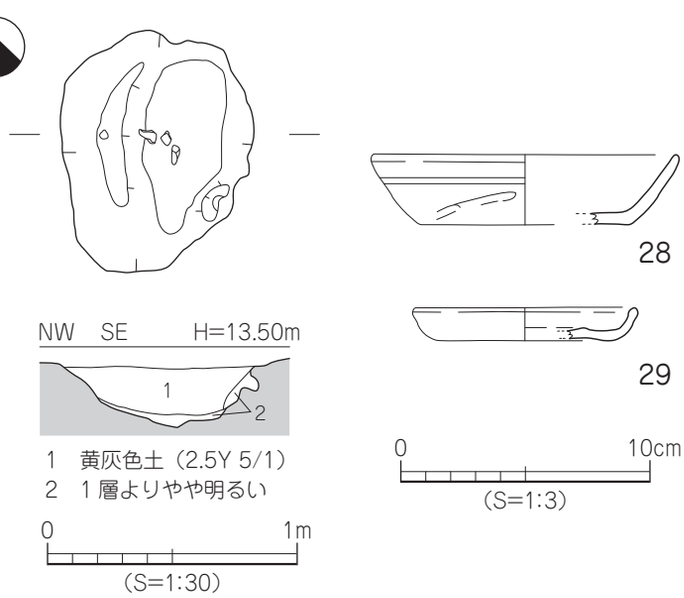
28 は土師器坏で、底部に回転糸切痕が残る。29 は土師器皿で底部に回転糸切り後の板圧痕が残る。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。

ＳＫ６（第 59 図）

1 区南端 B2 区に位置する。平面形態は不整楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸 1.06 m、短軸 0.77 m、深さ 15㎝を測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器・瓦器の小片が少量出土した。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。



第 58 図　SK5 測量図・出土遺物実測図

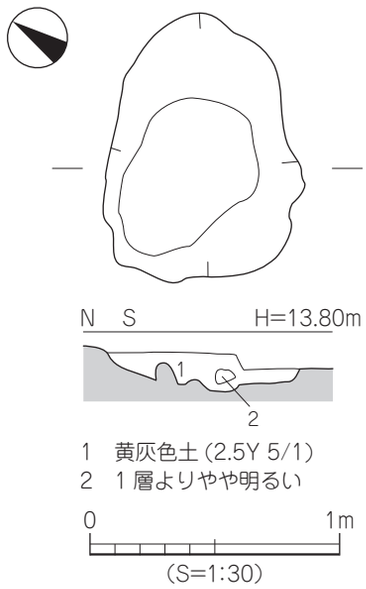
ＳＫ７（第 60 図）

1 区南側 B2 ～ C2 区に位置し、東西方向の鋤跡を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 1.17 m、短軸 0.91 m、深さ 10㎝を測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器・瓦器の小片が少量出土した。

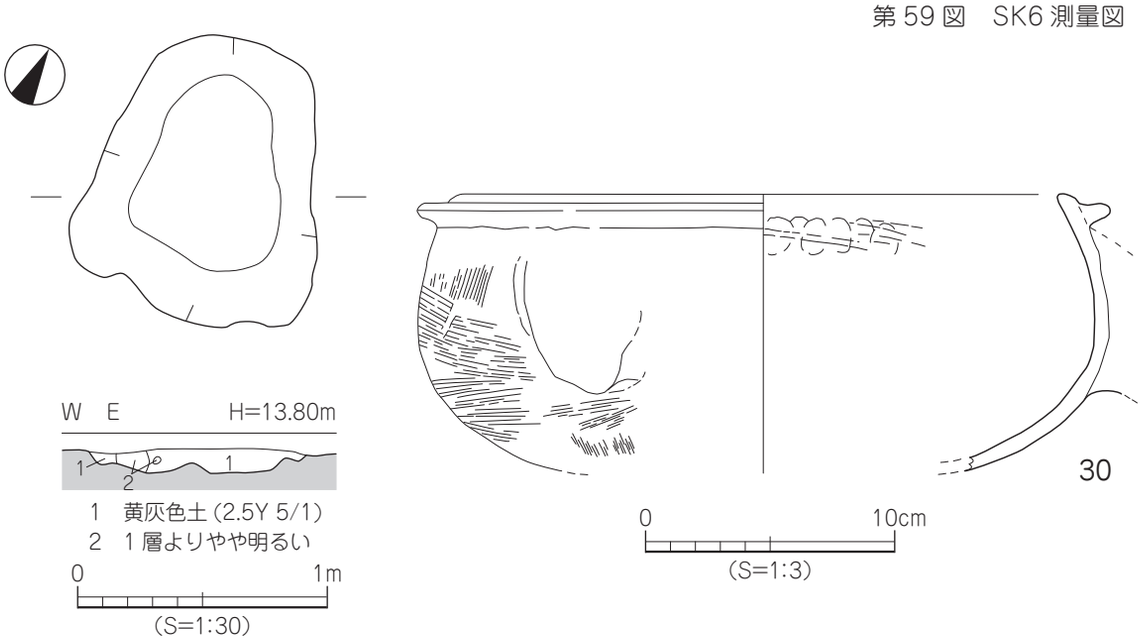
出土遺物（第 60 図）

30 は土師器の釜である。内湾する胴部外面には煤が付着しており、口縁端部には断面逆台形状の貼付凸帯をもつ。

時期：出土した土師器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。



第 59 図　SK6 測量図



第 60 図　SK7 測量図・出土遺物実測図

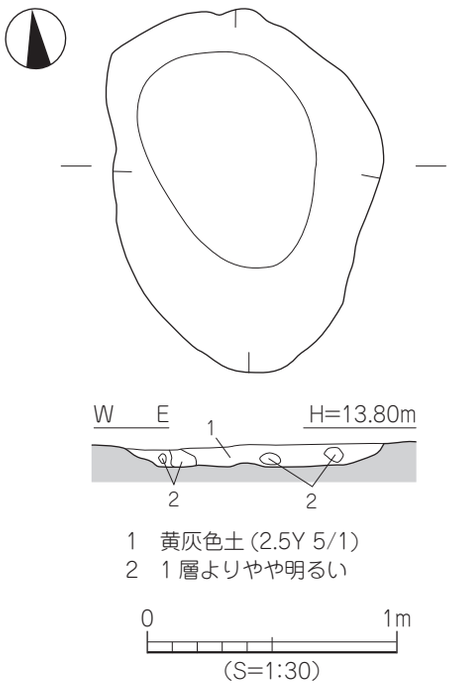
ＳＫ８（第 61 図）

1 区南側 C2 区に位置し、南北方向の鋤跡を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 1.46 m、短軸 1.08 m、深さ 9㎝を測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器の小片が僅かに出土した。

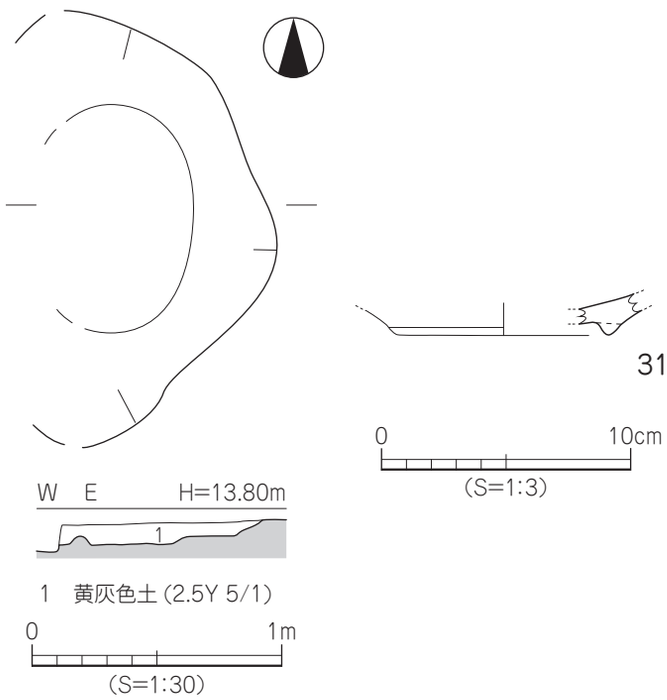
時期：時期決定しうる遺物が乏しく、埋土が SE1 と同一なことから 13 世紀代と考えられる。

ＳＫ９（第 62 図）

1 区西側 C1 ～ D1 区に位置し西側はトレンチに切られる。残存状況から平面形態は不整楕円形を呈するものと考えられ、断面形態はレンズ状を呈する。規模は南北 1.74 m、短軸 0.8 m以上、深さ 8㎝



第 61 図　SK8 測量図



第 62 図　SK9 測量図・出土遺物実測図

を測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器・須恵器・瓦器の小片が少量出土した。

出土遺物（第 62 図）

31 は土師器の椀で、底部に逆三角形の貼り付け高台をもつ。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。

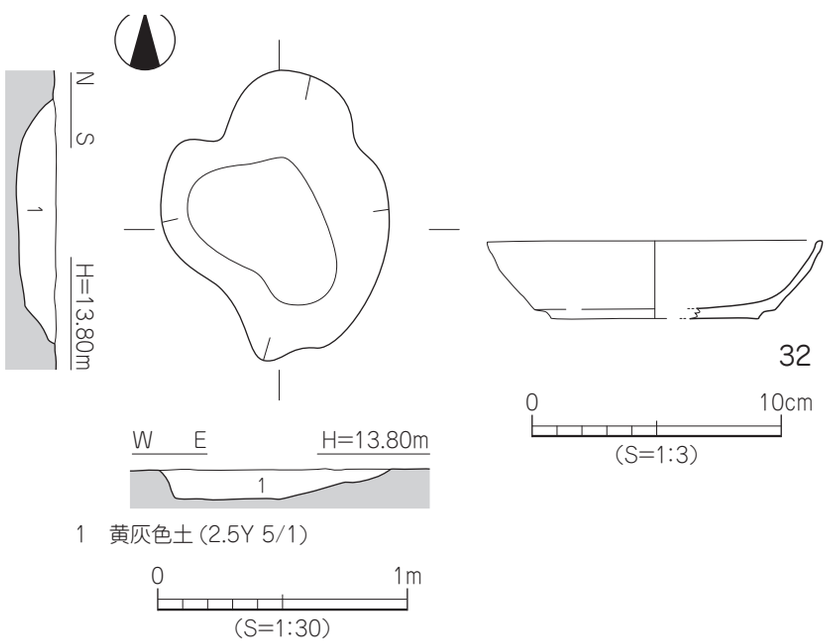
ＳＫ 10（第 63 図）

1 区中央部 D2 区に位置し、南北方向の鋤跡を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は南北 1.13 m、短軸 0.91 m、深さ 12㎝を測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器・瓦器の小片が少量出土した。

出土遺物（第 63 図）

32 は土師器坏で、内湾する胴部に口縁部はやや外反する。

時期：出土した瓦器椀の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。



第 63 図　SK10 測量図・出土遺物実測図

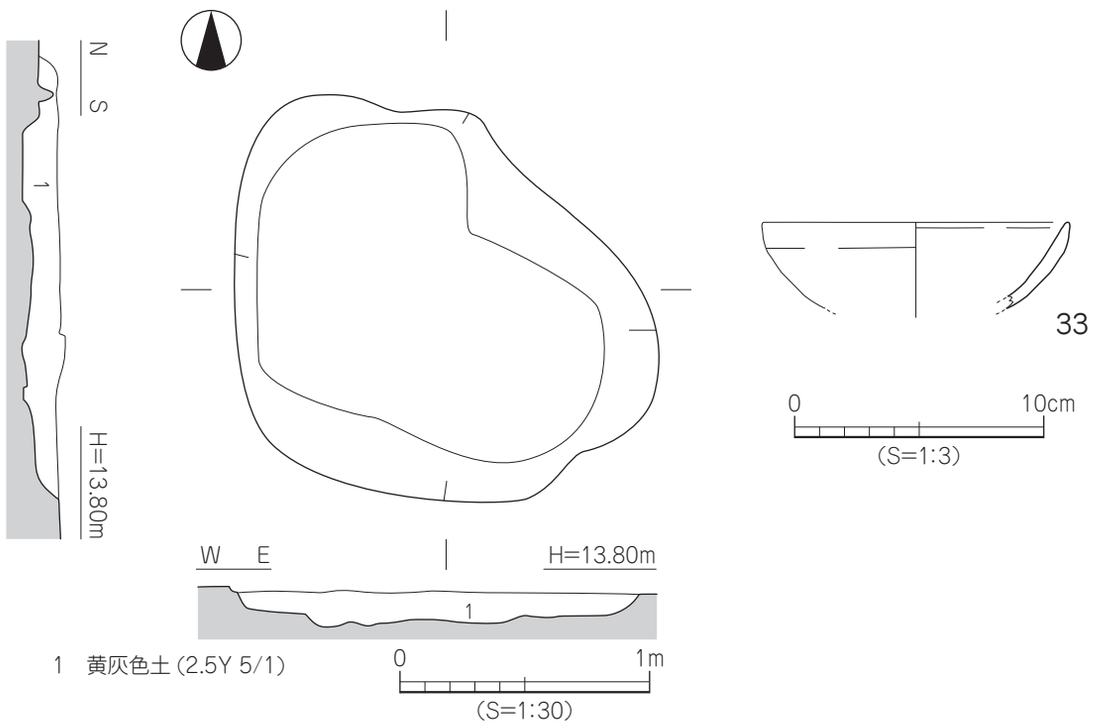
ＳＫ 11（第 64 図、図版）

1 区北側 D1 ～ E2 区に位置し、SK12・SD6・SX3 を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸 1.7 m、短軸 1.64 m、深さ 14cmを測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器・瓦器片が比較的多く出土した。

出土遺物（第 64 図）

33 は土師器の坏で、胴部は内湾し、口縁端部は尖り気味である。内外面はヨコナデ調整が施される。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。



第 64 図　SK11 測量図・出土遺物実測図

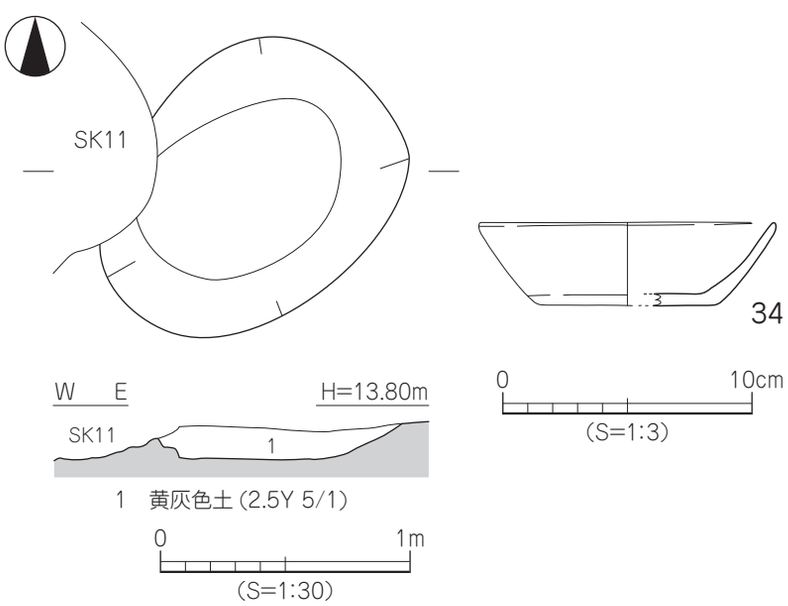
ＳＫ 12（第 65 図）

1 区北側 D2 ～ E2 区に位置し、SX3 を切り、SK11 に切られる。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 1.08 m、短軸 0.90 m、深さ 14cm を測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器・瓦器の小片が僅かに出土した。

出土遺物（第 65 図）

34 は土師器の坏である。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。



第 65 図　SK12 測量図・出土遺物実測図

5）柱　穴

中世では、77 基の柱穴を検出した。柱穴の埋土は黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）・黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）・Ⅴ①層（砂粒を多く含む）の三種類となる。遺物は土師器の坏・皿・土鍋・土釜、瓦器椀の破片が出土する。

6）鋤　跡

1 ～ 3 区、T1 において 131 条を検出した。殆どが南北方向のほぼ真北を指向しており、1 ～ 3 区の南側では僅かに東西方向を指向するものがみられる。断面形状は殆どがレンズ状であり、埋土は黄灰色土で東西・南北方向とも同一である。

出土遺物

土師器の坏・皿・土鍋・土釜、瓦器椀の小片が出土する。

時期：出土した土師器・瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。

7）性格不明遺構

1・2 区から 4 基を検出した。

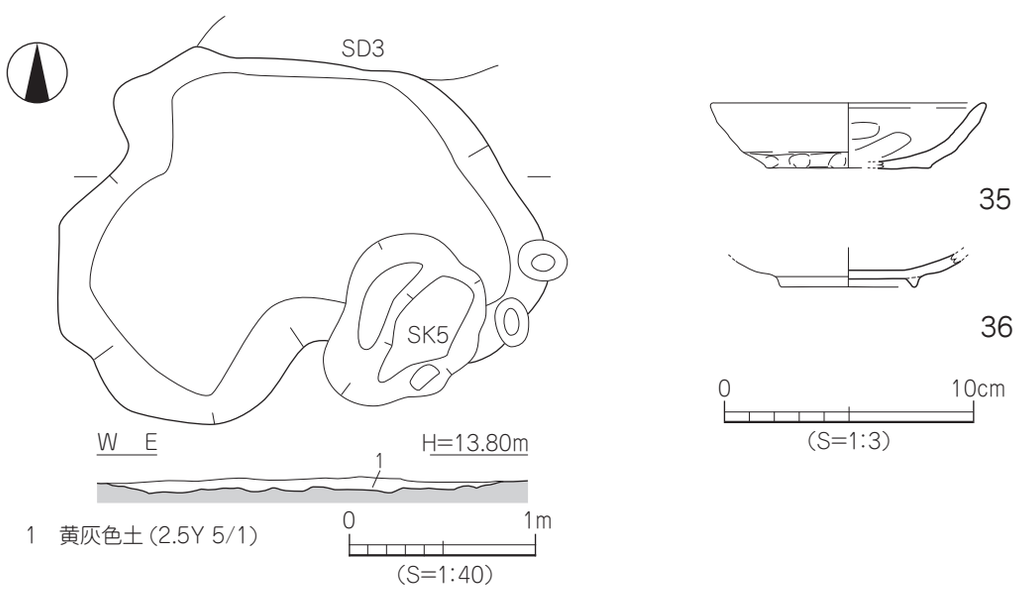
ＳＸ１（第 66 図）

２区西側 C6 区に位置し、SK5 に切られ、SD3 を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 2.62 m、短軸 2.04 m、深さ 8cmを測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器・瓦器の小片が少量出土した。

出土遺物（第 66 図）

35 は土師器坏で、底部付近がやや括れ、内外面に横ナデ調整が施される。36 は瓦器椀で、底部に逆三角形状の貼付高台をもつ。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。



第 66 図　SX1 測量図・出土遺物実測図

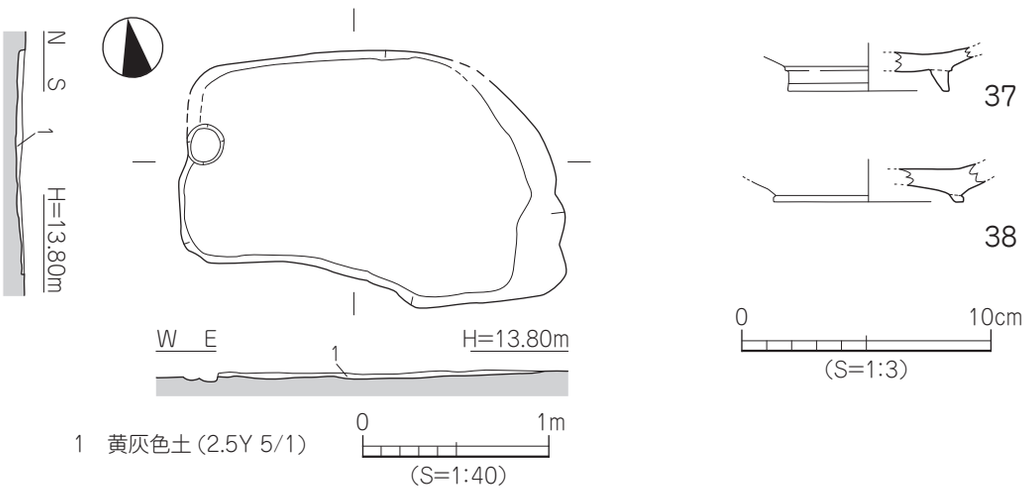
ＳＸ２（第 67 図）

２区中央部の C7 区に位置し、掘立１に切られる。平面形態は不整長方形、断面形態は皿状を呈し、その形状や規模などから土坑墓の残存の可能性をもつ。規模は長軸 2.05 m、短軸 1.36 m、深さ 4cm を測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器・瓦器の小片が少量出土した。

出土遺物（第 67 図）

37･38 は土師器の椀で、外反する断面逆台形状の貼付高台をもち、37 は高台が高く、38 は高台が低い。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。



第 67 図　SX2 測量図・出土遺物実測図

ＳＸ３（第 68 図）

1 区北側の D1 ～ D2 区に位置し、SK11･12 に切られ、南北方向の鋤跡を切る。平面形態は不整楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸 5.14 m、短軸 2.30 m、深さ 5cmを測る。埋土は黄灰色土で、上位から基底面にかけ土師器・瓦器の小片が少量出土した。

出土遺物（第 68 図）

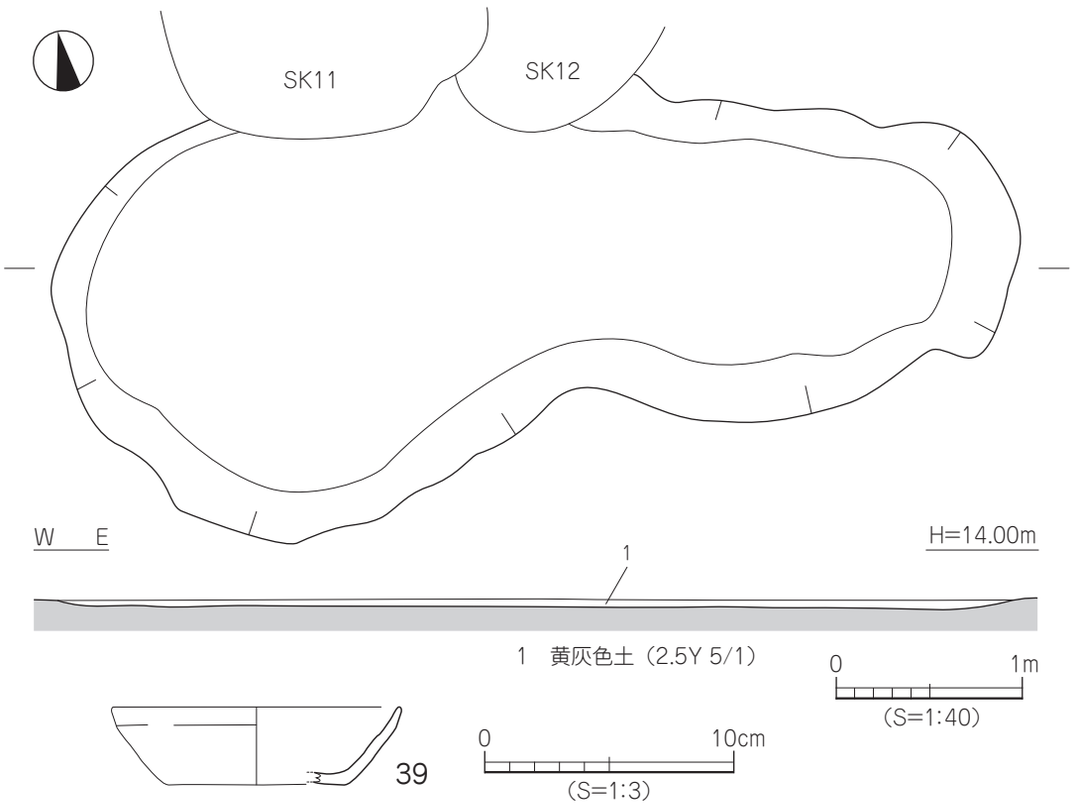
39 は土師器坏で、口縁端部が上方に延び、内外面に横ナデ調整が施される。底部には回転糸切り痕後の板圧痕が残る。

時期：出土した瓦器の特徴から、廃棄・埋没時期は 13 世紀代と考えられる。

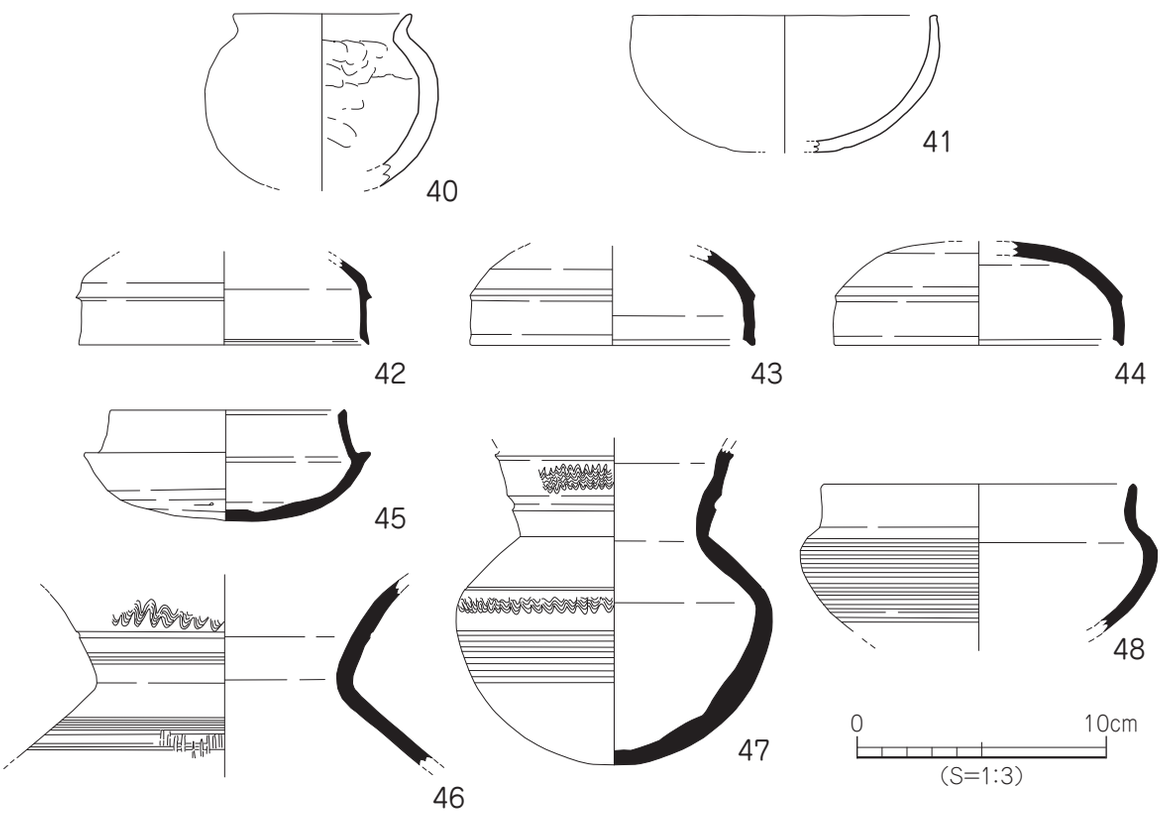
８）第Ⅵ層出土遺物（第 69 図）

全調査区・トレンチの全域に層厚 2 ～ 20cm程の堆積がみられ、古墳時代の土師器、須恵器などが出土した。

40・41 は土師器である。40 は小型丸底壺で球状の胴部内外面にはナデ調整、短く外反する口縁部は横ナデ調整が施される。41 は内湾する胴部内外面にはナデ調整が施される。42 ～ 48 は須恵器である。42 ～ 44 は坏蓋で、天井部と口縁部の境には明確な稜をもち、口縁端部に内傾する段を有する。45 は坏身で受部端はやや凹み、口縁端部に内傾する浅い段をもつ。46 は壺の頸部付近で、「く」字状の頸部上部には沈線 1 条と波状文 6 条が巡り肩部にはカキ目調整が施される。47 は直口壺で、球状の上胴部には波状文と下胴部にはカキ目調整が施され、口縁部はやや外反して立ち上がる。48 は短頸壺で、球状の胴部外面にはカキ目調整が施され、口縁部は上方に立ち上がる。



第 68 図　SX3 測量図・出土遺物実測図

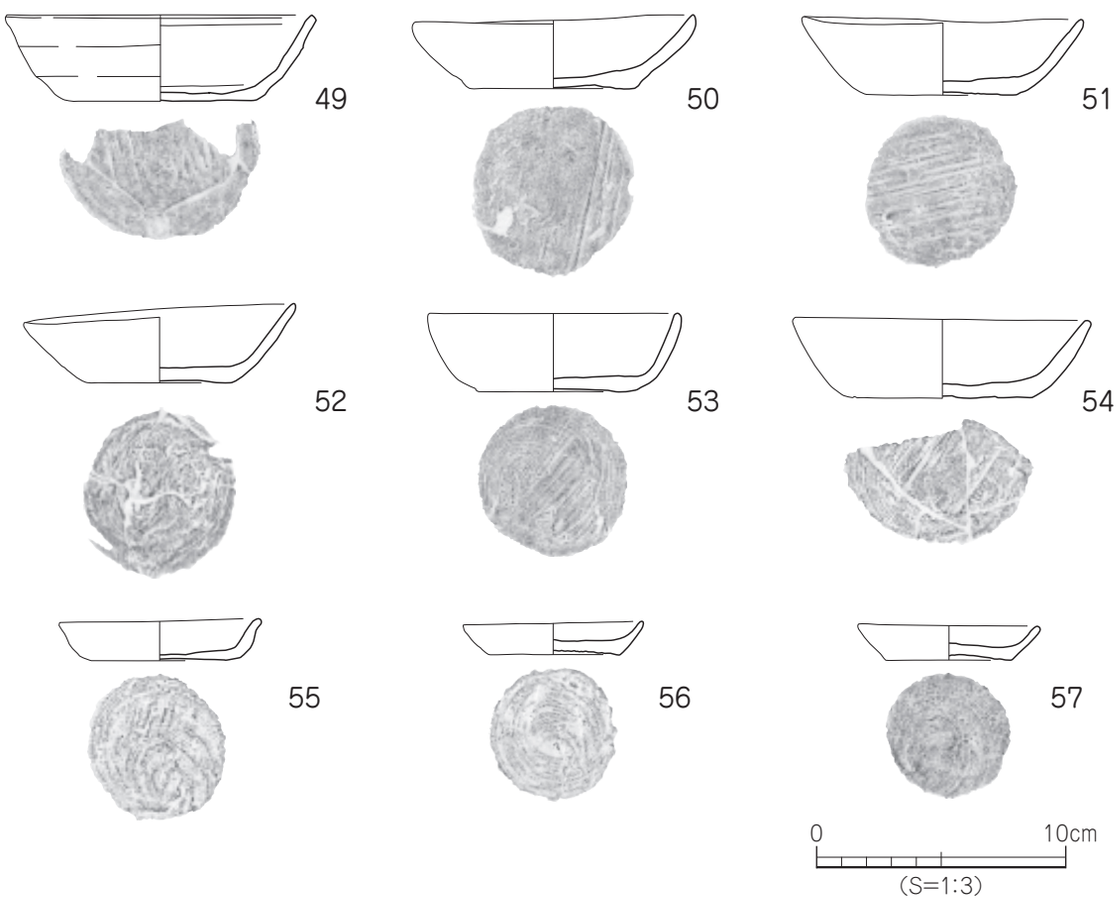


第 69 図　第Ⅵ層出土遺物実測図

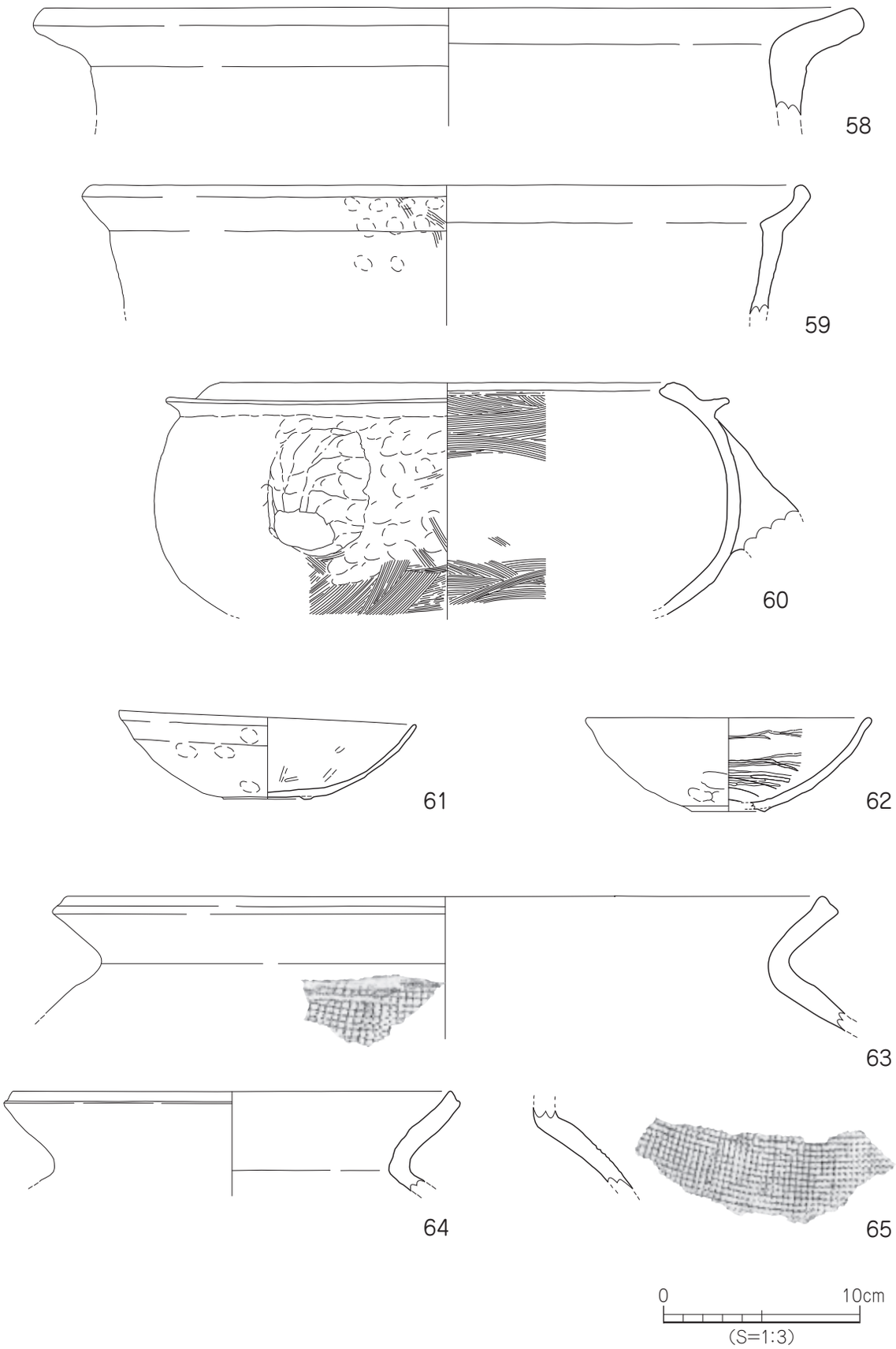
９）第Ⅴ層出土遺物（第 70・71・72 図、図版 12）

全調査区・トレンチの全域に層厚２～20cm程の堆積がみられ、土師器、須恵器、瓦器・磁器などが出土し、13 世紀代のものが殆どである。

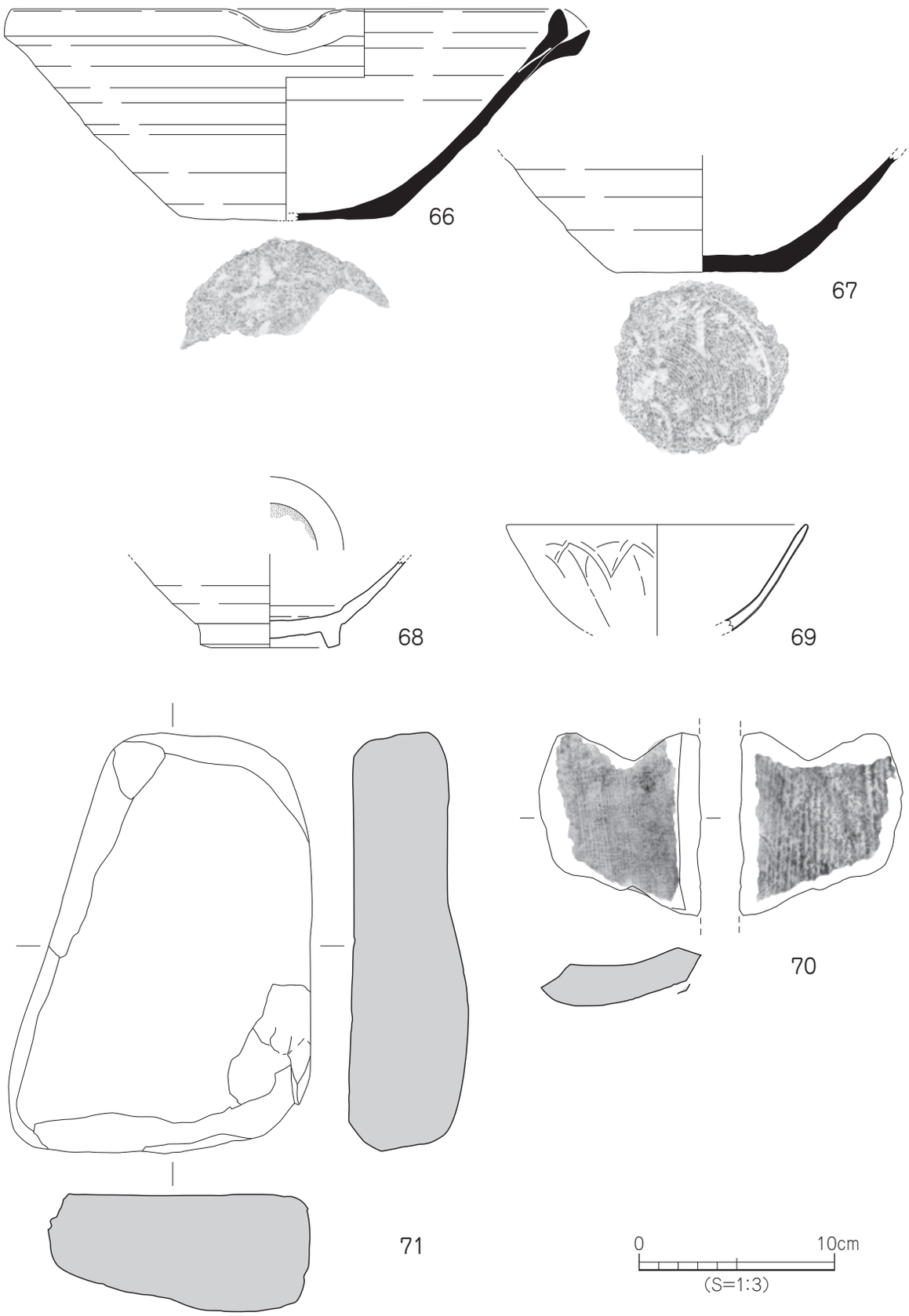
49 ～ 57 は土師器である。49 ～ 54 は坏であり、底部の切り離し技法は回転糸切りで、52 以外には板圧痕が残る。58・59 は土鍋の口縁部で、58 は「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなす。59 は内湾する口縁に端部はやや上方に延びる。60 は瓦質の釜で、口縁端部よりやや下に断面三角形状の貼付け凸帯をもち、凸帯下に下方に延びる脚をもつ。61・62 は瓦器椀で、61 は断面逆台形状、62 は断面三角形状の貼付け高台をもち、62 は内面に圏線状の暗文と見込みに平行線上の暗文を施す。和泉型。63 ～ 65 は亀山系瓦質土器の甕の口縁部付近で、63・64 は「く」字状の口縁部に端部は平らな面をなす。63・65 は肩部外面に格子タタキ調整が施される。66・67 は東播系須恵器の片口鉢で底部は糸切り痕が残る。66 は口縁部が上方へ拡張される。68 は陶器碗の底部で、削り出し高台をもち下胴部外面は回転ヘラ削り、見込部には砂目痕が見られ、内面や上胴部は施釉される。69 は龍泉窯系青磁碗で、片彫蓮弁文が施される。70 は軒平瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄叩き痕がある。71 は台石の完存品で上面はやや凹む扁平な面をなし、一部に煤けが見られる。長さ 21.5cm、幅 15.4cm、厚さ 6.0cm、重さ 3.51Kg を測り、石材は安山岩である。



第 70 図　第Ⅴ層出土遺物実測図（1）



第 71 図　第Ⅴ層出土遺物実測図 (2)



第 72 図　第Ⅴ層出土遺物実測図（3）

第4節　小　結

今回の調査では、弥生時代の溝・柱穴、古墳時代の溝・土坑・水田面・木杭・炭化物堆積面・性格不明遺構、中世の掘立柱建物跡・井戸・溝・土坑・柱穴・鋤跡・性格不明遺構を検出した。

弥生時代の遺構は、調査地北端 T9 の淡黄色シルト層の上面において検出したが、南側の調査区ではこのシルト層や遺構は未確認であった。周辺の調査結果から察すると淡黄色シルト層は地形の安定している調査地から北側に広がり、そこに弥生時代の集落が展開するものと考えられる。

古墳時代では、1 区において溝・土坑や炭化物堆積層を検出した。西隣の辻町遺跡 1 次調査では、同時期の溝や柱穴と祭祀行為の可能性が高い土器の一群が検出されており、1 区で検出された溝・土坑や炭化物の堆積層などは、1 次調査との関連が高い遺構と考えられる。また、南西約 15 mの辻町遺跡 2 次調査でも同時期の竪穴住居や祭祀跡を検出し、部分的に炭化層や焼土がみられ、調査地から西に広がる集落跡や祭祀跡に関連する施設の一部の可能性をもつ。2 区で検出した人の足跡は、出土した土器から集落と同時期に水田が営まれていたことがわかり、調査地南約 500 m付近で西流していた宮前川中流域の北側に広がる生産域が存在する貴重な資料といえる。

中世では鋤跡を多数検出した。近接する辻町遺跡 2 次調査で掘立柱建物跡、井戸、墓などの集落跡を検出しており、この集落の北東に広がる農耕地であると考えられる。また、掘立柱建物跡、井戸、柱穴などを検出しており、農耕地のあとに集落としての土地利用が窺えられる。掘立柱建物跡は小規模なもので倉庫的な施設と考えられ、井戸は曲物の井戸枠外に完形の土器が置かれていることから、井戸の構築に伴う祭祀行為の可能性が強い。第Ⅴ層からの遺物の出土量が多いことからも、周辺に集落が展開していたことが窺える。

今回の調査により、調査地には弥生時代、古墳時代、鎌倉時代における集落や農耕地の存在が明らかになった。

【参考文献】

梅木謙一・真木　潔　1992「辻町遺跡」『朝美澤遺跡・辻町遺跡』松山市文化財調査報告書第 29 集

相原浩二　1995「辻町遺跡ー 2 次調査地ー」松山市文化財調査報告書第 51 集

－凡例－

１．本報告書では、検出した遺構を以下のように掲載している。
２．遺構の一覧表や遺物の観察表の凡例は、以下とした。

遺構一覧表・遺物観察表　　－凡　例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
（２）遺構一覧表
　規模欄　　（　）：現存検出長を示す。
（３）遺物観察表の各掲載について。
　法量欄　　（　）：推定復元値
　調整欄　　土製品の各部位名称を略記した。
　　例）㊀ →口縁部、㊀ →胴部
　胎土欄　　胎土欄では混和材を略記した。
　　例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色土粒。
　　（　）の中の数値は混和材粒子の大きさを示す。
　　例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3mm 大の石英・長石を含む」である。
　焼成欄　　焼成欄の略号について 。◎→良好、○→良。

表 15　掘立柱建物一覧

掘立	区	地区	規模（間）	方位	桁行		梁行		床面積（㎡）	時期	備考
					実長（m）	柱間寸法（m）	実長（m）	柱間寸法（m）			
1	2	B7 ～ C7	2 × 1	南北	3.21	1.42 ～ 1.78	1.69	1.69	5.42	13 世紀代	SX2 を切る

表 16　溝一覧

溝（SD）	区	地区	断面形	規模 長径×短径×深さ（m）	埋土	出土遺物	時期	備考
1	3	E11	レンズ状	1.41 × 0.60 ～ 0.69 × 0.02 ～ 0.05	黄灰色土（2.5Y 6/1）	土師	13 世紀代	北側は現代坑に切られる。
2	2	C6 ～ D7	レンズ状	4.08 × 0.29 ～ 0.52 × 0.01 ～ 0.05	黄灰色土（2.5Y 6/1）	土師	13 世紀代	北側は調査区外に延びる。
3	2	C5 ～ 6	レンズ状	2.68 × 0.56 ～ 0.68 × 0.04 ～ 0.08	黄灰色土（2.5Y 6/1）	土師・瓦器	13 世紀代	SX1 に切られ SE1、SD4 を切る。
4	2	C6 ～ D6	皿状	2.92 × 0.88 ～ 1.18 × 0.02 ～ 0.07	黄灰色土（2.5Y 6/1）	土師・瓦器	13 世紀代	南端は SD3 に切られ、北端は調査区外に延びる。
5	4	F6 ～ G7	レンズ状	3.86 × 0.28 ～ 0.71 × 0.02 ～ 0.05	黄灰色土（2.5Y 6/1）	土師・瓦器	13 世紀代	南北端は調査区に延びる。
6	1	E1 ～ E2	逆台形状	2.16 × 0.48 ～ 0.60 × 0.05 ～ 0.08	黄灰色土（2.5Y 6/1）	土師・瓦器	13 世紀代	南端は SK11 に切られ、北端は調査区外に延びる。
7	1	B3 ～ E3	皿状	11.16 × 0.64 × 0.02 ～ 0.11	黄灰色土（2.5Y 6/1）	土師・瓦器	13 世紀代	東側は調査区外に延びる。
8	1	D2 ～ E3	逆台形状	3.76 × 0.55 ～ 0.82 × 0.09 ～ 0.16	黄灰色土（2.5Y 6/1）	土師・須恵磁器	13 世紀代	鋤跡を切り、北端は調査区外に延びる。
9	T9	M ～ N5	レンズ状	1.40 × 0.90 ～ 1.30 × 0.07	黒褐色シルト	弥生	弥生時代後期	両端は調査区外に延びる。
10	T7	G9	レンズ状	1.02 × 0.43 ～ 0.53 × 0.02 ～ 0.04	黄灰色土（2.5Y 6/1）		13 世紀代	北端は現代坑に切られ、南端は調査区外に延びる。
11	1	C1 ～ E3	レンズ状	11.50 × 3.75 ～ 5.54 × 0.04 ～ 0.17	灰黄褐色土	土師・須恵	6 世紀初頭	両端は調査区外に延びる。

表 17　土坑一覧

土坑（SK）	区	地区	平面形	断面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	3	B～C 12	不整長方形	逆台形状	1.03 ×（0.40）× 0.17	黄灰色土 (2.5Y6/1)	土師・須恵 瓦器	13 世紀代	両側は現代坑に切られる。
2	3	E11・12	不整円形	皿状	0.61 ×0.52 × 0.09	黄灰色土 (2.5Y6/1)	土師・瓦器	13 世紀代	
3	2	B6 ～ C6	楕円形	逆台形状	1.30 ×0.52 × 0.05	黄灰色土 (2.5Y6/1)	土師	13 世紀代	
4	1	C2 ～ D3	楕円形	レンズ状	1.43 ×0.78 × 0.10	淡黄色砂質土（5Y8/3）	土師・須恵	6 世紀初頭	
5	2	C6	不整楕円形	逆台形状	0.97 ×0.77 × 0.24	黄灰色土 (2.5Y6/1)	土師・瓦器	13 世紀代	
6	1	B2	不整楕円形	レンズ状	1.06 ×0.77 × 0.15	黄灰色土 (2.5Y5/1)	土師・瓦器	13 世紀代	
7	1	B2 ～ C2	不整楕円形	逆台形状	1.17 ×0.91 × 0.10	黄灰色土 (2.5Y5/1)	土師・瓦器	13 世紀代	鋤跡を切る。
8	1	C2	不整楕円形	逆台形状	1.46 ×1.08 × 0.09	黄灰色土 (2.5Y5/1)	土師	13 世紀代	鋤跡を切る。
9	1	C1 ～ D1	不整楕円形	レンズ状	1.74 ×（0.80）× 0.08	黄灰色土 (2.5Y5/1)	土師・須恵 瓦器	13 世紀代	西側はトレンチに切られる。
10	1	D2	不整楕円形	皿状	1.13 ×0.91 × 0.12	黄灰色土 (2.5Y5/1)	土師・瓦器	13 世紀代	鋤跡を切る。
11	1	D1 ～ E2	不整楕円形	皿状	1.70 ×1.64 × 0.14	黄灰色土 (2.5Y5/1)	土師・瓦器	13 世紀代	SK12、SD6、SX3 を切る。
12	1	D2 ～ E2	楕円形	逆台形状	1.08 ×0.90 × 0.14	黄灰色土 (2.5Y5/1)	土師・瓦器	13 世紀代	SX3 を切り、SK11 に切られる。

表 18　性格不明遺構一覧

性格不明遺構（SX）	区	地 区	平面形	断面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	2	C6	不整楕円形	逆台形状	2.62 ×2.04 × 0.08	黄灰色土 (2.5Y5/1)	土師・瓦器	13 世紀代	SD3 を切り SK5 に切られる。
2	2	C7	不整長方形	皿状	2.05 ×1.36 × 0.04	黄灰色土 (2.5Y5/1)	土師・瓦器	13 世紀代	掘立 1 に切られる。
3	1	D1 ～ D2	不整楕円形	逆台形状	5.14 ×2.30 × 0.05	黄灰色土 (2.5Y5/1)	土師・瓦器	13 世紀代	鋤跡を切り SK11・12 に切られる。
4	1	D～E 1・2	長楕円形	皿状	4.26 ×1.49 × 0.15	黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)	土師・須恵	6 世紀初頭	SD11 の溝床から検出。

表 19　SD9 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
1	甕	口径（24.6） 残高　2.6	口縁部は外方向に屈曲し、端部は平らな面をなす。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰褐色 にぶい褐色	石・長（1～2） ◎		

表 20　SD11 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
2	坏蓋	口径（12.5） 器高　（4.5）	天井部と口縁部境は凹み、口縁端部は内傾する段を持つ。	㊦回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
3	坏身	口径　10.0 器高　4.8	口縁端部に内傾する段を持つ。	回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	密・長（1～2） ◎		11
4	坏身	口径（10.4） 残高　4.4	口縁端部に内傾する段を持ち、受部端は凹む。	回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～2) ○		
5	高坏	口径　9.5 残高　4.9	口縁端部に内傾する段を持ち、受部端は凹む。	回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	石（1～5） 長(1) ◎		
6	高坏	底径　（9.0） 残高　6.4	透かしを施す脚部に端部は屈曲し下方に延びる。	回転ナデ カキ目	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
7	高坏	底径　（8.0） 残高　5.2	脚部に３方向の透かしをもち、屈曲した端部外面に凹みをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		
8	高坏	底径　（8.8） 残高　5.0	脚部に３方向の透かしをもち、屈曲した端部外面に凹みをもつ。	回転ナデ カキ目	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
9	器台	底径（32.8） 残高　3.6	脚下部は透かしをもち、外面に波状文が施される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
10	壺	口径（10.2） 残高　7.2	球状の胴部に外反する口縁部をもつ。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～3) ◎		
11	坏	口径　（9.0） 底径　（6.4） 器高　3.3	平底の底部に外反する口縁部をもつ。	ナデ	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	微砂粒・金 ◎		

表 21　SK13 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
12	壺	口径（13.0） 残高　7.5	「く」字状の口縁部に球状の胴部をもつ。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい黄橙色・黒色	石・長（1～3） 金 ◎		

表 22　SX4 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
13	甕	口径（17.2） 残高　6.5	「く」字状の口縁部外面に　は緩やかな稜をもつ。	ナデ	ナデ・指頭痕	橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ◎		
14	坏身	残高　3.6	受部端は外方向に延びる。	回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎		

表 23　水田面出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
15	坏蓋	口径　11.4 器高　4.5	天井部境に稜をもち、口縁端部に内傾する段をもつ。	㊤回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長（1～25） ○		11
16	坏蓋	口径　11.5 器高　4.1	天井部境に稜をもち、口縁端部に内傾する段をもつ。	㊤回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長（1～25） ○		

表 24　掘立１出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
17	皿	底径　（6.0） 残高　1.0	平底の底部。	ナデ ㊦回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

表 25　SE1 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
18	坏	口径（13.6） 底径　8.4 器高　3.5	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	ヨコナデ ㊞回転糸切り→板圧痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1～15） ◎	煤付着	11
19	椀	口径　15.1 底径　4.7 器高　5.1	底部に断面逆三角形状の貼付高台をもつ。	ヨコナデ 指頭痕	ヨコナデ 螺旋状のミガキ	灰色 灰色	石（1） ◎		12

表 26　SD4 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
20	鍋	口径（27.2） 残高　1.8	外反する口縁端部は平らな面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 橙色	石・長（1～2） 金 ◎	煤付着	
21	皿	口径　（7.7） 残高　1.7	胴部に稜をもち口縁部が外反する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色・暗灰色 灰白色	石・長（1～2） ◎		

表 27　SD5 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
22	鍋	口径（29.0） 残高　2.4	口縁部に稜をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ ハケ（5 本 /cm）	灰褐色 橙色	石・長（1～2） ◎	煤付着	
23	皿	口径　（9.8） 底径　（7.3） 器高　1.2	平底の底部に外傾する口縁部。	ヨコナデ ㊞回転糸切り痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1～2） 金 ◎		

表 28　SD6 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
24	皿	口径　（8.1） 底径　（4.1） 器高　1.7	平底の底部から内湾して立ち上がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 浅黄橙色	石・長（1～2） ◎		

表 29　SD7 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
25	椀	口径（13.8） 残高　2.9	胴部は内湾し、口縁部が外反する。	ヨコナデ 指頭痕	ヨコナデ	灰色 暗灰色	密 ◎		

表 30　SD8 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
26	坏	口径（13.0） 底径　（9.0） 器高　3.0	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ヨコナデ ㊞回転糸切り痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1～2） ◎		
27	鍋	口径（27.2） 残高　4.8	外反する口縁部をもつ。	ヨコナデ ハケ（6 本 /cm）	ヨコナデ	にぶい橙色 明赤褐色	石・長（1～2） ◎		

表 31　SK5 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
28	坏	口径（12.0） 底径　（8.4） 器高　2.8	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	ヨコナデ ㊞回転糸切り痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1～2） 金 ◎		
29	皿	口径　（9.4） 底径　（7.8） 器高　1.3	内湾する口縁部。	ヨコナデ ㊞回転糸切り→板圧痕	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長（1～2） ◎		

表 32　SK7 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
30	釜	口径 残高	(23.6) 11.1	内湾する胴部に貼付脚、口縁端部には貼付凸帯をもつ。	ヨコナデ ハケ（6 本 /cm）	ヨコナデ ハケ（6 本 /cm） 指頭痕	黒色 黒色	石・長（1～3） ◎	煤付着	

表 33　SK9 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
31	椀	底径 残高	(8.2) 1.3	底部に断面逆三角形状の貼付高台をもつ。	ナデ	マメツ	灰白色 灰褐色	石・長（1～2） ◎		

表 34　SK10 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
32	坏	口径 底径 器高	(13.2) (8.3) 3.2	底部付近が括れる。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色 灰白色	石・長（1～2） ◎		

表 35　SK11 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
33	坏	口径 残高	(12.1) 3.4	内湾する胴部をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長（1～3） 赤 ◎		

表 36　SK12 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
34	坏	口径 底径 器高	(11.8) (6.9) 3.3	平底の底部に、外傾する口縁部をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎		

表 37　SX1 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
35	坏	口径 底径 器高	(10.7) (6.5) 2.6	底部付近が括れる。	ヨコナデ 指頭痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1～3） 金 ◎		
36	椀	底径 残高	(5.4) 1.8	断面逆三角形状の貼付高台。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 38　SX2 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
37	椀	底径 残高	(6.4) 1.8	外反する断面逆台形状の高い貼付高台をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1～2） 赤 ◎		
38	椀	底径 残高	(7.2) 1.5	外反する断面逆台形状の低い貼付高台をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1）金 ◎		

表 39　SX3 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）		形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
					外　面	内　面				
39	坏	口径 底径 器高	(11.3) (7.3) 3.1	口縁部外面に稜をもつ。	ヨコナデ ㊟回転糸切り→ 板圧痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎		

表 40　第Ⅵ層出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（㎝）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
40	壺	口径　(7.1) 残高　6.9	球状の胴部に短く外反する口縁部をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ 指頭痕	灰白色 浅黄橙色	石・長（1～3） ◎		
41	椀	口径（12.0） 残高　5.5	内湾する胴部をもつ。	ナデ・マメツ	ヨコナデ マメツ	明赤褐色 黒褐色	石・長（1～2） ○		
42	坏蓋	口径（11.6） 残高　3.5	天井部境に稜をもち、口縁端部に内傾する段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長（1） ○		
43	坏蓋	口径（11.2） 残高　3.8	天井部境に稜をもち、口縁端部に内傾する段を有する。	㊦回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
44	坏蓋	口径（11.5） 残高　4.1	天井部境に稜をもち、口縁端部に内傾する段を有する。	㊦回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
45	坏身	口径　(9.5) 器高　4.5	口縁端部に内傾する段を有し、受部端は凹む。	回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色 灰色	石・長（1～2） ◎		
46	壺	残高　7.4	「く」字状の口縁部に6条の波状文をもつ。	回転ナデ カキ目	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
47	直口壺	残高　12.7	頸部に7条、肩部に4条の波状文をもつ。	回転ナデ カキ目	ヘラ削り	暗灰色 灰色	密 ◎		
48	短頸壺	口径（12.4） 残高　5.9	直立する短い口縁部。	回転ナデ カキ目	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	密 ◎		

表 41　第Ⅴ層出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（㎝）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
49	坏	口径（12.0） 底径　(7.6) 器高　3.4	内湾気味に立ち上がり、口縁端部がやや外反する。	回転ナデ ㊦回転糸切り→板圧痕	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石･長（1～3） ◎		
50	坏	口径（11.2） 底径　6.6 器高　3.0	底部付近がやや括れる。	回転ナデ ㊦回転糸切り→板圧痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1～2） 赤 ◎		
51	坏	口径　11.2 底径　6.0 器高　3.2	外上方に外傾して立ち上がる。	回転ナデ ㊦回転糸切り→板圧痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石･長（1～2） ◎		
52	坏	口径　10.8 底径　6.0 器高　3.2	外上方に外傾して立ち上がる。	回転ナデ ㊦回転糸切り	ヨコナデ	灰白色 にぶい黄橙色	石･長（1～2） ◎		
53	坏	口径（10.0） 底径　6.1 器高　3.2	直立気味に立ち上がる。	回転ナデ ㊦回転糸切り→板圧痕	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	石・長（1～3） 金　赤 ◎		
54	坏	口径（11.7） 底径　(7.5) 器高　3.3	内湾気味に立ち上がる。	回転ナデ ㊦回転糸切り→板圧痕	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	石･長（1～2） ◎		
55	皿	口径　8.0 底径　5.6 器高　1.7	口縁端部が外反する。	回転ナデ ㊦回転糸切り→板圧痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石･長（1～3） ◎		
56	皿	口径　7.2 底径　5.2 器高　1.3	外上方に外傾して立ち上がる。	回転ナデ ㊦回転糸切り→板圧痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石･長（1～2） ◎		
57	皿	口径　7.2 底径　5.0 器高　1.5	外上方に外傾して立ち上がる。	回転ナデ ㊦回転糸切り→板圧痕	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	石・長（1） ◎		
58	土鍋	口径（40.8） 残高　5.4	「く」字状に屈曲する口縁部。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石･長（1～3） ◎		
59	土鍋	口径（35.5） 残高　6.5	内湾する口縁部に端部は上方に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい黄橙色	石･長（1～2） ◎		
60	釜	口径（23.0） 残高　11.9	内湾する胴部に貼付脚、口縁端部には貼付凸帯をもつ。	ナデ ハケ（11～12本/㎝）	ナデ ハケ（11～12本/㎝）	灰色 灰色	石（1～3） ◎		

第Ⅴ層出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備 考	図版
				外　面	内　面				
61	椀	口径　(15.0) 底径　(3.6) 器高　4.5	底部に断面逆台形状の低い貼付高台をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色 灰白色	石･長（1～2） ○		
62	椀	口径　(14.4) 底径　(3.7) 器高　4.8	底部に断面逆三角形状の貼付高台をもつ。	ヨコナデ・指頭痕	ナデ 螺旋状のミガキ	灰色・灰白色 灰色	石･長（1～3） ○		
63	甕	口径　(38.1) 残高　6.8	「く」字状の口縁部に端面はやや凹む。	㊐ナデ ㊗格子タタキ	ナデ	黒色 黒色	長（1）少含 ◎		
64	甕	口径　(22.2) 残高　5.1	「く」字状の口縁部に端面はやや凹む。	ヨコナデ 格子タタキ	ヨコナデ	暗灰色 暗灰色	石･長（1～2） ◎		
65	甕	残高　3.6	内湾する肩部をもつ。	ナデ ㊗格子タタキ	ナデ	黒褐色 にぶい黄褐色	砂粒 ◎		
66	片口鉢	口径　(28.0) 底径　(10.3) 器高　10.9	口縁端部は上方に肥厚する。	回転ナデ ㊀回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石･長（1～3） ◎		12
67	鉢	底径　8.8 残高　10.0	平底の底部より、外上方に立ち上がる。	回転ナデ ㊀回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石･長（1～2） ○		
68	碗	底径　(6.0) 残高　4.4	見込部に砂目痕が残る。	回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
69	碗	口径（15.2） 残高　4.0	外面に蓮弁文が施される。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ◎		
70	軒平瓦	残長　9.4 残幅　8.3 厚さ　2.1	表面に布目痕、裏面に縄目痕が残る。	布目痕	縄タタキ痕	暗灰色 暗灰色	密 ○		

表 42　第Ⅴ層出土遺物観察表　（石製品）

番号	器種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
71	台石	ほぼ完存	安山岩	21.50	15.40	6.00	3.51	煤付着	

第４章　朝美辻遺跡１次調査

第１節　調査の経緯

（１）　調査に至る経緯

2007（平成19）年12月３日、五島　一明氏（以下、申請者という。）より松山市朝美一丁目1259番５、1266番１、1267番１、1267番７、1270番７地内における宅地造成に伴う埋蔵文化財確認申込書が松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.34 朝美町遺跡』内に所在する。

申請地は宮前川の右岸に位置し、周辺では大峰ケ台遺跡や朝美澤遺跡、辻遺跡、辻町遺跡等として多くの発掘調査が実施されており、弥生時代前期の土器を大量に含む包含層や弥生時代中期の土坑、後期の壺棺墓などのほか、古墳時代中・後期の竪穴建物や祭祀遺構、古代寺院（朝美澤廃寺）に関連すると考えられる遺構や遺物、中世から近世までの集落址や墓などが発見されている。

また、申請地から北方に約40ｍ離れた地点では、昭和47年11月に松山市道に下水道の汚水管を埋設する際、地下2.5ｍ付近に遺存状態の良好な木器容器（槽）や建築部材（鼠返し）が出土したことなどが知られている。

2007（平成19）年12月８日、財団法人松山市生涯学習振興財団〔現　公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団〕埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）は申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、試掘調査を実施した。調査は既存建物が存在した為、申請地内に試掘調査用のトレンチ１本を設定して確認作業を行った。その結果、土師器や須恵器を含む包含層を３層確認し、最下部の包含層中からは加工痕を残す木材片が出土したため、文化財課より事前の発掘調査が必要であると判断された。

2008（平成20）年２月12日、センコーホーム松山株式会社より、同地内における宅地造成に伴う埋蔵文化財確認申込書が文化財課に提出された。以前に実施した試掘調査の結果と、提出された宅地造成図面をもとに、申請者の代理人である三和アセット・プランと工事業者のセンコーホーム松山株式会社、文化財課及び埋文センターは発掘調査に関する協議を行い、埋蔵文化財が存在する可能性の高い範囲のうち、宅地造成工事の影響を受けると判断された部分に対して本格調査を実施する運びとなった。なお、遺跡名称に関しては、地元町内会からの助言を受け、今回の調査が松山総合公園建設に伴って実施した調査と、一般国道196号松山環状線建設に伴って実施した調査を除き、朝美地区の辻町内における初めての発掘調査であることから、「朝美辻遺跡」とした。

（２）調査の経緯

調査地は、東側以外の三方向が民地に接することより、出入口を市道に面した東側に設けた。また、市道は交通量が多く、歩行者や通行車両、周辺の住宅等に対する安全確保を第一に考えた結果、市道付近の掘削を断念し、事前協議の段階でセンコーホーム松山株式会社より調査と併行して擁壁工事を行いたいとの意向が示されていたことを受け、隣接地との境界から４ｍ程度控えた内側に廃土置き場

を設定した。さらに、掘削深度は２ｍを超えることが想定された為、土砂崩落を防止する為に壁面土層を記録する南壁と西壁以外は造成土の上面から法面を設けることにした。

調査は包含層に含まれる遺物の確認と、遺物包含層に掘り込む遺構の有無を確認することから開始し、平成20年５月１日（木）と２日（金）で、重機を使用して包含層上面までの掘削を行った。その後、作業員により包含層の掘り下げを開始した。その結果、基盤層や遺構の存在を確認した。５月９日（金）、自然流路内より木製品の『蹴放し』が出土し、検出後にPEGで補強し、写真撮影を行った。５月14日（水）、出土地点や出土レベルを記録した後、蹴放しを取り上げた。同日、測量業者による基準点の打設が行われ、遺構検出作業を開始した。５月19日（月）、遺構検出状況写真を撮影し、５月21日（水）より平板測量による遺構配置図の作成を行った。各遺構の掘り下げや測量を進め、６月12日（木）、報道機関を対象とした説明会を実施し、６月14日（土）には一般市民対象の現地説明会を開催し、午後からは測量作業の補足を行う。６月16日（月）～18日（水）の間、重機による埋戻し作業と発掘用具の撤収を行い、６月20日（金）、屋外調査を終了した。

（３）調査組織

調査場所：松山市朝美一丁目1259番５、1266番１、1267番１、1267番７、1270番７の各一部
調査期間：2008（平成20）年５月１日～同年６月20日
調査面積：約235平方メートル
調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター
調査担当：埋蔵文化財センター　　吉岡　和哉

第73図　調査地測量図

第2節　層　位

調査で確認した土層は、以下の9層（第Ⅰ～Ⅸ層）である。第Ⅰ層から第Ⅳ層までは近現代の造成土、第Ⅴ層と第Ⅵ層は近現代の耕作土、第Ⅶ層と第Ⅷ層は遺物包含層であり、第Ⅸ層が基盤層である。なお、調査で検出した自然流路（SR1）の埋土は、①～⑬として表記している（第74図）。

第Ⅰ層：建物が取り壊された後に搬入された整地土〔明褐色砂（7.5YR 5/6）〕

第Ⅱ層：建物が建築されていた段階における地表面を強化していた砕石層〔オリーブ灰色砂（10Y 6/2）〕で、2～3cm大の角礫を含む。

第Ⅲ層：建物が構築される以前に存在した旧建物基礎の痕跡で、灰オリーブ色砂（7.5Y 6/2）及び粘土を主体とした造成土。

第Ⅳ層：旧建物を建築する際に、整地目的のために搬入したと考えられる造成土〔黄色粘質砂（2.5Y 8/6）〕

第Ⅴ層：旧水田耕作土で、土色・土質の違いにより3種類に分層される。

第Ⅴ①層－緑灰色土（10GY 6/1）

第Ⅴ②層－灰色粘質土（5Y 6/1）

第Ⅴ③層－灰色粘質土（5Y 6/1）に、にぶい黄褐色土（10YR 4/3）が斑点状に混入。

第Ⅵ層：旧水田耕作土で、土色・土質の違いにより4種類に分層される。

第Ⅵ①層－オリーブ灰色粘質土（2.5GY 5/1）

第Ⅵ②層－緑灰色粘質土（7.5GY 6/1）に、明褐色土（7.5YR 5/6）が斑点状に混入。

第Ⅵ③層－オリーブ灰色粘質土（2.5GY 6/1）

第Ⅵ④層－灰黄色土（2.5Y 6/2）に、にぶい黄色土（2.5Y 6/4）が斑点状に混入。

第Ⅶ層：遺物包含層で、土色・土質の違いにより2種類に分層される。

第Ⅶ①層－黄灰色粘質土（2.5Y 6/1）に、暗褐色土（10YR 4/4）が斑点状に混入。

第Ⅶ②層－褐灰色粘質土（10YR 5/1）に、暗褐色土（10YR 4/4）が斑点状に混入。

本層からは、9～10世紀代の土師器、須恵器、瓦が出土した。

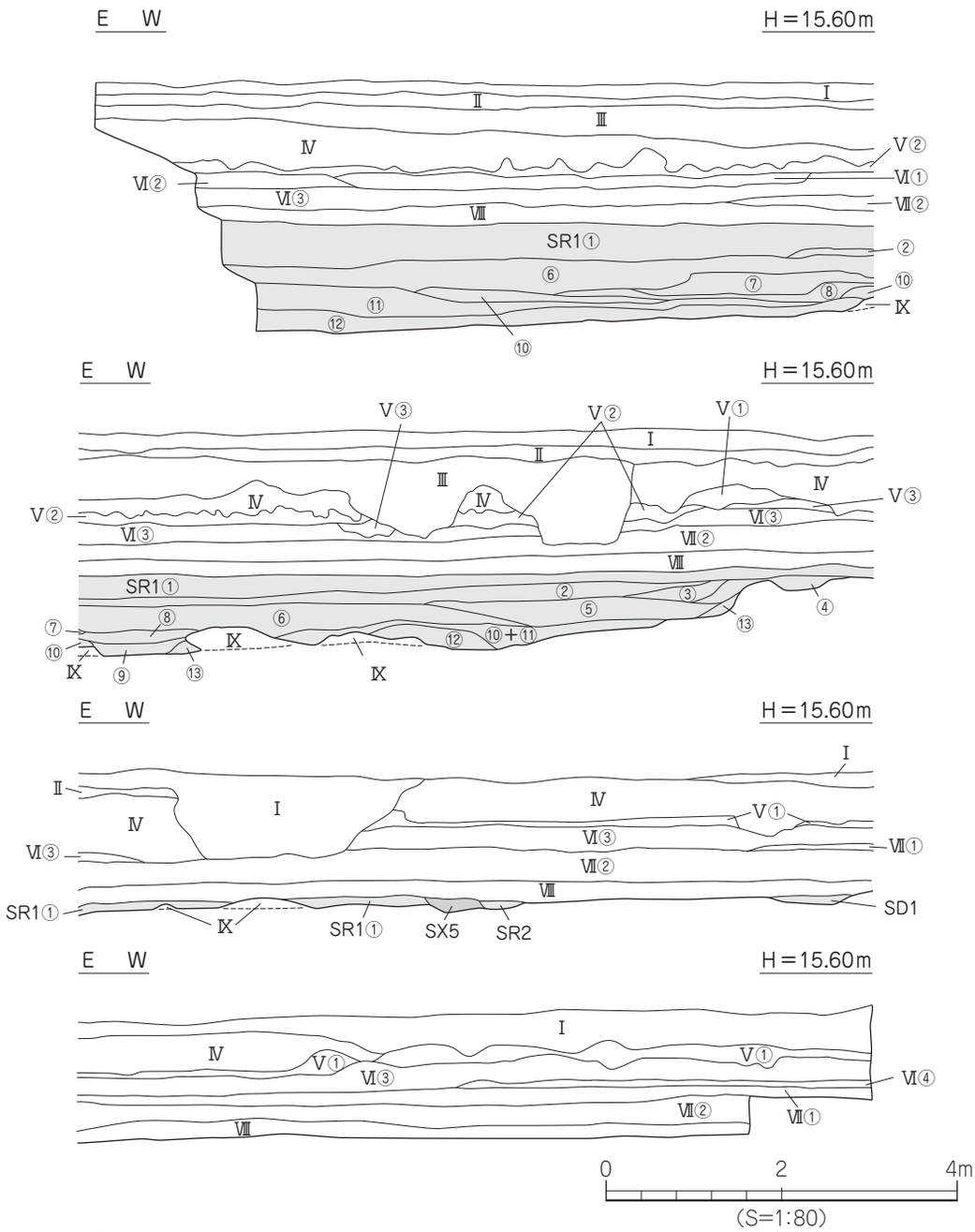
第Ⅷ層：遺物包含層灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）に、褐色土（10YR 5/6）が斑点状に混入。

本層からは、古墳時代中・後期の土師器や須恵器が出土した。

第Ⅸ層：黄橙色粘質土（10YR 8/8）や明オリーブ灰色粘土（5GY 7/1）で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。

出土遺物や検出層位より、第Ⅷ層は古墳時代、第Ⅶ層は古代までに堆積した土層と考えられる。

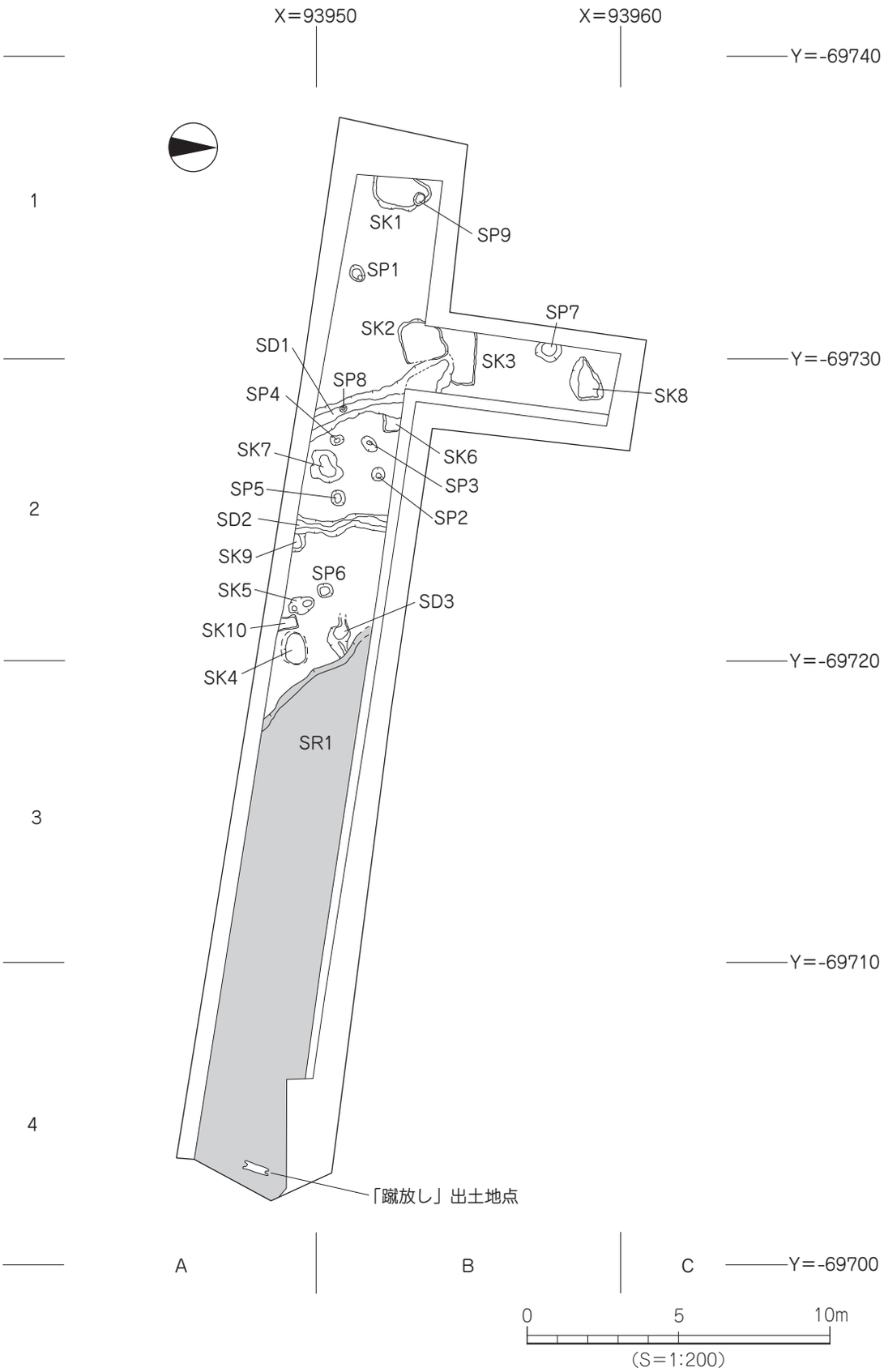
なお、調査にあたり調査区内に10m四方のグリッドを設定した。グリッドは南から北へA･B･C、西から東へ1･2･3･4とし、A1・A2・A3･･････C4区といった地区名を付した（第75図）。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。



Ⅰ　明褐色粗砂（7.5YR5/6）
Ⅱ　オリーブ灰色砂（10Y6/2）
Ⅲ　灰オリーブ色砂（7.5Y6/2）
Ⅳ　黄色粘質砂（2.5YR8/6）
Ⅴ①　緑灰色土（10GY6/1）
Ⅴ②　灰色粘質土（5Y6/1）
Ⅴ③　灰色粘質土（5Y6/1）ににぶい黄褐色土（10YR4/3）が斑点状に混入
Ⅵ①　オリーブ灰色粘質土（2.5GY5/1）
Ⅵ②　緑灰色粘質土（7.5GY6/1）に明褐色土（7.5YR5/6）が斑点状に混入
Ⅵ③　オリーブ灰色粘質土（2.5GY6/1）
Ⅵ④　灰黄色土（2.5Y6/2）ににぶい黄色土（2.5Y6/4）が斑点状に混入
Ⅶ①　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）に暗褐色土（10YR4/4）が斑点状に混入
Ⅶ②　褐灰色粘質土（10YR5/1）に暗褐色土（10YR4/4）が斑点状に混入
Ⅷ　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）に褐色土（10YR5/6）が斑点状に混入
Ⅸ　黄橙色粘質土（10YR8/8）

【SR1】
①　黒褐色粘質土（10YR3/1）
②　灰色粘土（5Y6/1）
③　灰色粘質土（10Y5/1）と暗灰色粘質土（N3/）の互層
④　灰色粘質土（10Y5/1）
⑤　黒色粘質土（N1.5/）
⑥　灰色粘土（N4/）
⑦　オリーブ灰色微砂（2.5GY6/1）
⑧　黒色粘土（N2/）
⑨　黒色粘土（N2/）に明オリーブ灰色粘土（5GY7/1）がブロック状に混入
⑩　灰色微砂（7.5Y6/1）
⑪　緑灰色粘質土（7.5GY6/1）
⑫　オリーブ灰色粗砂（5GY6/1）
⑬　灰色粘土（N4/）に灰色微砂（7.5Y6/1）が混入

第 74 図　南壁土層図


X=93950
X=93960
Y=-69740
Y=-69730
Y=-69720
Y=-69710
Y=-69700
1
2
3
4
A
B
C
SK1
SP9
SP1
SP7
SK2
SD1
SK3
SP8
SK8
SP4
SK7
SK6
SP5
SP3
SD2
SP2
SK9
SP6
SK5
SD3
SK10
SK4
SR1
「蹴放し」出土地点
0
5
10m
(S=1:200)

第 75 図　遺構配置図

第３節　遺構と遺物

調査では自然流路１条、溝３条、土坑 10 基、柱穴９基を検出した（第 75 図、図版 13･14）。遺物は弥生土器や土師器、須恵器のほか木製品や種子などが出土した。ここでは、検出した遺構別に報告する。

1）自然流路

SR1（第 75 図、図版 14・15）

調査区東半部 A3 ～ B4 区で検出した自然流路で、流路西側は溝 SD3 を一部削平している。第Ⅸ層上面での検出であり、第Ⅷ層が流路を覆う。規模は東西検出長 19.00 m、南北検出長 3.50 m、深さは最深部で１ｍである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は以下の 13 種類に分層される。①層：黒褐色粘質土（10YR 3/1）、②層：灰色粘土（5Y 6/1）、③層：灰色粘質土（10Y 5/1）と暗灰色粘質土（N3/）の互層、④層：灰色粘質土（10Y 5/1）、⑤層：黒色粘質土（N1.5/）、⑥層：灰色粘土（N4/）、⑦層：オリーブ灰色微砂（2.5GY 6/1）、⑧層：黒色粘土（N2/）、⑨層：黒色粘土（N2/）に明オリーブ灰色粘土（5GY 7/1）がブロック状に混入、⑩層：灰色微砂（7.5Y 6/1）、⑪層：緑灰色粘質土（7.5GY 6/1）、⑫層：オリーブ灰色粗砂（5GY 6/1）、⑬層：灰色粘土（N4/）に灰色微砂（7.5Y 6/1）が混入。

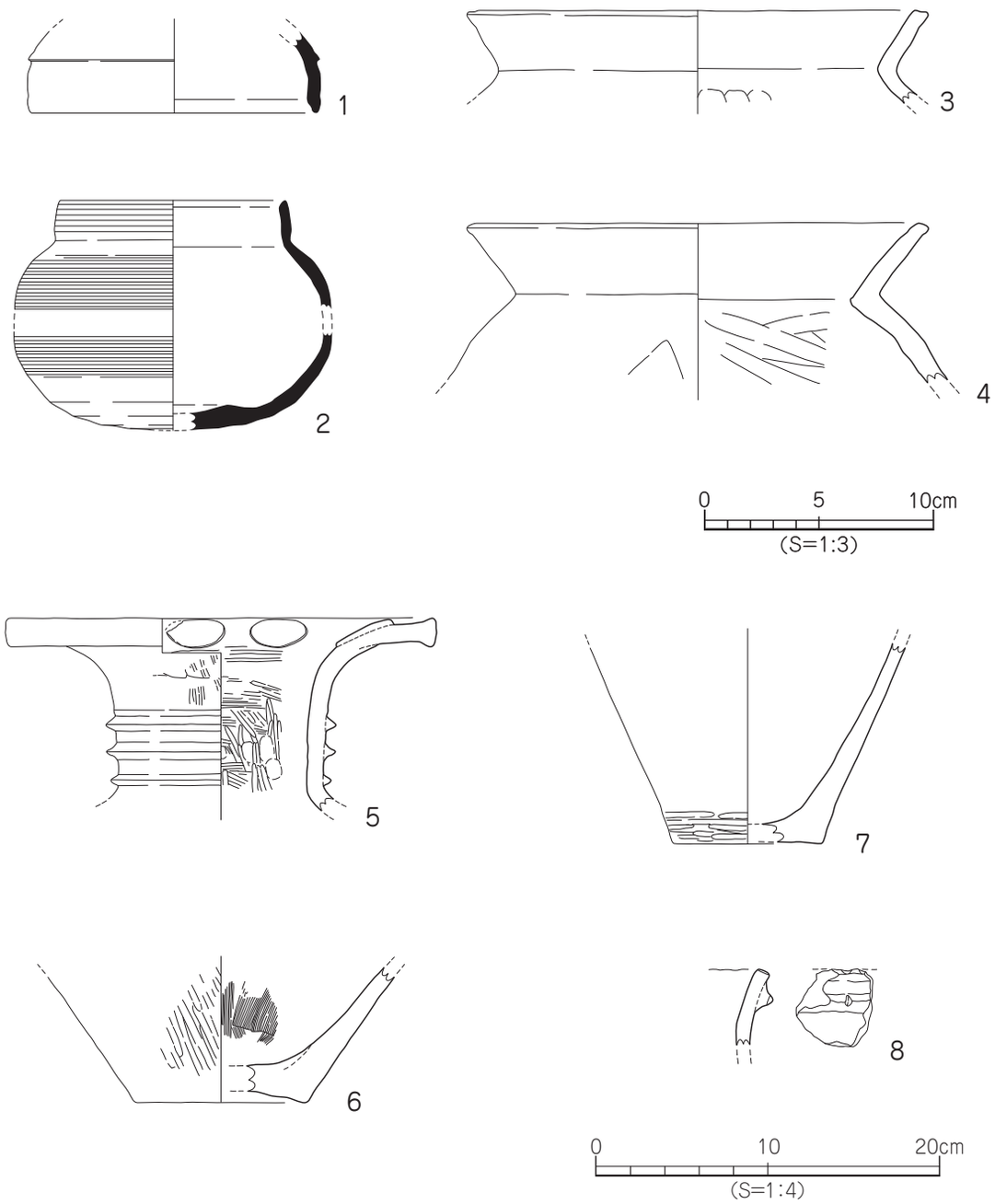
遺物は⑥層中より遺存状態の良好な木製品（蹴放し･木錘）のほか、植物の種子（モモ核、ウリ類、ヒョウタン類）や昆虫（甲虫）の羽などが古墳時代後期の土器と共に出土した。また、⑦層上面からは弥生時代中期中葉から古墳時代の土器類が出土している。

出土遺物（第 76・77 図、図版 18・19）

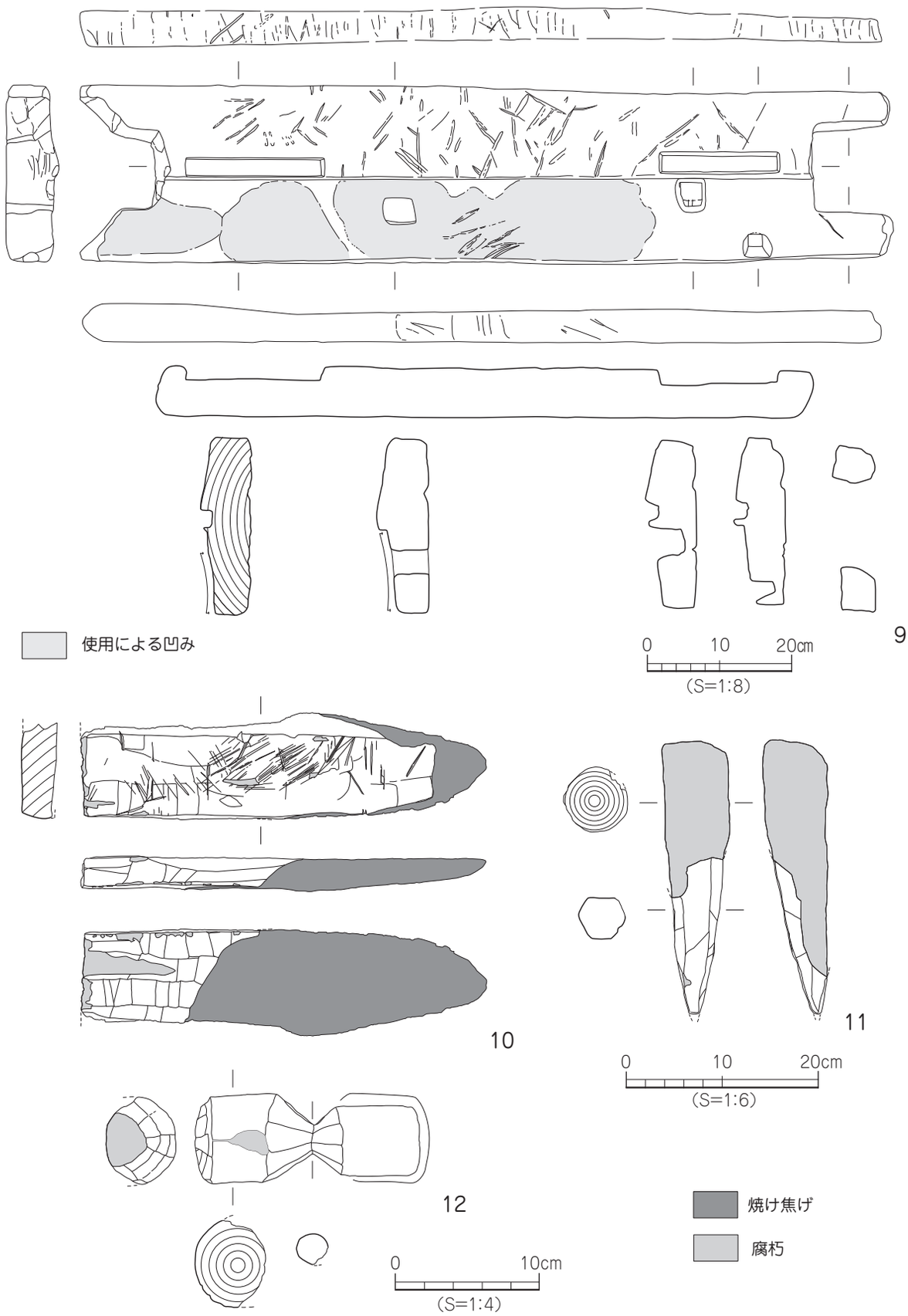
１は須恵器坏蓋。小片で、断面三角形状の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する。口縁部に、火膨れ痕を残す。２は須恵器短頸壺。口縁端部は内傾し、口縁部から胴部中位の外面には、回転カキメ調整がみられる。3･4 は土師器の甕。3 は口縁部が僅かに内湾し、口縁端部はナデ凹む。4 の口縁部は外反し、口縁端部は外傾する。胴部内面には、板状工具によるナデを施す。５～７は弥生土器。5･6 は壺形土器。５は広口壺で、口縁部内面に径 3.7㎝大の円形浮文が貼り付けられ、頸部には断面三角形状の凸帯３条を施す。頸部内面には、タテ方向のヘラミガキを施す。６は底部片で上げ底をなし、外面にはヘラミガキがみられる。７は甕形土器の底部で、上げ底をなす。８は縄文時代晩期の深鉢片で、口縁端部に刻目、胴部には凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。

９は蹴放し：木製の建築部材で、須恵器甕の胴部と共に出土した。蹴放しの上面には扉を閉めた時に建物側で受けて止める「扉当たり（とびらあたり）」が削り出されており、全てが１枚の板で作られている。大きさは長辺が約 111㎝、厚さは 6.5 ～ 7㎝であり、扉当たりが削り出される側（一段高くなる側）が建物側になる。建物側に向かって蹴放しを見た場合に、左右には形の異なる孔が削り込まれており、左側には外側に直径 25㎝前後の円柱を意識した弧状の切り込みがある。その内側には、約５× 11㎝を測る長方形状の切り込みが存在する。なお、板材の右側には約 11 × 12㎝を測る長方形状の切り込みが存在する。これにより、蹴放しの左側には直径 25㎝前後の円柱（柱材）が存在した可能性が高く、それに対して右側には円柱が存在せず、壁材との接合を担う四角柱をした「辺付（へんつけ）」に直接はめ込んでいたと考えることが可能である。この場合、左側部分に見られる弧状の切り込みの内側に切り込まれている長方形の孔は、角材を使用している右側との視覚的なバランスを

とるために設けられた「辺付」を組み込むための孔（切り込み）であると考えられる。また、扉当たりの上には、扉当たりと接した位置に、扉の枠として取り付ける柱「方立（ほうだて）」を組み込む長方形の孔（溝）が左右に２つ存在し、孔（溝）の大きさは左側が約 18.5 × 2.5㎝、深さ約 1.5㎝、右側が約 16.4 × 2.5㎝、深さ約 1.5㎝である。入り口側には、扉の軸孔以外に左右２つの孔があり、特に左側にある約 3.5 × 3㎝を測る長方形状の孔は裏面まで綺麗に貫通しており、そのことが他の孔と大きく異なっている。この孔と扉の軸孔や左側にある方立を組み込む孔（溝）との位置関係を観察する



第 76 図　SR1 出土遺物実測図（1）



第 77 図　SR1 出土遺物実測図（2）

と、扉の軸穴よりやや外側に位置し、また方立を組み込む孔よりもやや中央寄りに穿たれていることが確認できた。このことから、この孔は扉を閉めた際に再び開かないようにするための所謂「落とし金」のような機能を持つ棒を差し込むための孔である可能性が考えられる。また、右側の孔は約 3.4×2.5㎝を測る長方形状をなし、深さは約 3㎝の底すぼまりであることが特徴である。左側の穴と同様、扉の軸孔や右側にある辺付をはめ込むための孔との位置関係をみると、扉を開いた際に棒材を差し込んで固定するために設けられた孔であると推測される。10 は建築部材として使用された板材で、1/2 の範囲に焼け焦げがみられる。11 は杭で、先端部は加工が施されている。12 は木錘で、長さ 15.6㎝、最大径 6.0㎝である。使用樹種は 9・10 がヒノキ、11 はヤマグワ、12 はクリである。

時期：出土遺物の特徴より、SR1 は弥生時代中期から古墳時代後期に流れていた流路と考えられる。

2）溝

SD1（第 78 図、図版 16）

調査区中央部西寄り A･B2 区で検出した南北方向の溝で、土坑 SK2･SK3 と重複し、SD1 が後出する。規模は検出長 5.15 m、幅 1.50 m、深さは 7㎝である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は暗褐色粘質土（7.5YR 3/3）に黒褐色粘質土（10YR 3/1）と黄橙色粘質土（10YR 8/8）がブロック状に混入する。溝基底面はほぼ平坦で、溝南側基底面にて柱穴（SP8）を検出した。遺物は埋土中より、弥生土器や土師器、須恵器の小片が少量出土した。

出土遺物（第 79 図、図版 19）

13 ～ 16 は弥生土器。13 は壺形土器。広口壺で、頸部に断面三角形状の凸帯 2 条を貼付ける。14 ～ 16 は底部。14 は上げ底、15・16 は平底である。17 は土師器の甕。推定口径 18.2㎝で、口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。

時期：出土遺物の特徴や他の遺構との重複関係より、SD1 は古墳時代後期、6 世紀後半の溝と考えられる。

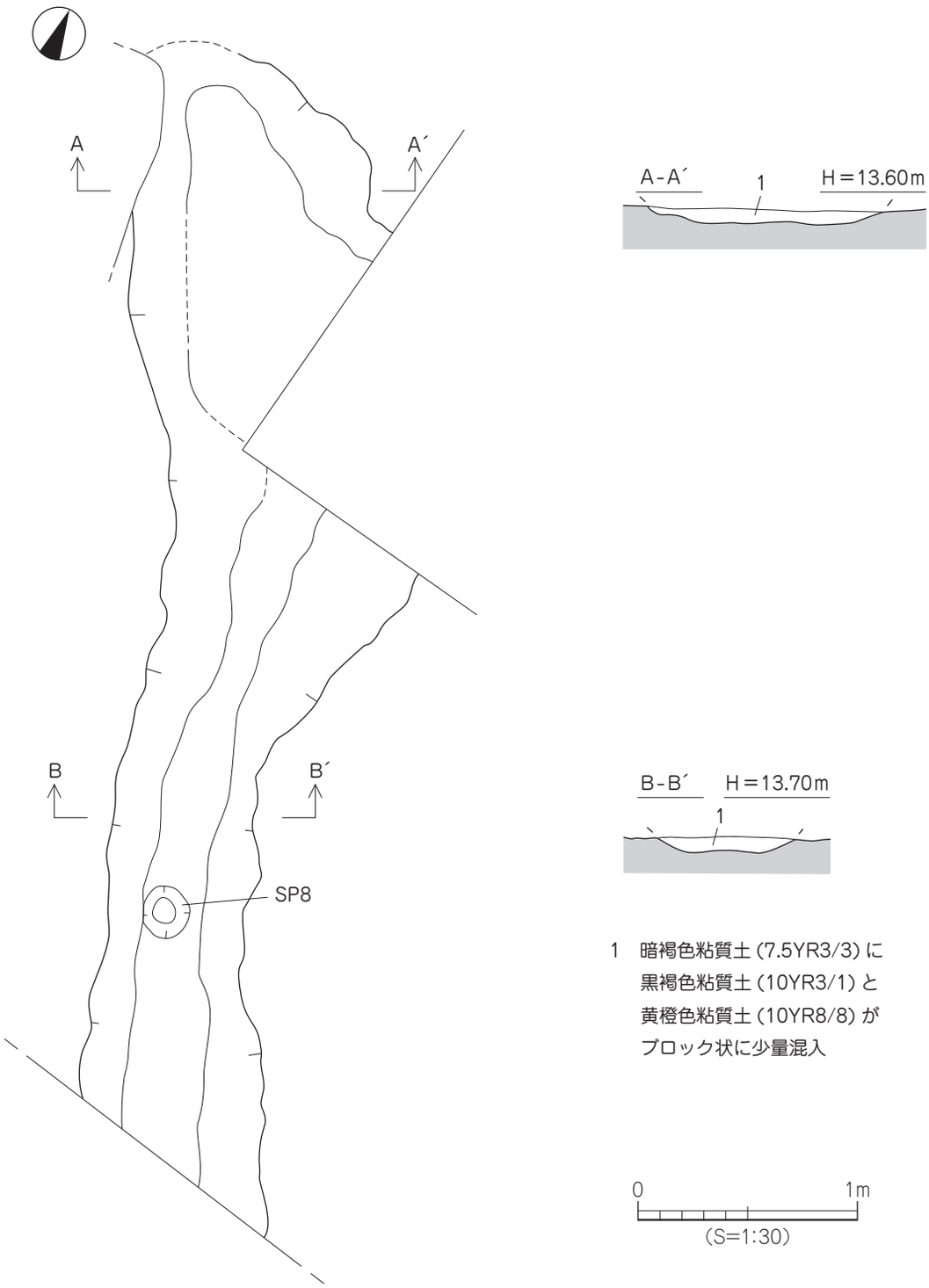
SD2（第 80 図、図版 16）

調査区中央部やや西寄り A・B2 区で検出した南北方向の溝で、溝南側は土坑 SK9 と重複し、SK9 が後出する。規模は検出長 2.68 m、幅 0.50 m、深さは最深部で 22㎝である。断面形態は皿状をなし、埋土は 3 層に分層される。上位より 1 層：黒色粘質土（7.5YR 2/1）、2 層：褐灰色粘質土（7.5YR 5/1）、3 層：褐灰色粘質土（7.5YR 5/1）に黄橙色粘質土（10YR 8/8）がブロック状に混入である。溝基底面には僅かに凹凸があり、南側から北側へ向けて傾斜をなす。遺物は土師器や須恵器の破片が出土した。

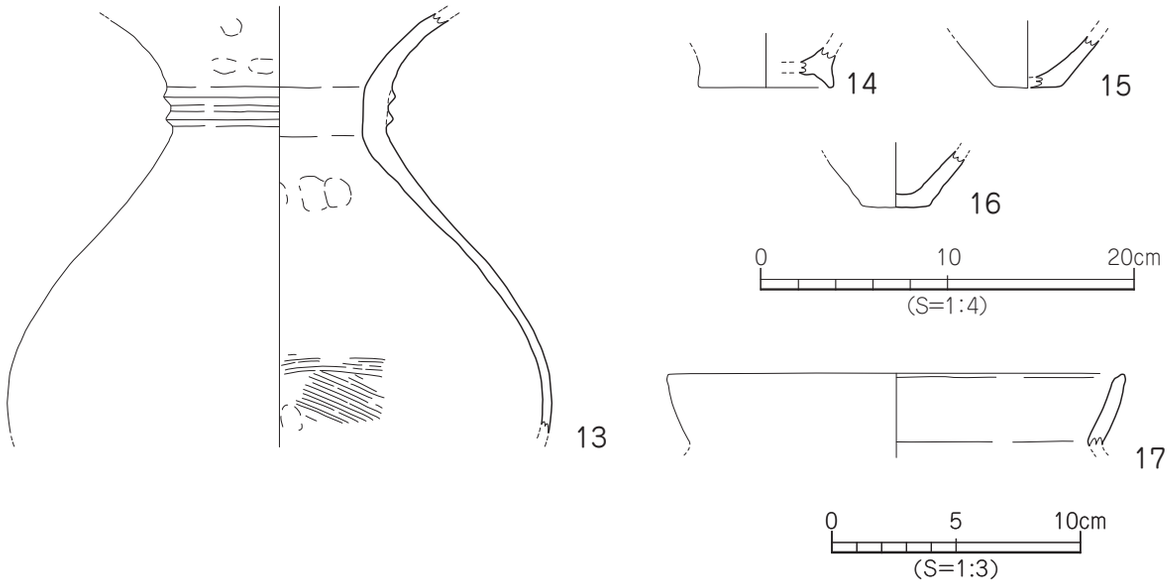
出土遺物（図版 19）

18 は須恵器の甕。胴部片で外面には平行叩き、内面は叩き痕を丁寧にスリ消している。

時期：出土遺物の特徴より、SD2 は古墳時代中期、5 世紀後半の溝と考えられる。


A
A´
A-A´
1
H＝13.60m
B
B´
B-B´
H＝13.70m
1
SP8
1　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）に
黒褐色粘質土（10YR3/1）と
黄橙色粘質土（10YR8/8）が
ブロック状に少量混入
0
1m
（S=1:30）

第 78 図　SD1 測量図



第 79 図　SD1 出土遺物実測図

SD3（第 81 図、図版 16）

調査区中央部 B2 区で検出した東西方向の短い溝で、溝東側は流路 SR1 に削平され、西側は消失している。規模は検出長 1.38 m、幅 0.80 m、深さは 8㎝である。断面形態は皿状をなし、埋土はにぶい黄褐色土（10YR 5/3）単層である。溝基底面は凹凸が著しい。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SR1 に先行することから概ね古墳時代後期以前の溝とする。

3）土　坑

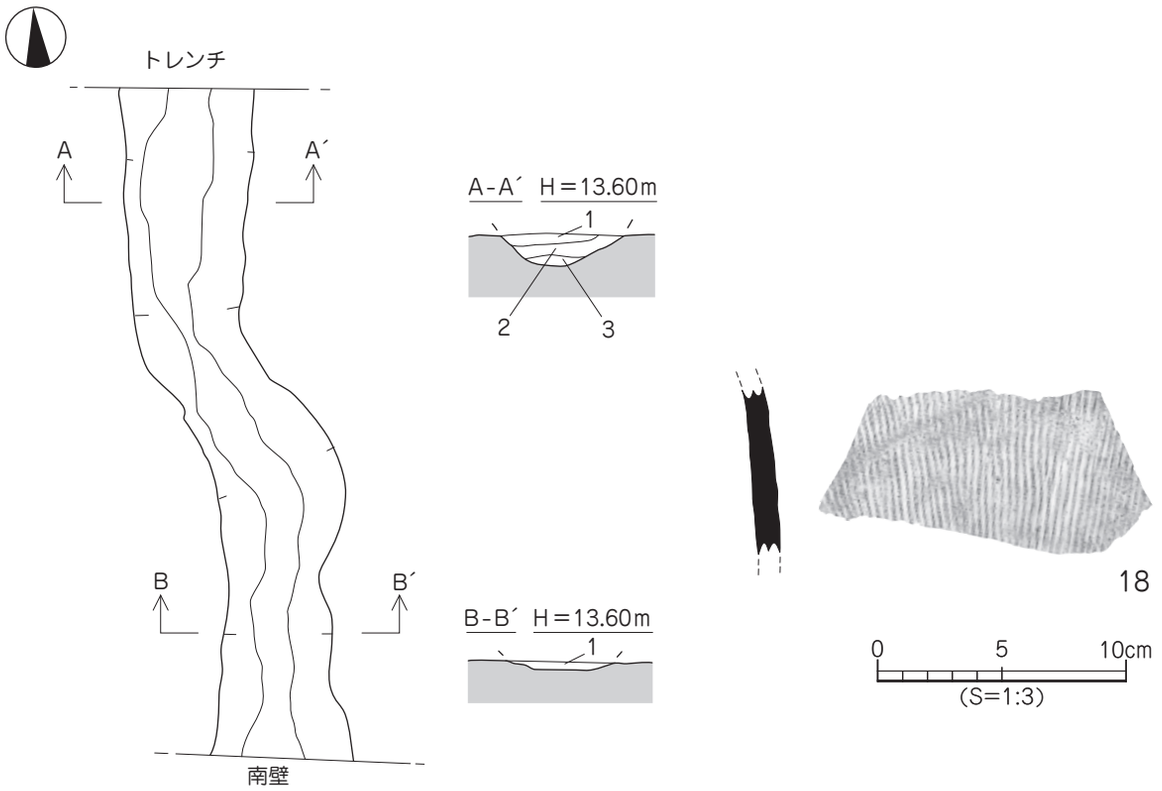
SK1（第 82 図、図版 17）

調査区西端 B1 区に位置する土坑で、土坑西半部は調査区外に続く。土坑北東部は、柱穴 SP9 に削平されている。平面形態は不整の楕円形で、規模は南北長 1.93 m、東西検出長 1.03 m、深さは 16㎝である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は褐灰色粘質土（10YR 5/1）に灰黄褐色土（10YR 4/2）がブロック状に混入するものである。土坑基底面には僅かに凹凸があり、中央部が凹む。遺物は埋土中より弥生土器や土師器、須恵器の破片が出土した。

出土遺物（図版 19）

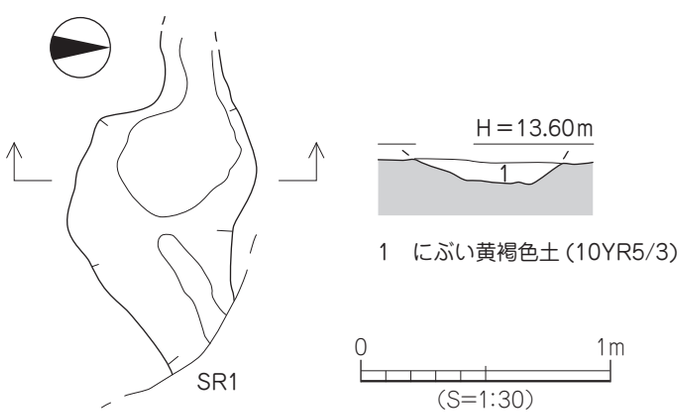
19 は須恵器の坏身。たちあがりは内傾し、たちあがり端部は尖り気味に丸く仕上げる。底部には焼け歪みがあり、たちあがり外面には火だすきの痕跡が残る。20 は弥生土器。支脚形土器の底部片で、外面にはタタキ痕を残す。

時期：出土遺物の特徴より、SK1 は古墳時代後期、6 世紀後半の土坑と考えられる。



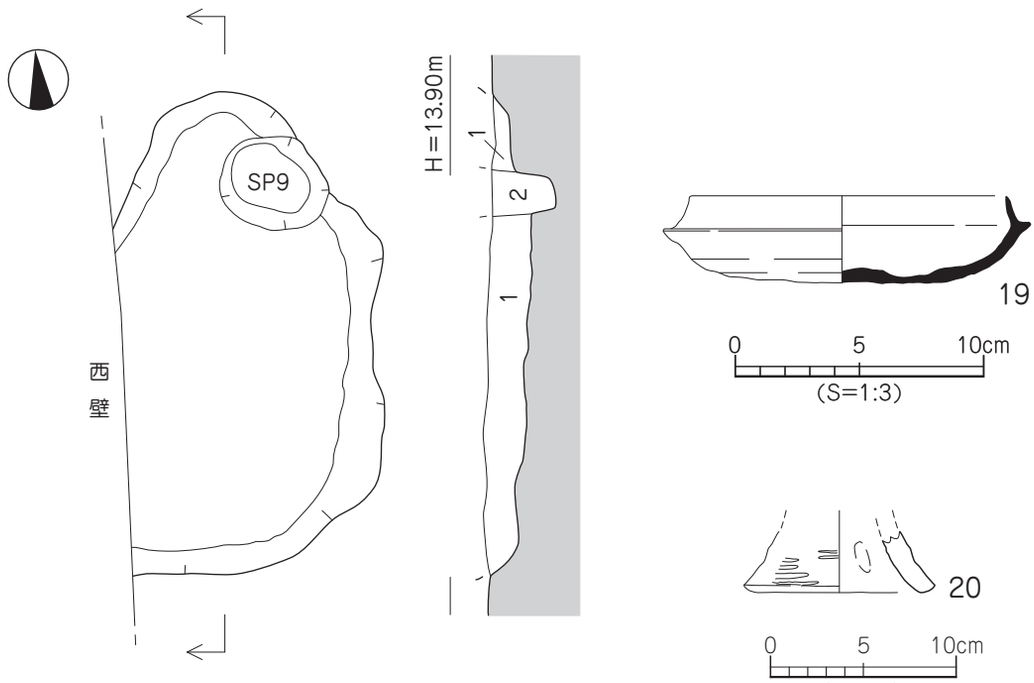
1　黒色粘質土（7.5YR2/1）
2　褐灰色粘質土（7.5YR5/1）
3　褐灰色粘質土（7.5YR5/1）に
　　黄橙色粘質土（10YR8/8）が
　　ブロック状に混入

第 80 図　SD2 測量図・出土遺物実測図



1　にぶい黄褐色土（10YR5/3）

第 81 図　SD3 測量図



1　褐灰色粘質土（10YR5/1）に灰黄褐色土（10YR4/2）がブロック状に混入
2　褐灰色粘質土（10YR5/1）

第 82 図　SK1 測量図・出土遺物実測図

SK2（第 83 図、図版 17）

調査区西側 B1･2 区に位置する土坑で、土坑東側は溝 SD1 に削平されている。平面形態は不整の楕円形をなし、規模は東西検出長 1.80 m、南北長 1.53 m、深さは 10㎝である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗褐色粘質土（7.5YR 3/3）に褐灰色土（7.5YR 5/1）がブロック状に混入するものである。土坑基底面はほぼ平坦で、遺物は埋土中より土師器や須恵器の破片が少量出土した。

出土遺物

21 は須恵器の高坏。脚部の小片で、脚端部は尖り気味に丸く仕上げる。

時期：出土遺物の特徴より、SK2 は古墳時代後期、6 世紀前半の土坑と考えられる。

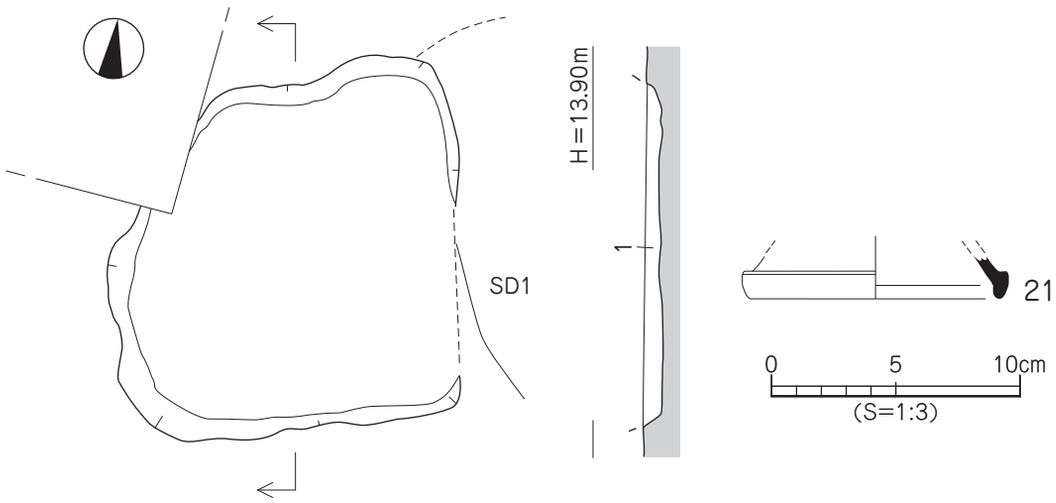
SK3（第 84 図、図版 17）

調査区西側 B1･2 区に位置する土坑で、土坑南側は SD1 により削平され、西側は調査区外に続く。平面形態は方形をなすものと思われ、規模は東西検出長 1.70 m、南北検出長 1.25 m、深さは 10㎝である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗褐色粘質土（7.5YR 3/3）に褐灰色土（7.5YR 5/1）と黄橙色粘質土（10YR 8/8）がブロック状に少量混入するものである。土坑基底面は、平坦である。遺物は埋土中より弥生土器や土師器の小片が出土した。

出土遺物（図版 19）

22 は須恵器の坏蓋。小片で、断面三角形状の鋭い稜をもつ。23 は須恵器の甕。胴部片で、外面には格子目叩き、内面は叩き痕を丁寧にスリ消している。24 は土師器の高坏。脚部片で、脚裾部は水平に開き、柱裾部内面には明瞭な稜をもつ。

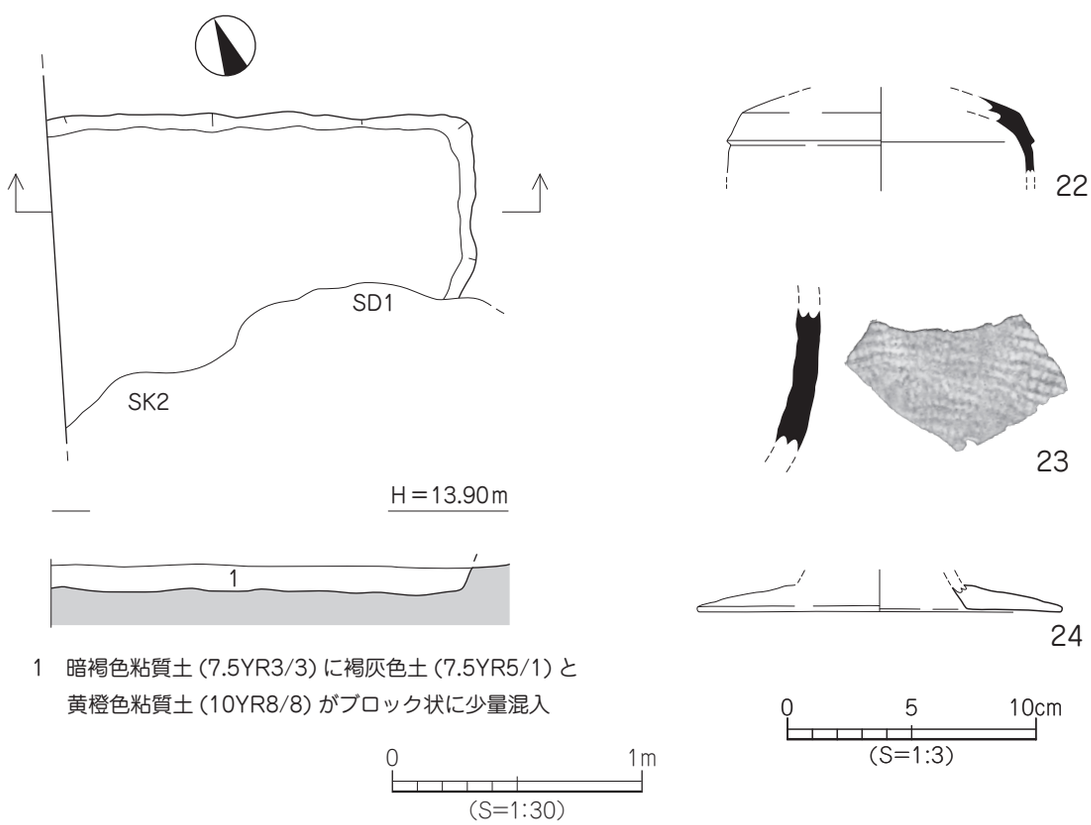
時期：出土遺物の特徴より、SK3 は古墳時代中期、5 世紀後半の土坑と考えられる。



1　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）に褐灰色土（7.5YR5/1）がブロック状に混入

0　1m
(S=1:30)

第 83 図　SK2 測量図・出土遺物実測図



1　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）に褐灰色土（7.5YR5/1）と黄橙色粘質土（10YR8/8）がブロック状に少量混入

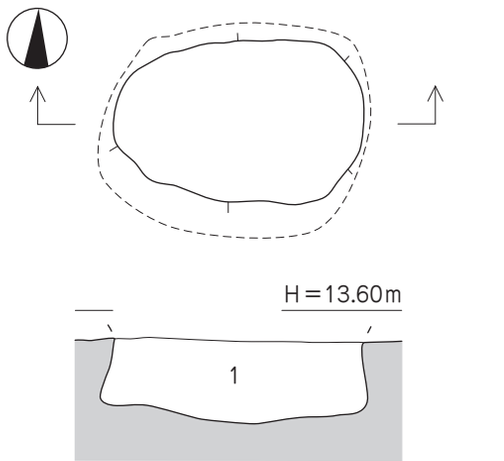
0　1m
(S=1:30)

第 84 図　SK3 測量図・出土遺物実測図

SK4（第 85 図、図版 17）

調査区中央部 A2･3 区に位置する土坑で、平面形態は東西に長い楕円形をなし、規模は長径 0.98 m、短径 0.56 m、深さ 33㎝である。断面形態は袋状をなし、埋土は黒色粘質土（2.5Y 2/1）に黄橙色粘質土（10YR 8/8）がブロック状に混入するものである。土坑壁体は袋状をなし、基底部中央部が凹む。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、概ね古墳時代以前の土坑と考えられる。



1　黒色粘質土（2.5Y2/1）に黄橙色粘質土（10YR8/8）がブロック状に混入

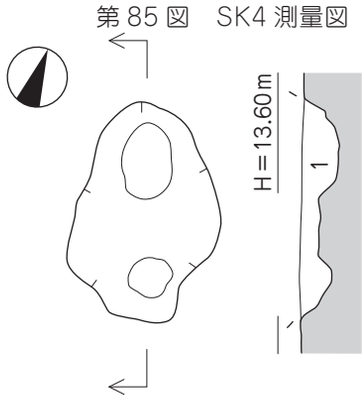
0　1m
（S=1:30）

第 85 図　SK4 測量図

SK5（第 86 図）

調査区中央部 A2 区に位置する土坑で、平面形態は南北に長い不整の楕円形をなし、規模は長径 0.86 m、短径 0.61 m、深さは 14㎝である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色粘質土（10YR 3/1）単層である。土坑基底面は凹凸が著しく北側と南側には凹みがみられる。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土が溝 SD2 と類似することから概ね古墳時代の土坑と考えられる。



1　黒褐色粘質土（10YR3/1）

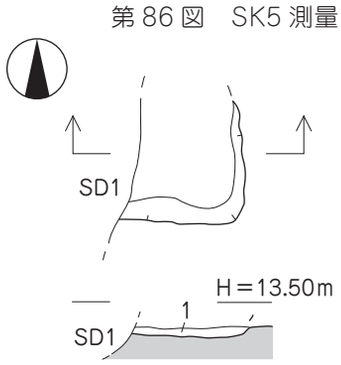
0　1m
（S=1:30）

第 86 図　SK5 測量図

SK6（第 87 図）

調査区西側 B2 区に位置する土坑で、土坑西半部は溝 SD1 に削平され、北側は調査区外に続く。平面形態は方形をなすものと思われ、規模は南北検出長 0.50 m、東西検出長 0.5 m、深さは 4㎝である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は黒褐色粘質土（10YR 3/1）に黄橙色土（10YR 8/8）がブロック状に少量混入するものである。土坑基底面は平坦で、遺物は埋土中より土師器片が少量出土したが図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物はないが、土坑埋土が SK4 と酷似することから、概ね古墳時代の土坑と考えられる。



1　黒褐色粘質土（10YR3/1）に黄橙色土（10YR8/8）がブロック状に少量混入

0　1m
（S=1:30）

第 87 図　SK6 測量図

SK7（第 88 図）

調査区中央部西寄り A・B2 区に位置する土坑で、平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径 1.20 m、短径 1.02 m、深さは 14㎝である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は灰黄褐色微砂（10YR 6/2）単層である。土坑壁体は緩やかに立ち上がり、基底面は丸味を帯びる。遺物は埋土中より弥生土器や土師器の破片のほか石器が少量出土した。

出土遺物

25･26 はサヌカイト製のスクレイパーで、重量は 25 が 4.91 g、26 は 7.76 g である。

時期：時期と規定しうる遺物の出土ないが、検出層位より概ね古墳時代の土坑と考えられる。

SK8（第 89 図）

調査区北西部 B2 区に位置する土坑で、平面形態は不整の楕円形をなし、規模は長径 1.45 m、短径 1.04 m、深さは 8㎝である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は褐灰色粘質土（10YR 5/1）単層である。土坑基底面は、平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

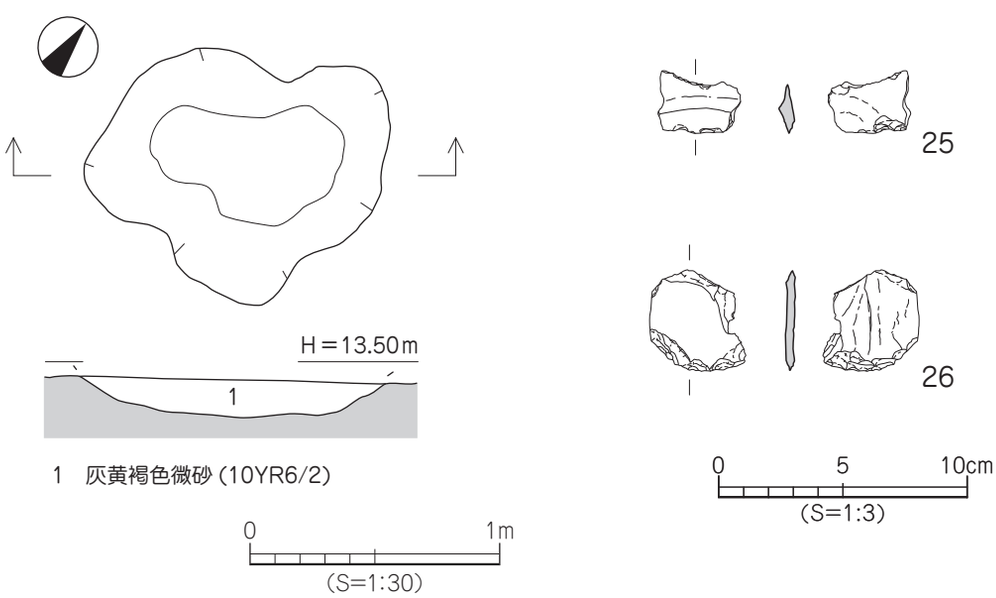
出土遺物

27･28 は弥生土器の甕形土器。27 の口縁部は「く」の字状をなし、口縁端部は先細りする。28 は底部片で、僅かに上げ底をなす。

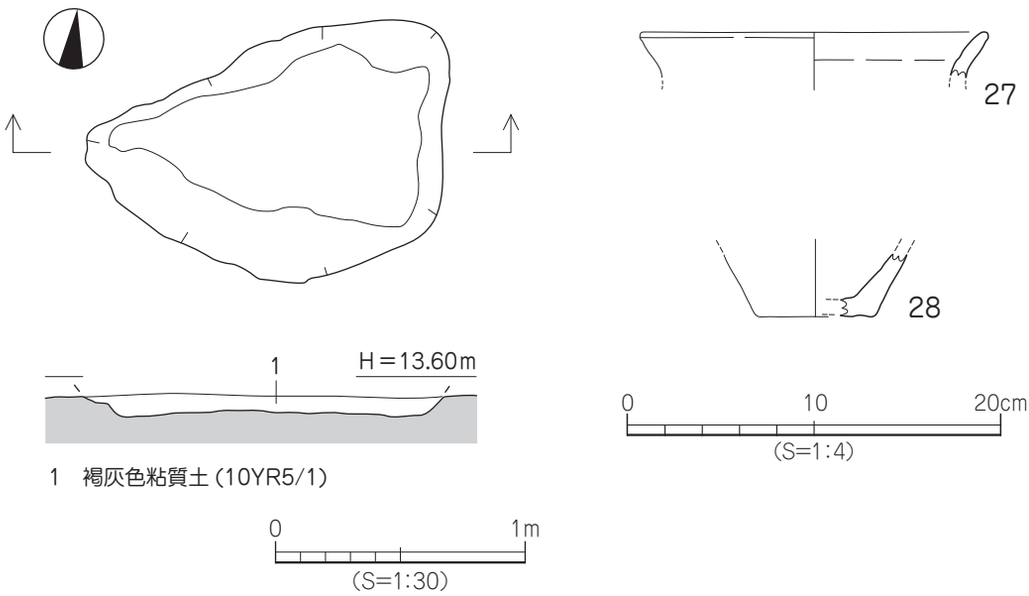
時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、出土遺物の特徴より、SK8 は概ね弥生時代後期の土坑と考えられる。

SK9（第 90 図）

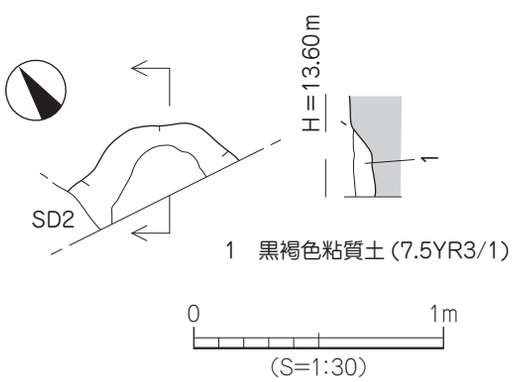
調査区中央部南西寄り A2 区に位置する土坑で、土坑西側は溝 SD2 に削平され、南半部は調査区外に続く。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は南北検出長 0.42 m、東西検出長 0.70 m、



第 88 図　SK7 測量図・出土遺物実測図



第 89 図　SK8 測量図・出土遺物実測図



第 90 図　SK9 測量図

深さは 7㎝である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は黒褐色粘質土（7.5YR 3/1）単層である。土坑基底面は、平坦である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土が SK6 と酷似することから、概ね古墳時代の土坑と考えられる。

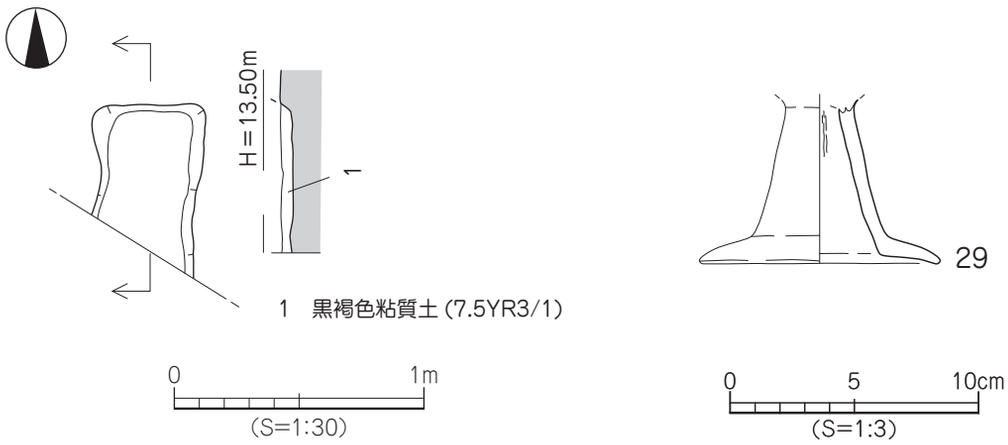
SK10（第 91 図）

調査区中央部 A2 区に位置する土坑で、土坑南半部は調査区外に続く。平面形態は長方形をなすものと思われ、規模は南北検出長 0.70 m、東西検出長 0.46 m、深さは 4㎝である。断面形態は浅い逆台形状をなし、埋土は黒褐色粘質土（7.5YR 3/1）単層である。遺物は埋土中より土師器や須恵器の小片が出土した。

出土遺物（図版 19）

29 は土師器の高坏。脚部で、脚裾部は下外方に開き、柱裾部内面には不明瞭な稜をもつ。

時期：出土遺物の特徴より、SK10 は古墳時代中期、5 世紀後半の土坑と考えられる。



第 91 図　SK10 測量図・出土遺物実測図

4）柱　穴

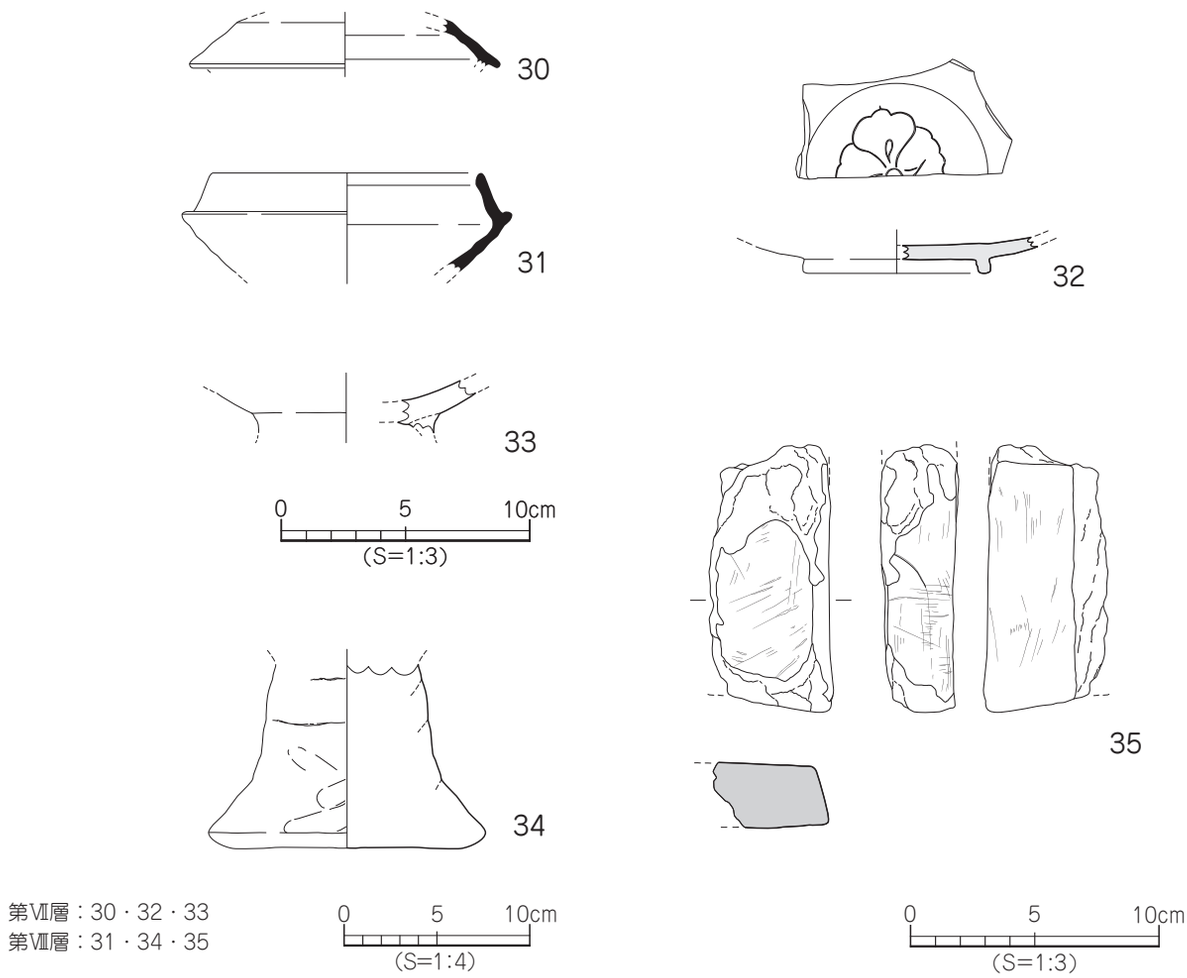
調査では、9 基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の 5 種類がある。なお、各柱穴内からは、遺物の出土はない。

① 緑灰色粘質土（7.5GY 6/1）・・・・・・・・・・1 基（SP1）
② 黒褐色粘質土（7.5YR 3/1）・・・・・・・・・・4 基（SP2 ～ 5）
③ にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/3）・・・・・・1 基（SP6）
④ 褐灰色粘質土（10YR 5/1）・・・・・・・・・・2 基（SP7・9）
⑤ 暗褐色粘質土（7.5YR 3/2）・・・・・・・・・・1 基（SP8）

5）包含層出土遺物（第 92 図、図版 20）

調査では、第Ⅶ層と第Ⅷ層中より弥生時代から平安時代までの遺物が出土した。ここでは、図化しうる遺物を 6 点掲載する。なお、30･32･33 は第Ⅶ層、31･34･35 は第Ⅷ層からの出土品である。

30 は須恵器の坏蓋片。推定口径 12.5cmで、笠形の天井部をもち、かえりは消失している。飛鳥時代後半。31 は須恵器の坏身片。推定たちあがり径 11.4cmで、たちあがり端部は内傾する。古墳時代中期後半。32 は灰釉陶器の碗。方形状の高台が付き、内面には陰刻花文が描かれている。胎土は緻密で灰白色をなし､焼成は良好である。9 世紀後半。33 は内黒椀。1/3 の残存で､高台は欠損している。10 世紀。34 は弥生土器。支脚形土器で、推定底径 12.2cm、残高 9.9cmである。中実で、底部は僅かに上げ底をなす。弥生時代末。35 は砥石で、使用面は 3 面である。石英粗面岩製。



第 92 図　包含層出土遺物実測図

第 4 節　小　結

今回の調査では、弥生時代から古代までの遺構や遺物を確認した。特筆すべきは、弥生時代中期から古墳時代後期に流れていた自然流路を検出したことである。流路内からは 6 世紀前半の土師器や須恵器等と共に遺存状態の極めて良好な木製品や種子、甲虫の羽などが出土した。その中でも建築部材である『蹴放し』は欠損箇所の少ないものであり、使用痕跡を観察することにより片開きの扉に用いられたことのわかる貴重な資料である。一般国道 196 号松山環状線建設に伴い実施した大峰ケ台Ⅱ遺跡（愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施）からは、6 世紀代の掘立柱建物址 7 棟が検出されているなど、朝美辻遺跡の周辺には 6 世紀の集落が存在したことは確実であり、今回出土した『蹴放し』はこれらの建物に使用された可能性が高く、今後は充分に検証を行う必要がある。

また、包含層出土ではあるが、内面に陰刻花文を有する無釉須恵器の碗（32）は地方における出土が稀有であり、9 ～ 10 世紀頃における朝美辻遺跡の周辺には、朝美澤廃寺を含めた富裕層が存在したことを示す資料といえよう。

遺構一覧・遺物観察表　　－凡　例－

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。記載内容は、以下のとおりである。

（1）遺構一覧表

地区欄　　グリッド名を記載。

規模欄　　（　）：検出値を示す。

埋土欄　　複数の土層がある場合→「黒色粘質土　他」と記載。

出土遺物欄　　遺物名を略記した。

例）弥→弥生土器、土→土師器、須→須恵器

（2）遺物観察表

法量欄　　（　）：復元推定値を示す。

調整欄　　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、胴→胴部

胎土欄　　胎土欄は混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～4）→「1～4㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄　　焼成欄の略記について

◎→良好、○→良

表 43　　自然流路一覧

自然流路（ＳＲ）	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期
1	A3～B4	レンズ状	19.00 × 3.50 × 1.00	黒褐色粘質土 他	弥・土・須・木・種・虫	弥生中期～古墳後期

表 44　　溝一覧

溝（ＳＤ）	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期
1	A・B2	レンズ状	5.15 ×（1.50）× 0.07	暗褐色粘質土 他	弥・土・須	6 世紀後半
2	A・B2	皿状	2.68 × 0.50 × 0.22	黒色粘質土 他	土・須	5 世紀後半
3	B2	皿状	1.38 × 0.80 × 0.08	にぶい黄褐色土		6 世紀後半以前

表 45　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ（m）	埋　土	出土遺物	時　期
1	B1	不整楕円形	逆台形状	1.93 ×（1.03）× 0.16	褐灰色粘質土 （灰黄褐色ブロック混入）	弥・土・須	6 世紀後半
2	B1･2	不整楕円形	逆台形状	1.80 × 1.53 × 0.10	暗褐色粘質土 （褐灰色土ブロック混入）	土・須	6 世紀前半
3	B1･2	方形	逆台形状	（1.70）×（1.25）× 0.10	暗褐色粘質土 他	弥・土	5 世紀後半
4	A2･3	楕円形	袋状	0.98 × 0.56 × 0.33	黒灰色粘質土 （黄橙色土ﾌﾞﾛｯｸ混入）		古墳以前
5	A2	不整楕円形	逆台形状	0.86 × 0.61 × 0.14	黒褐色粘質土		古墳時代
6	B2	（方形）	逆台形状	（0.50）×（0.50）× 0.04	黒褐色粘質土 （黄橙色土ﾌﾞﾛｯｸ混入）	土	古墳時代
7	A･B2	不整楕円形	レンズ状	1.20 × 1.02 × 0.14	灰黄褐色微砂	弥・土・石	古墳時代
8	B2	不整楕円形	逆台形状	1.45 × 1.04 × 0.08	褐灰色粘質土	弥	弥生後期
9	A2	（円形）	逆台形状	（0.70）×（0.42）× 0.07	黒褐色粘質土		古墳時代
10	A2	（長方形）	逆台形状	（0.70）× 0.46 × 0.04	黒褐色粘質土	土・須	5 世紀後半

表 46　柱穴一覧

柱穴（ＳＰ）	地　区	平面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備　考
1	B1	楕円形	0.60 × 0.45 × 0.12	緑灰色粘質土		
2	B2	楕円形	0.52 × 0.48 × 0.20	黒褐色粘質土		
3	B2	楕円形	0.60 × 0.40 × 0.20	黒褐色粘質土		
4	B2	楕円形	0.57 × 0.38 × 0.17	黒褐色粘質土		
5	B2	楕円形	0.68 × 0.56 × 0.08	黒褐色粘質土		
6	B2	円　形	0.56 × 0.55 × 0.22	にぶい黄褐色粘質土		
7	B1・2	円　形	0.86 ×（0.67）× 0.06	褐灰色粘質土		
8	B2	円　形	0.24 × 0.24 × 0.04	暗褐色粘質土		
9	B1	楕円形	0.44 × 0.38 × 0.27	褐灰色粘質土		

表 47　SR1 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	坏蓋	口径（12.4） 残高　3.6	断面三角形の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する。口縁部は火膨れた痕跡あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰黄色	密 ◎		
2	壺	口径（9.8） 残高　10.0	短頸壺。口縁端部は内傾し、胴部は扁球形をなす。1/3 の残存。	㊐回転カキメ ㊥回転カキメ ㊦回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		19
3	甕	口径（19.0） 残高　4.0	内湾口縁。口縁端部はナデ凹む。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 浅黄色	石・長（1～3） 金・赤 ◎		
4	甕	口径（19.2） 残高　7.0	外反口縁。口縁端部は外傾する。1/5 の残存。	㊐ヨコナデ ㊥ナデ	㊐ヨコナデ ㊥板状工具によるナデ	灰黄色 灰黄色	石・長（1～3） 赤 ◎		
5	壺	口径（24.6） 残高　11.2	広口壺。口縁部内面に径 3.7cm大の円形浮文２ヶ、頸部に断面三角形状の凸帯３条を貼付ける。1/3 の残存。	㊐ヨコナデ→ハケ ㊧ナデ	㊐ナデ ㊧ハケ→ヘラミガキ	灰黄色 灰黄色	石・長（1～3） ◎		19
6	壺	底径（10.0） 残高　7.8	上げ底。1/4 の残存。	㊥ヘラミガキ ㊦ナデ	ハケ（10 本 /cm）→ナデ	褐灰色 灰黄褐色	石・長（1～3） ◎		
7	甕	底径（8.6） 残高　11.6	上げ底。1/4 の残存。	㊥ヘラミガキ ㊦ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰白色	石・長（1～2） 金 ◎	黒斑	19
8	深鉢	残高　4.4	口唇部に刻目、口唇下に断面三角形状の凸帯を貼付け、凸帯上に刻目あり。小片。	マメツ	ナデ	黒褐色 黒褐色	石・長（1～3） 金 ◎		19

表 48　SR1 出土遺物観察表　（木製品）

番号	器種	材質	法量 残存長（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	備考	図版
9	蹴放し	ヒノキ	111.8	24.7	7.1		18
10	板材	ヒノキ	41.7	9.6	3.2		
11	杭	ヤマグワ	28.3	7.1	6.7		
12	木錘	クリ	15.6	6.2	6.0		

表 49　SD1 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
13	壺	残高　22.4	広口壺。頸部に断面三角形状の凸帯２条を貼付ける。	マメツ	㊧ナデ ㊥ハケ（5本/cm）→ナデ	明黄褐色 橙色	石・長（1～5） 金 ◎		19
14	甕	底径（7.2） 残高　2.1	上げ底。小片。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 灰白色	石・長（1～3） ◎		
15	甕	底径（3.4） 残高　2.8	小さな平底。1/2 の残存。	マメツ	マメツ	暗灰色 橙色	長（1～2） ◎	黒斑	
16	甕	底径（3.2） 残高　3.1	小さな平底。	マメツ	マメツ	灰白色 にぶい黄橙色	石・長（1～3） ◎		
17	甕	口径（18.2） 残高　2.8	内湾口縁。口縁部は内傾する面をなす。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ◎		

表 50　SD2 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
18	甕	残高　6.8	胴部片。	平行叩き	叩き→スリケシ	灰色 灰色	密 ◎		19

表 51　SK1 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
19	坏身	たちあがり径（12.2） 器高　3.5	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。底部は焼け歪みがあり。たちあがり外面に火だすきの痕跡あり。	㊤回転ナデ ㊦回転ヘラケズリ（1/2）	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		19
20	支脚	底径（8.6） 残高　3.3	中空。1/6 の残存。	タタキ	ナデ	橙色 暗灰色	石・長（1～3） ◎		

表 52　SK2 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
21	高坏	底径（10.1） 残高　1.7	小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長（1） ◎		

表 53　SK3 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
22	坏蓋	残高　2.6	断面三角形の鋭い稜あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
23	甕	残高　5.8	胴部小片。内面は叩き痕をスリ消している。	格子目叩き	叩き→スリケシ	灰色 灰色	密 ◎		19
24	高坏	底径（14.4） 残高　1.1	脚部片。脚裾部は水平に開き、柱裾部内面には明瞭な稜をもつ。小片。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 淡橙色	石・長（1～3） ◎		

表 54　SK7 出土遺物観察表　（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
25	スクレイパー	完形	サヌカイト	3.3	2.5	0.5	4.91		
26	スクレイパー	完形	サヌカイト	4.1	3.9	0.3	7.76		

表 55　SK8 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
27	甕	口径（18.0） 残高　2.4	「く」の字状口縁。口縁端部は先細りする。小片。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～2） ◎		
28	甕	底径（6.2） 残高　3.3	僅かに上げ底。1/6 の残存。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～3） ◎		

表 56　SK10 出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
29	高坏	底径　(9.6) 残高　6.5	脚裾部は下外方に開き、柱裾部内面には不明瞭な稜をもつ。	マメツ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ◎		19

表 57　包含層出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
30	坏蓋	口径（12.5） 残高　2.0	笠形の天井部。かえりは消失している。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	第Ⅶ層	
31	坏身	たちあがり径（11.4） 残高　3.8	たちあがりは内傾し、たちあがり端部は内傾する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	第Ⅷ層	
32	碗	底径　(7.2) 残高　1.4	灰釉陶器。底部内面に陰刻花文あり。1/2 の残存。	回転ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	第Ⅶ層	20
33	椀	残高　2.1	内黒椀。1/3 の残存。高台は欠損している。	マメツ	マメツ	灰白色 黒色	石・長（1） ◎	第Ⅶ層	
34	支脚	底径（12.2） 残高　9.9	底部は僅かに上げ底。中実。	ナデ（指頭痕）		灰白色	石・長（1～3） ◎	第Ⅷ層	20

表 58　包含層出土遺物観察表　（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
35	砥石	一部欠損	石英粗面岩	10.7	5.0	2.6	211.67	破損品。砥面 3 面 第Ⅷ層	20

第５章　朝美辻遺跡２次調査

第１節　調査の経緯

（１）調査に至る経緯

2012（平成 24）年５月 15 日、白石正光氏より朝美一丁目 1395 番１及び 1394 番３における戸建賃貸住宅の建築に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。確認願いの提出された申請地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地『No. 33　大峰ヶ台遺跡Ｂ、大峰ヶ台古墳群Ｂ』内にあたる。現在は平成 26 年３月に包蔵地の修正により『No34　朝美遺跡』と名称が改定された。申請地は松山平野西部、伊予灘から約 3.5㎞に位置する大峰ケ台丘陵（独立丘陵）の東麓縁辺部、標高約 19 ｍに立地する。周辺の調査では、北側に朝美澤遺跡１次調査、２次調査、朝美辻遺跡１次調査があり、西側の大峰ケ台丘陵には大峰ケ台遺跡があり１次～ 12 次の調査が行われている。また、南方には辻町遺跡１次～３次調査、南江戸鬮目遺跡、古照遺跡が調査され弥生時代から中近世までの各時代の遺構・遺物が多数検出されている地域である。接する遺跡には、昭和 62 年に現公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センターが一般国道 196 号松山環状線の建設に伴い「大峰ケ台Ⅱ遺跡」（5 調査区１・2）として、本調査地の約 15 ｍ西の環状線道路内で発掘調査が行われている。

申請地は包蔵地内に所在することや周辺の遺跡の状況等から、申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、文化財課の指導のもと公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターは 2012（平成 24）年６月６日に試掘調査を実施した。調査の結果、柱穴、溝を検出した。この結果を受け、申請者と文化財課は協議を重ね、住宅建設に伴い遺跡が破壊される部分のみを対象とし、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は申請者と公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）とが委託契約を結び、発掘調査を行うこととなった。発掘調査は申請地内における弥生時代以降の集落様相解明を主目的として、文化財課の協力のもと 2012（平成 24）年８月１日より開始することとなった。

（２）調査の経過

2012（平成 24）年８月１日より調査を開始した。調査地東部には一部解体された土塀が残り、調査区掘削作業及び調査に伴い崩落・倒壊の危険性があったので、掘削範囲の東部は土塀の高さを考慮し約 1.5 ｍ程度掘削を控えた。また、北部は掘削中に径約 20㎝程度の大型の配水管が調査区内東西に渡り露出したため、協議の結果、露出した配水管以北の掘削は行わなかった。南部は調査地の現進入口にあたり、車両が東西方向から十分通行できる幅の５ｍ程度を北に控え掘削を実施した。以下、調査工程を略記する。

８月１日（水）調査員１名と作業員６名により本格調査を開始する。また、発掘用機材の搬入･設営、調査区内の草木やゴミの撤去など環境整備を行う。また、調査区外周に杭を打ちトラロープにより囲い、防護フェンス等を用い安全対策措置を行った。

8月 2 日（木）調査区の掘削は南から北に向かって重機により行う。人員を配して同時に壁面の精査を行う。重機による掘削は翌日（8月3日）まで行った。
8月 6 日（月）重機による表土剝ぎ取り作業を終了し、遺構検出作業を開始する。
8月10日（金）午前中より調査区内の全面清掃を行う。午後より、遺構検出写真を撮影する。
8月16日（木）前日の降水のため場内の水抜き作業を実施。委託業者によって基準点測量を行う。
8月17日（金）壁面層序の分層に着手し、調査区内に堆積する基本土層（基本層序）を決定する。同時に土層図作図作業および遺構の掘り下げを開始する。5m 四方のグリットを設定し、グリッド杭設置作業開始する。
8月27日（月）調査区南部から遺構平面図の作成を開始する。
8月 3 日（月）柱穴群の半截と遺構断面図の作成を開始する。
8月22日（土）午前10時30分より現地説明会を開催する。参加者は説明会開催時には50名程度の参加を見て終了した。説明会終了後から午後の作業中にも説明会目的の周辺住民の方々の来場が相次ぎ、結果的には総勢70名ほどの参加となった。
9月27日（木）調査区内の清掃作業を行い、その後遺構完掘状況の写真撮影を行う。
9月28日（金）午前より調査区外周の杭の撤去および清掃を行い、野外調査を終了する。

（3）調査組織

所 在 地 ：松山市朝美一丁目1395番1の一部
調査期間：2012（平成24年）8月1日（水）～同年9月28日（金）
調査面積：約190㎡
契 約 者 ：白石 正光 氏
調査主体：公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
調査担当：埋蔵文化財センター調査員　小笠原　善治

第2節　層　位

基本層位（第95図）

調査地は松山平野西部、伊予灘から約3.5㎞に位置する大峰ケ台丘陵（独立丘陵）の東麓縁辺部、標高約19ｍに立地し、調査前は既存建物が既に撤去された更地であった。調査で確認した土層は以下の6層である。

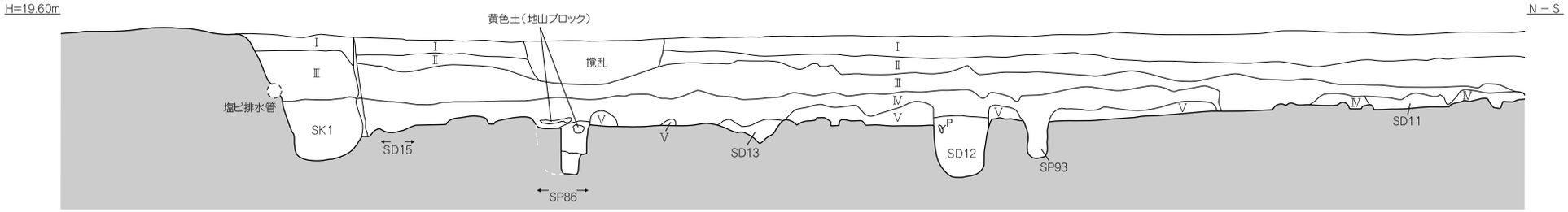
第Ⅰ層：近現代の造成に伴う客土。
第Ⅱ層：灰褐色土（5YR 6/2）に灰白色（10YR 8/1）混じり。
第Ⅲ層：にぶい赤褐色土（5YR 5/3）
第Ⅳ層：褐灰色土（7.5YR 4/2）
第Ⅴ層：褐灰色土（7.5YR 4/2）にⅥ層が粒状に混じる。
第Ⅵ層：浅黄色（10YR 8/4）の地山相当層。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。

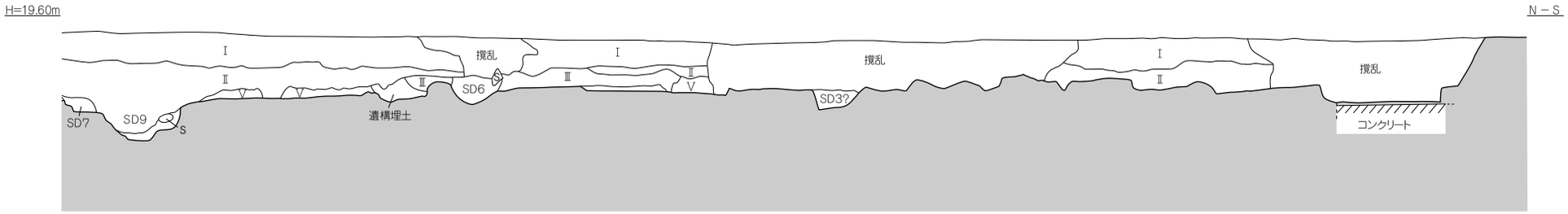
第93図　周辺遺跡位置図

座標一覧

測点	X	Y	標高(m)
No.1	93875.000	−69817.000	19.200
No.2	93885.000	−69817.000	19.000
No.3	93885.000	−69815.000	18.800
No.4	93875.000	−69815.000	19.100

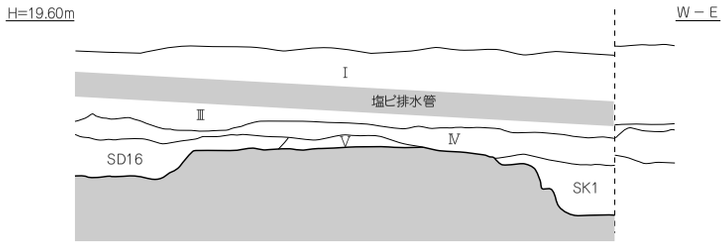
第94図　調査地座標一覧および対象範囲図





東　壁

P：土器
S：石



北　壁

Ⅰ　表土
Ⅱ　灰褐色土(5YR6/2)に灰白色(10YR8/1)混じり
Ⅲ　にぶい赤褐色土(5YR5/3)
Ⅳ　褐灰色土(7.5YR4/2)
Ⅴ　褐灰色土(7.5YR4/2)にⅥ層が粒状に混じる
Ⅵ　浅黄色(10YR8/4)の地山相当層

0　2m
(S=1:50)

第95図　調査区東壁･北壁土層図

第96図　調査区遺構配置図

第３節　遺構と遺物

検出遺構・遺物

今回の調査では、主に弥生時代と古墳時代～飛鳥時代（5 世紀後半～ 7 世紀初め）の溝（16 条）、土坑（2 基）、掘立柱建物（1 棟）、柱穴（100 基以上）を検出した。遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、石器などが出土した。ここでは、遺構別に説明を行う。

1）掘立柱建物

掘立１（第 97 図、図版 22・23・27）

調査区北部に位置する掘立柱建物で、南側建物の一部である柱穴 3 基分を検出した。これら検出された柱穴は東西 2 間分で、その平面形状から SP84 が建物南西角の柱穴、もしくは柱穴列が西方に延びる建物南面の一部と思われるが、周辺遺構の状況からおそらくは北部に建物が展開するものと考えている。各柱穴の規模は、SP84 が径約 62㎝、深さ約 42㎝を測る方形で、埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）。他の 2 基と異なり平面形態が方形であることから掘立柱建物南西隅の柱穴と想定でき、この建物は北方に展開するものと考えられる。SP85 は径約 76 × 62㎝、深さ約 42㎝を測る方形で、埋土は、黄色土（2.5Y 8/6）および黒褐色土（7.5YR 3/1）。SP86 はこの掘立建物の東部端で、東部は東壁外に展開すると考えられる。規模は、径約 72 × 50㎝、深さ約 48㎝を測る方形で、埋土は、黒褐色土（7.5Y 3/1）および黒褐色土（7.5YR 3/1）に黄色土（2.5Y 8/6）（地山相当）が小ブロック状に混入する。それぞれの柱間は心芯間で SP84 － 85 間が 130㎝、SP85 － 86 間が 180㎝を測る。また、SP84、85 間には布堀状の溝が確認された。規模は幅 45㎝～ 115㎝で深さ約 30㎝を測り、平面形状は方形で掘立柱建物の柱穴に切られている。埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）に黄色土が小ブロック状に混入する。断面の観察からは、この布堀状の溝は床面はやや起伏があるがほぼ平坦で、しっかりと掘られた印象を受ける。

出土遺物：掘立柱建物の柱穴から、弥生土器・須恵器などの小片が出土するが、図化はしていない。

時期：遺構の時期は、柱穴（SP86）から 6 世紀前半と思われる須恵器の坏身口縁端部片が出土しており、出土遺物から 6 世紀前半とする。

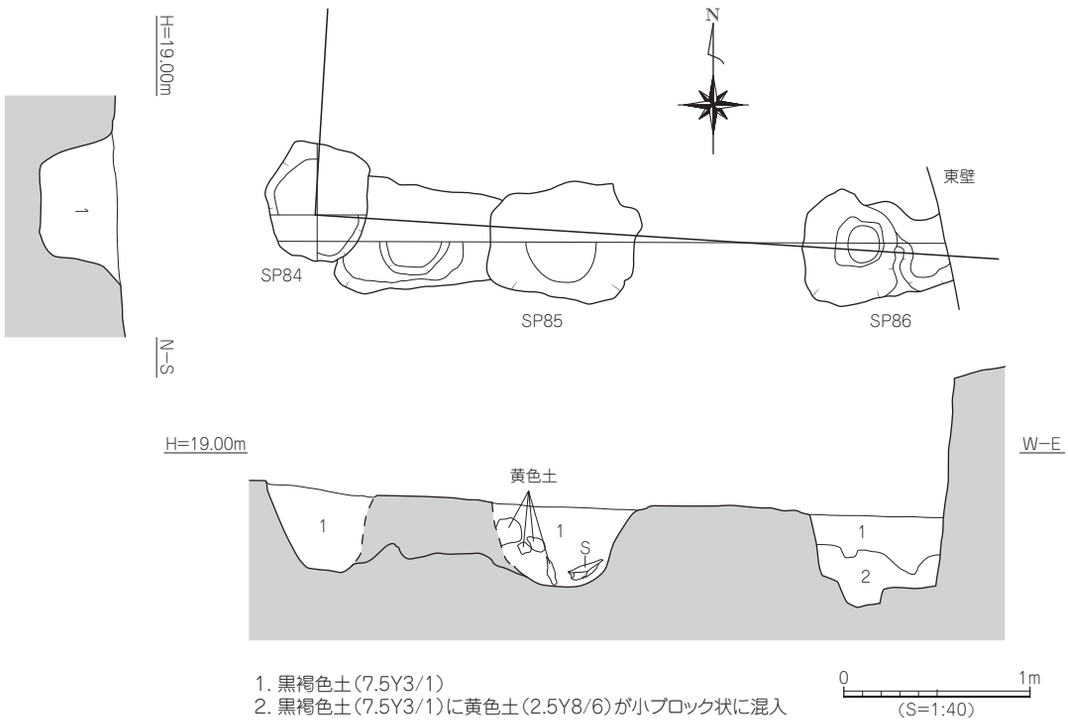
2）溝

ＳＤ１（第 98 図、図版 23）

調査区南東部で検出した南北方向へ延びるやや屈曲した溝で、東半部は溝の両端ともに調査区外に展開する。溝の中央部は方形の近世撹乱によって削られ消失している。溝の規模は、検出長 5.5 m、幅 26 ～ 40㎝、深さ 3 ～ 20㎝を測る。埋土は褐灰色土（5YR 4/1）に褐灰色土（10YR 6/1）、小ブロックの黄色土混じりである。埋土の観察からは砂や円礫等も見られず、長期的に水流があったものとは認められなかった。遺物は遺構南部より弥生土器小片と須恵器の坏身片等が出土している。

出土遺物：3 は、体部から内傾しながら端部では直立気味に立ち上がり、端面は尖り気味に仕上げる。10 は須恵器の壺の底部で、外面には線刻が見られる。

時期：遺構の時期は、出土遺物から遅くとも 6 世紀中頃までの埋没と考えられる。



第97図　掘立1測量図

ＳＤ２（第 99 図）

調査区中央～南部で検出した、ほぼ南北方向へ走る溝で、北部は撹乱によって削平される。撹乱から以北には延びない。溝の規模は、検出長 3.5 m、幅 10 ～ 26cm、深さ 4 ～ 6cmを測る。埋土は褐灰色土（5YR 4/1）に褐灰色土（10YR 6/1）、黄色土（2.5Y 8/6）粒混じりである。遺物は弥生土器片、須恵器片が出土している。

出土遺物：小片のため図化はしていないが、端部を丸く仕上げた坏蓋の口縁部小片が出土している。

時期：遺構の時期は、出土した遺物から 6 世紀末～ 7 世紀と考えられる。

ＳＤ３（第100図、図版24）

調査区南部で検出した東西方向に走る溝で、調査区外に延びる。溝は東西部分を後世の撹乱によって削平され消失している。唯一東側の撹乱北部壁に溝の痕跡が見られた。その痕跡からはSD1 を切って構築され、のちに溝に削平されている。溝の規模は、検出長 3.3 m、幅 10 ～ 52cm、深さ 12 ～ 16cmを測る。埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）に黄色土（2.5Y 8/6）粒が少量混じる。遺物は弥生土器小片、須恵器小片が出土している。

出土遺物：9 は、須恵器高坏の脚部片で方形の透かしが三箇所残存している。

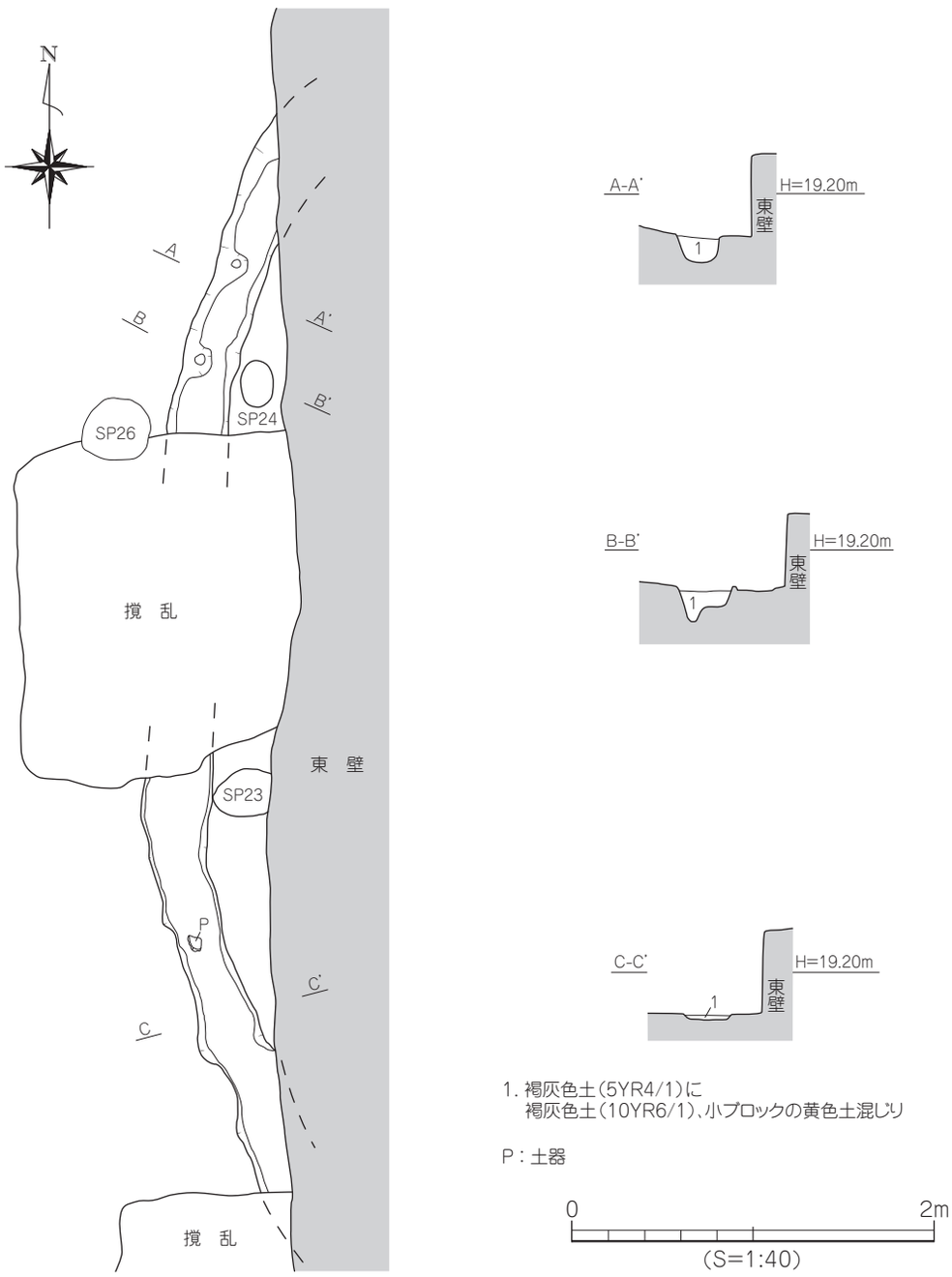
時期：遺構の時期は、SD4 を切ることと出土した遺物から 6 世紀末以降と考えられる。

ＳＤ４（第 100 図、図版 24）

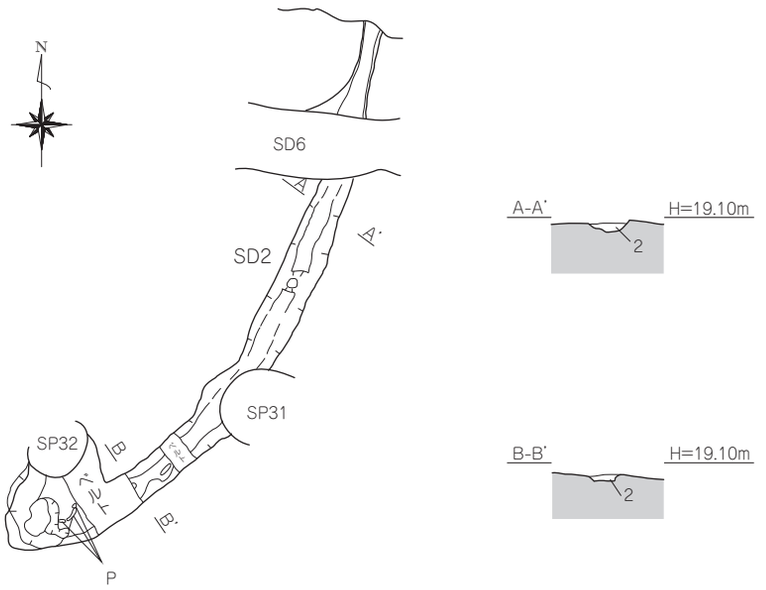
調査区南部に位置し、東西方向へ走る溝で、調査区外に延びる。溝はSD3 およびSD5 に切られ、東部は撹乱によって削平される。規模は、検出長 3.4 m、幅 16 ～ 52cm、深さ 4 ～ 11cmを測る。埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）に黄色土（2.5Y 8/6）粒が少量混じりである。

出土遺物：遺物は弥生土器小片、須恵器小片が出土している。

時期：遺構の時期は、小片ではあるが出土遺物から 6 世紀末～ 7 世紀初めと考えられる。

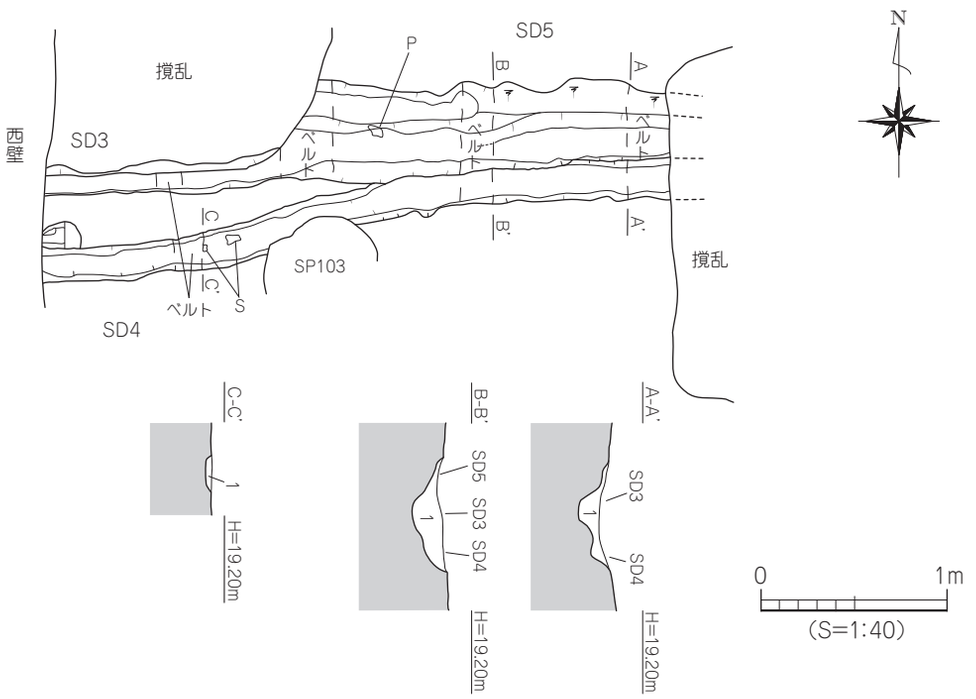

N
A
A'
B
B'
SP26
SP24
撹　乱
東　壁
SP23
P
C
C'
撹　乱
A-A'
H=19.20m
東壁
1
B-B'
H=19.20m
東壁
1
C-C'
H=19.20m
東壁
1
1. 褐灰色土(5YR4/1)に
褐灰色土(10YR6/1)、小ブロックの黄色土混じり
P：土器
0
2m
(S=1:40)

第98図　SD1測量図



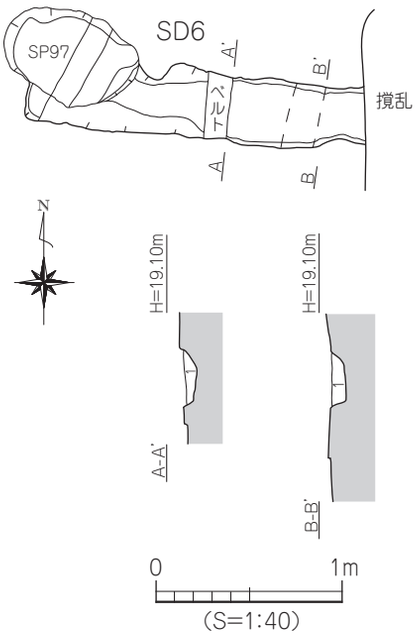
2. 褐灰色土（5YR4/1）に褐灰色土（10R6/1）、
黄色土（2.5Y8/6）粒まじり

第99図　SD2測量図



1. 黒褐色土（7.5YR3/1）に、黄色土（2.5Y8/6）粒が少量混じる。

第100図　SD3･SD4･SD5測量図



1. 褐灰色土（5YR4/1）に褐灰色土（10YR6/1）
黄色土（2.5Y 8/6）粒まじり

第101図　SD6測量図

ＳＤ５（第 100 図、図版 24）

調査区南部に位置し、東西方向へ走る溝で、調査区外に延びる。東部は撹乱によって削平されているが、西部では撹乱を切る、新しい溝である。溝の規模は、検出長 2.0 m、幅 16 ～ 30cm、深さ 10cmを測る。埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）に黄色土（2.5Y 8/6）粒が少量混じりである。

出土遺物：弥生土器や須恵器の小片が出土している。

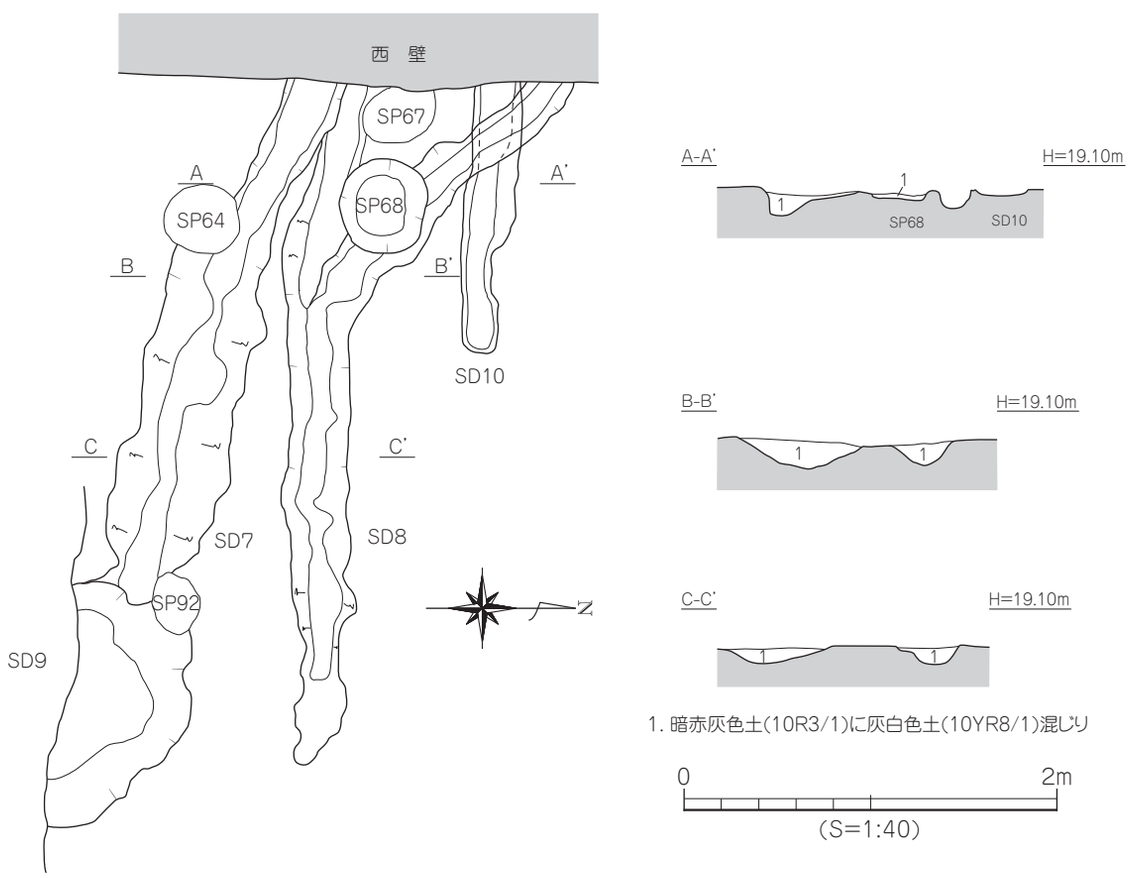
時期：撹乱を切ることから中近世と考えられる。

ＳＤ６（第101図）

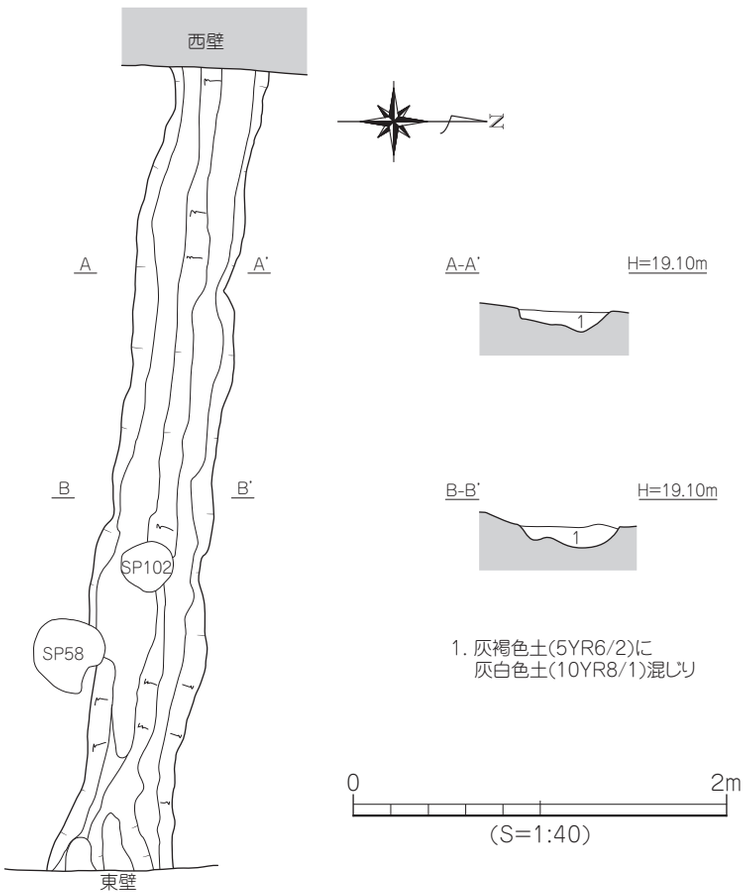
調査区中央部南に位置し、東西方向に走り東部は撹乱によって削平される溝で、西部は柱穴によって切られ、SD2 を切る。東壁の断面観察では第Ⅲ層を切り込んでいる。溝の規模は、検出長 2.3 m、幅 26 ～ 40cm、深さ 4 ～ 10cmを測る。埋土は褐灰色土（5YR 4/1）に褐灰色土（10YR 6/1）、黄色土（2.5Y 8/6）粒混じりである。

出土遺物：弥生土器、須恵器、土師器の小片が出土している。

時期：遺構の切り合いや層序関係からから、7 世紀初め以降で SD9 までの時期と考えられる。



第102図　SD7･SD8･SD10測量図



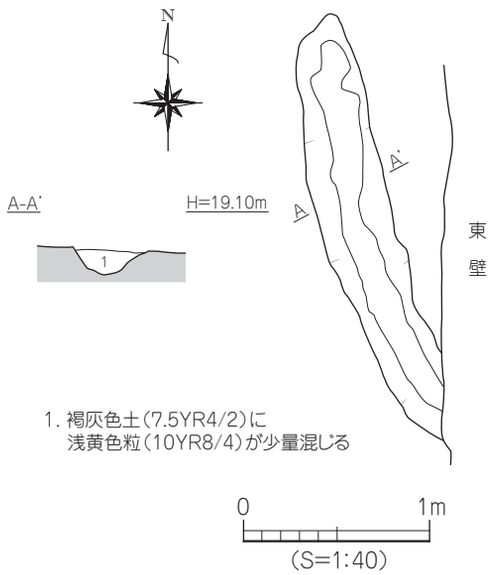
第103図　SD9測量図

ＳＤ７・８（第 102 図、図版 24・25）

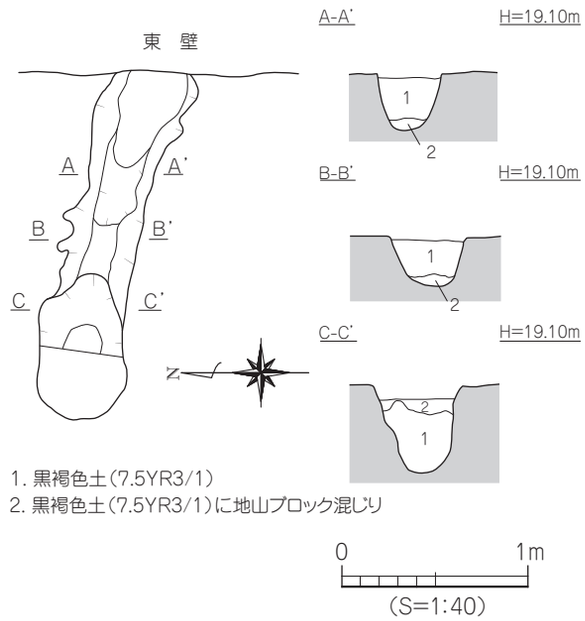
調査区中央部で検出した東西方向へ延び、2 つの溝が合流するやや蛇行する溝で、東部および西部は調査区外に展開する。両溝ともに比高差は丘陵斜面に沿って西から東に向かって低く、比高差約 18cmを計る。SD7 は西部壁面付近より SD8 を切りながら東壁へ向かい、東部壁面付近では SD9 によって大きく切られる。SD8 は北西壁面からのやや幅の狭い溝が新しい時期の SD10 に切られながら、SD7 下からの溝と合流する。SD7 と SD8 の切り合い関係は壁面の観察から SD7 が SD8 を切っており、やや SD7 が新しい遺構である。また SD8 を構成する西部 2 本の溝は、断面観察からも切り合う状況は見られず、溝が合流したものと考えている。

SD7 の規模は、検出長 4.4 m、幅 22 ～ 70cm、深さ 8 ～ 30cmを測る。埋土は暗赤灰色土（10R 3/1）に灰白色土（10YR 8/1）混じりである。断面形状はレンズ状を呈するが床面はところによってやや窪み、平坦ではない。SD8 の規模は、検出長 4.1 m、幅 18 ～ 46cm、深さ 3 ～ 12cmを測る。埋土は暗赤灰色土（10R 3/1）に灰白色土（10YR 8/1）混じりである。断面形状は船底状を呈する。遺物は、遺構内より弥生土器の胴部小片が出土した。

出土遺物：SD7 からは SD9 に交差する手前でやや深く窪む落ち込み部分から土師器高坏の脚部や石鏃が出土した。1 は、須恵器の坏身で端部はやや内傾して立ち上がり、段を有する。12 は土師器高坏の脚部でハの字状に広がり、裾部はほぼ水平に屈曲する。13 は石鏃の完形品。平基式の無茎石鏃である。



第104図　SD11測量図



第105図　SD12測量図

時期：SD7 は出土遺物から 5 世紀後半～ 6 世紀初め頃までの埋没と考えられる。SD8 も SD7 と大きな時期差はなく、5 世紀後半～ 6 世紀初め頃までの埋没と考えられる。

ＳＤ９（第 103 図、図版 24）

調査区中央部 SD7 の南側に隣接し、東西に直線的に走り東部壁面付近で SD7 南東端部を切る。溝の埋土は基本層序である第Ⅱ層灰褐色土（5YR 6/2）に灰白色土（10YR 8/1）混じりが流れ込み堆積する。遺構は東西壁を縦断し、その埋土は両壁面層序に含まれ、南北壁の層序が不安定な中で東西壁をつなぐ基準となるものである。規模は検出長 4.3m、幅 46 ～ 66cm、深さ 7 ～ 11cm を計る。埋土は灰褐色土（5YR 6/2）に灰白色土（10YR 8/1）混じりで断面形態は船底状を呈し、南側がテラス状に平坦で北側がそれより 5 ～ 10cm程度深くなる二段堀状を呈する。

出土遺物：遺構内より弥生土器胴部片や須恵器高坏の脚部等の小片が出土している。

時期：出土遺物から 7 世紀前半頃までの埋没と考えられる。

ＳＤ 10（第 102 図）

調査区中央部に位置し、東西方向へ走り西部は調査区外に伸びる小規模な溝である。溝の規模は、検出長 1.4 m、幅 16 ～ 26cm、深さ 4cmを測る。埋土は第Ⅲ層のにぶい赤褐色土（5YR 8/3）である。

出土遺物：遺構から遺物の出土は見られなかった。

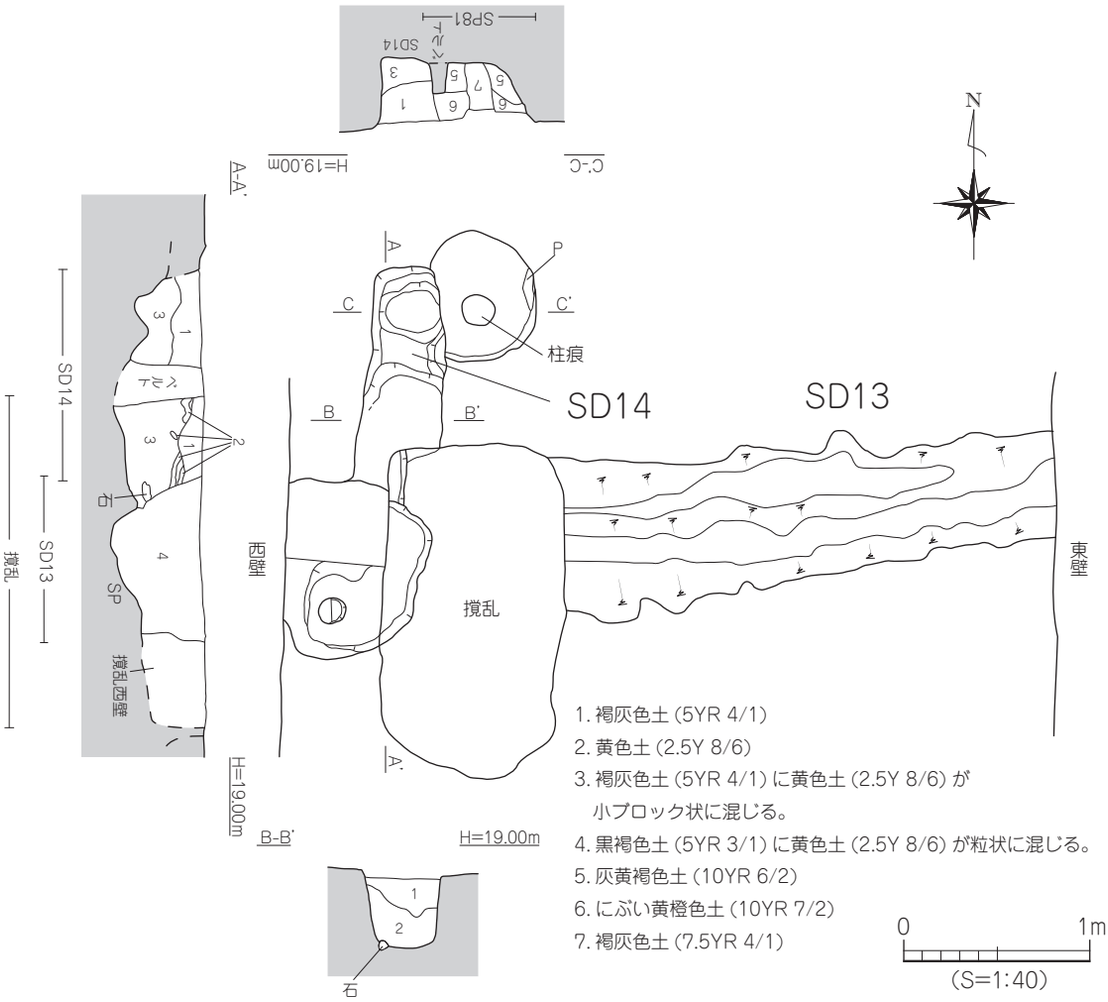
時期：時期を比定できる遺物の出土はないが、西壁の層序関係と以降の切り合い関係から、SD9 より古いが SD7・8 より新しく、6 世紀中頃～ 7 世紀初めと考えられる。

ＳＤ 11（第 104 図、図版 25・26）

調査区中央部東端に位置し、北西－南東方向へ弱い曲線を描いて走る溝で、東端は調査区外に延びる。溝の規模は、検出長 2.2 m、幅 30 ～ 42cm、深さ 14cmを測る。埋土は褐灰色土（7.5YR 4/2）に浅黄色土（10YR 8/4）粒が少量混じる。

出土遺物：弥生土器、須恵器、土師器の小片が出土している。

時期：時期を比定できる遺物の出土に乏しく不明であるが、東壁の層序や遺構の埋土を参考にすれ



第106図　SD13･SD14測量図

ばSD12より新しいものと考えられ、ここでは７世紀以降の埋没とする。

ＳＤ 12（第105図）

調査区北部に位置し、中央から東方向へ延びる直線的な溝で、東部は調査区外に延びる。溝の規模は、検出長1.9 m、幅32 ～ 52cm、深さ25 ～ 40cmを測る。埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）である。溝の西部端はやや膨らんだ形状を呈し床面も深くなり落ち込み状を呈する。

出土遺物：須恵器の坏身等が出土している。5は低い口縁部、端面は丸く仕上げ、受け部は厚い。6は立ち上がり短く内傾し、端部は丸い。受け部は上方に丸く延びる。

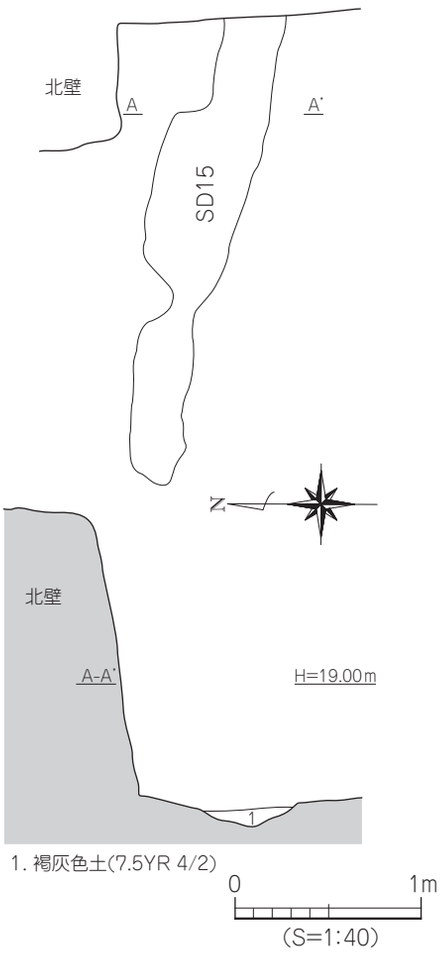
時期：遺構の時期は、出土遺物から６世紀末～７世紀までの埋没と考えられる。

ＳＤ 13（第106図､図版26）

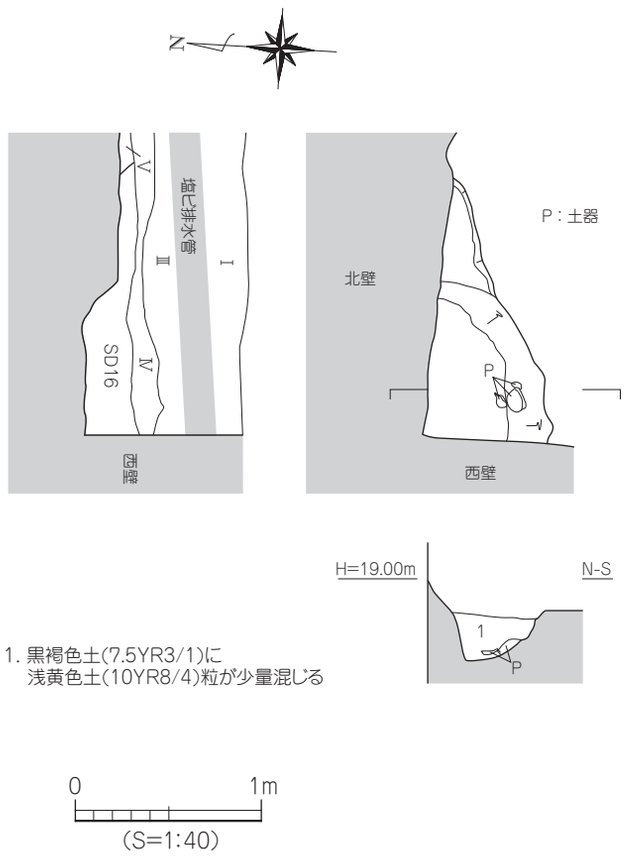
調査区北部に位置し、東西に走る溝で、東部は調査区外に展開し、西部は撹乱に切られ削平されている。また､延長上の西壁にはSP82がSD14を切った状況であるため､西方への溝の展開は不明である。規模は、検出長2.6 m、幅54 ～ 86cm、深さ14 ～ 20cmを測る。埋土は黒褐色土（7.5YR 3/2）である。

出土遺物：須恵器の坏身等が出土している。2は口縁部は緩く内傾して立ち上がり、端部は長く持ち丸く仕上げられる。7は内傾して立ち上がる。

時期：出土遺物より６世紀前半と考えられる。



第107図　SD15測量図



第108図　SD16測量図

ＳＤ 14（第 106 図）

調査区北部に位置し、南北方向に走る短い溝で、南部は SP82 および撹乱に切られ一部削平され、北部は SP81 を切り北へ延びる。溝の規模は、検出長 1.2 m、幅 30 ～ 46cm、深さ 35 ～ 38cmを測る。埋土は上層より褐灰色土（5YR 4/1）、同色（5YR 4/1）に黄色土（2.5Y 8/6）が小ブロック状に混じる。

出土遺物：8 は須恵器の坏蓋である。内湾する口縁で端面に緩い段を有する。

時期：遺構の時期は、出土遺物から 5 世紀後半から 6 世紀初め頃までの埋没と考えられる。

ＳＤ 15（第 107 図）

調査区北東部に位置し、東西方向に走る短い溝で、東部は調査区外に展開する。溝の規模は、検出長 1.26 m、幅 6 ～ 26cm、深さ 5cmを測る。埋土は褐灰色土（7.5YR 4/2）である。

出土遺物：遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

時期：時期を比定できる遺物の出土もなく不明であるが、層位的には遺構埋土が SD12、13 の上層であることから、SD12、13 以降の 7 世紀以降と時期と考えられよう。

ＳＤ 16（第 108 図、図版 26）　調査区北西部隅に位置し北－西半部は調査区外に展開する。第Ⅳ層下で遺構プランを確認した。規模は東西 1.3 m、南北 0.65 mを測り、深さ 25cm で、埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）に浅黄色土（10YR 8/4）粒が少量混じる。検出時は南西－北東に走る溝状の平面プランを確認した。遺構内中央はやや深く落ち込みテラス状を呈し、床面はほぼ平坦である。北壁断面の観察では切り合

い等による分層可能なラインは見られず単一層と判断した。

出土遺物：遺構内の落ち込み南部床面直上にて土師器の高坏坏部片を検出した。

時期：出土遺物から５世紀後半頃までの埋没と考えられる。

3）土　坑

ＳＫ１（第 109 図）

調査区北東に位置し、北－東部は調査区外に展開する。遺構の北壁は調査区掘削時に塩ビ管が露出し、それ以北の掘削を行わなかったため土坑の全容は不明であるが、平面形態は方形と思われる。規模は検出長 0.62m × 0.5m、深さ 34 ～ 50cm を測る。断面形状は部分的ではあるが逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）に黄色土（2.5Y 8/6）である。

出土遺物：弥生土器、須恵器の小片が出土している。

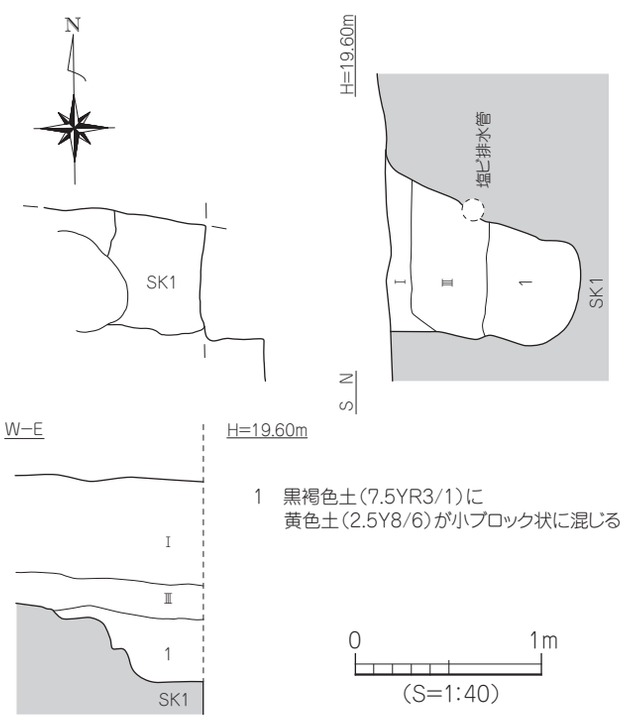
時期：時期を比定できる遺物の出土も無く時期は不明であるが、層序的に第３層下での検出であることや SD12 の埋土を参考にすれば、ここでは６世紀末～７世紀としておく。

ＳＫ２（第 110 図）

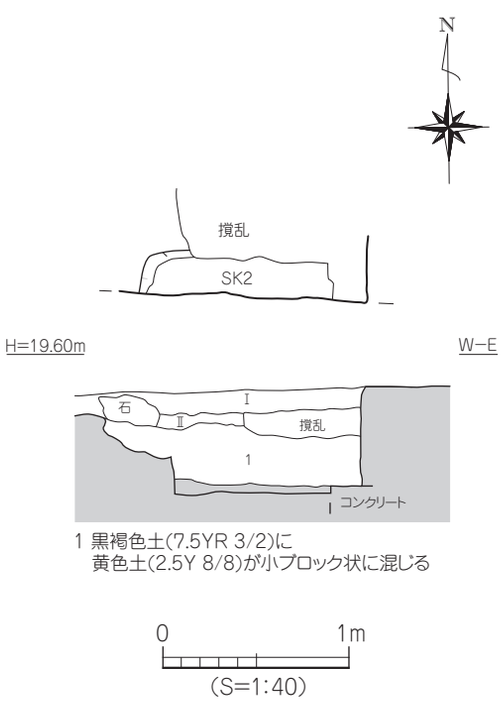
調査区南東部に位置し､南部は調査区外に展開する。北－東部は撹乱によって削平されているため、全容は不明であるが、平面形態は方形と思われる。規模は検出長 1.04m × 0.22m、深さ 56cm を測る。断面形状は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土（7.5YR 3/1）に黄色土（2.5Y 8/6）である。

出土遺物：遺構からの遺物の出土は見られなかった。

時期：時期を比定できる遺物の出土も無く時期は不明であるが、層序的に第２層下であることからも７世紀初めまでのものと思われる。



第109図　SK1測量図



第110図　SK2測量図

第４節　小　結

今回の調査では、西に隣接する「大峰ケ台Ⅱ遺跡」に比べ調査は小規模ではあるが、遺構の密度はやや高く、主に古墳時代～飛鳥時代（5 世紀後半～ 7 世紀初め）の溝や柱穴、そして掘立柱建物の一部を確認した。

遺構の中でも特に多くの溝が確認され、計 16 条を数える。これらの溝は大峰ケ台東麓丘陵斜面にそって直線的に走る溝、そして少数ではあるが短い弧を描く溝が検出された。これらの溝は断面観察から、埋土には砂や礫、粘土層などが見られないことから、長期間または常時水流があった溝ではないと考えられる。各溝から出土した遺物には、須恵器の坏身口縁部片や土師器の高坏の坏部片や脚部などがあり、概ね 5 世紀後半～ 7 世紀前半（古墳時代中頃～飛鳥時代）の遺物が出土している。

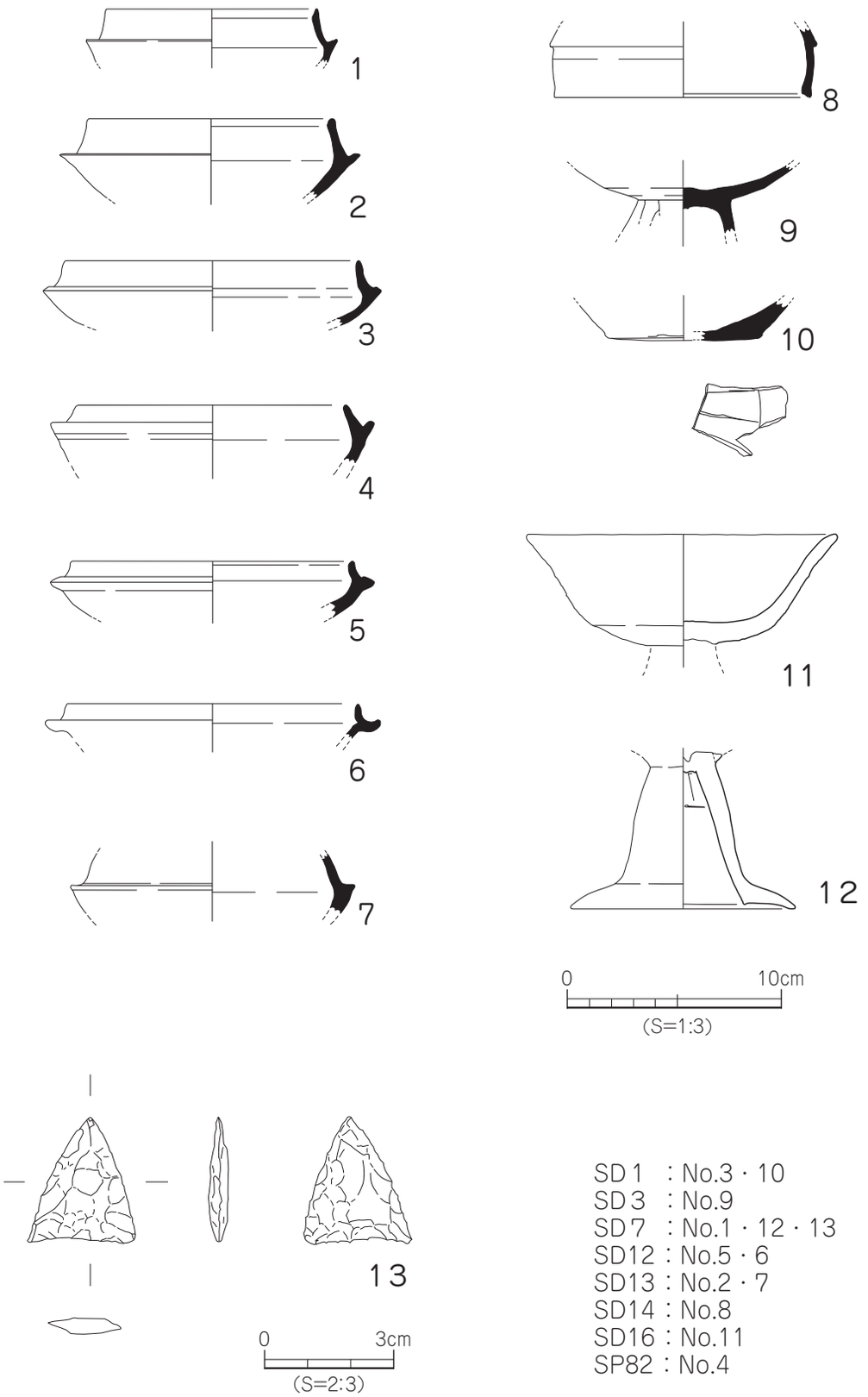
直線的な溝は隣接する「大峰ケ台Ⅱ遺跡」からは該当する溝は、位置および方向性がほぼ一致する「南側調査区」SD9 があり、関連性が想定できる。その他は、おそらくは本調査区付近で完結する遺構であると考えている。ただし、本調査区以東は地形的にやや急傾斜することから、溝の東部への展開には不明な部分がある。一方、本調査では弧を描く半円状の溝は、2 条が検出されており、「辻町遺跡」や「大峰ケ台Ⅱ遺跡」などにもみられ、これらの調査では古墳の周溝である可能性が指摘されている。

調査区の北部には掘立柱建物の一部である掘立 1 を検出した。この掘立柱建物の規模は、南側の東西 2 間分で、約 1.5 m前後の柱間隔で全長 3 m程度をはかる。建物の北部分は不明であるが、おそらく北方に展開するものと考えられる。また、建物の柱穴（SP86）からは 6 世紀前半と思われる須恵器の坏身口縁端部片が見つかっている。隣接する「大峰ケ台Ⅱ遺跡」では倉庫群とされる掘立柱建物の柱穴からは、6 世紀前半段階の須恵器や土師器が出土しており、時期的にも今回の掘立柱建物と一致することから、本調査で確認された掘立柱建物もこれら倉庫群の一部と考えられる。倉庫群の範囲は、本調査では北部のみの検出であることから、現時点では 6 世紀前半の倉庫群は本調査区北部が南東限と想定される。

その他には、大小多数の柱穴が調査区全体で見つかっており、その分布はやや南部に多く見られる。これら柱穴は約 100 基ほど確認したが、建物を構成するとして認定したものは掘立 1 の 1 棟のみである。多くの柱穴からは弥生土器や土師器、須恵器などの胴部小片がみつかり、これら柱穴の時期は古墳時代までのものと考えられる。ただし、調査地全域から弥生土器片が出土することから、調査地西の大峰ケ台丘陵東麓上に営まれる弥生集落の存在が窺われる。

調査では、古墳時代中頃から飛鳥時代までの遺構･遺物が見つかり、西に接する「大峰ケ台Ⅱ遺跡」で確認された遺跡が東側へ広がることを確認した。朝美辻遺跡 2 次調査および大峰ケ台Ⅱ遺跡での遺構分布状況を見ると、この遺跡の広がりは、南東にやや密度を増して展開し、遺跡はさらに南－東に存在する可能性がある。本調査では掘立柱建物は 1 棟のみで、倉庫群は調査地内北部が南東限であり北方に展開する可能性がある。また、大峰ケ台東麓域における古墳時代後期集落の分布を追認することが出来た。

この地域では大峰ケ台丘陵に築造される古墳や集落、そして朝美澤遺跡、辻町遺跡などの低地に立地する集落も存在し、これら周辺遺跡の性格や動向を含め総合的に評価した上で、この朝美、辻町地域の成り立ちや遺跡の移り変わりの解明が今後の課題となる。



SD１　：No.3・10
SD３　：No.9
SD７　：No.1・12・13
SD12：No.5・6
SD13：No.2・7
SD14：No.8
SD16：No.11
SP82：No.4

第111図　出土遺物実測図

遺構一覧

－凡例－

1．本報告書では、検出した遺構を以下のように掲載している。
2．遺構の一覧表や遺物の観察表の凡例は、以下とした。

遺構一覧表・遺物観察表　　－凡　例－

（1）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
（2）遺構一覧表
　規模欄　　（　）：現存検出長を示す。
（3）遺物観察表の各掲載について。
　法量欄　　（　）：推定復元値
　調整欄　　土製品の各部位名称を略記した。
　　例）㊀ →口縁部、㊀ →胴部
　胎土欄　　胎土欄では混和材を略記した。
　　例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤→赤色土粒。
　　（　）の中の数値は混和材粒子の大きさを示す。
　　例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3mm 大の石英・長石を含む」である。
　焼成欄　　焼成欄の略号について 。◎→良好。

表 59　掘立柱建物址一覧

掘立	規模（間）	方　向	桁　行		梁　行		埋　土	時　期	備　考
			実長（m）	柱間寸法（m）	実長（m）	柱間寸法（m）			
1	1 × 2 間以上	東西	3.3	1.3 ～ 1.8	―	―	黒褐色土 （黄色土混入）	6 世紀前半	

表 60　溝一覧

溝 （S D）	断面形	規　模（m） 長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	逆台形状	(5.5) × 0.26 ～ 0.40 × 0.03 ～ 0.20	南北	褐灰色土 （黄色土粒混入）	弥生・須恵	6 世紀中頃	
2	逆台形状 皿状	3.5 × 0.10 ～ 0.26 × 0.04 ～ 0.06	南北	褐灰色土 （黄色土粒混入）	弥生・須恵	6 世紀末 ～ 7 世紀	
3	皿状	3.3 × 0.10 ～ 0.52 × 0.12 ～ 0.16	東西	黒褐色土 （黄色土粒混入）	弥生・須恵	6 世紀末以降	
4	皿状	3.4 × 0.16 ～ 0.52 × 0.04 ～ 0.11	東西	黒褐色土 （黄色土粒混入）	弥生・須恵	6 世紀末 ～ 7 世紀初め	
5	皿状	2.0 × 0.16 ～ 0.30 × 0.10	東西	黒褐色土 （黄色土粒混入）	弥生・須恵	中近世	
6	逆台形状	2.3 × 0.26 ～ 0.40 × 0.04 ～ 0.10	東西	褐灰色土 （黄色土粒混入）	弥生・須恵 土師	7 世紀初め以降	
7	レンズ状	(4.4) × 0.22 ～ 0.70 × 0.08 ～ 0.30	東西	暗赤灰色土 灰白色土	須恵・土師 石鏃	5 世紀後半 ～ 6 世紀初め	
8	船底状	(4.1) × 0.18 ～ 0.46 × 0.03 ～ 0.12	東西	暗赤灰色土 灰白色土	弥生	5 世紀後半 ～ 6 世紀初め	
9	船底状	(4.3) × 0.46 ～ 0.66 × 0.07 ～ 0.11	東西	灰褐色土 灰白色土	弥生・須恵	7 世紀前半	
10	皿状	1.4 × 0.16 ～ 0.26 × 0.04	東西	にぶい赤褐色土	―	6 世紀中頃 ～ 7 世紀初め	
11	船底状	2.2 × 0.30 ～ 0.42 × 0.14	北西―南東	褐灰色土 （浅黄色土粒混入）	弥生・須恵 土師	7 世紀以降	
12	U 字形状	1.9 × 0.32 ～ 0.52 × 0.25 ～ 0.40	東	黒褐色土	須恵	6 世紀末 ～ 7 世紀	
13	逆台形状	2.6 × 0.54 ～ 0.86 × 0.14 ～ 0.20	東西	黒褐色土	須恵	6 世紀前半	
14	逆台形状	1.2 × 0.30 ～ 0.46 × 0.35 ～ 0.38	南北	褐灰色土	須恵	5 世紀後半 ～ 6 世紀初め	
15	皿状	1.26 × 0.06 ～ 0.26 × 0.05	東西	褐灰色土	―	7 世紀以降	
16	テラス状	(1.3 × 0.65 × 0.25)	南西―北東	黒褐色土 （浅黄色土粒混入）	土師	5 世紀後半	

表 61　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	平面形	断面形	規　模（m） 長さ×幅×深さ	床面積（㎡）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	方形	逆台形	(0.62 × 0.5 × 0.34 ～ 0.5)	0.31	黒褐色土 黄色土	弥生・須恵	6 世紀末 ～ 7 世紀	
2	方形	逆台形	(1.04 × 0.22 × 0.56)	0.23	黒褐色土 黄色土	—	7 世紀初め	

表 62　柱穴一覧　(1)

柱穴（SP）	平面形	規　模 (m) 長さ×幅×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	(円形)	(0.38) × 0.36 × 0.12	黒褐色土			
2	(円形)	0.42 × (0.32) × 0.08	褐灰色土　黄色土混入			
3	不整形	0.62 × 0.44 × 0.30	褐灰色土　黄色土混入			
4	(方形)	0.70 × (0.34) × 0.32	—	弥生		
5	楕円形	0.32 × 0.26 × 0.28	褐灰色土　灰褐色土混入			
6	円形	0.36 × 0.34 × 0.26	褐灰色土　黄色土混入			
7	円形	0.20 × 0.16 × 0.11	褐灰色土　灰褐色土混入			
8	円形	0.22 × 0.18 × 0.04	褐灰色土　灰褐色土混入			
9	楕円形	0.32 × 0.24 × 0.20	褐灰色土　黄色土混入			
10	円形	0.18 × 0.16 × 0.04	褐灰色土　黄色土混入			
11	(円形)	0.20 × (0.14) ×　—	—			
12	不整形	0.34 × 0.30 × 0.15	褐灰色土　黄色土混入	弥生		
13	円形	0.28 × 0.24 × 0.14	褐灰色土　黄色土混入			
14	円形	0.52 × 0.48 × 0.10	黒褐色土　黄色土混入			
15	円形	0.24 × 0.22 × 0.13	褐灰色土　黄色土混入			
16	円形	0.32 × 0.28 × 0.30	褐灰色土　黄色土混入			
17	円形	0.28 × 0.26 × 0.08	黒褐色土　黄色土混入			
18	(円形)	0.24 × (0.20) × 0.18	黒褐色土			
19	円形	0.16 × 0.16 × 0.04	—			
20	円形	0.26 × 0.24 × 0.33	褐灰色土　灰褐色土			
21	欠番					
22	円形	0.30 × 0.28 × 0.08	褐灰色土　黄色土混入			
23	(楕円形)	(0.32) × 0.26 × 0.03	—			
24	楕円形	0.26 × 0.18 × 0.12	褐灰色土			
25	欠番					
26	円形	0.38 × 0.34 × 0.17	褐灰色土　黄色土混入			
27	円形	0.12 × 0.10 ×　—	—			

柱穴一覧 (2)

柱穴(SP)	平面形	規　模(m) 長さ×幅×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
28	円形	0.16 × 0.12 × 0.04	褐灰色土　黄色土混入			
29	円形	0.12 × 0.12 × 0.06	褐灰色土　黄色土混入			
30	円形	0.18 × 0.16 × 0.10	褐灰色土　黄色土混入			
31	円形	0.48 × 0.46 × 0.22	褐灰色土　黄色土混入	弥生		
32	円形	0.32 × 0.32 × 0.12	褐灰色土　黄色土混入			
33	円形	0.32 × 0.30 × 0.08	褐灰色土　明褐灰色土			
34	不整形	0.80 × 0.42 × 0.20	黒褐色土　黄色土混入			
35	(円形)	0.42 × (0.38) × 0.08	—			
36	(楕円形)	0.40 × (0.24) × 0.38	黒褐色土			
37	円形	0.18 × 0.16 × 0.10	褐灰色土　黄色土混入			
38	円形	0.24 × 0.22 × 0.08	褐灰色土　黄色土混入			
39	(楕円形)	0.38 × (0.18) × 0.08	褐灰色土　黄色土混入			
40	(円形)	0.40 × (0.28) × 0.20	褐灰色土　黄色土混入			
41	欠番					
42	欠番					
43	欠番					
44	欠番					
45	欠番					
46	欠番					
47	欠番					
48	欠番					
49	欠番					
50	円形	0.32 × 0.24 × 0.08	褐灰色土　黄色土混入			
51	不整形	0.42 × 0.38 × 0.50	褐灰色土　黄色土混入			
52	円形	0.40 × 0.38 × 0.16	にぶい赤褐色土 灰白色土混入			
53	円形	0.24 × 0.24 × 0.28	黒褐色土 褐灰色土混入			
54	円形	0.26 × 0.24 × —	黒褐色土 褐灰色土混入			
55	(円形)	0.28 × (0.26) × 0.05	黒褐色土 褐灰色土混入			
56	(円形)	0.36 × (0.28) × 0.10	褐灰色土			
57	円形	0.42 × 0.38 × 0.12	褐灰色土 黄色土混入			
58	円形	0.40 × 0.38 × 0.18	黒褐色土 褐灰色土混入	弥生		

柱穴一覧　(3)

柱穴(SP)	平面形	規　模(m) 長さ×幅×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
59	円形	0.24 × 0.22 × 0.06	褐灰色土			
60	円形	0.26 × 0.26 × 0.08 ～ 0.26	黒褐色土 灰白色土混入			
61	円形	0.26 × 0.20 ×　—	—			
62	(円形)	0.46 × (0.34) × 0.56	褐灰色土 黄色土混入			
63	欠番					
64	円形	0.40 × 0.36 × 0.25	褐灰色土　褐灰色土			
65	不整形	0.62 × (0.56) × 0.42	黒褐色土 地山粒混入			
66	円形	0.30 × 0.24 × 0.18	黒褐色土 灰白色土混入			
67	(円形)	0.38 × (0.30) × 0.36	黒褐色土 地山粒混入	弥生		
68	円形	0.50 × 0.46 × 0.29	黒褐色土 黄色土粒混入			
69	円形	0.16 × 0.14 × 0.07	黒褐色土 にぶい黄橙色土			
70	円形	0.18 × 0.16 × 0.15	黒褐色土 にぶい黄橙色土			
71	(楕円形)	0.88 × (0.62) × 0.54	褐灰色土　黒褐色土			
72	円形	0.32 × 0.30 × 0.14	黒褐色土 褐灰色土混入			
73	円形	0.16 × 0.14 × 0.06	褐灰色土 褐灰色土混入			
74	円形	0.24 × 0.20 × 0.05	褐灰色土 褐灰色土混入			
75	隅丸方形	0.68 × 0.60 × 0.19 ～ 0.38	褐灰色土　黒褐色土	弥生		
76	円形	0.20 × 0.18 ×　—	—			
77	円形	0.16 × 0.15 ×　—	—			
78	円形	0.19 × 0.18 ×　—	—			
79	欠番					
80	円形	0.18 × 0.14 ×　—	—			
81	(円形)	0.70 × (0.52) × 0.32	灰黄褐色土　褐灰色土 にぶい黄橙色土	弥生		
82	隅丸方形	0.94 × (0.72) × 0.43	黒褐色土　黄色土混入	弥生		
83	(円形)	0.56 × (0.20) × 0.40	—			
84	方形	0.62 × 0.53 × 0.42	黒褐色土　黄色土混入	弥生		
85	方形	0.76 × 0.62 × 0.42	黄色土　黒褐色土	弥生		
86	方形	0.72 × 0.50 × 0.48	黒褐色土　黄色土混入	弥生・須恵	6 世紀前半	
87	(円形)	0.32 × (0.26) × 0.08	褐灰色土　黄色土混入			
88	楕円形	0.62 × 0.44 × 0.23	黒褐色土	弥生		
89	(円形)	0.22 × (0.08) ×　—	—			

柱穴一覧 (4)

柱穴(SP)	平面形	規　模(m) 長さ×幅×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
90	円形	0.14 × 0.12 × 0.02	褐灰色土　黄色土混入			
91	(楕円形)	(0.34) × (0.12) × 0.07	褐灰色土　黄色土混入			
92	円形	0.34 × 0.24 × 0.26	—			
93	円形	0.22 × (0.14) × 0.28	—			
94	欠番					
95	円形	0.50 × 0.44 × 0.26	褐灰色土　黄色土混入			
96	楕円形	0.20 × 0.16 × 0.23	—			
97	楕円形	0.72 × 0.48 × 0.34	褐灰色土　黄色土混入	弥生		
98	円形	0.34 × 0.32 × 0.12	黒褐色土 灰白色土混入			
99	隅丸方形	0.44 × 0.34 × 0.28	黒褐色土　黄色土混入	弥生		
100	欠番					
101	円形	0.32 × 0.26 × 0.34	黒褐色土　黄色土混入			
102	円形	0.28 × 0.26 × 0.36	黒褐色土 褐灰色土混入			
103	隅丸方形	0.62 × 0.60 × 0.22	黒褐色土　黄色土混入	弥生・土師		
104	円形	0.20 × 0.20 × 0.04	褐灰色土　黄色土混入			
105	楕円形	0.36 × 0.24 × 0.16	褐灰色土　黄色土混入			
106	(円形)	(0.50) × 0.46 × 0.12	褐灰色土　黄色土混入			
107	不整形	0.68 × (0.52) × 0.08	褐灰色土　黄色土混入			
108	隅丸方形	0.32 × 0.26 × 0.10	褐灰色土　黄色土混入			
109	不整形	0.48 × 0.40 × 0.34	褐灰色土　黄色土混入			
110	(円形)	0.64 × (0.42) × 0.13	褐灰色土　黄色土混入			
111	円形	(0.60) × (0.54) × —	—			
112	(円形)	0.26 × (0.10) × 0.44	黒褐色土　黄色土混入			

表 63　出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	坏身	口径（9.8） 残高 2.5	やや内傾して立ち上がり、段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰黒色 灰黒色	密 ◎		28
2	坏身	口径（11.3） 残高 3.7	口縁部は緩く内傾して立ち上がり、端部は長く持ち丸く仕上げる	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長（1～2） ◎	自然釉	28
3	坏身	口径（13.6） 残高 3.0	体部から内傾しながら端部では直立気味に立ち上がり、端面は尖り気味に仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		28
4	坏身	口径（12.4） 残高 2.7	体部から外傾し、端部は緩く外反する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		28
5	坏身	口径（13.0） 残高 2.6	低い口縁部、端面は丸く仕上げ、受け部は厚い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	28
6	坏身	口径（13.6） 残高 1.6	立ち上がり短く内傾し、端部は丸い。受け部は上方に丸く延びる。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 灰色	長（1） ◎		28
7	坏身	残高 2.7	内傾して立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		28
8	坏蓋	口径（11.9） 残高 3.1	内湾する口縁。端面に緩い段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 灰色	密 ◎		28
9	高坏	残高 3.1	脚部片。中空。方形の透かしが三箇所残存。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		28
10	壺	底径（6.9） 残高 1.8	須恵器底部。底部外面に線刻。	回転ナデ	回転ナデ	黒色・灰黒色 灰色	密 ◎		28
11	高坏	口径（14.3） 残高 5.1	やや外反する口縁。端部に段を有する。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 黄橙色	石・長(1～5) 赤色粒 ○	黒斑	28
12	高坏	底径（10.4） 残高 7.3	脚部はハの字状に広がり、裾部はほぼ水平に屈曲する。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		28

表 64　出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
13	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.9	2.5	0.45	2.408	完形品。 平基式の無茎石鏃。	28

第６章　調査の成果と課題

本書に掲載した、辻遺跡５次調査、辻町遺跡３次調査、朝美辻遺跡１次調査、朝美辻遺跡２次調査では、弥生時代から中・近世まで各時代の遺構や遺物を確認し、多くの調査成果が得られた。ここでは、時代別に概要をまとめておく。

（１）弥生時代

大峰ケ台（おおみねがだい）丘陵の山頂部には、大峰ケ台遺跡４次調査地（弥生時代中期中葉）などがあり、同丘陵東裾部の朝美澤（あさみさお）遺跡からも中期中葉の土器が出土するなど、以前より同丘陵上から丘陵東裾部にかけて弥生時代中期の高地性集落が営まれていることが知られている。今回の調査では、大峰ケ台東麓斜面の遺跡から調査地全域で弥生土器片が出土し、また辻町遺跡３次調査においては北部に淡黄色シルト層の安定した堆積が広がり、そこに弥生集落の展開が想定された。このことから、丘陵上に営まれた弥生時代中期の集落が丘陵東麓斜面を経て、宮前川左岸の低地まで広がることが明らかとなった。

（２）古墳時代

大峰ケ台丘陵東麓斜面では、６世紀代の掘立柱建物と建物関連遺物が確認された。特に朝美辻（あさみつじ）遺跡１次調査では弥生時代中期から古墳時代後期の自然流路を検出し、流路内からは６世紀前半の土器と共に建築部材である『蹴放（けはな）し』が出土している。『蹴放し』は片開きの扉に用いられたもので、丘陵東麓で確認された倉庫群に使用された可能性もあり、当時の様相を知る貴重な資料となるものである。また、一般国道196号松山環状線建設に伴い実施した「大峰ケ台Ⅱ遺跡」からは、倉庫群として６世紀代の掘立柱建物址が報告されているが、その東域は朝美辻遺跡２次調査まで広がることが確認された。そのほか同２次調査では弧を描く溝は「辻町遺跡」や「大峰ケ台Ⅱ遺跡」などにもみられ、古墳の周溝である可能性が指摘される。

宮前川左岸の低地遺跡である辻町遺跡３次調査では、同１次調査で確認された祭祀遺構関連の溝、土坑また炭化物の堆積を見ており、調査地周辺に存在する集落と祭祀遺構の広がりが想定された。同時に水田跡の検出など、宮前川中流域に営まれた生産域を示唆する貴重な資料がえられている。

（３）古代

朝美・辻地区では古代の遺構遺物が確認できるのは大峰ケ台丘陵北東麓の宮前川右岸とそのほか周辺では同丘陵南方の南江戸付近で確認されているのみで古代遺跡が希薄な地域である。朝美辻遺跡１次調査では、包含層出土資料ではあるが、碗の内面に陰刻花紋が描かれた９～10世紀の無釉須恵器が出土しており、朝美澤廃寺との関連も考えられる貴重な資料となった。

（４）中世

辻町遺跡３次調査では中世の鋤跡が確認され、西方の辻町遺跡２次調査など周辺集落に伴う農耕地と評価される。そのほか後続して掘立柱建物、井戸や柱穴が確認されることから農耕地の後に集落として開発されたことがわかり、宮前川左岸の低地に中世集落が広がることが明らかとなった。

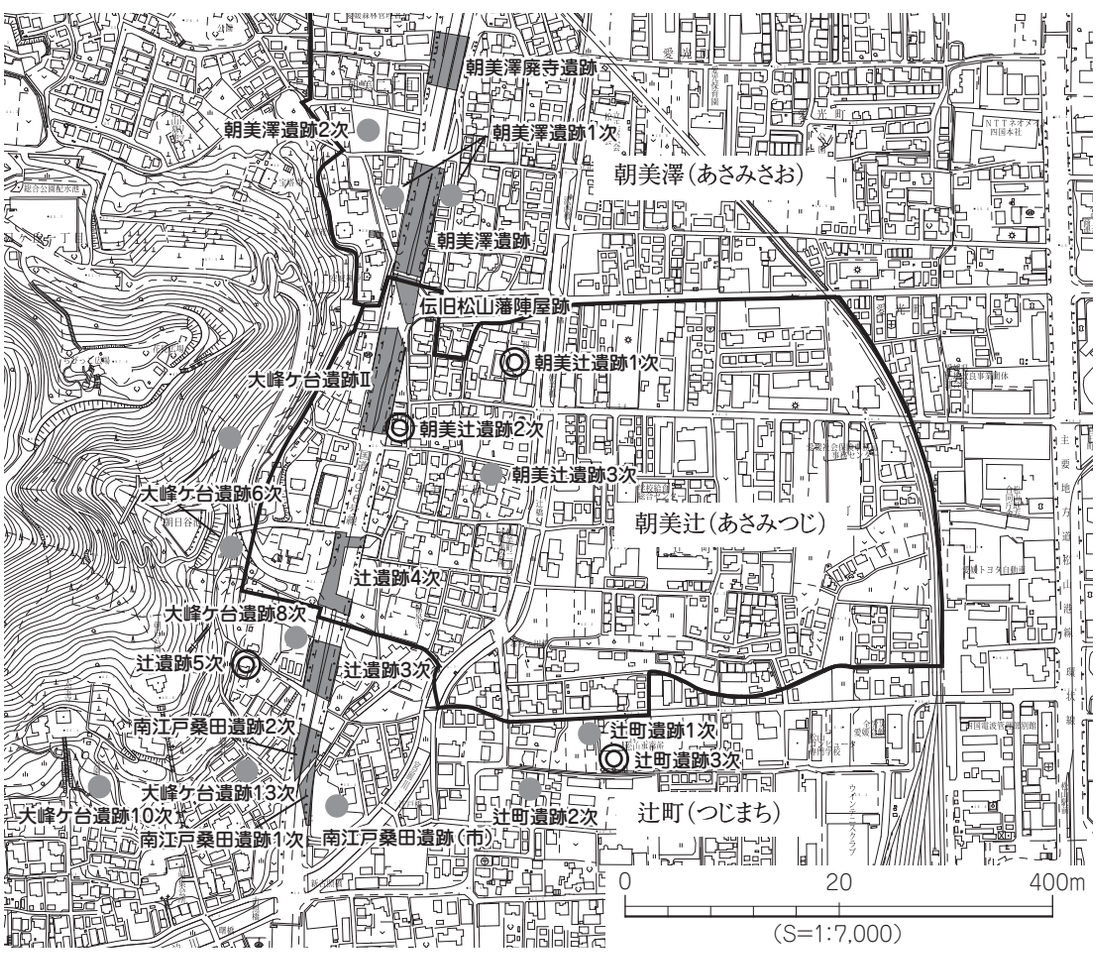
（５）近世

近世以降では、辻遺跡５次調査から意図的に埋納された棟端飾瓦の出土があり、近隣の江戸時代後期に創建されたとする山内神社の関連遺構の可能性が指摘されている。

以上、今回掲載された遺跡を時代ごとにまとめた。

朝美・辻町地区は、大峰ケ台丘陵東麓斜面から宮前川左岸の低地に位置し、山麓・河川そして平地を有し遺跡の立地として多彩な環境である。ここでは、当地域における時代ごとの遺跡分布状況を簡単にまとめてみたい。

縄文時代では、丘陵北東麓の朝美澤遺跡２次調査包含層中から縄文後期の少量の土器片が出土している。それ以外は南方の古照遺跡に至るまで確認されていない。次に弥生時代では、前述の朝美澤遺跡２次調査から前期の松山最古の土器が出土しており、その後丘陵上から裾部に中期の遺跡が分布するが、中期後葉、凹線文期の遺跡は現時点では確認されていない。後期の遺跡は、丘陵東麓から宮前川左岸の辻町遺跡３次調査まで及んでいる。古墳時代では、前期の集落遺跡はほぼ見あたらず、南方の古墳時代前期の大灌漑工事を行った「古照遺跡」との関連も考えられる。中期～後期の遺跡はほぼ全域に認められるようになる。古代になると地域内の遺跡数は減少し、わずかに丘陵北東部に平安時代を含む遺跡が確認され、東方～南方には全く見られなくなる。その後、中世では遺跡数が増加することとなり、多くは宮前川中流域の両岸に営まれる。近年では、JR 駅西側の南江戸上沖遺跡１・２次調査や同下沖遺跡など同時期の遺跡が確認され、その範囲は拡大している。また、この地域は中世墓も集落に伴って多く確認されている。中世墓は、大峰ケ台遺跡８次調査（14C ～ 15C）、辻町遺跡２次調査（13C）の稀少な２例として確認されており、今後は朝美・辻地区の中世集落構造解明に期待される。



第112図　朝美･辻町周辺の遺跡分布図

写真図版

写真図版 1～ 4:辻遺跡5次調査
写真図版 5～12 :辻町遺跡3次調査
写真図版13～20:朝美辻遺跡1次調査
写真図版21～28:朝美辻遺跡2次調査

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィ ルムで撮影し、35㎜判フィルムカメラ・デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カ　メ　ラ	トヨフィールド 45A	レ ン ズ	スーパーアンギュロン	90㎜他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67	55㎜他
	ニコンニュー FM 2		ズームニッコール	28 ～ 85㎜他
フ ィ ル ム	白黒アクロス			
デジタルカメラ	Nikon D90　AF-S　DX18 ～ 55㎜			

2. 遺物は、デジタルカメラで撮影した。

使用機材：

デジタルカメラ	Nikon D610　マイクロニッコール 105㎜
	Adobe　Light Room にて現像
ス ト ロ ボ	コメット /CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101

3. 製　　版：写真図版 175 線
印　　刷：オフセット印刷
用　　紙：マットコート 110kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1～20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.1～6

1. 調査前
（北西より）

2. 遺構検出状況
（西より）

3. 南壁土層
（北東より）

図版２

1. SX1遺物出土状況
（西より）

2. 掘立1・P1半掘状況
（西より）

3. 掘立2・P1半掘状況
（西より）

1. ＳＸ1ベルト土層
（南より）

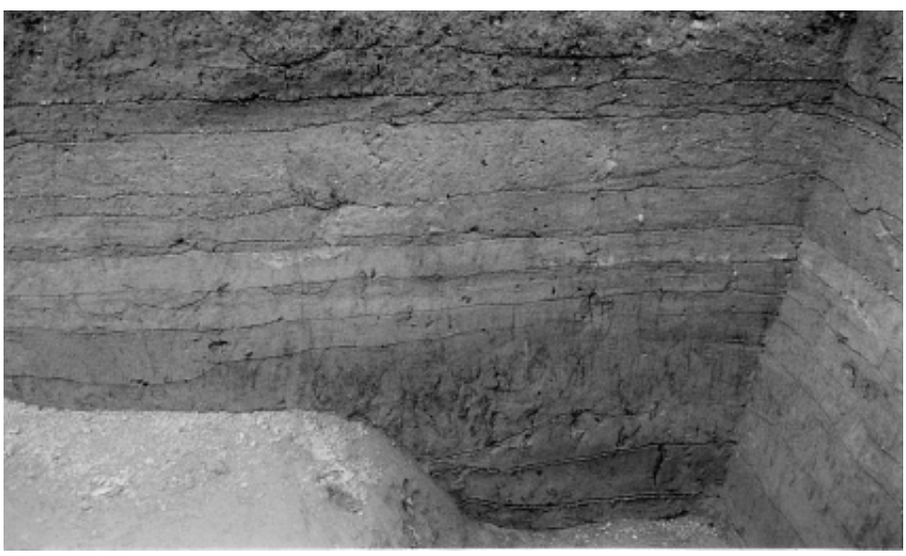
2. 遺構完掘状況
（南より）

3. 掘立3完掘状況
（北より）

図版4

1. 出土遺物（SK3:11、SD2:16、包含層:24・25）

1. 調査地全景
（南西より）

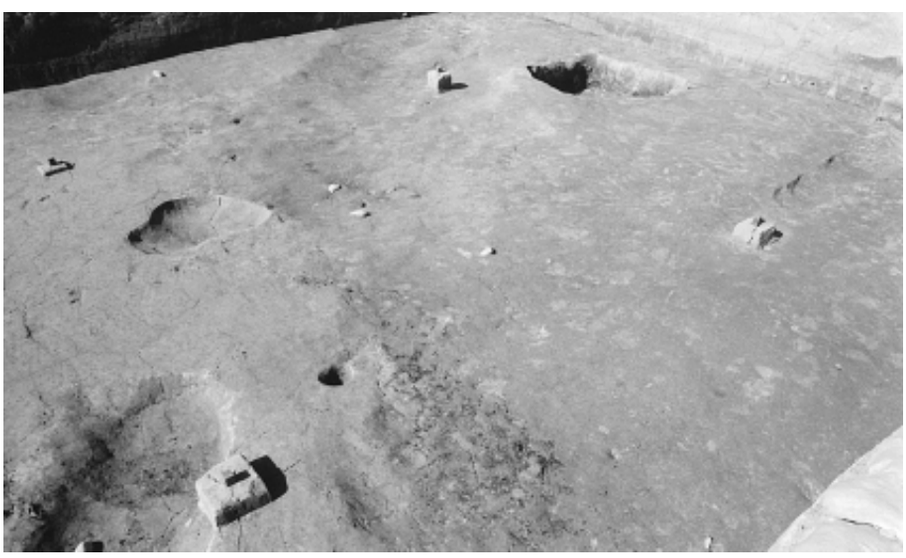


2. 1区堆積土層
（北より）

3. 1区遺構検出状況
（南より）

1. 1区第Ⅵ層上面遺構
検出状況
（北より）

2. 1区第Ⅵ層上面遺構
完掘状況
（北より）



3. 1区SD11完掘状況
（南東より）

1. 2区第Ⅵ層上面遺構検出状況
（西より）

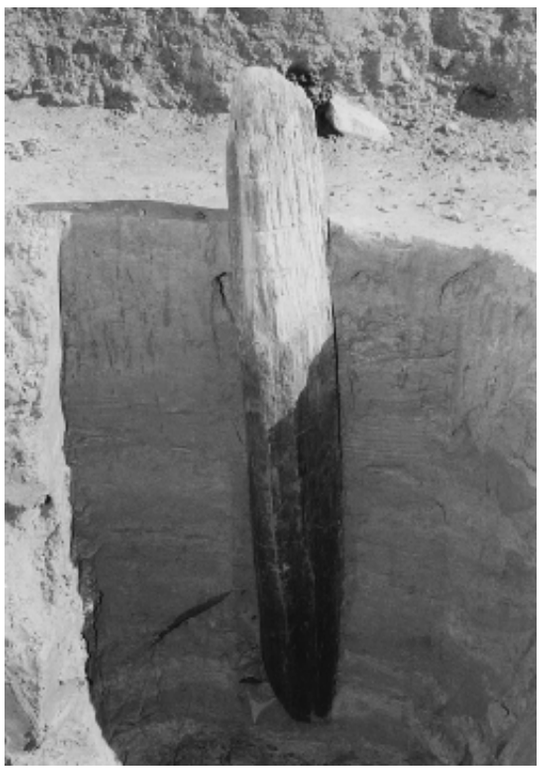
2. 2区第Ⅵ層上面遺構完掘状況
（西より）

3. 2区SE1井戸枠検出状況
（西より）

1．2区SE1半截状況
（北東より）

2. 2区掘立1完掘状況
（北より）

3. 2区第Ⅶ層足跡完掘
状況
（北より）



1. 2区第Ⅵ層上面
木杭1半截状況
（西より）

2. 3区遺構検出状況
（南より）

3. 3区遺構完掘状況
（西より）

図版10

1. 3区南側遺構完掘状況
（北東より）

2. 4区遺構検出状況
（東より）

3. T9遺構検出状況
（西より）

1. 出土遺物(SD11:3、水田面:15、SE1:18)

図版12

1. 出土遺物(SE1:19、Ⅴ層:66)

１．調査前全景
（南東より）

２．遺構検出状況①
（西より）

３．遺構検出状況②
（北東より）

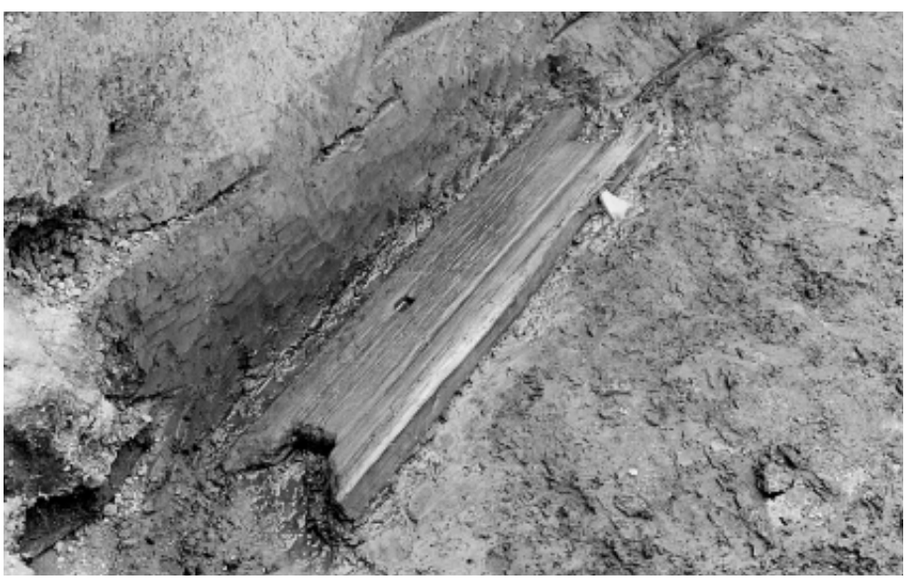
図版14

１．西半部完掘状況
（南東より）

２．東半部完掘状況
（東より）

３．SR1 検出状況
（北西より）

1．SR1 土層（北より）



2．SR1 蹴放し出土状況（北西より）

3．作業風景（北東より）

1．SD1 完掘状況
（北西より）

2．SD2 完掘状況
（南より）

3．SD3 完掘状況
（北東より）

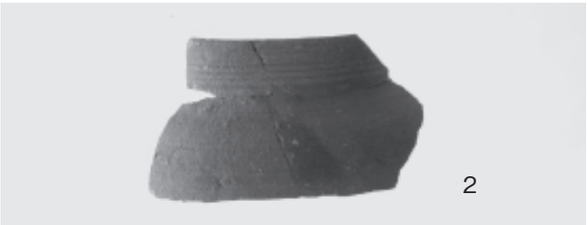
１．SK1 検出状況
（南より）

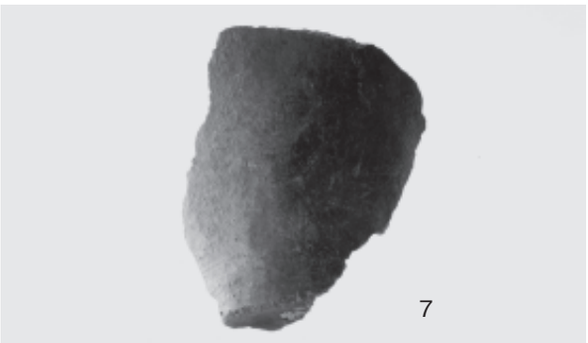
２．SK2・３検出状況
（北西より）

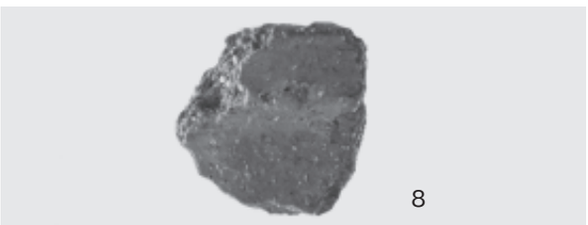
３．SK4 半截状況
（東より）

図版18

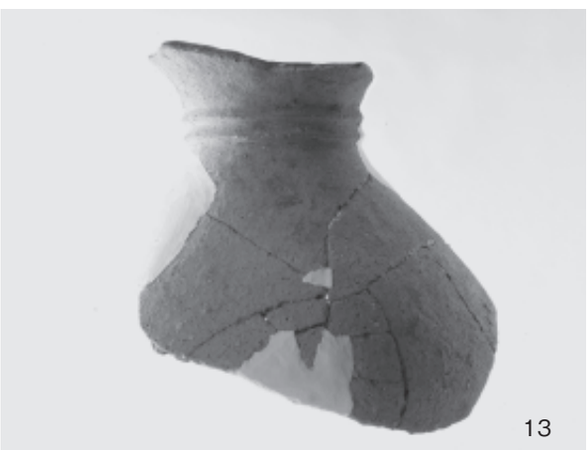
１．SR1 出土遺物①

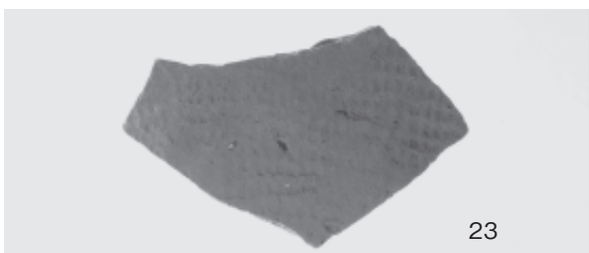


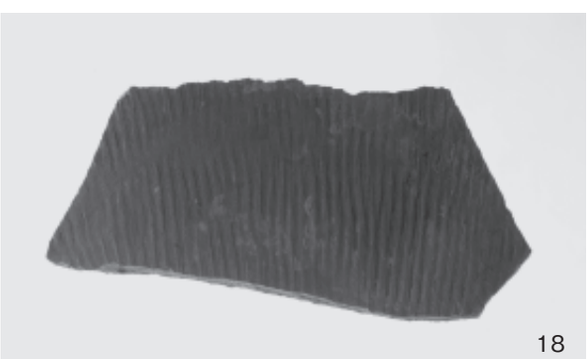




1．SR1 出土遺物②

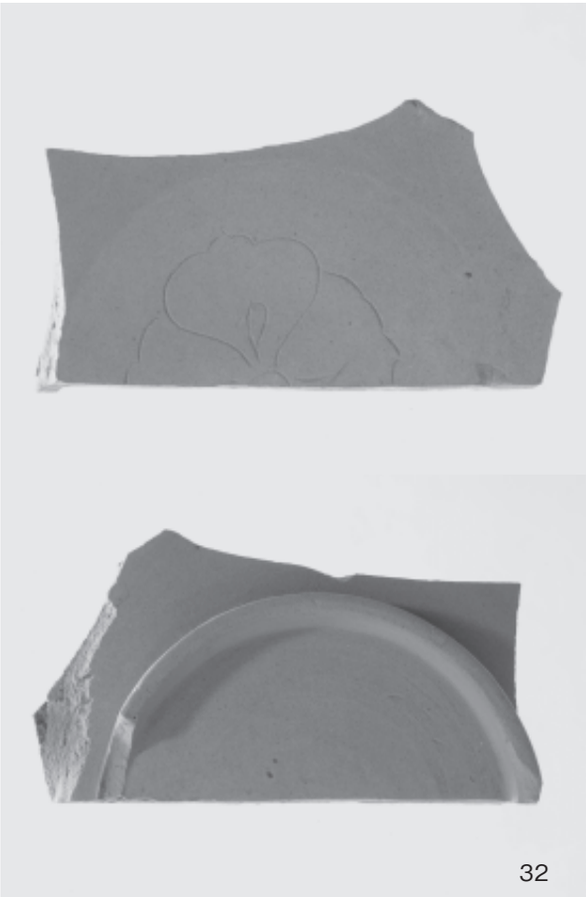


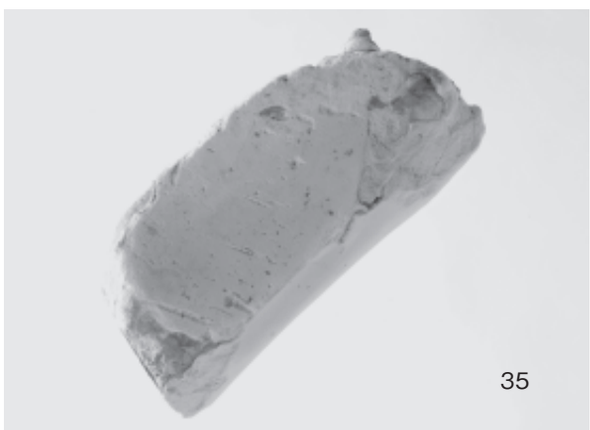




2．出土遺物（SD1：13、SD2：18、SK1：19、SK3：23、SK10：29）

図版20





１．包含層出土遺物

1. 調査前風景（南より）

2. 重機による掘削状況（北東より）

1. 遺構検出状況１（北より）

2. 遺構検出状況２（西より）

1. 掘立1布堀り断面状況
（東より）

2. SD1北部検出状況
（西より）

3. SD１北部断面状況
（西より）

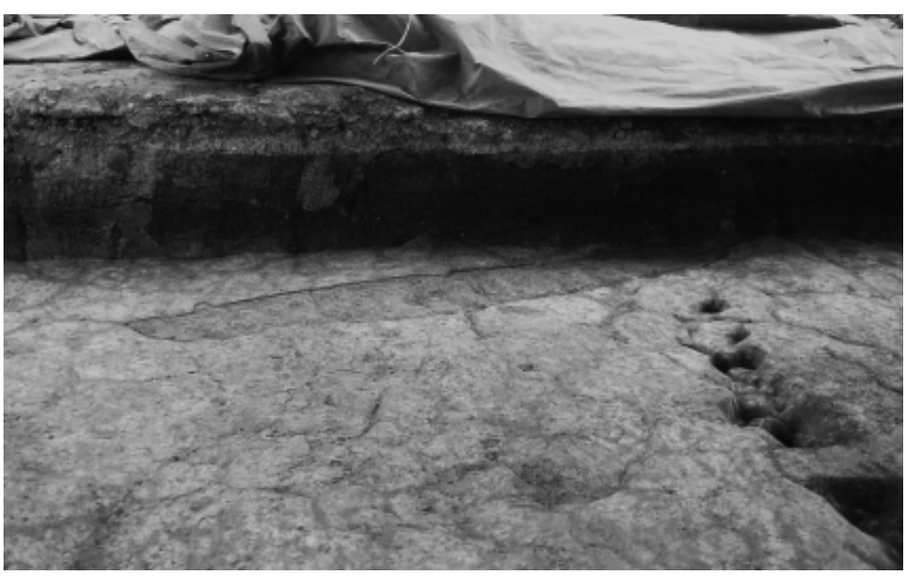
1. SD3・4・5検出状況
（北より）

2. SD3・4・5断面状況
（西より）

3. SD7・8・9検出状況
（東より）

1. SD7遺物出土状況
（北より）

2. SD7東部断面状況
（西より）



3. SD11検出状況
（西より）

1. SD11遺物出土状況
（西より）

2. SD13遺物出土状況
（西より）

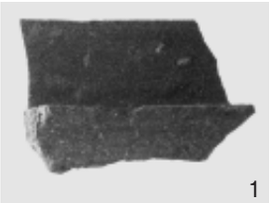
3. SD16遺物出土状況
（南より）

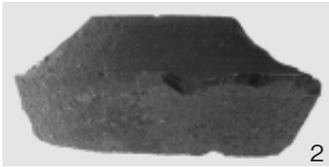
1. SP26根石出土状況
（東より）

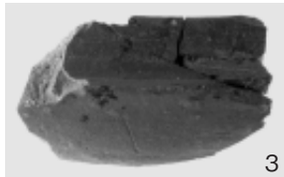
2. SP86（掘立1）
半截状況（南より）

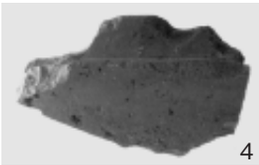
3. 調査風景
（南西より）

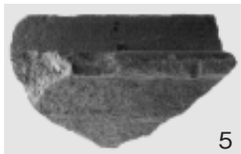
図版28


1

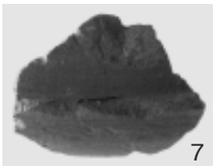

2

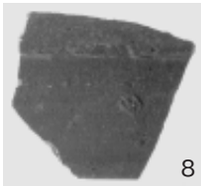

3

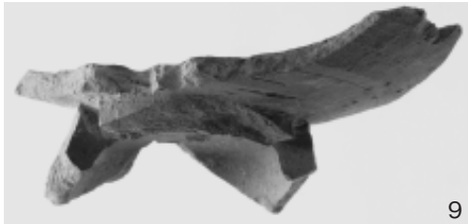

4

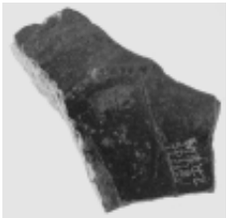

5

6


7

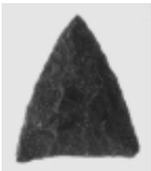

8


9


10

11

12


13

1. 出土遺物（SD1：3・10、SD3：9、SD7：1・12・13、SD12：5・6、SD13：2・7、SD14：8、SD16：11、SP82：4）

報　告　書　抄　録

ふりがな	みやまえがわりゅういきのいせき
書名	宮前川流域の遺跡Ⅲ
副書名	辻遺跡５次調査、辻町遺跡３次調査、朝美辻遺跡１次調査、朝美辻遺跡２次調査
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第190 集
編著者名	小笠原善治・河野史知・宮内慎一
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
所在地	〒791－8032　愛媛県松山市南斎院町乙67－6　　TEL（089）923－6363
発行年月日	西暦2017（平成29）年３月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
辻（つじ）遺跡５次調査	松山市南江戸五丁目（まつやましみなみえど）1529-1の一部、1529-2	38201	418	33° 50' 31.723"	132°44'38.986"	20030805 ～ 20030829	245.35㎡	宅地開発
辻町（つじまち）遺跡３次調査	松山市辻町（まつやましつじまち）41番1、44番1の各一部	38201	544	33° 50' 29.156"	132°44'52.229"	20101001 ～ 20101126	約450㎡	老人福祉施設の建築
朝美辻（あさみつじ）遺跡１次調査	松山市朝美（まつやましあさみ）一丁目1259番5、1266番1、1267番1・7、1270番7の各一部	38201	509	33° 50' 37.343"	132°44'23.675"	20080501 ～ 20080620	約235㎡	宅地開発
朝美辻（あさみつじ）遺跡２次調査	松山市朝美（まつやましあさみ）一丁目1395番1の一部	38201	558	33° 50' 39.005"	132°44'44.194"	20120801 ～ 20120928	約190㎡	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
辻遺跡５次調査	集落	古墳	掘立柱建物址・柵列・溝・土坑・柱穴	弥生土器・須恵器・土師器・石器	丘陵麓部の緩傾斜面に展開する集落。
辻町遺跡３次調査	集落	弥生 古墳 中世	掘立柱建物址・溝・土坑・井戸・柱穴・水田	須恵器・土師器・陶磁器・瓦 鉄滓・木製品	中世においては耕作地から集落へ移行した土地利用が確認できた。
朝美辻遺跡１次調査	集落	古墳	自然流路・溝・土坑・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器 木製品	木製品 （蹴放し）の出土
朝美辻遺跡２次調査	集落	古墳 古代	掘立柱建物・溝 土坑・柱穴	弥生土器・須恵器・土師器・石器	丘陵麓部の緩傾斜面で大峰ケ台遺跡Ⅱで見つかった倉庫群の一部を確認。

要　約

松山平野の朝美・辻町地区における４遺跡の発掘調査をまとめたものである。辻遺跡５次調査では弥生時代の集落が大峰ケ台山頂から丘陵東麓斜面まで広がることが示され、また古墳時代の集落が確認された。近世以降では棟端飾瓦が出土している。辻町遺跡３次調査では、弥生時代後期の集落が宮前川左岸まで広がることを確認した。古墳時代では祭祀関連遺構と集落の検出と同時に北方に広がる生産域が示唆された。中世では農耕地に後続して集落が営まれる遺跡の変遷が確認され、各時代における集落や農耕地の存在が明らかとなった。朝美辻遺跡１次調査では、6 世紀前半の土器に伴って建築部材の「蹴放し」が出土し、大峰ケ台丘陵東麓で確認されている倉庫群との関連が指摘された。古代では包含層中から陰刻花紋を有する無釉須恵器碗が出土した。朝美辻遺跡２次調査では、丘陵東麓の倉庫群の範囲が東に広がることが確認された。

松山市文化財調査報告書　第190集

宮前川流域の遺跡Ⅲ

・辻遺跡５次調査
・辻町遺跡３次調査
・朝美辻遺跡１次調査
・朝美辻遺跡２次調査

平成29年3月27日発行
編・発行　公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター
〒791－8032　松山市南斎院町乙67－6
TEL（089）923－6363
松山市教育委員会
〒790－0003　松山市三番町6丁目6－1
TEL（089）948－6605
印　刷　佐川印刷株式会社
〒791－8018　松山市問屋町6番21号
TEL（089）925－7471(代)